

神様にされたら愛され過ぎてヤバい件について。

Am.

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

某世紀末世界に転生させられた少年の話。現実はあまりに凄惨でした。

目次

EP 0. PROLOGUE

01. 再生 (リザレクション) 1

02. 天使 (ザイゴート) 6

03. 進化 (プリマドンナ) 11

04. 喰愛 (サリエル) 17

05. 喰人 (ゴッドイーター) 22

06. 獣達 (ハントレス) 29

07. 神機 (レン) 36

08. 雪虎 (バルファ) 42

09. 彼地 (スポナー) 50

10. 再会 (サリー) 57

EP 0.5 GOD EATER

01. 受難 (デスマッチ) 65

02. 供物 (ブレイン) 71

03. 生贄 (ラーナ) 77

04. 宿敵 (アマミヤ) 85

05. 赤実 (イヴ) 94

06. 聖誕 (エデン) 101

07. 転生 (ネメシス) 107

08. 始動 (プラン) 115

09. 変異 (ケガレ) 121

10. 新生 (ウタヒメ) 129

11. 狼煙 (サイン) 144

12. 乱戦 (ランブル) 159

2 6.	愛慾 (ロマンス)	411
2 5.	原点 (ゼロ)	386
2 4.	変調 (ノイズ)	371
2 3.	偽装 (トロイ)	360
2 2.	蝕鎧 (シユラウド)	342
2 1.	伴侶 (セファイラ)	331
2 0.	賢王 (???)	316
1 9.	呪縛 (チャーム)	290
1 8.	決別 (フレイ)	276
1 7.	禁書 (ラジエル)	265
1 6.	忌子 (ロスト)	246
1 5.	悪意 (マステマ)	219
1 4.	蹂躪 (パレード)	196
1 3.	侵攻 (ゲヘナ)	179

# EP0.0 PROLOGUE

## 01. 再生（リザレクション）

神様転生。ラノベの中だけのものかと思ってたが、僕は半年ほど前にそれを経験したことがある。

転生先は元いた世界ではゲームの世界。所謂ゴツドイーターって狩りゲーなんだけども。早い話あれの世界に飛ばされた。

……そこまではいい。そこまでは良かったんだよ。いや世紀末世界に転生とか良くないけども。どうせこういうのってチート能力で順風満帆ウツハウハライフ出来るんだろって思ってたし。このゲームの女の子は可愛いからウエルカムしてたわ。

まず転生してスポーンしたのがマグノリアコンパス。あのラケル博士が営む孤児院ね。

そこに転生した時点でまずん？となった。あれ2スタートなのかなくて。

あとくそどうでもいいとは思うけどピクニック隊長がまだシヨタだった。この時点では2の本編始まる前っぽくてね。僕より全然子どもで可愛かったよ。この頃からしっかりしてたけどね。

そう。ここまでは問題なかった。進行的にも問題ないんだなって勝手に思ってたし、そのうち幼女のシエルとかナナとか来んのかなーって楽しみにしてたんだよ。

それでマグノリアコンパスに入って数日。遂にラケル博士によって偏食因子が投与された。あのブラッドアーツ使えるようになるやつ。僕は他に比べれば年長者の類だから因子を入れたらすぐ使えるようにするつもりだったらしい。

けど冷静に考えてもみて欲しい。僕は元々この世界の人間ではな

く、ましてやこの世界で育ったわけでもない。それこそ神様が都合よく僕の身体を改竄でもしてくれない限り、いい意味で特別なんてことはありえない。

結論を言えば、僕の身体に因子は適合しなかった。それどころか投与された偏食因子は僕の体内で増殖。神機使いとかになる以前に僕の身体を人ならざるものに変えた。

肌は人間離れした黒いそれとなり、四肢の指先や瞳は赤く変色。おまけに眉の辺りからは角みたいなのが生え、僕の姿はどこからどう見ても化け物のそれに変わった。同じ人型アラガミのソーマの嫁とかが可愛く見えるくらいに。あれ実際可愛いけども。

当然アラガミにされた僕は処分されるわけで。殺処分されるのが嫌で僕は大慌てでマグノリアコンパスを逃げた。ていうかあつさり逃げられたから分かる。あのラケルとかいうクソアマ。あいつ僕がこうなるの分かってて投与しやがったな。孤児院に拾われる年齢かつては思ってたけど戸籍不明の便利なモルモットを拾ったって認識だったのだろう。邪悪の化身がよ。

こうして転生特典らしいもの……どころか神機すら持たされずに放り出されて半年。僕は今日までなんとか生きている。

アラガミ化したならどうせチート能力持つてんだろとか思ったところのおまえ。僕も逃げてすぐはそんなこと思ったよ？でもこの身体ヤバいの。人間よりちよつと動けて再生能力あるだけでオウガティルより弱い。襲ったら尻尾で吹っ飛ばされて困惑したものの。

しかもアラガミ化したのに自我あるじゃんとか思ったのも三日くらい。すぐに体内のナニカが僕の意識を乗っ取ろうとしてきた。多分放置したら今頃はマジで野良のアラガミになってる。いやもう野良のアラガミなんだけど。

この自我の侵蝕を止める方法はただひとつ。それはとてもアラガミらしい方法で、この体内の細胞が求めるものを口にするってこと。

この身体になった唯一の利点。それはこの世界の大概のものが食事として摂取できること。本当ならアラガミとか食いたいところだが、さつき言った通り僕はコクーンメイデンより弱い。あいつのがまだ硬いつていうかあいつめちやくちや硬くて食えなかつた。しかも悪戦苦闘してる間に腹の針で反撃して、その直後に地面に潜ってどっか行つたし。逃げるな卑怯者。お前動かないんじゃないのか。

草でも食つてろ雑魚とでも言うのか、荒地の僅かな枯れ草を口にする程度で僕の身体は意識を侵蝕する手を緩めてくれた。枯れ草うめえなんてしてる場合じゃないのに。

でも僕の身体を形成するオラクル細胞は口にしたものの性質を学習する能力を持つ。そのせいか枯れ草ばつか食つてたら頭から草生えた。引っこ抜くと同時、二度と枯れ草は食わねえと心に決めた。草食のアラガミで済めば人間からしても平和だったんだけどそうはいかないらしい。

そこで枯れ草の次に妥協案として目をつけたのがアラガミの死骸。大型アラガミや神機使いの餌食になったアラガミを口にする。

口にするのがアラガミなら草食つた時みたいに変な方向に進化する心配はないはず。むしろこの貧弱ボディが食つたものに合わせて進化したりとか――

――――って思ってた時期が僕にもありました。アラガミの死体って霧散するんでしたね。このハイエナ戦法を取るには予めその狩猟現場に居合わせなきゃ間に合わないわけで。

それで神機使いがアラガミと戦つてるところに向かったら襲われましたよ。腕ぶつた切られてお腹と胸に二箇所ずつ穴が空いた。死ぬかと思つたわクソが。

とにかくそんな狩猟現場に居座ってたら一緒に狩られるので。やっぱりアラガミを口にするにはどうにかして自分で狩るしかないらしい。

改めてマグノリアコンパスを逃げる時に神機を持って来れなかったのが悔やまれる。せめて神機だけでも持つてれば戦えるかもだし、他の神機使いも話を聞いてくれるかもしれないものを……いつそマグノリアコンパスに侵入しようかとも考えたが、半年も彷徨ううちに方角なんて分からなくなってしまった。つか今世界のどの辺にいるんだろ。

誰だよ神様転生したら生きるの easyとか言ったやつ。こんな人外の化け物にされて世紀末世界に放り出されて……人生諦めるのは easy だわ。何が悲しくて屍肉漁るのに必死こいて頭働かせなきゃならないのか。地獄に直葬された気分だよくそつたれ。

まずいな……そろそろなにか食わないとオラクル細胞に意識を侵蝕される。あまりに暮らしが惨め過ぎてもう別に侵蝕されちゃってもいいかなとか思い始めてるのがマジでまずい。しつかりしろ。意識と心を強く保て。意識を蝕まれたら多分元に戻れなくなる。

頭を振って精神の均衡を保ち、少し落ち着いたところで辺りを見渡す。するとふと、こちらにふよふよと近寄ってくる奇形のアラガミの姿が目止まる。

巨大な卵殻から人の女の上半身が生えた浮遊するアラガミ。ザイゴートと呼ばれる小型アラガミだ。そういえばあいつはまだ試してなかったな。コクーンメイデンやオウガテイルはダメだったが奴なら……

ふよふよとこちらに不用意に近付いてくるザイゴートに右手を伸



ばす。弱った餌でも見つけたつもりだろうが、果たして食われるのはどっちかな。

ザイゴートの下半身を包む布のような尾を掴み、こちらへと引き寄せる。そしてその黒い卵殻に僕は歯を突き立てた。その姿から既に人間性というものを感じられず。ただただこの身体が訴える飢餓感に従い、僕はその天使を喰らうことだけに意識を注いだ。

## 02. 天使（ザイゴート）

ようやくありつけた餌であるザイゴートの頭に食らいつく。が、それと同時に気持ち悪い感覚が脳へと流れ込んできた。

それだけでは無い。卵殻のような頭部に詰まった毒が血肉と一緒に僕の喉を通り、胃が悲鳴を上げるのが分かった。そういや毒持ってたっけこいつ……うええマジで気持ち悪い。吐きそうだ……

それに脳に流れてくるこの感覚は……このザイゴートの思考とでも言うべきだろうか。そうだ。あの枯れ草の件と言い、僕の身体は食ったものの性質を取り込んで進化していくオラクル細胞なんだから。アラガミを食って進化すれば頭もアラガミのそれに塗り替えられていくわけで……

……ダメだ。アラガミはダメだ。アラガミは食えない。アラガミを食っても精神が汚染される。僕の内側のナニカが侵蝕を止めた辺り身体は求めているんだろうが……僕の自我が塗り潰されるのは嫌だ。

でもそうするとどうする？ やっぱ口にできるなら普通の食事だが……この世界、人間のいる場所って絶対神機使いとかいるよな。今の僕じゃ神機使いに出会ったらそれだけで狩られる。どっか襲って食料パクるって真似はできない。

そうするとやっぱ口にすべき最適解は……人間、だよな。人間なら食って記憶が流れ込んできたところで精神の汚染なんかないだろうし、集落の外とかで野垂れ死んでくれてるやつなら僕でも食える。

問題といえば倫理観とかカニバる事への抵抗感程度。自らの人間性を保つために人間を喰らうまでに至るとは、何とも本末転倒な気はするが。背に腹はかえられん。食事が全ての僕にとっては死活問題なんだ。好き嫌いなんかできるか。

幸いにも先程口にしたザイゴートのおかげで僕の自我は少し汚染されながらも正気を保っている。三日は持つだろう。その間に人間の……出来れば死体でも見つければいいなって。

ほんと今更かもしれないけど人間を手にかけて食うつてのは出来ればやりたくない。それやっちゃったら本当に人として終わりな気がするから。死体なら遺棄されたタンパク質の有効活用ってことでまだ許せる気がする。こんなのは五十歩百歩の問題かもしれないけど、このご時世なら死体には困らないだろうし。

次に口にする予定の餌が決まり、精神汚染が少しマシになったところで僕は立ち上がる。しかしそうすると、僕の背後からそっと忍び寄る影があった。

「……………まだ生きてたのか。」

それは頭部らしき部分を少し挟まれたザイゴートだった。僕に食われた部分は徐々に再生しているが、それでも大きな充血した目玉で僕を見つめて後を付けてくる。なんだこいつは。もう行っていいよ。お前食うとヤバいみたいだから。

しかしこいつはそんな僕的心情なんか知ったこっちゃないとばかりにその身体を僕に近付け、そして――

――あの腕の代わりに生えてる翼で、僕の顔をそっと抱きしめてきた。

……………あまりに意外な出来事で、しばらく呆然としていた。いやいや。アラガミって……………ザイゴートって人に懐くものなのか？こいつ野生だろ??

そう思ったけどそうか。僕のことをアラガミとして見てるからこ  
うやって擦り寄ってきて……いや、擦り寄るものなのか……??卵殻  
の目も細まっており、人型の口の部分も気のせいかにつこり笑って  
いる。

アラガミに感情……というか知性なんて無かったはずだが。特に  
こんな雑魚アラガミには。でもこのザイゴートは自分を食おうとし  
た僕のことを、それは大事そうに抱きしめるような仕草を見せてい  
た。

「……………変なやつ。また食われるかもしれないのに。」

「……………♡♡♡」

ザイゴートを引き剥がし、試しに頭と思わしき卵殻のような部分を  
撫でるとこれまた嬉しそうに目を細める。そういやこいつって人型  
の部分が女の形してるんだよな。アラガミに性別とかあるのかわか  
らんけどメスなのかな？

「……………アラガミのくせに結構な巨乳だよな。お前。」

と、人の形の胸の部分をぷにぷにと押してみる。思ったより柔らか  
かったと思う反面、めちゃくちゃしようもないことしてる気がして恥  
ずかしくなった。周りに人がいないから良かったものの。どれだけ  
飢えてるんだよ僕は……ガキじゃねーんだから……

……………おいこらザイゴート。お前も困った顔すんな。こいつ人の  
部分が結構感情豊かだな!?しかも困りながらも胸の部分を僕の方へ  
と近付けて……別に触りたいわけじゃねーんだよ!!やめろ!!なんか  
恥ずかしそうにすんな!!お前そういう知性ないだろ!!

はーほんと……半年も一人だったせいかな。頭おかしくなってる  
よな。事実として、アラガミとはいえ一緒に生きてくれるのが少

し嬉しかったりするんだから。なんかだんだん可愛く見えてきたっ  
ていうか……………

「……………♡♡♡」

擦り寄ってくるザイゴートの頭をもう一度撫で撫でしてしまった。  
自分で言うのもなんだけど末期だと思う。

こうして旅の仲間が増えた僕だったが。結論を言うと、それから数  
日経った今日に至るまで死体どころか生きた人間すら見つかってい  
ない。そして内側からの侵蝕が始まりかけている。

そしたらなんとこのザイゴート。自分の身体を僕へと差し出して  
きた。よほど飢餓が顔に出てたのか『食べてください』とでも言わん  
ばかりに僕の腕の中へとすっぽり収まってきた。

……………これがザイゴートの何なのかは分からないけど。愛だ  
としたらちよつと重すぎないかなって思うよ？物理的に身体捧げて  
くるとか……………

とはいえ、僕も選り好みできないレベルの飢餓感に襲われていたの  
も事実なわけで。結論を言うと頂いてしまいました。食われても致  
命傷にならなそうな尻尾の部分をちよいとだけ。

今回は毒のない部分を食べたから胃の気持ち悪さは無かったけど、  
やっぱり精神が汚染される感覚はあったよね。アラガミの本能みた  
いなやつに。

あと朗報か悲報か分からないけど。一定量食った影響なのか、ザイ  
ゴートの能力が少しだけ使えるようになってしまった。

具体的には肩から背中にかけてザイゴートの卵殻みたいな部分を  
形成。その中で圧縮した空気を掌から撃てるようになった。身体の

一部をザイゴートのそれに変えられるようになったというか……草食つてたら草生えてきたあれのザイゴート版みたいな感じ。肩から背中にでかい卵殻できるわ腕から羽生えるわですげーグロテスクだけどね。バ●オに出そうな見た目してるよ。

いくら自由に制御はできるけど不味いよなあ……着実に人間やめてってるよ。僕の身体が食ったものの性質を学習するってのはそうなんだろうけど、こう身体単位で進化していくとは……これで元に戻れませんとか言ったらそのうちG生物みたいな化け物になりそうで怖い。

そして僕が自分と同じ能力を使えるようになったと知ったザイゴートは——

「!!!」

「おいバカ仲間呼ぶな!!おかわり要求してねーから……つてげっ!!  
いっばい来た!?!」

どこから呼んだのか色違いの墮天種まで混ざってた。ちなみにみんな一番最初の子みたいに献身的でした。助けてください。

### 03. 進化（プリマドンナ）

様々なザイゴートに囲まれて歩くこと更に二週間。致命的と呼べるまでの餌不足に僕はやむを得ずに僕にひっついて来るザイゴート達（墮天種含む）を口にした。

その結果精神汚染が結構深刻なレベルになり、頭の中に変な声が聞こえるようにまでなってしまった。具体的には『終末捕喰』って言葉がゲシュタルト崩壊しそうになってる。あの女もこんな感じだったのかな。

で、それ抜きにザイゴートのみを食い続けた結果。僕の身体は当時想定していたチートスペックに徐々に近付きつつある。雑魚アラガミの中では、って意味だけどね。ヴァジュラ辺りに出くわしたら死ぬのは変わらないけど。

具体的には掌の口から放つ空気弾が通常弾に加えて炎、氷、雷と撃ち分けられるようになったのとザイゴートの扱う各種毒ガスの生成。及びそれらに対する抗体が出来た。

これが地味に便利で、ヴェノムだのリークだのと言った面倒な状態異常が軒並み無効化。加えて守備力低下のガスはアラガミの結合を弱めるという性質上、今まで歯の立たなかった硬いアラガミの捕喰も可能となった。これにより最近は餌リストにコクーンメイデンが入ったりしている。アラガミから離れられねえ。

そして何より。掌に目玉を形成する程度で済んでいた僕の肉体的な作能力が、この人型アラガミの姿から完全にザイゴートのそれに変えられるほどにまで進化した。これにより一時的にはあるが飛行能力を会得。移動が随分と楽になった。

こう並べてみるとめっちゃくちゃ強そうに見えるかもしれないが、それでも攻撃力や耐久力は所詮ザイゴートの域を出ない。一回クアドリガに遭遇して地獄を見たのは記憶に新しいか。あの戦車道に連れ

てるザイゴート何体か焼かれたしね。

### 閑話休題。

そんなアラガミに囲まれての奇妙な生活に慣れつつある僕だが、一番最初についてきた通常種のザイゴート……こいつが最近妙にべったりしてくる。身体を丸めて腕の中に収まってきたり、寝ていると胴体に乗っかってたり。

それだけじゃない。僕が他の墮天種のザイゴートとか食つてると割り込んできたり、他のザイゴートを毒ガスで威嚇したりと奇妙な行動が目立ってきている。

……嫉妬、なのだろうか。ザイゴートなのに??ザイゴートがそんな複雑な思考回路を持っているものなのか。どこぞの糸目の博士じゃないけどちよつとアラガミの生態に興味が出てきちゃったりしてる。

アラガミとはつまり、オラクル細胞の群体。早い話スイミーのあれたいなもんだ。その全てが捕喰という本能で動いているから個体として存在しているだけで、元はと言えば無数の生き物の集合体なのだ。詳しく覚えてないから合ってるか分からないけど、現実だとカツオノエボシとかがこれに該当したはず。

つまりこいつらアラガミは交尾とかで繁殖するわけではない。むしろ分裂、増殖したオラクル細胞が新しく個のアラガミを形成するつて形になるはずなだけ。それなのにこのザイゴート達はまるで我先に僕に身を捧げようと熾烈な戦いを繰り広げている。これはなんでなんだろうか。

することが無さすぎて、本当にくだらない疑問を抱いていた。でも元人間とはいえ僕もアラガミながら自我は持つてるわけだしね。



やっぱゲーム中で描写がないだけで雑魚アラガミでも感情や思考は持っていたりするのかもしれない。うーむ哲学じみた話になりそうだな……………

とにかく。そんな感じに一番最初のザイゴートが僕が墮天種ばつか構ってるのに怒ってるぽいんだよね。通常種は一番口にしててもう全能力を取り込めてるからさ。どうせ精神汚染されるなら、少しでも僕の得になる方を食いたいわけで。そうしてここ最近では墮天種ばつか食ってたから。それが気に入らないらしい。

今も氷の墮天種を口にしてる側で勢い弱めとはいえタツクルして邪魔してきている。お前らって食われるのが愛情表現みたいな風潮あるけどアラガミってみんなそうなのか。人類にはまだちよつと早すぎる愛ですね……

そういう感じでここしばらく、僕の周りを飛び回るザイゴートの間で内ゲバが続いている。誰が今日の僕の餌になろうかというトチ狂った戦い。押し付け合うならまだ分かるけど率先して食われたがってるんだからほんとアラガミって頭おかしいと思う。

内ゲバは段々エスカレートし、最近じゃ僕の周りは常時属性弾が飛び交い、様々な毒ガスが充満するある種の地獄状態。こいつら食って得た耐性が無ければとつくに死んでると思う。遠目にヴァジュラがドン引きして離れてった時は流石に乾いた笑いが漏れた。

でもね。そんな凄惨な修羅場もある日突然終わった。

それはある日の朝のこと。なんか妙な気配がして、まだ日が昇りかけている時間にも関わらず目が覚めた。明け掛けの朝の中、辺りを見渡す。そうするとまず、僕の視界に地獄絵図としか形容できないよう

な風景が飛び込んできた。

それは無残に引きちぎられて散乱した多数のザイゴートの羽だった。あちこち血と毒液の混ざったものが撒き散らされてるからすごいグロテスクで、まず何かのアラガミに襲撃されたのかとびびった。

結論をいうと居たんだよ。大型のアラガミが。

その姿は蝶を思わせる人型で、青白い肌を持つ女神だった。スカートを思わせる青い翅の内側には金色に輝く無数の目を持ち、同じく妖艶で無機質な顔の額にも輝く邪眼を備える。

名はサリエル。その制空能力と毒の鱗粉でゴツドイーターを翻弄し、光壁やレーザーで空中での射撃戦闘を得意とする大型のアラガミだ。そいつが寝ぼけてた僕のことを静かに見つめていた。

心臓がヤバかった。いくらザイゴート種的能力を手にした僕でも大型のアラガミは手に負えない。だから普段は小型以外のアラガミが見えたらそれがコンゴウでも隠れるようにしてたし、寝ている時は周りのザイゴートに付近を警戒させていた。

戦おうなんて気は起きなかった。むしろこの遠距離までばっちり対応出来る女神様からどうやって逃げ切ろうかと必死に考えていた。あのザイゴートの群れを寝てる僕に気付かれる事無く片付けるほどの相手だ。勝ち目なんかないしまず間違いなく食い殺される。

しかし。僕が後ずさりすると、そのサリエルは笑った。額の邪眼が目を細めるだけでなく、人の顔の部分もそれは優しく。そこに敵意や殺意などはなく、ただ穏やかに微笑んでいた。

それだけじゃない。サリエルは宙に浮かべたその身体を静かに下ろすと、僕のことを青い翅はねに包まれた腕でそっと抱き寄せた。下手に抵抗もできずされるがまま抱きしめられるが、その抱きしめる仕草と目付きで気付いた。

このサリエル。僕に最初についてきたあのザイゴートなのではと。

だつて僕がふぎけて女体部分の胸を触つたのを覚えているのか、こいつ僕を抱きしめて顔におっぱい押し付けてくるもの。……すっげえ柔らかいんだけど。体格差あるから顔を大きいおっぱいに挟まれてぎゅーつてされてんの……

それでもやつぱ恥ずかしいのか、僕がサリエルの顔を見つめてたら困つたように顔を逸らした。ヤバい性癖歪みそう。歪むっていうかなんか目覚めそう。涼しげな顔に反して仕草がめちゃくちゃ可愛い。

でも反面。食い散らかされたように散乱した他の墮天種を見るとゾツとするものがある。多分だけこのサリエル……いやザイゴート、共食いしてサリエルになったんだよね？僕が他の墮天種ばっか食ってるのが気に食わなくて、それで皆殺しにしたんだよね?!

……人間もそうだけどき。女って怖いね。僕のことを独占するように抱きしめるサリエルを見て少しだけ鳥肌が立った。邪眼ニツコリしてるけど……

「…………ヤンデレかあ。」

「ムム。」

前から献身的だしその気質はあつたとはいえ。他の女の子とかアラガミに浮気（食事的な意味含む）したら後ろからレーザー飛んできそうで怖いな。僕を守ってくれるって意味では頼りになるけども。

ほんとアラガミっていうのはよく分からない。

## 04. 喰愛（サリエル）

共食いの果てに生まれたこの子と旅をすること更に数ヶ月。精神の汚濁が割とマジにヤバいことになってきている。原因は分かっている。サリエルだ。

……誰だそれ？あのサリエルのことだよ。名前までつけてんのかよってドン引きしないでね。この子ヤバいんだから。

精神汚染進んでるせいだと思うけどね……この子が天使過ぎて。天使ってどうか女神。めつつちやいい子なの。もう結婚しよってレベルで。

まず僕にだけなんだけど凄い優しい。僕が疲れたなーって思うと抱きしめて元気づけてくれるんだよ。あの僕の顔を挟めちゃうくらい大きいおっぱいにぎゅーってされたら元気出るに決まってるじゃん。何ならライフ回復してるわ。まだ赤い雨降ってないのにいつの間になユクスになった。実は剣戟効かなかつたりしない？

しかもそうやって僕のこと抱きしめてる時にね。あの翹でふわふわした手で僕の頭を撫で撫でしてくるの。もう包容力がヤバ過ぎて。母性にも目覚めたのかってくらいめちやくちやに甘やかしてくんの。なんでこんな愛でられるのかは未だに分からないけど、この過酷すぎる旅の中ではこの子が清涼剤過ぎてね。最近じゃサリエル抜きじゃ生きられない身体にされている。包容力あるヤンデレって恐ろしいな……

……ぶつちやけちやうと精神汚染進んでる原因はね。最近この子しか口にしてないんだよ。大型アラガミは食った時の精神汚染が小型アラガミより酷いらしくて。それなのにサリエルばっか食ってるから『終末捕喰はよ』って声が鳴り止まなくなっただと思う。

でも仕方なくない？この子食う時めつつちやエロいんだもん。サリーのどこ食うのかって言うのと首の部分なだけでさ。要するに構図としては抱きしめられてる時に首にがぶってするわけで。

そうやって噛み付くとね。この子いつもビクってするの。それで痛いのかなって思ってたやめるともつとやってとばかりに抱きしめる力が強くなるんだよね。んで首の肉をガジガジしてる間ずーとぎゅううって強く抱かれるの。

詳しくは言えないけどね。サリエルってこんな顔するんだって顔してたよ。いつも涼しげで邪眼以外は表情変わらないものだと思うってたから。

それでしばらくサリーの身体を食っているとサリーも我慢できなくなっちゃってね。僕の耳とかすぐ生える程度に甘噛みしてくんの。そうして口の周りに血のついたサリーはエロくてね……舌なめずりとかさされると腕とかあげちゃってもいいかなーってなるわ。すっげえゾクゾクした。

ザイゴートの時は分からなかったけど、食ったり食われたりするのがアラガミの愛情表現だったのがよく理解できたわ。互いに身体の一部を与え合う。これが愛し合うってことなんだなって。これは確かにいい。むしろなんで人間だった頃に気付かなかったのか。もっと早く気付きたかった。こんな素敵なジャンルがあるなんて。

………狂ってる？何を今更。半年ほど言うのが遅いぞ。

でもそんなえっちいサリーを見るためにこの子ばっか口にしてたせいか、汚濁した精神と同じくらいに僕の身体の異形化も進んでしまった。目の白目の部分は赤く濁った血みみたいな色に変色し、瞳は輝きを持たない金色へと。口の中の歯はギザギザした牙状のそれに変

わり、口が耳近くまで開くようになってしまった。

腕と腰周りにはふわふわした白い翅が生え、両手の掌には僕と同じ気持ち悪い目玉が生えた。変な感覚だけど視覚もあって、しかも顔の方の本来の目より凄く視力がいい。おかげで掌を顔に向ければ鏡の代わりとなったが、そのせいで自分の容姿の醜さに軽く絶望を覚えた。綺麗なサリーが羨ましいなって……

そして今はそんなサリーと一緒に飛行訓練中。抱っこされたまま浮いてもらって、離してもらおうと軽く身体が浮く。それでもサリーみたいに自由には浮けないししばらくするとぼてって地面に落ちちやうんだけどね。その度にサリーが心配して抱っこして頭撫でてくれるのがほんと包容力高い。こりや男を駄目にするアラガミだわ……

でもふわふわした翅が腰にも生えてる辺り、ちゃんと練習すれば飛べるようになるはずだからな……感覚はなんとなく掴めてきてるんだけど。やっぱり飛行能力って男の子の憧れだからさ。飛べるだけの身体を持つならちゃんと飛べるようになりたいな……って。こうやって暇な時には練習してるんだよ。

それと掌の邪眼。こっちは使い勝手がまだ理解できたから、もうサリエル種が使うレーザーに似たものを撃てるようにまでなっている。種類は直線だけでホーミングとかは出来ないけどね。それでもオウガテイルを殺せるようになった辺り相当強い。ようやく自力で狩りのできる身体になった。

あとはこの精神の汚濁さえ取り除ければ完璧なんだけど……僕が思うにね？この精神汚染、空腹時に自我が薄れる感じとは違うんだよ。あっちが生存本能みたいなのに対してこれは種族の本能みたいな……言うならアラガミの本能とでも言うべきか。

これってさ。多分だけど僕の身体がまだ人間ってものを知らない

のが原因だと思うんだよね。僕は確かに元々人間だけど、僕の身体に投与されて増殖した偏食因子。つまるところオラクル細胞はまだ人間というものを僕の身体しか知らない。

それなのにアラガミを食いまくってアラガミの情報量ばつか身体に溜まってくから人間の部分がこうして薄れていつてるんだと思う。

ならば、だ。早い話がこの身体に人間というものを学習させれば。そうすれば人間としての性質も身体が覚え、このゲシユタルト崩壊するほどの『終末捕喰はよ（ノシ、ω、）ノシ バンバン』という声も収まるのではないかと。僕はそう思うんだよ。

「……………??？」

「って……サリーに言っても分かんないよね。わっ!？」

「♡♡♡♡♡」

膝の上に抱っこされておっぱいに頭を乗せてたら、サリーが突然僕の顔を抱きしめて胸に押し付けてきた。これ実は中に人いたりするんじゃないか……?やあらかいけどちよつと苦しい……

……まあつまりね。僕の身体は食ったものの性質を学習する。それで人間の性質を学習させようっていうんだ。ここまで言えば僕がなにをしようかってのは言うまでもないだろう。

幸いそれが出来るだけの身体は手に入れた。あとは心の問題だ。元々は人間なのに人間コロコロするのに抵抗はないのかと言われると……ありませんね。まっつったく。精神汚染進んだ影響か、ちつとも罪悪感がない。

特に神機使い。あいつらには身体に穴あけられたり腕切り飛ばされたり散々な目に遭わされてるので。恨み晴らさしておくべきかって



感じだよ。一般人ならまだしも。

幸いにもここ最近、ここらでも神機使いはちらほら見かける。それを襲わなかったのはこのサリエルの能力をまだ物にしてないから。これを完全に物にしたら奇襲をかけてぶっ殺してくれる。

某地域を除けば神機使いって基本的にヴァジュラ出ただけでも支部単位で大騒ぎになるってなんかで見た事あるし。それに近いサリエルの能力を得た僕はすなわち、支部を大騒ぎさせるだけの強力なアラガミってことなんだ。負けるはずがない。

しっかし……それでもやっぱり皮肉な話だよ。人間性を取り戻すために人間を食らう。僕をアラガミに変えたあの阿婆擦れが聞いたら大喜びしそうな話だ。本末転倒にしてもほどがある。

己の自我の正気を保つたためとはいえ。これで僕は本格的に人間に敵対することになるんだから。

## 05. 喰人（ゴツドイーター）

四日後。地道な練習とサリーの協力（捕喰的な意味で）もあり、遂に僕は自由に浮けるようになった。元々サリエル種はあまり高くは浮けないのか、高度を上げようとするともまだ落ちるけど。それでもサリーと一緒にふわふわできるようになり、滑るように宙を舞えるほどにまでなった。

更に両手の掌の邪眼。ここから放つレーザーはかなり自在な軌道で放てるようになり、その威力もあの硬いコクーンメイデンの外殻を貫通して撃ち抜けるまでに強力に。毒の鱗粉や光壁はまだ使えないけど、人間相手には十分というものだろう。

というわけで。神機使い狩りの時間ですよお!!

「……………??？」

「大丈夫だよ。サリーは心配性だなあ。」

引き止めるように抱っこしてくるサリーの頬を撫でるが、行っちゃダメとばかりに抱きしめる力が強くなる。そんな心配そうな顔しなくても大丈夫。この時代ってまだ新型神機なんてものないから。近接型なら延々と引き撃ちしてれば簡単に殺せる。

それに某地域を除けば普通のフエンリル支部はヴァジュラとか出るだけでも大騒ぎするレベルだってなんかで聞いたことある。僕の認識ではサリエルやクアドリガってその辺の中堅クラスのアラガミだからさ。その能力を持つ今の僕はスペックだけでも普通の神機使いには手に負えないわけで。

……………ほんとならずつとこうやってサリーとイチヤイチャしてたいんだけどさ。僕の精神が完全にアラガミになったらもうこういう事が嬉しいってのも分からなくなっちゃうかもしれないから。もっ

と酷いとサリーのこと喰い殺しちゃうかもしれない。サリーは歓迎かもしれないけどそれは嫌だからさ。

「だから……ね？行かせて??」

「……………」

サリーが渋々といった感じに僕のことを放す。なーに。適当に弱そうな神機使い一人喰ったらすぐ戻るから。そんな悲しそうな顔しないの。ほんとこの子どんだん表情豊かになるなあ……明確に感情つてものが芽生えてるもんね。そのうち本当に人間みたいに進化するそうさ。

「んじや行ってくるねサリー。お土産楽しみにしてて。」

そうして身体を宙に浮かせたまま、遙か彼方へと掌を向ける。そして掌の邪眼で遠くまで見渡すと……いるな。神機使い。二人組でシユウ師匠と戦っているやつが。遠過ぎてよくは見えないけど片方は近接で片方は後方支援か。やっぱまだ时期的に新型神機はなさそうさ。

それにこれはチャンスだ。普通の神機使いは四人でパーティーを組んで動くのに。あいつらは今二人組だ。しかもシユウとやり合つて消耗していると来た。

喰い方は決まったな。シユウを倒して安心したところで奇襲をかけてやる。浮かせた身体で滑るように飛来し、掌の邪眼で状況を確認しながら距離を詰める。

……よし。シユウが倒れた。釣り餌ご苦労さま。まずは前方に向けた両手の邪眼を見開き、急接近しつつもレーザーをばら撒く。不

規則な軌道で襲いかかる赤い光の雨に神機使い二人は直ぐに気付くが、その中にはいくつかホーミングするレーザーも混ぜた。剣の方はさておき銃の方は防ぐ術はないはず。

「ぐうっ……………!?!」

「姉上!?!…なんだこのアラガミは!!」

銃を持った女の神機使いは飛来するレーザーを無理やり捻って避けたから、その直後に転ぶようにして体勢を崩す。そうすればあとは飛来するこの速度の勢いのままに喉元目掛けて喰らいつくだけ。

口の付け根から耳のあたりまでが裂けるように開き、口の輪郭そのものが無数の牙のようにギザギザな形を作る。サリーには絶対しない捕喰形態だ。これで首を喰いちぎって頭と胴体を泣き別れさせてやるよ。じっくり頂くのはそのあとだ。

「それじゃーイタダキマ——」

——次の刹那。顎から左頬にかけてが吹き飛んだ。焼けるような感覚と肉の焦げ付く臭い。それがアサルトの神機から放たれた弾丸によるものだど認識するのは、続けざまに振られた凶刃に僕の左腕が切り飛ばされてからのことだった。

「姉上……大丈夫か!?!」

「誰にものを言っている……畳み掛けるぞ!!」

「おう!!」

待て待て待て。なんだこいつら。なんだこの神機使い二人組。めちゃくちゃ強いぞ!?!いや……今まで会った神機使いの中で一番ヤバい!!全く僕が反応できなかった!!

残った右腕を剣……いや、チェーンソーを持った神機を振るう男の方へと向ける。そして邪眼から拡散するレーザーを放つが、ほぼゼロ距離に近いにも関わらず回避。僕の腕がない左側に回りこみ、死角から切り上げるようにして胴体と左脚が切り離される。

白い翅のついた器官は腰周りにある。その器官が半壊した僕は当然地面に崩れるようにして落ち、しかもその瞬間に数発の弾丸が僕の右腕をも吹き飛ばした。微塵の無駄もない連携に嫌でも思い知ることになる個々の技量の高さ。

この時点で既に僕はこいつらを口にする事ではなく、この状況からどのようにして逃げ切るかに思考を回していた。僕の身体で残っているのは胴体と右脚だけ。武器の邪眼がある両腕は吹き飛ばされて反撃どころか移動すらままならない。

加えて僕が仰向けに倒れると、男の方が赤いチェーンソーを僕の胴体に突き立てた。これで這いずる事すら出来なくなったわけだ。クソツタレ……道理で強いわけだよこの二人。だってこのチェーンソーみたいな神機、めつつつちや見覚えあるもん。一番喧嘩売つちやいけない神機使いじゃん。

「姉上……もしかしてこいつじゃないか？ 榊のおっさんが言った人に似たアラガミって。」

「アイテールの特異個体か幼体か？ しかし腕に眼があつたな。」  
「新種かどうか判断するのは俺達の仕事じゃないさ。姉上、捕喰するから離れてくれ。」

姉上ってまさか……うわ若いな。若いけどこの頃から凶悪なおっぱいしてんな。そして性格もあんま変わってないっぽい。いや、若い分なんつーか荒々しい感じだな。僕の身体にアサルトの銃身を突き立てて押さえつけてきた。綺麗だけど付き合いたいかって言われる

と悩むタイプだわ。行き遅れるのも分か r……

……なーんて余裕こいてる場合じゃないのよ。どうやって逃げようか。腕の再生は……無理だな。肘から先がない。この負傷じゃ再生させるのに片方三日はかかる。足も同様。再生するってだけで回復能力として使えるほどアラガミの再生能力は高くない。

とにかく。今は僕に出来ることを考えろ。腹には神機が突き刺され、仮に抜けたとしても移動手段も攻撃手段もない。そうなるかどうか考えても僕一人で逃げ切ることは不可能だ。

だが……僕が散々喰ったサリーの前の姿の時の能力。ザイゴートの能力には、『アラガミを呼び寄せる』という能力がある。本当はこれは僕もやりたくないんだけどさ。現状はこれにワンチャンかけるしかない。下顎が吹き飛んでるから上手く叫べるかは不安だが……

「!!!」

「なっ!? こいつまだ生きてんのか!!」  
「離れろ lindow!! なにか不味い!!」

そしてもうひとつ。ザイゴートの毒ガスだ。両腕と左脚の傷口の付け根から、毒性のオラクル細胞を放出させて辺りに充満させる。すると僕に刺さったままの神機を手放し、二人は僕から咄嗟に飛び退いてガスを回避する。

……これでいい。ガスは別に吸ってくれなくていい。ただ僕の身体に刺さったこのブラッドサージ。僕の目的はこいつだ。こいつを手から離して欲しかったんだよ。

僕含めアラガミはその全身が捕喰機能を持つオラクル細胞で形成されている。つまり、口以外の場所でも捕喰ができる。僕の身体には

神機が突き刺さっているが、それは逆にこの神機の刀身が僕のオラクル細胞に包まれているということ。

つまり。口の中にあるのと変わらないってわけだ。

蝕むようにしてブラッドサージの刀身を体内に取り込み、そのまま分解するように捕喰していく。すると身体に凄まじい拒絶反応が走り、体内に取り込まれた異物に対する吐き気が全身に走る。プラスチック喰ってるみたいな感覚とでも言うべきか……

しかし……それだけだ。神機もアラガミ。普通のアラガミが口にしたくないと思う材質で出来てるだけで、スサノオとか神機を好んで捕喰するアラガミがいるくらいだからな。我慢すれば喰えないわけではない。

そして僕の捕喰によりブラッドサージを半分くらい取り込んだところで、ようやく僕を地面に縫い止める刀身がへし折れた。

「あ……あいつ！俺の神機を!!」

「リンドウ!!ここにアラガミの群れが接近しているらしい!!」  
「なに!?!さてはこいつの能力か!!」

ほーら。どうする?そんな武器のない状態でアラガミに囲まれたら、いくら流石にリンドウさんでも危ないんじゃない?捕喰機能のない銃型の神機じゃ僕は完全に殺せないし。ここは大人しく撤退した方がいいんじゃないかな?..

「榊博士にこいつの情報を持つてくためにもここで死ぬ訳には行かない。リンドウ……ここは退くぞ。」

「ああ……了解だ。」

リンドウさんが刀身の無くなった神機を握り、僕の方を一度睨んだ後にそのままどこぞへと向かっていく。そうか……ここがそうだった

たのか。

他の支部じゃ大騒ぎになるヴァジユラを単独で片付けるゴツド  
イーターがゴロゴロいる魔境。その名を極東支部。行く宛てもなく  
彷徨い続けていた僕は、いつの間にかこの地へと辿り着いていたら  
しい。

どうにか生き残ったこの身体を再び横にするが、遠方から響く地鳴  
りがこちらへと向かってくる。ザイゴートの能力で呼び寄せたアラ  
ガミがこちらへと向かってくる音だ。

そう……問題はまだ片付いちやいない。神機使いはどうかして  
追い払った。が、二人を追い払うために呼び寄せたアラガミ。ぶつ  
ちやけこいつらも僕のこととは基本餌認定してると思うし、僕も普段は  
サリーと一緒にやなきや隠れてやり過ぎすレベルなんだよ。

そんなのがいっぱい。それも片足しか残ってない動けない僕の元  
へと集まってくる。僕の声を聞いてサリーも来てくれることを祈る  
しかないが……この魔境に住まうアラガミもまた強靱なものも事実  
なわけで。

一難去つてまた一難とはよく言ったものだ。迫り来る『獣』の群れ  
に悪寒が走る。今日は厄日というやつなのだろうか。そう考えずに  
はいられないほどの絶望が、僕のすぐそこまで歩み寄ってきていた。



## 06. 獣達（ハントレス）

まず視界に入ってきたのは怖い顔したおっさんの顔だった。真っ黒な皮膚を持つ人面獣のアラガミ。その特徴的な鬣を思わせるマントを揺らし、赤い双眸で身動きできない僕を見つめる。

ディアウス・ピター。ヴァジュラ神属の接触禁忌種にして天帝の名を持つアラガミ。数いる大型アラガミの中でも最上位クラスの存在だ。

そしてその黒い帝王を囲む氷の女王達。プリティヴィ・マータと呼ばれるこちらと同様、第二とはいえ接触禁忌種。普通の神機使いでは出くわすだけで危険という凶悪極まりないアラガミだ。

まさかこんな大層なもんを呼び寄せてしまうとはねー……計七体もの接触禁忌種の目の前に四肢を三箇所もがれた状態で転がってんだ。この後僕がどうなるかなんて言うまでもない。この顔触れじゃサリーが来たところでどうにもならないし。

群れの長であろうディアウス・ピターが僕へと足を進め、まるでこちらの反応を楽しむかのように口を歪める。こいつってあれなのか。アリサの両親殺したりリンドウさんの右腕持ってたったりしたやつなのかな。いや、僕の場合は未来形か。こいつがリンドウさんの腕輪持つてくのはまだまだ先の話なはずだから。

……あーあ。サリーに言われた通りやめておきや良かったな。こんな邪悪なライオンキングに喰い殺されるなんて。それが嫌ってわけではないけど。オウガテイルとか雑魚に食い散らかされるよりはマシなだけだよ。どうせならサリーに喰われて死にたかったな。

でもそんな願い事が届くはずもなく。帝王は跪き、僕の胴体をその巨大な口で引き千切る。腹部と右脚が食い千切られているにも関わらず痛みは少なく、そして意識は未だに明瞭にこの食事を行うピター

を視界に映している。

だがその時。ピターが口にしてた僕の下半身を吐き出した。咀嚼はしたのか右脚は既に見るも無残な肉塊に変わってはいるものの、それを汚そう顔をしてピターが吐き出していた。

しかもそのままピターは僕のことを忌々しそうに見つめると、もう一度口を近付けかける。でもある程度まで口を近付けると、やはり噛み付くことはなく顔を背け、不快そうに眉間に皺を寄せた。

……不味かったのかな。僕の身体。ピターの反応に興味を示したのか、他のプリティヴィ・マータも僕の身体に顔を近付けて匂いを嗅いだり舐めたりする。けどいずれも口にするのではなく、嫌そうな表情をして顔を背けた。

なんでだろ……サリーは普通に僕の耳とか指先とか捕喰するのに。単純にヴァジュラ神属は僕の味が好みじゃないのか。それとも僕の身体に変化が起きたのか。でもサリー以外には最近は何も口にしてない。さつきも結局リンドウさんもツバキさんも傷一つ付けられなかったし——

——いや待て。喰ってたわ。めつつちや不味いものを。異物同然の『神機』っていうアラガミを。僕の身体を縫い止めるあのブラッドサージを壊すのに捕喰して壊した。まさかあれのせいかな？それしか心当たりがない。

なんの因果だろうか。僕を死に追いやりかけたあの神機を口にしたことで、今こうしてピター達に喰い殺されることが無くなった。神機は偏食因子のせいで普通のアラガミは食えないから。その性質を学習して模倣した僕の身体もきつと同じ性質を有するのだろうか。

……しかしもしそうだとしても妙ではある。神機を喰ったのはついさつきだというのに。もうその性質を学習して模倣するに至っ

ているのか？ ザイゴートの時とか何日も口にしてなきや能力使えるようにまではならなかったのに。 武器壊すのに急いで喰ったから消化も早かったとか……？

考えても分からないが確かなことはひとつ。 どういうわけか僕は神機に近い性質を得た。 アラガミに喰われにくい異物の身体だ。 酷い目に遭ったと思ったが、思わぬ収穫を得たものだ。 これで僕はアラガミに喰われることは無い。

落ち込んだ様子で引き返すディアウス・ピター達に下顎のない口元が緩む。 残念だったなピター。 あとはサリーが来るまでここで大人しくしておけばいい。 ほんと肝を冷やした……けど助かって良かった。 あの場で口にしたリンドウさんの神機には本当に感謝しかない。

でもね。 これではいおしまいつて行かないのが僕なわけで。

「グルルッ。」

「……………??……………ッ!!」

不意に僕の胴体に大きな前脚が押し付けられる。 何事かと思いきや目の前にあの不気味な女神像の顔があった。

プリティヴィ・マータ。 女帝と呼ばれるそのアラガミは、僕のことを餌ではなく玩具と認識したらしい。 喰えないと分かって引き返す他の群れを気にもとめず、僕のことを前脚で転がして遊び始めた。 しかもそれだけでなくその大きな口で僕を喰えて……ちよ。 涎つけんなこの人面猫!! 涎凍ってるんだけど!?

こいつ正気か。 達磨になった人型の生き物を玩具にするとか。 しかも喰えられた場所が軽く凍り付いてる。 神機に似た体質になったと言っても喰われなくなっただけで、普通に攻撃は効くし死ぬんだろ

そうしてしばらく僕で遊んでたプリティヴィ・マータだったが。途中で群れに置いていかれたのに気付いたらしい。なんだか慌てた様子でどこぞへと走り始めた。

……………僕を口に啜えたまま。

ちよつと待てエエエエ!!?お前どこ行く気!?ねえ僕をどこに連れてく気!?!なんでお気に入りの玩具見つけた感じで僕のこと持つてくの!!ヤバイヤバイヤバイ凍る!!身体凍ってるから!!

しかも腕も足もないから僕は暴れることも出来ず、下顎もないから舌に噛み付いて離させることも出来ない。離せこのアホ猫が!!あそこにサリー来てくれるかもしれないんだから!!

でもプリティヴィ・マータはそんなこと知ったこっちゃないとばかりにどこぞへと向けて走り続ける。あとついでに啜えられてる部分から僕の身体が凍り始めている。あれ……これ死んだのでは………なんか眠くなってきたんだけど………

そうして僕は氷の女帝にどこぞへとお持ち帰りされた。僕の最後の記憶はここで途切れたんだよ。

だからこそその道中でなにがあったのか。そんなことは知る由もないし、僕は間違いなく死ぬか眠るかのどちらかの状態だったはずなんだよ。少なくとも何かを捕喰したりできるような身体では無かった。

にも関わらず。僕は誰のものとも分からない声を聞いた。

『……て……さい……』

「……………」

『起きてください。もう朝ですよ。……僕の声、聞こえていますか?』

少年とも少女ともつかない変わった声だった。けどその声を聞くと霞がかつてた意識が妙にはつきり目覚め、そしてふと我に返った。

目を開けるとまず真っ先に飛び込んできたのは薄暗い鉛色の空だった。横たわっているのはコンクリートらしく、薄らと身体が濡れて冷やされている。雨でも降ったのだろうか。その感触がこの景色が現実のものだということを理解させる。

「……………生きてたか。」

あのプリティヴィ・マータに連れ去られてそのまま凍え死んだかと思っていたが。それどころか僕の身体は五体満足にまで再生し、手足の指先にまで感覚が戻っていた。どうやら奇跡的にも一命は取り留めたらしい。

しかしさつき頭に響いたあの声……あれは誰の声だったのだろうか。夢や幻聴と片付けるには妙に耳に残る声だったし、僕の内側から聞こえたように感じた。三途の川でも渡ってるのかと思っただけ……何だっただろ。

『よかった……目が覚めたんですね。』

「?!?!?!」

やっぱ幻聴じゃねーなうん!?なんだ……こいつ僕の脳内に直接!?!誰だお前……人の言葉を発するものなんて僕は食ってないぞ。しかもこの声は僕の心の中まで読めるのか。少し困ったように返事までしてきた。

『困りましたね……もしかして『僕』のこと食べたの覚えてませんか？』

「は？何言って——」

『まあ三日も寝てれば無理はないですね。一応ずっと呼びかけてたんですよ？』

……そんなに寝てたのか。道理で身体が動かないはずだ。身体がえらく重いせいで起き上がるのも辛い。動かしてないのに加えて再生したてつて動きにくいから余計だ。

それでも立ち上がらずにはいられなかった。三日間も寝てたつて……どこだここは。僕はどこにまで連れてこられた？あのアホの人間猫、僕をどこまで拉致しやがった。

早く帰らなきゃ。あの極東ではサリーが僕のことを探しているんだ。身体も元に戻ったなら帰らなくては。あの極東とかいう魔境にサリーを置き去りにするとか、下手するとサリーの方が危ない。

しかしそんな思いとは裏腹に。僕は自分が横たわっていた場所を知り、目の前に広がる景色に言葉を失う。

僕が寝かされていた場所。それは廃ビルの屋上だった。目下には植物の侵食が進んだ無数の廃屋が並び、灰と緑だけが果てしなく広がっている。

「……………どこですかここ。」

『僕にも分かりません。』

人の文明の滅亡を象徴するかのような廃墟都市。僕の内から響く声に問いかけたところでここがどこかは分かるわけなく。こうしてただ神機使いを喰うだけのつもりだった僕は、再び行く宛ての無い旅路へと放り出されてしまった。

「グルル……………」

……………それもこの状況の元凶と共に。唸り声に振り向けば、そこには相も変わらず涼し気な顔をしたアホ猫が居座っていた。

## 07. 神機（レン）

「うおっ!?おま……………いつの間に!!」  
「ガオ。」

思わず目の前に座って吠えるプリティヴィ・マータに掌の邪眼を向ける。こいつ……………まだ着いてきていたのか。この廃ビルの屋上とい、完全に僕という玩具を他のアラガミに取られないように隠してたよな?それに僕が臨戦体勢に入っても全く気にかける様子もなく欠伸してる。舐めやがって……

『まあまあ。彼女に敵意は無いみたいですし。やめておいた方がいいと思いますよ?』

「……………だな。」

仮にも第二接触禁忌種。僕が万全の身体でもまず敵う相手じゃないし、色々思うところはあるが今は大人しくしておこう。向こうも特に何かしてくる様子もないからね。てゅーかほんと無表情で怖いなこいつ……………何考えてるかが全く分からん。

今もなにを思ってたか、こいつは僕の側へと歩み寄ると身体を丸めるようにして横になる。とりあえず害意はないようだが、僕への興味は無くしてないのか未だにこちらをチラチラと見ている。

……………そうなるとこいつよりはまず僕の中からするこの声の正体だな。誰なんだお前は。何故僕の中から語りかけることが出来る。こんな知性を持った存在を僕は口にした覚えはないぞ。

『……………それよりまずは食事でも摂りませんか?流石に三日食べないと空腹で……………』



「あー……そうだね。そうするか……」

身体が重い原因これだったか。普通だったら三日も喰ってなかったら身体のアラガミの部分に自我が完全に侵蝕されてもおかしくないんだ。今すぐ適当でいいからアラガミ喰ってこよう。

幸いにもこの廃墟都市。屋上から見下ろせばそれなりに小型アラガミはいるし、逆に大型アラガミや神機使いらしい影はない。小型アラガミなら口にするリスクも少ないだろうし適当に何体か狩るとするか。

『でしたら試しに僕を使ってみませんか？せっかく貴方に取り込まれたついでなので。』

「使う？使うってなにを………ツ!?!」

『ちよつと痛いかもしれませんが我慢してくださいね。』

丸まつてるプリティヴィ・マータの中から脱出した時だった。急に僕の右腕に激痛が走った。見れば右掌の邪眼の真ん中から骨が変質したような刃が飛び出し、ついでに腕の形が無理やり変形させられていく。

掌から伸びた刃は巨大な生物じみた剣の形となり、右腕の肘辺りまでが赤黒く刺々しい有機的な籠手のようなものに覆われる。それだけでなく指は巨大な剣の持ち手に融合するかのように皮膚が引っ張られ、自在に動かせないほどに硬質化する。

そしてその痛みと変質が終わると、僕の右腕は生々しい大剣を握った異形のものへと変わっていた。不思議な話だが刃の先にまで感覚が通じており、刀身にも血管のようなものが浮き出て脈打っている。これシオやリンドウさんがアラガミ化した時に使ってた神機擬きに似て――

神機??

『どうですか？貴方の細胞を使って構築したからリンドウのものみた  
いには出来ませんでしたか……』

「……………なるほどな。やっと君の正体が分かった。」

『あ。思い出してくれましたか？』

神機の残存意識とでも言うのか。僕が喰って壊したあの神機はリ  
ンドウさんのブラッドサージだったからね。つまりそういうことな  
のだろう。リンドウさんの神機を取り込んだ時に一緒に入ってきた  
らしい。そうかこの頃から意識はあつたのか……

「…………でも分からないな。なんで僕の中で自我を保っていないながら僕に  
手を貸す？この右手の変質を全身に行えば殺せるだろうに。」

『今の僕の身体は貴方の身体なので。それに僕はあくまで貴方達アラ  
ガミを殺せるだけで、貴方達に敵意があるわけではありません。』

なるほどね……つまり殺すのはあくまで使う人間だと。それを聞  
いて安心したよ。危うく食あたりで死ぬかと思つたわ。

そうか……神機の性質を僕の身体が学習したのは分かつてたが、こ  
うやって神機を模倣した武器まで出せるようになってたとはね。見  
た感じロングブレードっぽい。試しに振り回してみるが、腕に一体化  
してるせいか重さとかはほとんどない。見た目が醜悪なまでに生々  
しいのだけが欠点か。

んじやせつかくだしこいつを使ってアラガミを数体狩ってみよう  
かね。そうして廃ビルの上から飛び降りようとすると、後ろで横に  
なつてたプリティヴィ・マータが急に起き上がった。

「グルル……………」

「なんだ？お前も来るのかい。」

『一人で行かせるのは心配って言ってますよ。』

……メスのアラガミってみんなこんなのだろうか。過保護って  
いうか……あのとき僕を連れ去ったのもあの場に放置してくの危な  
いとか思ったのかな。その割には僕のこと転がしたりして遊んでた  
けど……

まあいいや……着いてくるなら勝手に着いてくればいい。流石に  
ヴァジュラテイルに不覚を取ることはないと思うけど。

ビルから飛び降りると同時、サリエル種の飛行能力で目下のヴァ  
ジュラテイルへと向けて身体を加速させる。そして落下の勢いその  
ままに手の剣を振り下ろし、ヴァジュラテイルの身体を縦に両断す  
る。

「グギヤアア!?!」

「……ん。いい斬れ味。」

しかもヴァジュラテイルを一匹叩き切ると同時、赤黒い刃が脈打  
つ。そしてこの身体に伝わるこの感覚は……この神機擬き、斬った箇  
所をそのまま捕喰しているのか。攻撃と食事を同時に行えるとは随  
分と便利な武器だな。

おかげでヴァジュラテイルの比較的固めの外皮が無残に引き裂か  
れている。捕喰という性質上硬さもある程度無視できるらしい。こ  
れさえあれば硬いアラガミでも食えるな。シユウとかカムランとか。  
あの辺を食う機会なんてそうないとはいえ、攻撃面だけならゴツド  
イーターの神機より強いんじゃないか？

『いや……流石に一般の神機には劣りますよ？攻撃力は確かに上です  
が……』

「そんなことないって。……あ？」

後ろに気配を感じて振り向くと、更に別個体のヴァジュラテイルがこちらに突進しつつ尻尾を振りかぶっていた。あの特徴的な尻尾が雷光を帯び、ヴァジュラテイルが身体を捻る。

……リンドウさんとやり合った後だと隙だらけだな。見てから余裕で防げる。僕は神機擬きの刀身に左手を重ね、迫ってくる尾を刃で受け止めてみせる。

何故か刃が吹っ飛び、掠めた僕の頬を切り裂いた。

……………あれ??

「おっ……折れたあ!? ねえ折れたんだけどレン!!」

『だから言ったでしょう。貴方はブレードの部分しか食べてないからそれはガードできないんです。いたた……』

「初めて聞いたんだけど!? でもそっか!! ごめんね!!」

やべえヴァジュラテイルと思って舐めプしてた!! どうしよ!? ヴァジュラテイルって結構攻撃力あるから喰らったらやばいよね!! なんか最近いつもピンチになってんな!! あと折れた刀身の根元からめっちゃ血が噴き出してる……これやっぱ身体の一部って判定なのか。

武器を失ったと見たのかヴァジュラテイルがゆっくりこちらへと詰め寄ってくる。ちっ……やっぱいつも通りサリーの能力を使った方がやりやすいか。

右腕の変質を解き、両掌の邪眼を開く。でもそれを向けるとほぼ同時。僕の背後から甲高い声が響くと、目の前のヴァジュラテイルが地面から生えた氷柱に貫かれる形で絶命した。

まるで百舌鳥の早贄のようになった死体が氷柱の消失と共に地に落ち、声の主——。プリティヴィ・マータが僕の身体をまじまじと

見てくる。相変わらず無表情だけどこれは心配してくれてるのか……しかも僕が無事と分かると、一瞬で仕留めたヴァジュラテイルの死体を啜えて僕の前へと持ってくる。

「あ………ありがとう。」

「ガオ。……………♪♪」

頬っぺを撫で撫でしたらプリティヴィ・マータは腰を下ろして顔を寄せてきた。もつとやってくれつてことか……再生しかけの剣をヴァジュラテイルの死体に突き刺す傍ら、まるでフリスビーを取ってきた犬のように撫で撫でを要求するこの子をしばらく撫でておいた。

犬なのか猫なのかはつきりしろ。

## 08. 雪虎（バルファ）

「ふう……ごちそうさま。」

『これだけ食べればしばらく大丈夫ですね。』

「ガオ。」

数にして十匹。ヴァジュラテイルを平らげたところでプリティヴィ・マータと共に近くの瓦礫の山に腰を下ろす。さーて……これからどうしたもんか。いやどうするかなんざ決まっただけだよ。

ひとまずは極東地域。あの僕がリンドウさん達にやられてこのアホ猫に拉致られた場所にまで戻りたい。サリーが心配してるかもだしこっちも心配だからな。だが問題はどやってあそこに行くかってことだ。連れてこられる際に意識を失ったからここがどこである場所からどの程度離れているのが分からない。

『極東に戻るって……リンドウに出会ったら今度こそ殺されるかもしれませんよ？やめた方がいいんじゃないですか？』

「それ以上にあそこに置き去りにしたサリーの方が危ないんだよ。放つてはおけないだろ。」

会える保証なんてないけど戻らなきゃな。あのアラガミも神機使いも化け物揃いの極東にサリーを置き去りにしたら遅かれ早かれ死ぬんだから。あの子は僕が半年も孤独だった時に僕に寄り添い守ってくれたんだ。このまま別れるなんて出来るわけない。

でも方角も地理もわからない僕がどうやってあの極東に戻るか……一番の問題はそれだ。僕の飛行能力なら速度はそこそこ出るだろうが闇雲に飛び回っても余計に迷うだけだ。

あんまのんびりしてられないんだが、焦っても状況が悪化するだけ

だよな。やっぱここは地道に情報を集めながら進むしかないか……  
ん？レンどうした。なにかあるのか？

『あの……死んでもいいなら極東の方まで案内しましょうか？』

「案内？いけるのか??」

『僕はあくまで本体から切り離されて食われた神機の一部です。僕本体の位置なら大体ですが分かりますよ。』

………マジで??本体つて要するにリンドウさんの握ってる神機つてことだよな??確かにあの人は極東支部に居座つて他の支部に移るようなこともないだろうし。神機のある場所を目印に進めば極東には戻れるだろうが……

それつてつまり、リンドウさんのいる場所に自分から向かうつてことだよな。あのめちやくちや強いリンドウさんに。殺してくださいって言うてるようなもんじゃねーか。あ、死んでもいいならつてそういうね?なるほど確かに死ぬわ。

『僕としては貴方がリンドウに殺されてくれれば元の身体に戻れると思うので、行ってくれれば嬉しいんですけど。』

「君みたいな正直な奴は嫌いじゃないよ。……んじゃ行くか。」

『え。』

身体の中のレンが困惑したように声を漏らす。だつて現状それしか極東に戻る手がかりないんだろ?なら行くしかねーじゃあないか。それに僕が殺されればレンは元に戻れる。僕は運が良ければサリーに会える。互いにWinWinだと思っけど??

『え……いいんですか。確実に死にますよ?』

「元からいつ死んでもおかしくない暮らししてんだからいいよ。それにこつちも勝算がないわけじゃない。」

「ガール。」

万が一サリーより先にリンドウさんに出くわしたらこのプリティヴィ・マータをぶつけてやる。今のリンドウさん確かに化け物じみて強いとはいえ、ベテランってほどではないだろうから。見た感じ本編より若いし。接触禁忌種をぶつければ互角かこつちに分があると思う。

元はと言えばこいつのせいでこんな場所に来ちまったんだから。いざとなったら働いて貰うからな。なに？他力本願寺？どこぞの究極生命体も言ってただろ。最終的に勝てば良かろうなのだ。あいつらもこの前僕一人にツバキさんと二人がかりで殺しに来たんだから別にずるくはない。

「そうと決まれば行くよ。レン、案内お願い。」

『……分かりました。ではまず僕が次の指示出すまで南に向かってください。あの森の方に真っ直ぐです。』

「ガオ。」

よしよし。希望が見えてきた。一時はマジでどうしたものかと思ってたが、これなら極東に戻れる。不安要素は依然てんこ盛りだがサリーに会えるかもしれないんだ。ほんとリンドウさんの神機ことレンには感謝しかないな。

「……………もう無理。」

『体力なさすぎでは？』

「こんな長時間飛んだこと無いもん……………ほんとにこつちで合ってるのか…………？」



あの廃墟都市を出て一時間ほど経ったか。鉄塔の並ぶ貯水池のエリアに差し掛かり、僕はぐったりとコンクリートの地面の上に落ちた。しようがないじゃんこのアホ猫が走るの速すぎんだよ……機動性はサリエルよりヴァジュラのが上だから当たり前だけどさ。それに合わせて一時間も飛んでりや倒れるって。

でもさすがプリティヴィ・マータ。こいつを引き連れると他のアラガミに襲われない。接触禁忌種に喧嘩を売ろうなんてバカはいないのか、今も近くの排水貯まりからグボロ・グボロが何匹かこちらを覗いている。そんな中型アラガミでもプリティヴィ・マータがチラリと目を向けると、慌てて排水の中に隠れてしまう。僕一人だったら絶対襲われてるんだろうな……

それで僕が床に倒れてぐったりしていると、プリティヴィ・マータがその場に腰を下ろして僕に顔を近付けてくる。慣れというのは恐ろしいもので、だんだんこの無機質な顔も怖くなくなってきた。むしろ顔だけなら結構美人な類だよなこいつ。

「ガ―オ。」

「……………背中乗っていいの?」

「ガルルツ。」

あー背中ひんやりしてて気持ちいい……短いとはいえ体毛もモフモフしてるし。そうしてプリティヴィ・マータは僕を背中に乗せると再び四足獣特有の脚力で鉄塔の森を駆け抜ける。

でもその時だった。軌道上に二つの影が踊り出る。あの巨大なサルみたいなのはコンゴウか。二匹がかりならとても思ったのだろう。そいつらが僕らの行方を遮るように突っ込んでくるが、プリティヴィ・マータはすれ違いざまに二本の氷柱を生やす。

それは一撃で刺し貫くようにしてコンゴウを持ち上げ、その直後に体内から無数の氷の棘が生えてコンゴウを身体を内側から八つ裂きにした。プリティヴィ・マータってあんなエグい技使うっけ……？

「グルルツ♪」

「お前すごいよな……頼りになるっていうか。」

敵対してたらと思うとゾツとするよ。これが接触禁忌種の力か……自慢げに唸り声を上げるプリティヴィ・マータを他所に、宙で八つ裂きになったコンゴウの腕がこちらに降ってくる。キャッチしといた。よしよしい子いい子。頭撫でて欲しいんだね。

プリティヴィ・マータは何やらすれ違いざまに捕まえたようで、根元から引きちぎったコクーンメイデンを啜えてバリバリやってる。……せつかくだしこいつを頂いておくか。そろそろお昼だし。

そうして僕がコンゴウの腕を口にした時だった。ふと僕の耳が銃声を捉える。……この先だ。爆音ならクアドリガって可能性もあるけど銃を扱うアラガミは現状いないはず。つまり神機使いがいる。足音は三つ。種類の異なる銃声二つが響いてる辺り一人は近接か。

けど銃声に反して交戦しているアラガミの足音がしない。浮いてるからだろうか。……まさかサリーか!? 浮いてるってことはサリーエル種かザイゴート種だろうし!! 可能性はある!!

『!!……待ってください!! そっちは危険です!!』

「なに!? でもあそこに……あ。」

『周り道ですが右に行ってください。近くに大型のアラガミの反応はありませんから。』

レンの案内に従いプリティヴィ・マータの頭の右側を軽く叩く。するとプリティヴィ・マータは排水溜まりを冷気で凍らせ、その上を一気に駆け抜けてシヨートカットしてみせた。よく聞いてみたらさっ

きの場所、着弾音が一点に集中して動いてなかった。恐らくコクーンメイデンだろう。

でも雑魚アラガミに神機使い三人がかりってことは新人教育か何かだろうか？少し気にはなるが……今は神機使いとやり合ってる暇はない。人間も確かに捕喰したいがレンも危ないって言ってたし先に行こう。

……にしても急に耳がよくなったな。今喰ったこのコンゴウの影響だろうか。だとしたらやはり僕の身体も学習速度が早くなっている。一口でアラガミの能力を一部とはいえ模倣できるなんて。これも神機の性質か？あれ新型だと捕喰したアラガミの技そのまま撃てるし。それとも僕が単純にアラガミとして進化しているのか。

なんにせよこの聴覚は便利だ。サリーの邪眼の視覚と併せて危機回避に使える。ゴツドイーターで言うところの『ユーバーセンス』つてやつだ。見えない場所でも神機使いや大型アラガミがある程度なにをしてるか理解できる。

現に早速僕の耳がこちらに向かう三つの足音を捉える。さっきの神機使い達か。あつちにもユーバーセンス持ちがいるのか、真っ直ぐにこちらに向かっている気がする。今やり合うのは面倒なんだよな……よし。プリティヴィ・マータ。道の閉鎖を頼む。

「ガオッ。」

僕をちらりと見つめてプリティヴィ・マータがその場で跳躍する。そうするとさっきまで僕達がいた場所から巨大な氷壁が形成され、鉄塔の森の通路を完全に封鎖する。しかもそれだけではなくプリティヴィ・マータは地面から生える氷壁の上に乗る、その形成速度の勢いのままに高台へと跳躍した。それとほぼ同時、さっきまで形成されて

いた氷壁が粉々に崩れ去る。

さつきから思ってるけどさ。お前すごいな!?冷気を操るって能力がここまで応用性高いとは……自慢げに喉ゴロゴロ鳴らしてるけどほんと誇っていいよ。この子のおかげで移動がめっちゃ速い……アラガミ寄って来ないし。ゲームでこの変態機動やられたら発狂するわ。

『そういえば極東地域に着きましたけど、明確な行先はあるんですか？』

「え……もう着いたの。」

いや。そういや鉄塔の森って初代の頃からあるマップだっけ……そうか。もう着いたか。なら次に目指すのは荒野だ。あそこはゲーム中では無かったマップだけど、遠目に街が見えたから。多分贖罪の街。次はそこを目指そう。

「ガールルル………」

「ほんとありがとうね。プリティヴィ・マータがここまで頼りになるなんて思わなかったよ。」

頭撫でてって上を向いてくるプリティヴィ・マータの頭を両手でわしわしする。……でもサリーに会ったら怒られるだろうな。勝手にいなくなったと思ったら他のメス連れてきたとか。どう弁明しよ。この子に拉致られたとか言ったらサリー殺しにかかるだろうし……

……いや。まずはサリーに会ってからだよ。もうすぐそこまで来たんだから。早く会って安心させてあげなきゃ。

(……私、バルファ・マータなんですけどね。)

## 09. 彼地（スポナー）

鉄塔の森を抜け、夕暮れを背負った街を通り、やがて僕は彼の地へと辿り着く。

プリティヴィ・マータの走破能力は大したものだ。虎の威を借る形ではあるが他のアラガミに襲われて足止めを食うことなく贖罪の街を抜けられた。本来ならゲームで一番最初に来るマップだしゆっくり探索したいんだけどね。あいにく今の僕にそんな時間はない。

しばらく走り続け、見覚えのある荒野へと辿り着いた。こここそが僕が前に雨宮姉弟と交戦して達磨にされ、挙句にこのプリティヴィ・マータに拉致られた場所。その付近のどこかだ。

しかし当然というか未だにサリーの姿は見えない。せいぜい目に入るものといえばそこらを闊歩するオウガテイルやヴァジュラ程度。サリエルが飛んでたらすぐ分かるのに。

……まさか本当に殺されちゃったなんて言わないよね？僕やだよ??サリーには会って謝らなきゃいけないんだから。サリーの言うこと聞かないで殺されかけたこと。拉致られて心配させちゃったこと。それに加えてこれで死なれたりなんかしたら……

「……………そうだ。」

『どうしましたか?』

ふとあの時拉致られたことを思い出した。あれって確か僕がその場のぎでアラガミを呼び寄せたせいで拉致られたんだよね……あのザイゴートの能力で。サリーはあの時に僕の呼び声を聞いてるはずなんだ。だからもし、まだ生きてこの辺にいてくれるなら。もう一回呼んでみたら来てくれるかもしれない。

『でもそれ、他のアラガミも集まりませんか?』

「今は僕も手足は無事だから。それにこの子いるし。」  
「!?」

プリティヴィ・マータの頭を軽く叩くと「えっ」て困惑したようにこちらを見てきた。第二接触禁忌種連れるのに喧嘩売ってくるやつなんてそう居ないでしょ。それに運が良ければこの子のはぐれちやつた群れも見つかるかもしれないし。あのディアウス・ピターが連れてた群れはここで呼んだら来たから。案外この辺を縄張りとして居座ってるかもしれない。

「……………」

「え。なにその嫌そうな顔。」

『群れに帰りたくないんじゃないですか。』

めつつつちや眉間に皺寄ってる。プリティヴィ・マータってこんな顔すんの。いや、帰りたくないなら無理に帰らなくてもいいけどさ!!? でもとにかく!あの第一接触禁忌種のディアウス・ピターが来たらこの子に守ってもらうから!!

うつ伏せになって何故か拗ねてるプリティヴィ・マータを他所に身体を軽く浮かせる。そして両手を左右に広げ、本来の目と手の邪眼で全方位を視界に入れる。よし……やるよ。

「!!!」

声を張ってアラガミを呼び寄せる鳴き声を上げる。しかしサリエルの姿は見えない。寄ってくるのはさっきまで徘徊してたオウガテイルだけ。あと何故か足元からニョキッとコクーンメイデンも生えてきた。プリティヴィ・マータ、食べていいよ。

「ガオツ。」

「!?」

『サリエルいませんね。ほんとにここなんですか?』

分かんない。見る限りこの荒野めっちゃ広いから。ウロヴオロス百体くらい同時に戦えそうなほど広いから。場所が悪いのかもしれない……あちこち移動しながら呼んでみようか。

「ガル?」

「次はあっち行ってみようか。」

コクーンメイデンを前足で挟んでバリバリしてるプリティヴィイ・マータがコクーンメイデンの死骸を引っこ抜いて持ってくる。場所を移し、再びアラガミを呼び寄せる鳴き声を上げる。

しかし来たのはグボロ・グボロ。それも金色。ある意味大当たりだけれども。プリティヴィイ・マータ、食べていいよ。

「グボオ!?!」

次行こ次。あっちの高台とかまだ行ってないはず。あとあんま断続的に叫んでるとあちこちから聞こえてサリーが混乱しちゃうから。これからはなるべく叫び続けておこう。そうすれば移動してるって分かりやすいと思うから。

高台。何故かシウ師匠。お前あの時リンドウさんに殺されたはずじゃ。流石に別個体だと思っけど。

「食べていいよ。」

「~~~~~!?!?!」



『さつきから呼ぶだけ呼んでおいて酷いですね。』

僕が呼んでるのはサリーなんだよ。サリーだけに通じる鳴き声とかあるならとつくにそれ使ってるわ。

はー……叫び過ぎて喉痛くなってきた。回復用に僕もシユウ師匠頂いておくか。プリティヴィ・マータに押し倒されて悲鳴上げてる師匠に蝕刃神機擬きを生成して振り下ろす。切ると同時に捕喰できるからほんと便利。

次の場所。コンゴウ四体来ました。ピルグリムやめろ。

プリティヴィ・マータに殺つて貰って喰ったら僕の身体がマツスル!!になった。すぐ戻ったけどあんな食ったアラガミ吐こうとしたのは最初で最後だと思う。二度とコンゴウとか喰わねえわ。能力完全に物にしたし。

「あと食べていいよ。」

(もうお腹いっぱいなんですがあなの?)

次。ディアウス・ピター。僕を見るなり舌打ちしたから前に行くわした個体だと思う。やっぱこの辺縄張りなのか。群れとして他のプリティヴィ・マータも連れてたけど、結局僕の連れてるプリティヴィ・マータはついて行こうとしなかった。

次。ウロヴオロスが生えてきた。おい待てお前マジ。ゲームで見るとよりめちやくちやでかいんだけど。これ将来ソロするリンドウさなんてなんなの??プリティヴィ・マータ。食べていいよ。なに横になってるの。

(無理無理無理無理。もう食べれないから。)

ウロヴオロスはしばらくのっしのっし歩いてたけど特に何も無いと知るとどっかに行った。ビームで焼かれるんじゃないかとヒヤヒヤしてたよ……

次。サリエル墮天種。

「……………!!?」  
「……………♪♪♪」

あれ!?待ってこれサリー!?嬉しそうにこつち来るけど!!わー久しぶりにぎゅーってされてる!!おっぱい柔らかい!!いつの間に墮天したの!?良かったー!!無事でいてくれたんだ!!

でも墮天したせいかもしれないけど、なんか色っぽくなった?いつもは僕がこうやって抱きつくのと恥ずかしがってたのに。今はむしろウエルカムっていうか、僕のこと抱きしめるだけじゃなくて押し倒してくるんだけど。ぐいーって体重かけて。え?え??

サリーはそうして僕の身体に自分の上半身を重ね合わせると、僕の背に腕を回して首を舌で舐めてくる。……待って待って待って!!いつの間にもサリーこんなエッチになったの!?しかも僕の味を確かめると舌なめずりして、それは妖艶な笑みを浮かべる。やっぱいゾクツてした……こんなSっ気たっぷりだっけ……それともやっぱちよつと怒ってるのか??

『貴方の探してたサリエルってこの個体ですか?……アラガミってこ

んな行動取るんですね?』

「いや。ここまで積極的じゃなかったような……そもそも通常種だし

——」  
そう口にしかけた時だった。サリーが僕の首に喰らいついて、首を振って喰いちぎった。ブチってえらく生々しい音を立てて血が噴き出すと同時に、僕の肉を口にして顔を顰めるサリーが目に入った。

相当不味かったのか両手で口元を覆い、邪眼が忌々しげに僕を捉える。その光景を見て、プリティヴィ・マータが反射的に飛び出した。前脚で僕にのしかかるサリエル墮天種をぶつ飛ばし、僕も身体を自由を取り戻すと急いで離れる。

やっぱり別個体だよなこいつ。サリーは間違っても僕を殺そうとしないもの。寄りにも燃ってこんなエグいキスマークつけやがって。

「プリティヴィ・マータ。食べていいよ。僕も手伝うから。」

(お腹いっぱいだって。)

蝕刃を右腕に形成し、飛行能力で舞い上がってサリエル墮天種の頭に振り下ろす。喰い千切るといふ性質を持つ僕の蝕刃はアラガミに使えばその攻撃が当たった箇所を結合崩壊させる性質を持つ。たった一撃で額の邪眼を粉碎し、まずはメイン武器を奪う。

そこに背後からプリティヴィ・マータが巨大な氷柱をマシンガンのように降り注がせる。サリエル墮天もそれは器用に避けるが、プリティヴィ・マータは自身の目の前に氷壁を生成。それに猫パンチを放つ。

そうすると氷壁が粉々に粉碎されて発射され、さながら氷の散弾銃のようにサリエル墮天を吹っ飛ばした。結構離れてるくせに威力もあるのかスカートが一撃で結合崩壊してた。こつつつわ……至近距

離で食らったらミンチになるんじゃないあれ。一個の一個の破片が大きいから……………

「……………ツ!!」

(あ、逃げた。)

「え。ちよ……………どこ行くの!?!」

しかもサリエル墮天が逃げ出すと、それはまた凄まじいスピードでサリエルを追い回し始めた。うっわお気の毒に……………もしかしたらあの子も結構怖いのでは。この世界のメスのアラガミってみんなやべーやつなのかな……………

## 10. 再会（サリー）

更に叫ぶこと数時間。いくら呼んだところでサリーは来なかった。場所を変えて呼び続けてもどこにも姿は見えず、それどころかあの墮天種を最後にサリエル種すら見かけなくなった。

僕に愛想を尽かせたのか。それとも僕が死んだと思っただけか。行っちゃったのか。それならそれでいい。もう会えなくなるのは確かに寂しいけど、サリーが無事でいてくれるなら。

でももし殺されちゃったりしたら、それは僕が殺したも同然だ。僕がサリーの言うこと聞かないで神機リンドウさん達使いに襲いかかったばかりに置き去りにしてしまったんだから。

手応えが無すぎで嫌な想像ばかりが膨らむ。叫び過ぎて喉が焼けるように痛い。声も上手く出なくなってきた。でも動かすにはいけない。もしまだここに残って生きてるなら見つけてあげなきゃ。

………案外移動しながら鳴き続けてる僕を追いかけたりするのかもしれない。ここで一回鳴いたら少し待つてみるか。

「………っ、ゲホッ!」

腰を下ろして声を上げるが、掠れたような弱々しい声しか出ない。おまけにさっきの墮天種に噛まれたのもある。休めば再生するから大丈夫なんだけどさ……

さすがにこんな弱い声じゃアラガミの一匹も集まらないわけで。やっぱ一回休んだ方がいいかもしれない。でもサリーを探すのはやめず、両手の邪眼を辺りに向けて周囲の景色を視界に入れる。もしサリエルが飛んでればすぐ分かるから。身体青いし浮いてるしで、この拓けた荒野の中ではこの上なく見つけやすい。

そうして見回してた時だった。僕の右手の邪眼が遠目にこちらへと飛来する影を映した。この位置からでも視認できる青い蝶のようなシルエット。間違いなくサリエルだろう。それも原種。……もしかしてサリーか？いや、まだ分からない。サリエルって言っても色々いるしな。

でも僕は疲れた身体のことまで忘れてこちらへ向かってくるサリエルの元へと飛び立っていた。近付いてみれば多分わかるし、違ったらまた逃げよう。今はプリティヴィ・マータが墮天種追ってどっか行っちゃってるから慎重にね。

そうしてこちらを指すサリエルの元へと段々と近付いていく。

目の前を飛んでたサリエルが地面に落ちた。

待て。なんで落ちる？聴覚は荒野に吹く風の音しか捉えていない。神機が使われたような音はしなかった。それなのに……

力なく横たわるサリエルに急いで近寄る。嘘だ。サリーなわけない。サリーは僕に飛び方を教えてくれた。飛べない僕を抱き抱えて浮かせてくれた。そのサリーが地面に倒れるわけない。飛べないわけないんだ。

なのになんでこんな走馬灯みたいに彼女との記憶が蘇る？うつ伏せになってピクリとも動かないサリエルの傍に降りる。

そうして真っ先に入ってきたのは風穴だった。背中の部分に腕を通せるほどの大きな風穴が開けられ、羽を思わせるスカートはズタズタに引き裂かれている。

おまけに邪眼は叩き潰され、身体の至る場所から黒い霞が溢れ出していた。結合力の弱まったオラクル細胞だ。コアの統制能力が弱まって制御を離れた細胞が霧散してる。

そのあまりに痛ましく凄惨な姿に言葉を失う。傷ついた身体で無理をしたのだろう。右腕は既に千切れ、浮くことも出来ずにそのサリエルはなにかを探すかのように這いずる。

間違いない。間違えようがない。

信じたくないが受け入れるしかない。

「サリー!!サリー!!しっかりして!!」

「……………!!」

「今治してあげるから!!ほら!!」

蝕刃を右腕に形成し、自分の左足を切断してサリーに差し出す。アラガミは食事さえ摂れればどんな酷い状態からも再生できる。ごめんね……僕が勝手にいなくなつたばかりに。僕のことこんなボロボロになってまで探してたんだね……本当にごめん。もう絶対で一人でどこか行ったりしないから。サリーの言うこと聞くから。

だからお願いサリー。僕の身体を食べて? そうすればきつと元

に戻れるから。

………なんで顔を背けるの？これ食べればまだ生きれるんだから。やだってしないで。いつも僕のこと食べたいって見てたじゃん。

「………お願いだから言うこと聞いてサリー！このままだと死んじやうよ!？」

『無理ですよ。貴方の身体は神機と同じ性質なんですから。アラガミの彼女には食べられません。それに………』

剣を握った異形の右腕に目がいく。………そうだ。神機つてすごい不味いんだ。味を思い出して吐きそうになるくらいには。その性質に今まで何度も助けられてきたというのに。

神機と同じ僕の肉体をサリーはもう口にできない。それを聞いて身体力が抜けるのが分かった。完全に失念していた。この身体になった最大の代価。それは一番好きな相手に口にして貰えないこの身体そのもの。

申し訳なきように笑うサリーの身体を抱きしめる。温もりの失われた崩れるだけの身体。生命の消失。全部僕のせいだというのに、僕には何もできない………また僕の過ちのせいでサリーが助けられない。神機なんか口にしたせいで………

「………」

僕のせいじゃない。そう言ってサリーが僕の背に左腕を回して撫でてくれた。かつてそうしてくれた時のような温かさはもうない。まるで死体に抱きしめられているような虚しさばかり覚える。



荒野の風に吹かれて彼女の身体が崩壊していく。風穴が大きく広がり、千切れた下半身が一瞬で霧散する。……ああ。そうか。そういうことか。この冷たさと崩壊速度。これは……

「サリー……コアを取られたんだね。」

「……………」

コアはアラガミの心臓のようなもの。奪われればもう再生はできない。そして……コアだけ持つてかれたということは、サリーは神機使いにやられたんだ。あの風穴や裂傷も神機によるものだ。あいつらにはサリーや僕みたいなアラガミを生かしておく理由なんかないから。

それなのにこんな死ぬ寸前の身体で飛び回って……はやく消えてしまいたかっただろうに。それを我慢して僕を探したのは、それだけ僕のことを心配してたんだね。死ぬのさえ堪えて、あんな小型アラガミすら寄り付かない鳴き声を聞いてくれて……

ほんとサリーは優し過ぎるよ……ありがとうね。ずっと僕のこと待っていてくれて。こんな愚かで弱い僕を愛してくれて。

なら僕も応えてあげなきゃ。サリーの気持ちに。僕が後悔したり悲しんだりするのはその後でいい。例え上手くいかなかったとしてもサリーは許してくれると思うから。

もしかしたらこれをやればサリーは本当に死んでしまうかもしれない。でも僕には前例と確証があるから。どうせこのまま死なせてしまうというのなら、やってみるしかない。

僕を抱きしめるサリーの左腕が砕けて霧散する。そうして崩れそうになったサリーの身体をしっかりと抱きしめた。こんな姿になっても嬉しそうに笑うサリーの頭を撫で、後頭部に手を回す。するとサリーは不思議そうに首を傾げる。

……………痛かったらごめんね。サリー。

「僕の中で生きて。必ず君を元に戻してあげるから。」

口を側頭部まで裂き、残ったサリーの身体を一口で噛み砕く。何とも懐かしい味が口いっぱいに広がるが、咀嚼はしなかった。少しでも痛くないように一気に口の中身を飲み込み、その上で混濁する意識をどうにかして保たせる。

アラガミを丸ごと一匹口にしたのは初めてか……自分の記憶ではない記憶が頭に流れ込んでくる。これはサリーの記憶か……？ ザイゴートだった時の記憶とサリエルになってからの記憶。そして……………

「……………ツ!!」

僕と別れた後の記憶。帰らない僕を待ちわびていたところ、サリーは神機使いを見つけた。僕のこと待ってたのと空腹でもないせいもあってサリーはその神機使い二人を見逃した。

でも、神機使いの会話を耳に入れてしまったんだ。

「あの人型のアラガミ……死んだと思うか？姉上。」

「どうだかな。なんせ強くはないが賢さかしい个体だ。また見ることになるかもな。」

怒り狂ってた。僕が殺されたって勘違いして、激昂のままに活性化し、普段からは考えられないほど荒々しく神機使いを襲撃していた。そこから先は言うまでもない。奇襲にも関わらず返り討ちにされ、動けなくなるまで撃たれて切り刻まれた。そしてコアを摘出されて死ぬはずだった。

けどそこから三日間。サリーは必死に身体の形を保ち、僕を探して舞っていた。神機使いや大型アラガミから隠れながらずっと。死ぬほどという表現すら生ぬるい激痛に耐えながら。今に至るまでずっと、僕の姿を探してさまよってたんだ。

あと一回。僕の顔を見たいって願いながら。ただそれだけの想いで生き長らえてたサリーの気持ちが届いほど分かる。さっきまでの笑顔が僕を悲しませないための強がりだったことも。本当はもつと一緒に居たかったって願望も。僕はサリーとひとつになったんだから。全部分かった。

……約束するよサリー。もう絶対に君のそばを離れない。誰にも君を傷つけさせない。守れるようにちゃんと強くなる。必ず元の綺麗な姿に……いや、前より綺麗な姿にしてあげるから。ずっと一緒に居てあげる。

意識の逆流が終わり、僕の左腕が激痛と共に変質を始める。左手の甲には邪眼が浮き上がり、裂けた皮膚の間から千切れたような青い蝶

の羽が生える。歪に変質する醜悪な左腕だが、不思議と嫌悪感はない。なかった。

でも手の甲の邪眼は心配そうに僕の顔を見つめてくる。大丈夫……また一緒に抱きしめ合ったり空を飛んだりできるようになる。僕がどんな犠牲を払ってでも君の願いを叶えてあげる。それが君への償いになるなら全然苦しくないから。

幾らでも殺してあげるからね。君をこんな姿にした奴らを。この世から一人残らず。

そして二度とサリーが傷つかない世界を作り出してあげる。この内側の本能のままにね。

## 01. 受難（デスマッチ）

左手の甲に出来た邪眼がひとりでに僕の顔を見つめてくる。サリーを口にして僕の中にその存在を留めることには成功した。これから僕のやるべき事は二つ。

ひとつはサリーを元の姿に戻すこと。どうかして身体いれものを手に入  
れ、かつての美しい姿にしてやること。

そしてもうひとつは人類。ひいては僕達アラガミにとって脅威となる神機使い及び神機の殲滅。こちらは終末捕喰を用いることを前提にすれば焦る必要は無い。いずれそのためのノヴァはこの地に出  
来上がる。特異点のこともあるし僕が動くのはそれからいい。

現状優先すべきは言うまでもなくサリーだ。この子は確かに僕の  
内側に残すことはできた。しかしそれも時間の問題だ。僕の身体の中  
でいつまで自我を保てるか。それは僕にもサリーにも分からない。  
サリーはいつ僕の身体の一部として消えてしまってもおかしくない  
のだ。

サリーの身体コアのあるの条件は二つ。それは生きたアラガミであること。  
そして人に近い姿のアラガミであること。そのアラガミを見つけ出  
して左腕のサリーを移してやれば、あとはその身体を無理やり変質さ  
せてサリエルになれる。サリー本人の弁だ。なんでもサリーみたい  
に自我を持つアラガミはかなり珍しいらしい。

しかしそれはつまり人型のアラガミ。同族のサリエル神属や  
ヴィーナスの上半身。アルダノーヴァの女の部分などを生きたまま  
無力化しろということだ。いずれも難敵もいとこなのにな。

……なんて泣き言言つてられないよね。僕のせいでサリーはこんな姿になっちゃったんだから。サリーは無理しなくていいって言ってるけど大丈夫。この程度無理のうちに入らないさ。それでサリーの身体が元に戻るならね。

』。

「……シユウ神属でも多分いける？確かに多少難易度下がるけど……」

でもそれで出来上がったのがサリエルじゃなくてアイテールだったら嫌だよな。あいつら硬そうだし。いや強さ的には全然文句ないけど。……なに？アイテールでも女版の姿になれる!?なにそれすんげえ見たい!!んじゃシユウも身体の候補に追加ね!!基本は女型のアラガミ優先するけど!!

……てゆるか待て。さつきよく考えたらサリエル墮天種いたよな。プリティヴィ・マータが追っかけてった僕のこと噛んだやつ。あいつワンチャン生け捕りにできればサリーの身体に出来るんじや……

とか考えてた時だった。左手の邪眼の周りに激痛が走り、左手の邪眼が血走った。……あ。違うのサリー。浮気したんじやなくてね？襲われちゃってさ。……尚更許せない？探し出してぶち殺してやるって……そういえばこの子ヤンデレだったなあ。待ってこれプリティヴィ・マータと今会うの危険なんじや——

「ガオ。」

「いやほんとお前タイミング考えろバカ。」

噂してたらスライディング気味にプリティヴィ・マータが僕の元へ

と戻ってきた。それもすっごい自慢げに尻尾ブンブンして。あーこいつあの墮天種コロコロしてきたな。ちくしょう生け捕りはダメだったか。

でも本人としては褒めて欲しいのか、身体を屈めて頭をこちらへと近付けてくる。まるで撫でてくれとでも言わんばかりに。

そうすると僕の左腕がひとりでに動いた。僕の意志に反したその手はプリティヴィ・マータの頭に触れるとひんやりした頭をそつと撫で――

「~~~~~ツ!?」

そのまま頭にアイアンクローをかけてプリティヴィ・マータの頭部を結合崩壊させた。プリティヴィ・マータが悲鳴を上げる中、左腕の表皮が暴れ狂い、無理やり変質しようとしていた。激痛と共に左腕から無数の青白い手や邪眼が生え、肩に口までもが形成されると声にならない怒りの絶叫を上げる。

「ちよ……待ってサリー！落ち着いて!!無理に変身しようとしちゃダメ!!コアないんだから僕と離れると死んじゃうって!!」

「違うからーこの子とはそういう関係じゃないから!!」

だからガトリングみたいにレーザー乱射するのやめてあげて!!プリティヴィ・マータが頭抑えてうずくまってんじゃん!!しかも僕の左腕を見てめっちゃ身体がプルプル震えている。あの子のあんな怯えてるとこ初めて見たんだけど。

違うんだよサリー。あの子は迷子になった僕をここまで連れてきてくれただけで、そんな僕のこと捕喰したり襲ったりはしてない。むしろご飯くれたり面倒見てくれたいい子で……

……………『このケツ穴女がよくも私の可愛い子を餌付けしやがったな』!?いや間違っちゃいけないけど言い方!!『この子をヒモにしているのはこの私だけなんだよ死に腐れ阿婆擦れが』……………って待ってサリー!!ガチで殺そうとしてるね?!落ち着いてっ!!

確かにこの子は僕のこと助けてくれたけど僕は別に好きでもなんでもないから!!あっちも僕のこと何とも思っていないから!!ね?!プリティヴィ・マータも首を縦に振ってるでしょ!?僕にとっての一番はサリーだから!!そんな排斥しなくても——

『……………♡♡♡』

「……………機嫌直った。」

身体がひとつになって思考まで共有できるようになったから、サリーが何を考えてるかが手に取るように分かる。だから脳内に洗脳されそうなレベルで愛の言葉を垂れ流されてる気分だよ。ヤンデレちゃんの頭の中ってこうなってるんだねって……………でも僕もサリーにならいつぱい愛でられたいな。はやく元の身体に戻るよう頑張るか  
らね。

そしてそのためにはプリティヴィ・マータの戦闘能力も僕には必要だから。他の女の存在が気に入らないってのはよく分かるけど、どうかサリーが元に戻るまでは仲良くしてやって欲しいんだ。心配しなくても僕もこの子に身体を許したりはしないから。ね??

『……………』

「え……………元の姿に戻ったら絶対殺す?どうか許してあげてくれない……………?」

「!?」

ほらあの子めっちゃ怯えてるから。さっきから『私なにか悪いことした?』ってこつち見えてきて心が痛いんだよ。ね?頭抑えてブルブルしてるプリティヴィ・マータなんてこの先一生見れないって。不覚に



も可愛いつて思っちゃったもん。

……ごめんサリー嘘！嘘だから！！ちよつとプリティヴィ・マータ逃げて！！超逃げて！！また左腕がグロい異形に無理やり変形してる！！骨や肉があちこち引つ張られてめちゃくちゃ痛いし腕の肉の裂け目とかに目玉いっぱい出来てるし！！

……でも待てよ。こんな僕の身体を自在に変質させられるならさ。もしかしたらサリー。僕の身体から自分の肉体を作るってことも出来やしない??僕の細胞を変質させてサリエルの身体を作れば……僕の身体じゃ質量不足??ならウロヴオロスとか食って大きくなるし。もしそれならわざわざ肉体候補のアラガミを探さなくても——

『……………。』

「ああ……身体作ってもコアないからダメか。」

人間が心臓をひとつしか持たないようにアラガミもコアはひとつだからね。コアがないと自壊する以上、僕がコアでも作れるようにならないとこの方法は無理と。そりやそうだよね……そんな美味しい話はないか。

分かった。大変だと思うけどサリーの身体に適したアラガミを生け捕りにする。当面はそういう方向で動いていこう。

……そして終末捕喰による神機使用の殲滅。こっちは当分先になると思うけど。案外神機使用と交わるのは近いかもね。

「……………ッ!？」

少し離れた岩山の上を横目に見つめる。スナイパータイプの神機使いか。姿まではよく見えないが……極東支部の斥候か。しかし気配の消し方がまだ甘い。さては新兵だな？僕でも気配に気付けた辺り。

でもそのスナイパーは僕が気付いたと悟ると、すぐ様物陰に隠れるようにして撤退してしまった。判断が早い。今はまだ未熟でも将来は厄介な神機使いになるかもしれないね……

これからはサリーの復活と神機使いとの戦い。当面はこのふたつがメインとなるだろうか。サリーがこんな姿な以上、僕も自分で戦える力は手にしなくてはならない。僕が強ければ強いほどサリーの身体確保も容易になるしね。今までとすることは変わらない。

身体を浮かせ、斥候のいた方向と正反対の方向へと飛び立つ。次の餌は何にしたものか……サリーはなにか食べたいものとかあるのかな？

## 02. 供物（ブレイン）

サリーが僕の身体に宿ってからしばらくの時間が経った。左手の手の甲には邪眼、掌には口が形成され左腕から胸元にかけては黒い皮膚を覆うようにして蝶の羽が形成されている。今や僕の左半身はほぼサリーの身体と化していた。

「ガルル……………」

『!?!?』

左腕を見て『気持ち悪…………』とかぼやいたディーヴァに手の甲の邪眼がひとりでにレーザーを放つ。でもそれをディーヴァは咄嗟に氷壁を展開すると、反射によって僕の方へと撃ち返してきた。……………痛いな!?!?身体貫通したんだけど!?!?サリーの身体が僕のものってこと忘れてない!?!?

「!!……………??」

「いや、大丈夫だけどさ…………二人ともあんま喧嘩しちやダメだよ。ディーヴァもサリーに酷い事言わないの。」

僕が膝をつくとディーヴァが大慌てで駆け寄って僕の頭を前脚で撫でてきた。腰を下ろして胸元の傷を冷たい舌で舐め、自分の脇腹に寄りかかって休めと身体の向きを変えて促してくる。

お言葉に甘えてディーヴァに身体を預けると、黒い体毛がモフッと反発した。…………この子の身体気持ちいいんだよなあ。モフモフなのにひんやりしてて。特に最近は毛並みとか気にしてるのか、前にも増して触り心地が増している。

このプリティヴィ・マータもね…………サリーが来てからだいぶ変わってきた。サリーに似て過保護になったっていうか。サリーみたいの名前付けてっておねだりして来たから「ん?」って思ったけど、実際のところはどうなんだろうか。サリーと違って表情とか分かりにくいからね。

とはいえ付き合いが長くなつて来たのも事実だし、能力を用いる時の叫びが妙に甲高くてよく響くから。歌姫の名前を<sup>ディーヴァ</sup>与えてやったところ、ちゃんと呼び名に反応するようになった。

どうも僕がサリーとベタベタしてるもんだからそれ真似してるだけっぽいんだけどね。でも僕が顔埋めてモフモフやってるとめっちゃ尻尾振ってた。これやっぱ喜んでんのかな………？

あと左手の邪眼をちらりと見るけど、サリーはサリーで気持ち良さそうに目を閉じていた。僕と感覚共有されてるからだろうけど、さっきのが嘘みたいに大人しいな??てつきり『この泥棒猫もう生かしちゃおけねえ』くらいブチ切れると思つたのに。モフモフは許してくれるのか。

』。

……元の身体戻つたらこんなものよりもつと凄いこととしてあげてからって。待つてマジで。なに凄いことって。いやサリーと思考共有してるから分かるけどさ。え……頑張ろ。サリーの身体絶対見つけよ。

サリーが勝ち誇つたようにディーヴァを見つめると、何故かディーヴァもちよつとムツとした顔をする。……うーん。やっぱよくわからないなこの子は。気があるのかどうなのか微妙なところで。気があるとしたらそれはそれで困るんだけどね。僕の本命はサリーなんだから――

「ガオ!!」

突然ディーヴァが吠えると同時に。僕の目の前に氷壁が生成され、更にその向こう側で大爆発が起きた。な……なに!?!何事!?!なんの爆発!?!

あ……やっぱ顔鬨めたのサリーのせいじゃなかったんだね!? なんかの気配に気付いてたんだね! 何これ敵襲!??

ディーヴァがゆっくり身体を起こすのに合わせて僕も急いで身体を浮かす。そうして氷壁が音を立てて崩れると、今まさに爆撃を引き起こした元凶の姿が目に入ってきた。

「なっ……! 僕の華麗な一撃をガードした!? なんだいこの奇妙なアラガミは!!」

「おいおい先走るなよ新入り。今回の任務はあくまでその人型だ。」  
「まさかあたし達の方が出くわすなんてね。あれやったら報酬いくらだっけ?」

神機使い……それも四人組。ここ最近見られてたのは知ってたが、やはり僕のことを付け狙っていたのか。くっそ全然接近に気付けなかった。サリーが左手にいるから今は戦いたくないのに……

でも僕と違ってサリーはイチヤイチャを邪魔されてお冠らしく。手の甲の邪眼から空中にレーザーを放つと、それを神機使い達に向けて降り注がせた。

「つと、撃ってきたぜ。お前らはあの白いヴァジュラ止めてろ。あいつは俺がやる。」

「了解。」

「ちやんと報酬は山分けしてよ隊長!!」

神機使い共はサリーのレーザーを散開して回避。隊長格のロングブレードを握った奴がこっちへと向かってきた。残りの三人はディーヴァの方へと……ちっ。どうしたもんか。ロングブレードって見るとリンドウさん思い出すからな。どうも苦手意識がある。

ひとまず蝕刃を右手に形成し、それで振り下ろされるロングブレードを受け止める。今回はディーヴァに人が行ってるおまけにブラストしか遠距離使いがないから後方支援は警戒しなくていい。1対1なら余程実力差がなきゃそう不利にはならないはず。

「!?…なんだこのアラガミ…神機だど!?」

そして切り結んで思い出したんだけど。僕は神機が喰えるアラガミでこの神機擬きの蝕刃は捕喰器官を兼用している。要するにこの蝕刃で斬ったものは捕喰できるんだよ。それが例え神機であってもね。

僕の能力を見て固まった隙に蝕刃をそのまま振り抜くと、ロングブレードが根元からへし折れて刃が神機使いの青年の腹を一閃した。胴体が上下に泣き別れして、流血と共に男の内臓が乾いた岩の上に撒き散らされる。

一撃にして一瞬。神機使いを屠るのはそれだけ呆気ない事だった。いや、リンドウさんとは比べ物にならないくらい弱かったせいだと思うけどね。え、こんな簡単に神機使いって殺せるの…いや。こいつが弱いだけじゃない。この僕の神機擬きが凶悪過ぎるんだ。打ち合った神機を一撃で破壊できるとか。

警戒が誤算であったと気付いて口元が軽く緩む。真つ二つになった青年は血が逆流して喉を詰まらせてるのか、言葉を発することも出ずに恐怖と絶望に染まった目で僕を見ている。…生命力があるから即死出来なかつたんだね。可哀想に。

「……そういや前は神機使いを喰おうとして酷い目に遭ったんだよね。」

』

うん。絶好のチャンスになったってわけだ。………なんで人間を狙っていたのかはもう思い出せないけどさ。なんか僕の身体に必要だって確信はあるから。殺したついでに頂くとしよう。

脈打つ蝕刃を叩きつけるようにして青年の喉元に振り下ろす。そうするとグチュツという音と共に刃が肉にめり込み、周りの部分が衣類もろとも蝕刃へと取り込まれていく。そして同時、僕の身体にもどこか懐かしい感覚が走る。

なるほど……アラガミとは全然違う味だ。初めて口にする味と言ってもいい。これは美味しい。それに凄く頭がスツキリする。なんて新鮮な気分なんだ。こんな晴れやかな気持ちは生まれて初めてだ。

【ハハ……ハハハ………っ?】

そして思わず漏れた人の笑い声に自分でも驚愕した。これは……今喰った男の声か?人間の声帯なんて僕は持つてなかったのに。それなのに人間の言葉を喋れたのは、恐らく僕の身体がこの男の声帯を模倣しているのだろう。

ならばと今度は蝕刃を脳に向けて振り下ろした。脳髄をぶちまけて頭骨諸共ごっそり捕喰すれば、これはまた思った通りだった。僕の頭の中に今口にしたこの男の記憶が流れ込んでくる。神機の振り方。言い渡された任務。人間関係。こいつの体験した全てが僕の頭へと流れ込んでくる。

すごい。これは素晴らしい。僕の身体が求めるわけだ。人間や神機使いは僕が求める最高の餌そのものだったか。身体に流れ込んでくる未知の感覚に左半身のサリーまでもが困惑と興奮を隠せないでいた。もつと食べてみたいと穏やかなサリーにしては珍しく僕のこ

とを急かしていた。

だから既に喰い散らかされた死体となった男に蝕刃を振り下ろす。それは何度も何度も。肉片のひとつすら残すことなく蝕刃で身体に取り込み、その全てを我が全細胞を以て学習し、模倣を試みる。

……流石に姿形を模倣するには量が足りないか。真つ黒な皮膚が部分的に肌色になっただけで、とても形質の変化までは出来なかった。人間はアラガミに比べて小さいからね。この分だと何十人かは喰わないとダメだろう。

とは言ってもまだだ。まだデイーヴァが相手している人間が三人いる。女一人に子ども二人。さつき喰った男の部下だったみたいだね。しかも女の方は付き合ってたらしい。流れ込んできた記憶で任務前にキスしてんのが見えた。

蝕刃に付着した血が完全に取込まれると、身体を軽く浮かせてデイーヴァの方へと向かう。神機使い共に奇襲された時は結構ビビったが、どうやら今回は相当幸運だったらしい。

極東支部とリンドウさん達に感謝しなきゃ。極上の餌をありがとうってな。



### 03. 生贄（ラーナ）

ディーヴァの方へと僕が向かおうとしたところ。ふと視界にさつき食い尽くした男の神機の残骸が目に入った。刀身の部分は粉々に砕けてるが、柄の本体の部分とシールドは未だに健在。……どちらも僕の蝕刃にはない機能だな。これはこれで頂いておくとするか。

【サリー。ちよつと不味いの食べるよ?】

左掌の口の部分で神機のオレンジのコアに当たる部分をまず口にし、そのあと盾の装甲部分を咀嚼する。……ほんと神機つて不味いな。さつき食った人間の味が大当たりなだけに余計不味く感じる。僕らに喰われないように作つてるとの話だが、幼少期に口にするブラックコーヒーみたいな……確かに普通のアラガミならこんなもん好き好んで食わないわ。

けどこれで僕は神機を丸々口にした事になる。これで僕は神機の機能をそっくりそのまま模倣できるというわけだ。人間共の作った人工アラガミとも呼ぶべき神機だが、実際こいつの能力はアラガミを殺すことに特化している。この能力を完全に取り込めばこれから神機使いと戦う上でも必ず大きな力となる。

……まずは残ってる神機使いで試してみるかね。ディーヴァに残りの三人を任せたままだから。助けがてらあいつらで試し斬りさせて貰うとしよう。

【あの猫はそのまま死ねばいいって……酷い事言わないのサリー。】

ディーヴァはディーヴァで頑張つて足止めしてくれてるんだから。

……現に今も神機使い三人を同時に相手取って互角以上に戦っている。凄いやねあの子。互角以上つていうか余裕じゃん。もうブラスト使いは地面に倒れてて、残りの大剣使いバスターと短剣使いショートの女を翻弄している。

「ちつ……なんなのよこいつ！アラガミのくせに防御なんかして!!」  
「!?……………おい。あいつは……………」

そこに遅らばせながら推参つと。空中から舞い降りる僕を見て、ディーヴァは神機使い共の相手を中断して僕の方へと駆け寄ってくる。そして僕の顔を心配そうに前脚で触って……大丈夫大丈夫。怪我とかしてないから。瞬殺してきたから平気だって。

するとポフツという音を立てて前脚が僕の頭に置かれた。……なでなでされてる。一人で倒してきたの褒められてるのか……

本当ならもっと褒めて欲しいところではあるけどね。あいにくあつちはあつちで体勢立て直したつばいから。ディーヴァが離れた隙にいつの間にか、大剣を持った神機使いがブラスト使いを復活させていた。あれがリンクエイドつてやつか。

「ちよつと待って……なんであいつがここに……?隊長は……ジャックはどうしたの……………!?!」

ジャック……ああ。さつき僕が殺した神機使いの名前だね。僕を見て戦々恐々としてる短剣使いの女……確かラーナとか言ったか。あいつの脳みそ喰った時に記憶で見ただけど、この女と僕が喰った奴は付き合ってたみたいでさ。この任務終わったらプロポーズする予定まで立ててたんだって。

けど代わりに立ったのは死亡フラグだったわけだ。リア充の末路はこうあるべきと昔なら僕も思ったけど。大切な相手を失う恐怖と

絶望は僕も最近知ったからさ。サリーが死んじやうと思った時は本当に焦ったから。あのラーナとやらの心中は察するに余るというもの。

そんな慌てなくても直ぐに会わせてやるさ。僕達の腹の中でな。だから安心して僕に身を委ねるといい。

「おいー来るぞ!!」

「~~~~っ!!この化け物が……ジャックをどこにやったのよ!!」

でも僕が斬りかかろうとした瞬間、僕の右肩に裂傷が入った。ちっ……速いな。しかも後ろに殺気を感じて左手の甲を背後に向けると、ラーナは跳躍した体勢はそのままに空中で加速してきた。慌てて右腕の蝕刃を背後へと向けると、ちょうど僕に放たれる一撃が蝕刃に弾かれる。

「このアラガミ……後ろに目でも付いてんの!？」

「ラーナさん！離れるんだ!!ここは僕が華麗に決める!!」

声のした方を見るとブラストの銃口が僕を捉えていた。しかもラーナもその声に合わせて退き、受け止めた神機の刀身を蝕刃で喰い壊す前に離脱された。ちっ……ブラストの方を避けたりガードする時間が無いか。デীবア、また頼むよ。

「ガオオツ!!」

天に向けた咆哮と共に氷壁が展開され、僕に放たれた砲撃を間一髪防いでくれる。やれやれ……この爆発、かなりのオラクル細胞を込めたものと見た。食らえば致命傷は免れられないが、あちらも今ので弾切れになったはず。なら援護射撃もうざったいしまずはずはあの小僧から喰い散らかしてやるか。

デーヴァに氷壁を解除するように目配せをする。しかしそうして氷壁を解除すると同時。氷壁で覆われた視界の先から、僕の死角を縫うようにしてひとつの影が躍り出た。

「ようやく捉えたぜ……化け物!!」

振り上げられた大剣が胸元を掠め、空中で体勢が揺らぐ。掠っただけでこの威力……これは神機の性能どうこう以上にこいつの腕力の問題か。何者だこいつ。どうみても普通の神機使いに比べて能力が高い。

しかもそこに割り込むようにして再びラーナが跳躍しながらの切り上げを放ち、僕がそれを回避すると空中から矢のように加速して神機で僕の胸元を貫いてきた。ていうか突き刺さった。それも僕のコアの上スレスレに。あつぶな……

「ソーマ!今だよ!!」

「言われなくても分かっている。手こずらせやがって……」

——ソーマ??

ふと呼ばれた名に今まさに振り下ろされようとしている神機を見る。あの黒い大剣……イーブルワンか。へえ……気付かなかった。まさかこのガキんちよがあこのソーマか。

確かに言われてみれば金髪に褐色肌って面影あるな。なるほどね……こんな小さい頃から神機使いしてたのか。可哀想に。

「ハハ……恨むなら。その歳で子を駆り出した愚かな親を恨むんだな。」

「「ツツツツツ!!??」」

完全に模倣を完了した声帯から発する声に神機使い達の動きが止まる。その一瞬を突き、僕の胸元に剣を突き立てて張り付くラーナを左手で殴って吹き飛ばした。更に入れ違いに振り下ろされるソーマの神機を右手の蝕刃で受け止めると、そのまま力を込めて神機を押し返す。シールドを食った甲斐があったというものだね。大剣のチャージクラッシュも受け止められるとは。かつてヴァジュラテイルにへし折られてたのが嘘みたいだ。

そしてソーマの神機を遠くに弾き飛ばすと、僕は胸元に刺さった神機をそのまま身体に取り込むように捕喰する。段々慣れてはきたが、やっぱ不味いな神機は……ごめんねサリー。こんな不味いものを二つも食べさせちゃって。直ぐに口直しさせてあげるからね??

「なんだこいつ……!今喋ったのか?!しかもあの声……」  
「ジャック……!!?なんで……」

おーおーびつくりしてるね。どんな感想だ?仲間を喰い殺した化け物が殺された仲間の声で喋り始めるってのは。まあお前らの心中なんざ僕が知ったこっちゃないんだけどさ。ただいくら驚いたからって、敵の前で丸腰で棒立ちするのはどうかと思うよ??

「——ラーナさん危ない!逃げるんだ!!」

取り込んだ神機の性質を身体が模倣し、変質が始まる。背中から生えた二つの生々しい剣は翼のような突起となり、それに応じるかのように身体が羽根のように軽くなる。良薬口に苦しとでも言うのか。神機はいつも僕に力を与えてくれる。

蝕刃を構えて空を蹴り、弾丸のような速度で突きを放つ。蝕刃の大振りな刀身が茫然自失のラーナの腹を貫き、同時に刃を伝ってそのありとあらゆる情報が僕の頭の中へと逆流し始める。戦闘中に食事を始めるのは無作法というものだが、やはりこの人間の味と情報には興味を惹かれるものがある。

でもそうして捕喰行動を始めると、ソーマが凄まじい形相でこちらへと走ってきた。ちっ……そりや邪魔しに来るよな。ディーヴァ、お願い。

「てめえ……このクソゲテモノ野郎が!!」

「ガオツ。」

「ぐあっ!?!」

前へと躍り出たソーマをディーヴァが前脚で叩き潰すようにして地面へと押さえつける。そしてディーヴァはソーマに向かって首を横に振っていた。まるで邪魔しちやダメとでも言うかのように。……そのまま殺しちゃっていいよディーヴァ。そいつは逃がすとリンドウさんみたいに厄介な神機使いになるから。サリーやディーヴァの脅威になる神機使いにね。

……こつちも早く喰い終えてあつちで腰を抜かしてるブラスト使いをやってくる。ディーヴァも人の味を知るといい。

『!!』

ん?どうしたのサリー。なに?その女がなにか持つてる?……ほんとだ。こんな今から死のうって時によく動くもんだ。教えてくれてありがとうねサリー。

一度蝕刃による捕喰を止め、ラーナを突き刺したまま地面へと放り投げる。そうするとグシャツという生々しい音がしたが、手に握った何かグディーヴァの方へと投げられた。……あれ。まさかあれって

「ギャンツ!?!」

「エリック……………ソーマを連れ…逃げ…さい……………」

ちつ……………スタングレネードか。閃光と爆音にディーヴアは怯んで顔を背けてしまい、そこにブラストの爆撃が飛んできた。氷壁の展開も間に合わずに爆撃を直に受けたディーヴアはよろけて前脚で押さえていたソーマを離してしまう。

健気というか……………死ぬ寸前だったのによくやる。人間は忌々しいが、ああした仲間のために命を張れるのは敬意を表する。だからって僕がソーマ達を見逃す理由にはならないんだけどね。

「ふざけんなラーナさん!!あんたを置いて逃げれるか!!」

「お願い……………もう……………助からない……………」

それにソーマも仲間を置いて逃げれるような性格じゃないからね。ましてや今のソーマはまだ子どもなんだから。自分が助ければどうにか出来ると思ってる。もう放つといても死ぬのに。

だから僕は食いかけのラーナをソーマ達の近くに投げたんだよ。ソーマが慌ててラーナに駆け寄るのを見て、左掌の口を向ける。そうすると口の中から黒い筋繊維のようなものが溢れ出し、左腕全体を覆うようにして巨大な捕喰器官を作り出す。丸呑みじゃ味なんて分からないかもだけど……………サリィ。食べていいよ。

『!!』

神機の捕喰形態を模した左腕がソーマに向けて伸びる。だが、それで僕に伝わってきたのは人を噛み潰す感覚でも頭に流れる情報でもなんでもなく。

サリーの悲鳴と、左腕が縦に切り裂かれる激痛だった。

その感覚に慌てて左腕を元に戻す。サリーは……無事だね。何が起きた？今の切り裂かれる痛みはどこかで味わったことがある……そう。僕が初めて神機に傷つけられた時の痛みだ。

「間一髪、ってところだったな。ソーマ。」

裂けた腕を元通りに再生させ、僕の捕喰を遮った相手を見すえる。新たな三人の人影に赤いチェインソーのような神機。忘れもしない。僕を一度殺しかけ、サリーをこんな身体に変えた神機使い。そして僕にとつての最大の天敵にして宿敵。

「いや……少し遅かったな。神機使い。」

雨宮リンドウ。また僕らの前に立ち塞がるか。それもいい。……あの時からどの程度僕らの差が埋まったのか。ここで試してみるのも悪くはないか。



## 04. 宿敵（アマミヤ）

予期せぬ増援による妨害。雨宮リンドウにソーマの捕喰を邪魔され、真つ先に怒りを顕にしたのはサリーだった。この二人は僕を傷つけた神機使いとしてサリーも覚えていたらしい。憤怒と殺意により僕の左手を無理やり変質させ、今にも襲いかからんと邪眼を血走らせている。それを僕が宥める反面、リンドウさんも今にも事切れそうならナーナの姿に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

「……くそ。遅かったか。その声といい……」

【「ディーヴァ。」】

その名を呼ぶとディーヴァは滑り込むようにしてリンドウさんの背後へと周り込む。そして倒れているラーナを啜えると、足元を冷気で凍らせながら滑るようになってどこぞへと滑走していった。

邪魔が入った以上ここでゆっくりあの女を頂くことはできない。が、かと言って追ってこられても面倒だ。僕はこつちを片付けてからディーヴァを追うとしようか。

「っ、あの人面猫……！ラーナさんを返せ……ぐふっ!!」

「ソーマ。お前はそこのエリックとやらと先に帰投しろ。ここから先は私達が預かる。」

「ふざけんなこのくそババア……！あいつは俺が——」

そこまで言っつて、ソーマがツバキさんに腹パンされていた。……うわっ。めっちゃ吹っ飛んだし気絶してるじゃん。女の人にババアはダメだって。ソーマって確かロリコンだった気がするけどさ。……にしてもやっぱあの人怖いわ。

でもソーマが倒れるとその場にもう一人。見たことの無い女が駆け寄り、エリックと共に気を失ったソーマを起こす。それを見てツバ

キさんが続け様に指示を出した。

「サクヤ。お前もその二人を護衛しつつ先に帰投しておけ。新兵のお前にこの戦場はまだ早い。」

「は……はい。分かりました。……気を付けてくださいね？ツバキさんも、リンドウも……」

「……………サンキュ。姉上。」

ふむ……サクヤ、つてあれだよな？リンドウさんの嫁の。そっかこの頃はまだ神機使いとしては新兵か。ソーマと一緒にだね。どうもさつきこつちを見た視線の感じ的に、ここ最近僕の周りをこそこそと嗅ぎ回ってたのはあの人っぽい。

しかしあのまま逃がすとソーマもサクヤさんも厄介な神機使いとなる。そしてその二人が今はこうしてひとまとめになっており、片方は動けない。ここまで条件が整っていればやることは一つだ。

【誰が帰っていいと言った。神機使い。】

「えっ……………!?!」

足元を浮かせて滑るように宙をかけ、戦場を去ろうとする神機使い三人の頭上へと一瞬で移動する。こいつらはここで殺す。これ以上リンドウさんやツバキさんレベルの神機使いが増えるのは我慢ならないんでね。僕らアラガミの脅威となる前にここで死んでもらおう。

しかし同時に背後に殺気を感じ、左手の甲の邪眼を後ろへと向ける。そうして振り向きざまに蝕刃の刀身を盾のように構えると、ちやうど放たれた銃弾を弾く形で無効化できた。

「私が許可した。私の決定に文句でもあるのか？化け物。」

「……………フム。」

薄らと弾痕の出来てる蝕刃を下ろし、退却していくソーマ達を横目に見る。……この二人が相手じゃ余所見してる余裕もないか。しかし今ので分かった。神機を二振り、神機使いを一人喰った今の僕なら銃弾にはそこそこの余裕を持って反応できる。

……と、思うのだが。僕の面前に立ち塞がる二人から発されるこの重苦しい殺気。ツバキさんはまだしもリンドウさんもそんな顔するんだね。怒りを必死に押し殺すような二人の表情に自然と僕も背筋が伸びる。浮いた身体を地に下ろし、左腕<sup>サリ</sup>を隠すように後ろへと回す。

「……なあアラガミ。言葉が通じるなら、さっきのラーナって人間の遺体を返してくれないか？そうすればここは俺達も下がる。」

「くだらん戯言を並べる前にその殺気を隠すといい。第一そんなものに何の用がある？」

「埋葬するんだよ。在るべき場所に……遺族達の元へな。」

埋葬……埋葬、ね。この時代にもそんなくだらない文化が残っているのか。葬式つてもものには出たことないから知らないが、この身体になった今なら言える。死者の埋葬など生物界に於いて見れば何の価値もないことだと。この身体となった今、弔いというものを理解は出来ても共感することは絶対がない。

何故なら僕は今、人間を僕の糧とするため。死体の使い道を見出したからこそ殺したのだ。それをわざわざ灰に変えて埋めるために返せと？それは人間が口にするため屠殺した牛や豚を、埋めて腐らせるために返せと言っているようなもの。それこそ命に対する冒瀆というものだろうに。

強いて言うなら殺した相手を喰い尽くしこの身の糧とするのが自

然における弔いだ。化け物相手に人間の価値観を押し付けるんじゃない。例えば人語を解したところで、僕はもう人間では無いのだ。故に僕はその回答とばかりに、蝕刃を向けて改めて臨戦態勢に入る。

「……………そうか。その声……………ジャックも食ったんだな？」

【彼には感謝しているよ。言葉が通じるといいうのは素晴らしいものだ。】

「耳を貸すなリンドウ。いくら言葉を得ても奴はアラガミだ。我々とは決して相容れない。それに……………」

ツバキさんがアサルトを構えてリンドウさんの前へと出る。……………思えば前も同じだったな。僕が初めて神機この二人使いと出会い、交戦し、そして僕はこの命とサリーを失いかけた。

だが今度喪うのは果たしてどちらだろうな。蝕刃の弾痕を再生させ、再び身体を浮かせる。サリー……………あの時はごめんね。君の言う事を聞かなかったせいで君を酷い目に遭わせた。今度は一緒に戦おう。

「……………私達がこいつを取り逃したせいでジャックとラーナは死んだ。この責任は……………他でもない私達が取るんだ。今ここで……………!!」

【いい覚悟だ。なら彼らにあの世で詫びてくるといい。】

左手を天に翳し、サリーが空中に無数のレーザーを放つ。それらは空中に停滞した後二人を捉えると雨のように降り注いで爆撃となるが、当然この程度の攻撃であの姉弟はやれない。爆撃を躲して左右に散開した後、同時に攻撃を敷いてくる。

しかも僕から見て左側にリンドウさんが移動し、ツバキさんは右側からアサルトで銃撃してくる。今の僕なら蝕刃で銃撃を防げるが……………なるほど。これでは左側から来るリンドウさんを蝕刃で迎撃できない。面倒な拘束になるわけだ。そして二人が早くも僕が左腕しか射撃能力を持たないと把握しているのなら……………

「リンドウ！まずその左腕を破壊しろ!!」

「了解だ姉上!!……………うおっ!」

【敵前で作戦を口に出す阿呆がいるか。】

地面に蝕刃を突き刺し、蝕刃の刀身を縦に展開する。そうするとその合間に赤い稲光が走り、大爆発と共に土埃が巻き起こる。

ロングブレードの特殊能力のインパルスエッジだ。剣形態のまま銃撃を行うことで至近距離を爆撃で吹き飛ばす技術。さつきジャツクの神機を口にして会得したんだよ。

直に当てれば人間相手には些か過剰火力だが……………こうして地面を爆破すれば、相手の視界を奪う搦手としても使える。現にこれで視覚を奪われたリンドウさんとツバキさんは攻撃の手を止めざるを得ない。

そうしてリンドウさんを土埃に巻くと同時。僕の左手の甲の邪眼に赤いエネルギーが収束する。サリー……………狙いは大雑把でいいから吹き飛ばしちやってね。

』

そうしてサリーの合図に合わせて左手を薙ぎ払うように振るう。そうすると無数の赤いレーザーが扇状に連射され、着弾地点一体を連続爆破で焼き尽くす。一緒に土埃も吹き飛ばしてしまっただが、リンドウさんもちやんと巻き込んだらしい。よくやったねサリー。

「ぐうっ……………!?なんだこれ……………身体が……………!!」

「おいリンドウ！何をしている!?!さっさと動け!!」

「姉上……………身体が重いんだよ。つかめちやくちやいて……………ゲホツ!!」

神機を杖のように突き立て、必死に立った姿勢を保つリンドウさ

ん。サリエルとザイゴートの致死性毒デッドリーヴェナムを吸っておきながらよく立っていられるものだ。さすが最強の神機使い……体力も化け物というわけか。

でも効いてはいるのか、リンドウさんは血の塊を口から吐き出して体勢を崩す。……うん。放つといたらあのまま死ぬね。サリーありがと。やっぱサリーが一緒だと頼りになるね。左手の甲に唇を当てると、左腕の羽の部分が慌てたようにパタパタと揺れる。

「おのれ毒か!?小賢しい真似を……!」

「人間がそれを言うか。」

「リンドウ!さっさと治療しろ!!それまでは私がこいつの気を引く!!」

……だから言葉の通じる敵前で作戦を口にするなど。対アラガミ戦しか知らない悪い癖だね。とはいえ僕としてもまずは後方支援のツバキさんを狩りたいところだから。ツバキさんの相手をする。

左手を向け、掌の鋭い牙が並ぶ口を開く。そうすると三連射、口の中から赤い光弾が高速で放たれる。シユウの気弾にサリーの毒を混ぜたものだ。ホーミングはしないがこっちは連射能力に優れる。

そして気弾を撒きながら銃撃を躲し、空中を駆けるようにしてツバキさんへと距離を詰める。二人の連携を断てたこの千載一遇のチャンス。決して無駄にはしない。距離を詰めてしまえば遠距離型の神機使いに為す術はない。

「——と、考えてる動きだな?化け物。」

「なに?」

「!!!」

左手のサリーの声に反応するも、次の瞬間には僕の視界が真っ白に塗り潰された。それに耳もキーンとして……くそつ。スタングレネードか。近付いても為す術あつたな。

咄嗟に左手の甲を向け、サリーの邪眼を使って辺りを見渡す。そうするといつの間にか僕から距離を取り、神機の引き金を引くツバキさんの姿が視界に写った。ほんと忌々しいこと。

「リンドウ！まだか!？」

「……よし！行けるぜ姉上!!」

【チイツ……!!】

遠距離から放たれる銃撃に晒される中、早くも分断が終わつたらしい。リンドウさんがこつちにダツシュしてくるのが左手のサリーの邪眼を通して見えた。完全に挟まれてるな……どうしたものか。ひとまず視界は回復しつつある。が、この二人を同時に相手するのは依然として厳しい。もう一度分断できるとは思えないし。

『!!』

【………確かに。十分時間は稼いだか。】

「なにっ!？」

斬りかかってくるリンドウさんの刃を蝕刃で受け止め、弾きつつ宙に舞い上がると掌の口からツバキさんへと向けて三発の光弾を吐き出す。流石に見え透いた爆撃だから避けられたが、直後に僕は右手の蝕刃の刀身を空中で展開する。そうして開いた刀身に赤い稲妻が走ると、僕は蝕刃へと意識を向けて形状を変える。

イメージは槍だ。チャージスピアはまだ口にしたことないが、柄を伸ばして刃と一体化させるイメージ。そうして形質を変化させれば、不格好ながらもそれらしい形へと蝕刃が変わる。そうして緋色の雷光を帯びた槍を僕は地面へと向けて投擲した。

「!!……………リンドウ！伏せろ!!」  
「了解だ!!あんのやろ……………!!」

危険を感じ取って伏せようとする二人を他所に槍に形を変えた蝕刃が大地に突き刺さる。それとほぼ同時。オラクル細胞の連鎖反応による大爆発が地表を包んだ。インパルスエッジの応用とでも言うべきだろうが……………こういう一発限りの実用性皆無な技は嫌いじゃない。僕も男だからね。アラガミには性別とかないんだけど。

そうして大爆発と共に大地が裂け、視界を覆うほどの毒素を含むオラクル細胞が土埃と共に巻き上げられる。あの二人は……………運が良ければ死んでくれるだろうが、この感じだと生きてそうだな。第一死んだのを確認しに行こうにも僕にはもう武器がない。生きてて反撃されたら嫌だし、ここはこちらも大人しく離脱するでしょう。

「……………次は必ず殺すけどね。」

『……………??』

それにはもつと力がある。戦えるようにはなっていたがそれだけだ。まだあの二人を殺すに至るほどの力は僕にはない。もつと力をつけなきゃ。アラガミを、神機使いを口にして能力と技術を伸ばす。そうやって準備が出来たら今度はこっちから出向いてやる。

ひとまずは先に行かせたディーヴァの元に合流しよう。僕達のと心配してたらいけないし。幸いディーヴァの通った場所は地面が凍りついている。これを辿ればディーヴァのところに行ける。

しっかし……………なんであいつら神機使いは僕の事を襲ってきたんだろうね??偵察がうろついてたから来るのは想像してたけど。僕が人



間を口にするメリツトがあるよう、あつちにも僕を殺すことにメリツトがあるとでもいうのか。

理由はどうあれ今後も神機使いが積極的に追撃しに来ると考えると、やはり頭が痛くなってくる。やっぱ神機使いは滅ぼさなきゃダメだな。サクヤさんとかソーマとか顔知ってるやつらが増えてきたけど、あの辺にも僕達アラガミの平穩のために死んでもらうとしよう。

## 05. 赤実（イヴ）

凍りついた地面を辿ること数分。デイーヴァは神機使い達が簡単に到達できない切り立った岩の上で横になっていた。そして僕が舞い降りるのを見ると、デイーヴァは腰を上げて僕の元へとゆっくり歩いてくる。

【デイーヴァお待たせ。撒くのに時間かかっちゃった。】

「ガルルルル……………」

【怪我？へーきへーき。ヤバくなる前に逃げてきたから。】

最もあれから神機使いは一人も食えなかったけどね。そう言ったらデイーヴァが慰めるように前足をポフツと僕の頭に乗せてきた。同時に左手の甲の邪眼がビキツた。ステイ！ステイ！！

……………で、デイーヴァ。君には確かラーナとかいう死にかけの神機使いを持ってって貰ったはずだけど。まだいる？流石に遅くなっちゃったしもう食べちゃった？いや、それならそれでいいんだけど。デイーヴァにも神機使いの味は知って貰いたいし。ただあいつらの腕輪って確か発信機だからさ。もしまだいるなら——

「……………あ……………うう……………」

……………つて言いかけて、デイーヴァが血の海に横たわる神機使いに目配せした。うわマジか。まだ生きてんのか。生命力強いとそれはそれで大変そうだね……………お腹に穴空けたのに。

でもよく見ると傷口が凍りつくようにして血が止められていた。恐らくデイーヴァが口で咥えた時に凍らせたのだろう。そう考えると中々にこの子もえぐい事するなって……………位置的に肺が凍ってるじゃん。息するだけで苦痛で地獄だろうに。

「ガオ。」

「……僕が帰って来るの待っていてくれたんだ？ありがとね??」

「グルルルル……♡♡」

甘えるように顔を擦り付けて来るディーヴァの頭を右手で撫でる反面、未だに満身創痍ながらも息のあるラーナに目をやる。ふむ……そうか。もう少ししたら死ぬと思うけど、一応神機使いを生き捕りに出来たわけか。

……でかしたねディーヴァ。この神機使いを生かしておいてくれてありがとう。これは想定外の大きな収穫だ。

「ガウ……??」

「いや……ちよつと待ってね。」

『??』

ディーヴァとサリーが二人して僕に「食べないの？」と尋ねてくる。いやさ……実はね僕。ちよつと前に考えたことがあるんだよ。

前に言ったと思うんだけどさ。サリーの身体いれものとして最適なのもつて、生きたアラガミで人型のアラガミなんだよね。同種族のサリエル種が最高なんだろうけど他だとアルダノーヴァの女神の方やシユウ神族とか。あの辺じゃないとサリーの身体には出来ない。

けどさ。同時にふと思っただよ。神機使いつて要はアラガミの細胞を身体に入れて神機っていうアラガミを使う人間なんでしょ？つまりところアラガミ混じりの人間だ。それもあの腕輪がないと完全にアラガミになってしまいうくらい不安定な状態の。

これってさ。一応サリーの身体としての条件は満たしてんじゃないかなって。

人型のアラガミとアラガミ混じりの人間。その本質は違えどもアラガミにしちやえばサリーの身体に出来るんじゃないかって。

『……………!!』

【ま……………あくまで思い付きだけどき。サリーが嫌ならやめるけど。】

『!!』

それを聞いてサリーは即座に僕の提案を受け入れた。そうだよね……………一番元の身体に戻りたいのはサリーだもんね。今回のあの化け物姉弟との戦いも僕がハマしたらサリーまで危なかったし。状況的に考えてもこれから神機使いにちよつかいかけられることを考えると僕の身体に一体化してるのは危険だ。

とはいえこれがただの僕の思い付きである以上、確実に成功する確証なんてものはない。もしダメそうだったら直ぐにサリーを僕の身体に戻すから。こんな妥協案みたいなものでサリーを元に戻すのは少し心苦しいが……………事態が変わったからね。ラーナが生きてるうちにさっさと終わらせてしまおう。

【んじゃ……………失礼するよ。神機使い。】

『……………??……………あ……………っ……………!!』

【……………こうでいいのかな?】

まずラーナの右手の腕輪の接続部に指を入れ、中に僕のオラクル細胞を流すことで偏食因子の働きを阻害する。そうすると……………おっ。腕輪のしてある部分から黒い血管みたいなものが浮き上がってる。それが脈打つと同時、ラーナは苦しそうな悲鳴を上げた。

「あ”う……………う”う……………!!う”ー……………!!」

そうしてそのまま腕輪を介して僕のオラクル細胞を体内に侵入させることで無理やりアラガミ化を促進させる。その影響か死にかけの重傷を負ったにも関わらずラーナの身体には異常な怪力が入り、腕輪周りの皮膚が赤黒く変色して硬化し始める。

瞳孔もだんだんと赤く濁り、その変質は僕が腕輪から指を抜いてももう止まらない。人間離れた唸り声と共に歯を剥き出しにし、今にも襲いかかってきそうなラーナの胴体に僕は蝕刃を突き立て地面に縫い止める。手元が狂っちゃうといけないからね。なに……多少の傷は変化の過程で塞がるさ。

あとはこの変質する過程にサリーを混ぜることで、アラガミへの変化をサリーの意思の元に行わせる。果たして上手く行くかどうかは分からないけど……サリー。頑張ってるね？

』。

『もしヤバそうだったら言ってね。直ぐに引き上げるから。』

そう言って僕は左手の人差し指と中指でラーナの頭骨を貫く。そして彼女の脳に指先が触れるのを確認すると、今度は僕の左手の甲が脈打った。手の甲の琥珀色の邪眼が僕の指を伝い、指先から剥がれ落ちるようにしてラーナの脳の中へと侵入する。

よし……入ったね。あとはサリーがどれくらい上手くできるかだけど。けど僕がラーナの額から指を抜くと同時。彼女のアラガミ化が急激に促進された。それを確認して僕も突き刺した蝕刃を引き抜く。

皮膚は血の気が失せるようにして白化すると同時、骨が軋むような音を立てて身体が巨大化する。衣類は内側から変質する身体に無理やり引き裂かれ、露になった裸体もみるみるうちに異形のそれへと変わり果てていく。

指先は裂けるようにして伸びて羽のような形に変わり、上半頭部は膨れ上がるようにして肥大化。人の顔の部分を覆うようにして後ろに伸びるとその先端が脳から噴き出すガスによって膨らみ始める。

でもそうやって急激な変異を遂げているものの、やはりアラガミ化にはかなりの苦痛が伴うのだろう。のたうち回るその身体を見るとなんだか心配になってくる。やっぱ神機使いにサリーを入れたのは不味かったかな……………

「あ……う…………ぐうう……………!!」

【サリー…………大丈夫？意識ある??】

『……………』

尋ねてみるとサリーから「私は大丈夫」って返事が帰ってきた。んじゃこの苦しんでるのはまだラーナの意識が残ってるってことか。さつさと消えてくれるといいんだけど……………

それから五分くらいが経過したか。脚は皮膚と皮膚が融合するようになってラツパのような尾に変化し、膨れ上がった上頭部に巨大な血走った単眼が開いた。さつきまでのたうち回っていたのも大人しくなった辺りラーナの意識は完全に消えたらしい。

そうしてアラガミ化が終わると、その元人間のアラガミは僕の腕の中へと飛び込んできた。僕はそれを受け止めるとゴムのような触感の頭部を傷つけないようにそつと撫でる。

やっとだ。短い間だったにも関わらず随分長く感じた。元通り……………とまでは行かなくてもちゃんとした肉体を彼女に与えられた。彼女をアラガミとして甦らせることができた。

【……………おかえり。サリー。】

そう囁き、物欲しそうに僕を見つめるザイゴートを優しく抱きしめる。なんと懐かしい姿だ。初めて会った時を思い出す。そうだよね……人間は体積自体はそれほど大きくもないから。大ききの近いアラガミに変質するとなるとサリエルにはなれないもんね。

大丈夫……完全に元通りになるまではサリーは僕が守るから。二度と君を消したりなんかないって。そう誓い、彼女を僕の頭の上に乗せたんだよ。

だからこそ。あまりに元通りで懐かしいその姿だからこそ、次に起きた出来事は僕の思考をどこぞかへと置き去りにした。

【た……………だ。い……………ま……………??】

頭の上から初めて耳にする掠れたような少女の声が返ってきた。発音を模索するかのようなその声は神が決して発することの無い産声。

それが世界を滅ぼす奇跡の先触れだと知ったのは、そう遠くない未来の話。ただ今の僕には、穏やかに邪眼を細めるサリーを撫でてやることしかできなかつた。

それほどまでに現在の状況を受け入れられてなかつたんだよ。

——まさかサリーが『喋る』なんて。



## 06. 聖誕（エデン）

アラガミの言語能力の会得。それ自体に前例がないわけではない。まず僕という存在そのものが人の人体構造を模倣し、人間との会話ができるわけだし。

それに例外中の例外とはいえこれから現れるであろう『特異点』は——人型のアラガミ故、言語を口にすれば学習もする。更には歌までも覚えた。アラガミが人の声を真似る事そのものは別段不可能というものでは無い。

しかし既存のアラガミが言語能力を獲得する。その実例は見たこともなければ聞いたことも無く、ましてや初見で会話を成立させてくるなんて。まるで始めから人の言葉を知っていたかのようだ。

腰を降ろす僕の膝の上で眠るザイゴートの喉の辺りを思わず撫で、その構造を確かめようとする。けどそうするとサリーが閉じていた邪眼をゆつくりと開き、羽のような両手で僕の腕を掴んできた。

【……………くすぐりたい……………】

【あ……………ごめんね？】

【あたまか……………からだ……………なでて……………】

そうやってサリーは細い人体部分の胸元を撫でるように催促してくる。たどたどしい口調だが明確に言葉の意味を理解し、会話を行っている。元人間の僕は言葉を元々知っていたからこそ声帯だけ模倣することで人の言葉を話せたが、サリーは違うはず。仮に声帯を模倣しても言葉を知らなければ呻くくらいしかできないのに。

……………まだ肉体に人間の意識が残ってるのか？それともサリーの自我と混ざったか??今この言葉を話してるのは本当にサリーなのか

??

この不測の事態に対して疑念が尽きない。が、僕がサリーに頼まれるままに人間の乳房に当たる部分を指で撫でていた時だ。サリーが身体を小さく跳ね上がらせながら、ぽつりと呟いた。

【ん……すきなひとには……ここさわられるとうれしいって……ほんどだね……んっ……】

【……??それは……】

【このからだのあたまに……そう書いてあるの。揉んだり吸われたりする……きもちいいって。】

息を荒らげながら羽で僕の腕をサリーが抱きしめる。頭の中に書いてある……??記憶のことだろうか。まさかサリーの身体にラーナの記憶が残っているのか？サリーはそれを辿ることで言葉を――

……いや。それなら僕もそうだね。僕もあのジャックとかいう神機使いの脳を喰った時、その記憶が頭に流れ込んできた。その結果この右手の蝕刃を神機のように扱えるようになり、あの男の今までの経験をまるで自分の記憶のように取り込めた。サリーがやったのはそれと同じだ。そう考えればなんら不思議なことは無い。

けどそうなるならサリーはなぜ僕と同じことが出来るって話になるが……こっちは心当たりがある。ラーナをサリーの身体にするべくアラガミ化させる際、腕輪の機能を阻害すべく僕の細胞を入れたからだ。その際に僕の細胞が持つ性質――元人間由来の優れた学習能力がサリーにも与えられたのだろう。

つまり……僕の細胞をアラガミに移植し、人間を喰わせればアラ

ガミに人間の言語とそれに類するほどの知能を与えられると。これがサリーが言語能力を得た仕掛けか。それなら今こうして話しているサリーは僕の知っているサリーと変わらないわけで……

【……………!?あ……………どうしたの……………??】

【ううん……………本当に帰ってきてくれたんだね。サリー。】

サリーのことを優しく抱きしめた。よかった……………もしかしたらサリーが消えちゃったのかと思った。身体がアラガミになっただけで残ってたのがあの人間の意識と魂だったらどうしようって……………人間をサリーの身体に使ったのは間違ってたんじゃないかって。

そんなことはなかった。ちゃんとサリーは元通りに……………いや、僕と同質の存在に進化させて復活させられたんだって。戻ってきてくれてありがとう。ありがとうねサリー。もう絶対離さないし離れたりしないから。ずっと一緒だからね。

ああ……………好きな人と言葉を交わせるのがこんなに嬉しいことだなんて。今となつては僕より小柄なサリーを抱きしめ、額にそつと異形化した唇を当てる。こんな身体じゃ温もりもよく分からないけど……………それでも嬉しいよ。ほんと大好きだよサリー。

【……………!!わたしも……………】

【必ず元の姿に戻してあげるから……………そしたら一緒に樂園を作ろうね。】

二度とサリーが傷ついてあんな目に遭わないように。僕達アラガミの手で人のいない世界を作り出そう。サリーのおかげで僕はその手段に気付いたんだ。僕ら神々に更なる進化を施すための方法を。

けど今はサリーとの二人きりの時間が大事だ。帰ってこれてよかったねサリー……僕の身体にずっと居たとはいえ受肉したばかりでおなか空いてるでしょ。なんか食べたいものある？神機使いでもアラガミでも。あつたらなんか捕まえてくるけど。

【……………んーと。たべたいのある……】

【なになに。教えて？】

【そこで寝てるどろぼうねこ。】

サリエルが翼で指さしたのはやる事やって横になってたディーヴァ。まさかの飛び火にディーヴァがびっくりして目を開ける。いやいや待つてサリー。ディーヴァめつちやサリーが元に戻るまで助けてくれたんだから。「え？私？」って困惑した目でこっち見てるし……やめてあげて？ね？

【いままでありがと。そしてさよなら。】

「ア”ア”ア”——ツ!!」

【こらーサリー!!メツ!!】

僕の膝から離れるなりサリーがディーヴァの頭部に喰い付き、ディーヴァからなんとも悲痛な悲鳴が上がる。慌ててサリーを引き剥がそうとはするけど、ザイゴートとは思えないすごい力で喰いついて頑なに離れようとしなない。

そうしてディーヴァとサリーと僕の奮闘はしばらく続き。結果としてディーヴァの冠みたいな部分がちよつと欠けてしまった。直ぐに治ると思うけど「私悪いことしてないのに」ってめっちゃこっち見てる。ごめんね。ほんとにごめんね。

しかもサリーはディーヴァの冠部分を咀嚼した後飲み込むと――

【……………まっつっず。】

そう一言。だがそれがド直球にデイーヴァの逆鱗に触れた。胴体に抱きつく形で飛びかかろうとするデイーヴァを必死に抑えるが、馬力が圧倒的に強いデイーヴァには振り回されるばかりで。

そんな飛びかかるデイーヴァを相手にサリーはひらひらと舞って躲しながらも毒ガスを浴びせるとヒットアンドアウェイを繰り返している。氷柱使わないのはデイーヴァの優しさなんだろう。

【こらサリー！その辺にしないと怒るよ！】

【……………だつて。この女じゃま……………】

【その子別に僕になにもしないから!!大丈夫だからこっちおいで!!】

そうやってしばらく不毛な戦いが続いたあと。サリーをなんとか鎮めて僕の腕の中に収めることに成功した。けどそうすると僕はある変化に気付く。

【サリー……………なんかひんやりしたね?】

【げっ……………】

見ると頭部の卵に似た部分の色合いが青白く変化し、漏れ出すガスが緑色に変色していた。氷属性のデイーヴァを口にしたせいだろうか。サリーはいつの間にか氷の墮天種へと進化を遂げていた。デイーヴァの性質が現れてすつつつごい嫌そうだけど抱っこしているとひんやりして気持ちいい。

【……………ほんと?わたしきもちいい……………?】

【うん。こうやってぎゅーってしているとすごい気持ちいい。】

「~~~~~ッ!?!」

そうやってサリーの後頭部に顔を押し付けると、サリーの頭から逆上せて湯気が立つようにガスが漏れた。恥ずかしがってるのだろうか、顔を羽で隠すように覆っている。かわいいな。包容力に溢れる前のサリーもかわいいけど今のちっちゃいサリーもかわいいね。

でも頭を撫でようとしたら腕からすっぽ抜けるようにしてサリーに逃げられてしまった。嫌だったっていうよりは恥ずかしかったっぽいけど――

「……………ひんやりしてて気持ちいいって。」

ちょっと待って。なんでまたディーヴァの方飛んでくの。ディーヴァもサリーのことを恨めしげに睨んでるが、それでも横になるとすぐ目を閉じてしまうのは大型ゆえの余裕か、それとも危機感がないのか。嫌な予感しかないんだけど。

【もつとよこせ。】

「ア”ア”ア”――ッ!!」

さつき見たままの奮闘がまた始まった。相変わらずすごい力で喰いつくサリーを引き剥がすのには相当苦戦し、結果としてディーヴァの頭は結合崩壊してしまった。

そしてついになにやらサリーの全身が白くなった。ディーヴァを喰い過ぎた結果だろうか。進化の速度まで僕の性能をそのまま継いでるのか、早めに餌になりそうなアラガミを狩ってこないと変な進化をしそうで不安である。明日は餌になるアラガミを狩りに行くからね。

## 07. 転生（ネメシス）

サリーがザイゴートとして蘇ってからはしばらく。僕とディーヴァはアラガミの狩猟を繰り返して、口にする反面でその一部をサリーに与え続けた。サリーが早く元の姿に戻りたがってたのもあるが、同時に僕の戦闘能力を強化し神機使いとの戦いに備えるという目的もあった。

当面のサリー復活って目的を達成した今、僕らの次の目的は神機使い及び人類の殲滅だ。二度とサリーやディーヴァが脅威に晒されないように最後の一匹までこの世から消してやる。現に奴らは時おり僕らの居場所を探し出しては襲撃してくる。その悉くは神機含めて僕とサリーの餌になったけど。

特にサリーは人間を口にした際に手に入る記憶が気に入ったのか、人間を好んで捕喰するようになった。人間を口にしてその技術や文明に対して理解を深める。元人間の僕と異なり、純粋なアラガミである彼女にはその営みがただただ新鮮に写ったのだろう。そういう意味では餌になりに来た神機使いは都合が良かったとも言える。

反面僕は不味いが神機を捕喰し、その機構をアラガミの能力同様に自身のものとした。特に最近口にしたものでめばしいものがバスターブレードとチャージスピア。これらの機構を僕の蝕刃に盛り込むことでチャージクラッシュとチャージグライドが使えるようになった。

そのおかげもあつてか、僕はさつき単騎でウロヴォロスを討ち倒すという快挙を成し遂げた。これは戦果だけ見ればリンドウさんと同程度の戦闘能力を得たということになるが、逆にこれだけ進化してようやく同程度かと。敵でありながら尊敬するよ全く。僕は色んな能力使ったの考えると剣一つで成し遂げたあつちのが腕前は上って事だからね。

さて。そうして倒したウロヴオロスだけど。さすがにデカいつて  
いか食べる部分が多いな。今日一日の食料がこいつ一匹で足りる  
程度にはポリリュームがある。どう食べようかなって僕が迷っていた  
時だった。ふと僕はサリーの様子がおかしい事に気付く。なんか落  
ち着かない様子で羽をパタパタとやってる。

【サリー。どうかした？】

【……………これ食べたら、きつと私は元に戻る。】

【えっ。】

そう言つてサリーはウロヴオロスの脚を形成する触手のような部  
分に喰いつき、存外に太くて大きいそれをポリポリやっている。その  
様を僕は見守っていたが、すると直ぐさまサリーの姿に変化が起き  
た。

まずザイゴートの人の女性の身体の部分が大きく成長を始め、反し  
て卵のような浮き袋は甲殻に覆われて冠状に変形。邪眼はそのまま  
に羽やラツパ状の尾が人間の腕や足のそれに近いものに変質する。  
その身体は幾度か神機使いを口にした影響だろうか。姿だけ見れば  
前より人間のそれに近い形をしていた。

でも額の邪眼が開くとその姿は大きく変わる事となる。腰の辺  
りからはまるで花が咲くかのように黒い蝶の羽が幾重にも展開され、  
その先端には額のものよりは小さいものの無数の赤い邪眼が飾りの  
ように開く。おおよその形が出来上がった時点でその身体も巨大化  
を始め、その体軀は瞬く間に僕を上回るほどに成長した。

そうして部分部分は裸体でこそあるものの、サリーはその姿を完全  
に復活させることに成功する。しかしそれで彼女の進化はそれで終  
わりではなかった。

【ふづつ……!!んづう……ツ……!!】



「サリー……大丈夫？ やっぱ無理して進化するの大変なんじゃ——」

「もつと……もつと強くなる……!!二度と人間共に負けないように……もつと、あなたを愛せるように……!!!」

その決意とも妄執とも取れる言葉と共に、サリーの全身が大きく跳ね上がる。そうするとまず額周りの邪眼周辺から植物を思わせる触手が広げた角や王冠を思わせるように展開し、全身から赤黒いオーラが溢れ始める。

そして手首から肘にかけてが同様の肉の蔓とでも呼ぶべき物によって覆われるとそれは手甲を模したものと代わり、スカートを思わせる蝶の羽の合間からもまるで翼の骨格みたいに鋭く尖った蔓が伸びる。

その肉蔓は、紛れもなくたった今口にしたウロヴオロスのもと同質の物体であった。サリーが早くもウロヴオロスの能力を取り込み、自身の進化へと用いている。僕がそうしたのを真似するみたいに。

いや、能力だけじゃない。ウロヴオロスを食べる傍からサリーの身体はどんどん大きく急激に発達し、通常のサリエル神属を上回る巨体に成長している。それに合わせて胸部なども大きく膨らみ、やがてその体軀はウロヴオロスと同等にまで巨大化する。

未だに顕な乳房を恥ずかしげもなく揺らしてこそのもの、その威圧感ほもはや本来のサリエルのそれとは比べ物にならない。しかし変異を終えてなお進化は止まらない。さらにサリーは背中から六本のウロヴオロスの爪を思わせる触手を生やすと、まるで手ブラのように豊満な胸に巻き付けることで衣服の代わりとする。同じように爪先には肉蔓のヒールを生成し、ふわりと地面に降り立つように着地してみせた。

雪のように白い肌に衣装や装飾を思わせる黒い触手。そして額から伸びる冠状の角と一体化した赤い邪眼。腰周りを覆うように展開されたドレス状の翅の合間にはその強度を補強するかののように触手

が生えており、本来スカート先端にあるべき邪眼はそれぞれがその触手の先端へと開いている。

サリエルとウロヴオロス、奇しくもレーザーを主体とした攻撃能力を有するアラガミ同士。その二つの性質を混ぜ合わせて洗練したサリーの姿はより妖艶で禍々しく、最早その姿はサリエル神属から外れた完全な新種と呼べるものだった。

サリエル神属第一接触禁忌種【テイターニア】。植物を身に纏ったような姿からか、或いは妖精の女王を思わせる艶かしい美貌からか。後に神機使い達の間で彼女はそう命名される程に、他に例を見ない強力なアラガミへとサリーは変じた。

しかし今のサリーは新たな自分の身体を見つめて小さく笑っていた。唇に指を当てて妖艶に、それはそれは嬉しそうに。

【ウフ……フフツ………】

【サリー……おめでとう。そしておかえり。】

僕はその姿がどんなものであれ、愛した彼女が戻ったのなら受け入れるだけだ。僕はサリーに向けて腕を広げてみせる。久しぶりに抱きしめ合えるとそう思ったから。それに気づくとサリーも僕の方へとゆっくり近付いてくる。

それでまた前みたいに愛し合えると。少なくとも僕はそう思っていた。

でもサリーはそんな僕の脇に手を回すと、僕のことをぐいっと持ち上げた。

【えっ。っ。】

そしてそのまま僕のことを抱きしめると、その身をゆっくりと浮かせて僕を抱きかかえる。ウロヴオロス並みの巨体で積極的に迫られたせいで僕は一瞬呆然としてしまうが、そうするとサリーはなんと人

の顔の閉じたままだった目を開いた。彼女の瞳は赤い狂気にも似た輝きを帯びており、恍惚とした彼女の笑みに背筋がゾクツとする。

【だいすき……愛してる。愛したい……愛でて愛でてあなたの全部を私のものになりたい……】

【サ……サリー??えっと、どうしたの——】

そう尋ね終える前にサリーは僕の首筋に噛み付いてきた。小さな口で僕の首の肉を喰い千切り、その口の周りを僕の血で鮮やかに染める。今のサリーは肌が雪みたいに白いから付着した血は口紅みたいになり、それを長い舌で舐め取るとサリーは熱の籠った視線を僕に向ける。

【おいしい……やっぱあなたが一番だいすき。一番大切……誰にも渡したくない……!!】

そんな言葉と共にサリーの額の邪眼が真っ赤に輝き出し、抱きしめる腕に力が入る。やばい。これはまずい。興奮しすぎて活性化してこの子。慌てて背中を軽く叩いて宥めようとするが、だいぶ理性が蒸発しているらしい。サリーは僕の後頭部に右手を回すと自身の首筋に僕の顔を押し付けるように抱きしめる。

【ほら……がぶってして……!!私の事も食べて……食べて私を感じて……!!!】

そう求めるサリーの翼からは、興奮のあまりか赤い猛毒の鱗粉が霧みたいに噴き出して周囲を汚染し始めていた。サリーの身体を長い間口にしてた僕には耐性こそあるものの、その毒は土すらも赤く蝕み腐らせるほどの瘴気と化しており、それを見たディーヴァは大慌てで僕とサリーの傍から離脱した。活性化しただけでこれだもの。災害じみた汚染を撒き散らす彼女は人類を滅ぼすに足る厄災に変じたの

だど。僕らは早くも彼女の力を思い知ることとなった。

とにかくこのまま興奮させるとディーヴァがヤバいため、僕はサリーがそうしたように首筋にゆっくりと噛みつき、再生に支障が出ない程度に作られたばかりの肉体を喰いちぎる。と言ってもサリーの身体が大きいから結構がつつり言っただけ。そうするとサリーは小さく身体を跳ね上がらせ、嬌声を上げて「もっと」と求めてきた。蜜のように甘い自身の血肉をもっと口にして欲しいと。僕の血肉を更に貪らせてほしいと。

なぜならこうして互いの身体を喰らい与え合うのが僕らアラガミの愛情表現だから。今サリーの肉を口にして思考が流れてきたから分かるよ。サリーはずっとこうするための身体を渴望していたんだって。僕を愛で、愛でられるための肉体を。そんな理想の身体を手にしたことで欲望の箍が外れてしまったのだと。サリーって前からスイッチ入っちゃうと制御効かなくなるから……

一方でサリーはサリーで僕がいきなり襲われて困惑してたのも分かったらしい。分かった上で更に行為を続けようと舌なめずりしてるけど。うん、その程度で止められたら本能なんて呼べないもんね。いいよ……サリーが完全に蘇ったお祝いだ。望み求めるままに互いを与え合おう。今はアラガミも神機使いもいないのだから。

【ほんと……？我慢、しなくていい……??】

【いいよ。……今日は前みたいにいっぱいラブラブしよ。】

【……………じゃあ口開いて。】

サリーが僕の顔に両手を当てて真っ直ぐ見つめてくる。果たして何を与えてくるのか。言われるがままに僕は口を開くが、そうするとサリーはとんでもない行動に出た。

【……………ッ?!?!?!……………】

【……………♡♡♡】

なんとこの子。僕の口に自分の口を重ね、舌と舌を絡ませてきた。その舌は自分で噛み切ったのか血が流れているようで、口の中にサリーの味が広がる。どこでこんな事を知ったのか。そんな疑問も他所にサリーは僕の舌も同じように噛み切り、舌から血を流させた上で改めて口付けを介して僕の味を堪能している。

【んっ…………私、これ好き……………】

絡み合う舌の感触を通じて口の中身が混ざり合い互いの血の味で満たされる。こちらを真っ直ぐに見つめるサリーの瞳は初めての感覚にすっかり蕩け、僕の身体を抱いて逃がさないようにと更に力が強くなる。きつと僕も同じなのだろう。柔らかな彼女の身体を抱きしめ、全身で彼女を感じている。本当に元通りに戻ってくれたんだって。

しばらくそうして深い口付けを続けた後。二人の血の混じった唾液を引きながらサリーはようやく口を離れた。……………情けないことに僕は腰が抜けて力が入らなくなつたよ。そんな僕をサリーは相変わらずお人形みたいに抱っこして優しい笑みを浮かべている。これヤバイね……………めっちゃよかった……………

【サリー……………どこでこんな事覚えたの……………】

【あなたの中にいた時。口にした神機にんげん使いがこうしてたから……………】

ああ……………サリーの身体の素体になつた神機使いか。それ参考にしてみんな事してきたわけね……………本当に賢くなつたんだねって感心する反面、人間の記憶っていい意味で悪影響だなんて思ったよ……………ほんとはめっちゃよかった……………

【……………もう一回、する？】

【する……………】

仕草でバレたのか。サリーに身体を預けて前より大きくなったおっぱいに顔を押し付けてたらそうお誘いされた。……断れなかつたよねうん。意思が弱すぎる。

結局もう一回どころじゃ済みませんでした。この調子だとそのうちマジで一線超えるんじゃないか。その日僕は人間の性質を取り込んだアラガミの思わぬ脅威を目の当たりにし、同時にすっかりサリー抜きじゃ生きられない身体にされてしまった。完全にリードされた。だから次は僕の方からも色々出来たらなって思ってます。

## 08. 始動（プラン）

サリーが完全に身体と力を取り戻した今、僕はついに神機使いの殲滅に向けて本格的に動くことにした。サリーを蘇らせることは出来たものの依然として神機使いが脅威であるのは変わりなく、特に極東支部の神機使い。あの雨宮姉弟は言うまでもないが、下手に時間が経てば今は経験の浅いソーマやサクヤさんも直に同等レベルの優秀な神機使いになる。

つまり当初の目的を達成した今、神機使いの本拠地であるフェンリル——特に極東支部の連中はさっさと潰したい。あの魔境は放置しとくとガチで手がつけれられなくなるから。そのためには二人にも協力してもらいたいんだけど……

「私も人間は食べたいから賛成。……だけどあなたの事も食べたい。もつといっぱい可愛がりたい……」

「ヴオウ……」

「ふむ……ディーヴァは嫌そうだね。なんか他にしたい事でもあるの？」

サリーに抱き上げられて甘噛みされてる中、ディーヴァは何やら物申したげに唸り声を上げていた。けどその姿を見てサリーは小さく笑うと、僕を一層強く抱きしめた。柔らかいおっぱいに顔が押し付けられるけど完全に当ててんのよって感じで。当の本人は僕に自分を食べて欲しくてやってるんだけど……そこ頂くとCEROが一つ上がっちゃうからね？また今度ね??

「ヴウウ————ッ!!!」

「えっ何!?ディーヴァどうした!?!」

「イチヤイチャすんなって?嫉妬は見苦しい……」

普段じゃ見ないくらい滅茶苦茶にキレ散らかしながら前脚バンバンしてるからびっくりしちやった。あつ……そういうこと？ごめんね??確かに人前でこういうことするのは良くないよサリー。人前っていうかアラガミの前でだけど。僕も見られてるって考えると恥ずかしいし今度また二人だけの時にね？

【……分かった。】

【よしよし。いい子だね。んじゃ離して——】

【あの猫がいなくなれば二人きり。消してくるから待ってて。】

待て待て待て頼むからちよつと待って思考回路世紀末やめてほんと。ディーヴァも徹底抗戦の構えやめてマジで。前から分かっていたけどこの二人相性悪いな!?!相性っていうか九割九分サリーが悪いけど!!喋れるようになってから毒増したなこの子はほんと!!

【はあ……はあ……死ぬかと思った……】

【大丈夫……?】

【グウルル……】

結合崩壊でボロボロになった二人に介抱されつつ、毒と冷氣塗れの身体をどうにか休める。正妻戦争とかいうガチの殺し合いの結果がこれだよ。仲裁に入った僕が真っ先に死にかけたわ。全くサリーは……そんな心配しなくても僕はサリー以外には興味ないから。そんなディーヴァの事を目の敵にしないの。神機使いと戦うなら内ゲバしてる余裕なんてないんだから。

【……ごめんなさい。】

【クウーン……】

【ディーヴァもごめんね。ずっと僕の面倒見てくれてたのに。】

悲しそうな声を上げてたディーヴァの顔を抱きしめてモフモフす



る。僕がサリーにばっか構ってるからやきもち妬いてるだけで、この子は僕にそう好意は向けてないはず。……そう思いたい。前脚で僕のことぎゅってしてるけど。

そもそもディーヴァってなんで僕について来てくれるのか。サリーがこうして戻った今、てつきりサリーに僕のことを任せてどっか行くと思ってたのに。まだこうしてついて来てくれるのは本当にありがたい。神機使いとやり合うならディーヴァは頼りになる。一緒に来てくれてありがとうね。

「ヴー……………」

「……………まだ不機嫌だね。どうしたんだろ。」

【私達。アラガミの言葉。わからない。喋って???】

こらサリー!!煽らないの!!ディーヴァまた怒って…………ていうか鳴いてるから!!表情変わらないけど凄い甲高い声を出して僕に顔を押し付けてきてる。ちよ、ぐいぐいしないで!冷気漏れてるから!!凍る!!凍って砕ける!!

けどそうか…………確かにディーヴァだけ明確に意思疎通が取れないのも不便だね。アラガミに言語能力を与える方法はサリーで確立されたし、ディーヴァにもそれを施すべきかも。そう考えていたらディーヴァが思い切り顔を上げた。

「……………もしかしてディーヴァ、僕とサリーが普通に話してるのにやきもち妬いてた??」

「ヴォウ!!」

【あー……………そうだったか。なるほどね。】

ディーヴァも僕らみたいに喋れるようになりたかったと。うーん……………実はそれは何回か考えたんだけどね。一応そうしなかった理由はあるんだよ。

というのも、サリーが言語能力を得たのは完全に偶然。神機使いをアラガミ化させてサリーの器にしたら、そのついでに言語能力を得たっただけで。その条件を僕は『僕の細胞を移植して学習能力が飛躍的に向上したアラガミに人を与えその性質を学ばせる』って解釈したけど、早い話がまずこの推察に確証がないこと。

なんせ僕の細胞を移植したアラガミはサリーしかいないし、そう簡単に餌用の神機使いを調達できるものでも無い。野生のアラガミで試すには適当なやつに僕の細胞を植え付け、その上で神機使いを与える必要があるんだけど……その実験も難しいんだよね。

そしてこればかりは杞憂かもだけど。そもそも僕の細胞を移植したアラガミが無事って保証がないんだよね。サリーは元々僕の身体の一部になってたから平気なだけで、他のアラガミが異なるアラガミの細胞を移植された際にどんな反応を引き起こすか。そうでなくとも僕の細胞は幾度も毒性のアラガミを捕食しその性質を模倣した、言わば猛毒だ。まずはその実験から行わないといけない。

「そういうわけだから。君に言葉を与えるにはそれなりに時間がかかるし、骨格が比較的人型に近いサリーと違って君が話せるかは――」

「ヴウウ……………」

「…………出来なくても文句言わない？なら試してみるけど…………」

…………正直この子を実験の材料にするのは気が引けるんだけどな。サリーも小さく「失敗しろ。そして死ぬ」って連呼してるし。ヤバイねお冠だね。額の邪眼がビキビキしてる。後でちゃんと相手してあげるから抑えて抑えて。

でも実際僕の細胞の影響が未知数で危険な反面、僕の細胞を与えたアラガミがサリーのようになるのならそれは神機使いと戦う上での

戦力の増強にも使える。あいつらの手頃な脅威を気軽に増やせるならそれで十分だし、サリーのように意思疎通が出来るようになればアラガミの組織的な行動も視野に入ってくる。

やる価値はあるか……けど、ディーヴァに僕の細胞を施すのは野生のアラガミで試してからだ。それから問題がないようなら細胞の移植だけは先に済ませてしまおう。そうすればディーヴァも僕やサリーみたいに捕食したものの性質を選択して自身に反映できるアラガミの一步上の存在になれる。

そうしたら人間を口にするだけで人間の機能や知能を模倣できるはずだから。それでこの子がどんな形に進化するかは僕にも分からないけど……やるだけやってみよう。歌姫<sup>ディーヴァ</sup>なんて名前を与えたのに言葉を口に出来ないのは確かに可哀想だから。

【余計なこと言った……私のバカ……】

【サリーも行くよ。この実験終わったら僕のこと好きにしていいいから。】

【やだ……私以外と話しちゃやだ……】

項垂れているサリーを連れて行こうと彼女の手を引く。ほんと独占欲の強い子なんだから……妖艶って言葉が服着て歩いているような風貌なのにその口ぶりや態度はあまりに幼げで、遂にサリーは耐え切れなくなつて僕を抱きしめてくる。ていうか抱き上げてくる。

【本当に何してもいい……？何でもしてくれる……??】

【うん。ディーヴァと仲良くできたらね。】

【……嘘ついたら怒るから。】

そう言つてサリーは口を開くと、僕の唇を奪って触手みたいに長い舌を絡める。そして短く互いに血を与え合うと、互いの感情や記憶を

共有して僕がちゃんとサリーを愛してるか。そして自分がなにをしようとしてるかを単純に伝えてくる。そのせいで僕がしばらく沈黙する事になったんだけどサリーはそんな僕を心配そうな、それは無垢な目で見てくる。

【サリー……どこでこんなこと覚えたの。】

【この身体の元にした人間の記憶……】

【ほんつと……人間って悪影響さいこうだね。できるのかこれ？】

それには僕も身体を流石に作り替えないと……そのためには互いにもっと人間を口にする必要があるな。僕の細胞の移植実験の件といい、どうにかして人間を調達できないものか。いや……今考えても仕方ないか。面前の目標から順番に片付け、その上で考えよう。

こうして僕達は『神を人に近付けるための実験』を始めた。人を滅ぼすために人の性質を模倣する。その本質は人間が僕らアラガミに對抗するためにオラクル細胞を取り込んだのと何一つ変わらない。故にその有用性を僕は心の中で確信していた。この方法は人が神に抗う力を得たように、神が人を滅ぼすための一手になるのだと。

今思えばその手段はあまりに人間寄りで、その中でも一際狂った人間が取る手法だった。なんせ『人を滅ぼす』って目的のために僕達アラガミという種族を『強制的に進化させる』んだから。その結果が後に「人類史上最大最悪の大災害」を引き起こしたのはある意味当然の結果だったのかもしれない。

## 09. 変異（ケガレ）

まず第一の実験として、僕は出くわすアラガミに手当り次第に細胞を投与した。方法は至って簡単で蝕刃でアラガミを斬る際に刃の先から僕の細胞を流出させるだけ。そうすれば切り口からオラクル細胞を僕の細胞が侵蝕し、早くも僕の性質が反映される。

……………そのはずだった。

「グギ…………ギイ…………グゲ……………」

「なんかダメそうじゃない…………？」

「うん。いきなりディーヴァで試さなくてほんと良かったね。」

最初に僕の細胞を投与したのはオウガテイル。その結果は全身が異様な形に変形した挙句に活動を停止した。死因は変異による肉体の強制的な変形と僕の細胞に全身を蝕まれた際の拒絶反応。しつかり全身の細胞が僕の細胞に似たものに変質はしていたものの、こうなってしまうては意味が無い。

……………これで死なくなれば実験は成功と言えそうだけど、問題は成功するのか。その場合問題なく適合できる条件は何なのかと。そこを具体的に突き止めるまでは危なくてディーヴァに投与なんて出来ない。

【だからディーヴァ。そんな怯えなくても大丈夫だよ。】

「……………ガウ。」

言い出しつぺのディーヴァは異形の何かに変異したオウガテイルを見て縮こまって震えていた。そんな今すぐ君に僕の細胞を移植しようってわけじゃないんだから。

一応成功の前例としてはサリーがいるが、この子は僕の身体の中にいた期間が長かったし僕の細胞と神機使いの身体を素体に自分の肉

体を作ったから。同じ手法を他のアラガミに取ることはできない。

反面、そのおかげで一応僕の細胞が他のアラガミにも適合してその学習能力を跳ね上げるって事実も確認できてるんだ。絶対成功しないって事はない。

あとはその具体的な条件を見つけるだけ。道のりは長いが不可能なことではない。

とりあえず動かなくなったオウガテイルには蝕刃を振り下ろし、捕喰する形で霧散させる。口にした感じオウガテイルとしての性質はきっちり残っており、今更ではあるが僕はオウガテイルの能力を使えるようになった。というのも蝕刃からオウガテイルの尻尾の棘を模したものを生やし、振り抜くことで発射できるようになったのだ。小型アラガミのそれと侮りがちだが追撃や搦手にも使えそうな地味に便利な能力である。

そしてこの実験のせいで、僕の細胞がある種のアラガミ殺しの猛毒として機能することも発見されてしまった。これのおかげでアラガミを狩るのが格段に楽になったのはまた別の話として。僕は引き続き出くわしたアラガミに細胞を移植し、その経過を見守る。

次に出くわしたのはコクーンメイデン。結果は死亡。死ぬまでの時間はオウガテイルより短かった気がする。投与対象の耐久値も関係してるのだろうか。

次はザイゴート。なんと適合した。変異の過程で全身が白い肉体に変わり、額の眼が真っ赤になったもののそれ以上の変化はなし。更に前に死なせたコクーンメイデンを捕喰させたところ、その砲撃能力を継承。目からオラクル弾を撃ち出す形で能力の使用を確認した。

結果としてザイゴートの探知能力とコクーンメイデンの砲撃能力、更に卵殻がコクーンメイデンの甲殻で覆われたことで硬化。全身固

い上にブンブン飛び回る狙撃型の小型アラガミが完成した。

神機使いからすれば害悪極まりなさそうだから野に放したが、やはり僕の細胞が適合するアラガミはいる。おまけにそうして学習能力が向上したアラガミは神機使いにとっても相当厄介なものになる。統制できないまでもこういつたアラガミを増やせば、それだけでも神機使いは疲弊するだろう。

それに成功例をこんなに早く発見できたのは予期せぬ収穫だ。ディーヴァに細胞を移植出来るようになるのも意外と時間の問題かもしれない。引き続き実験を続けよう。次の対象はディーヴァと同じ中型種や大型種のアラガミだ。

まずはグボロ・グボロ。適合に失敗。見るも無惨な姿になって死んだために捕喰して処分した。今さら水弾を放つ能力を得たものこのちらを使うことはそう無いだろう。

次にボルグ・カムラン。適合失敗。頑丈なアラガミの代名詞みたいなこいつも一瞬で活動停止した辺り僕の細胞の殺傷力は相当えげつないものと見た。あと口にしたことでオウガテイルの棘の代替品としてこいつの棘を習得。更に槍を思わせるような尾を模倣し、僕の背部に追加した。

次。クアドリガ。こいつも失敗。コアを捕喰したらミサイル撃てるようになりました。ロマン砲。ただミサイルポッドを僕の身体どの部分に模倣したものか。後で考えるところでしょう。

次はコンゴウ。まさかの成功。白い身体に黒い仮面を持つ個体に変異し、もぎ取ったクアドリガの食べ残しを与えたところ背中からミサイルポッドが生えた。寄りにもよってそれでサリーに襲いかかったから処分したけど今思えば勿体ないことをした。神機使いにけしかけたらどれほどの被害を齎したやら。

大型や中型は無理なのかなって思ったけど、二体目の成功個体が出たことで今までの結果をさらに振り返ってみる。うーん……こうして見ると本当に適合の条件が分からないな。確率って可能性は無きにしも非ずって感じだけどあまり考えたくない。もしそうだとしたら成功率が低すぎる。こんなギャンブルにデーヴァを巻き込めない。

【大丈夫……その猫なら行ける。できるぞ。】

「グツ……………!!」

【無責任なこと言わないの。】

もう少し。もう何体か成功個体が出るまで実験を繰り返し、その成功個体の共通点を探し出す。そうすれば僕の細胞が身体に馴染むための条件が見つかるかもしれない。

というわけで実験再開。今度もまたオウガテイル。この前ダメだったが、成功条件が種族という線もあるため一応細胞を移植。結果、なんと一匹目と違って適合に成功した。

ふむ……同じオウガテイルでも成功するやつとしないやつがいる。そうなるややはり確率って線が高いか……？うーん……もう少し見ない事にはなんとも言えないな。

次はサリエル。出くわすなりサリーの邪眼がビキったけどなんとか宥めて僕の細胞を投与。結果は適合。サリーと違って姿はそのままだったけど配色が似たようなものに変異した。

しかし適当に進化を果たして神機使いに被害を与えてくれればと放すと同時。そのサリエルは不思議そうに変異した自分の身体を見た後、小さな口で僕を甘噛みしてきた。

サリーがブチ切れたのは言うまでもないと思う。



【……ツ、ブツ殺してやる………!!!】

「ヴオオ………」

デーヴァが「あーあ」と言った感じに見ているが、サリーは額の邪眼に手を翳すと膨大なエネルギーを収束。同時に腰の羽を広げ、その先の八つの邪眼から何やら赤い粒子のようなものを噴出する。何をやらかすつもりなのかは大体想像ついたから、僕は急いで変異したサリエルから離れた。せつかくの適合個体だったのに。

直後。サリーの額からウロヴオロスウロヴオロスのそれすら上回る出力の巨大な赤黒いレーザーが放たれ、不思議そうにしているサリエルの上半身を跡形なく吹き飛ばした。……威力がエグすぎて身体が固まった。あんなの受けたら神機にんげん使いじゃ骨も残らないぞ。今のサリーってあんな強いんだ……??今のウロヴオロスの能力だよね……??

【フー……!!フー………!!】

【ぎ、サリー。ありがと?助かったよ。……あ”っ。】

まだ怒りの収まらない様子のサリーは僕へと向かってくると、僕の噛まれた箇所箇所に口を当てて思いつきり吸ってきた。しばらくそうやって抱きついてくるから背中を叩いて落ち着かせると、ようやく額の邪眼の光が収まる。……この子にはほんと逆らわないようにしましょうね。

けど案の定というか………今の実験で少しだけ分かったかもしれない。僕の細胞が適合するアラガミの条件。まだ確信は得られないからもう少し試してみるが、サリエルが適合したって言うのは結構なヒントになった。

次はシユウ師匠。適合して墮天種の微妙に色違いっぽい姿になった。さつきから適合したアラガミを見るに、どれも何故か白を基調と

した体色に黒い装飾。そして瞳は赤色と決まった配色に変色している。これは今の僕の姿がその色合いに近いせいだろうか。ディーヴアも僕の細胞に適合したらこういう姿になるのかな。

……そして今のでほとんど確信した。僕の細胞が適合するアラガミの条件。それは恐らく僕がかつて口にし、その能力を既に模倣している種類のアラガミだ。具体的には対象のアラガミを一個体の体積分、或いはそのコアを捕喰したことがあるアラガミなら僕の細胞は適合するらしい。

一体目のオウガテイルが適合に失敗したのに二体目が成功したのは、僕が一体目の亡骸を口にして能力を模倣した後だったからだ。そう考えれば少なくとも今まで適合した個体は辻褄が合う。

「……………なるほど。言われてみればありえそう……………」

「けどそうなる困ったね。」

「グウ？」

つまりだ。この条件が仮に当たった場合、僕はプリティヴィ・マータをその一個体分に当たる量捕喰しなくてはならない。正確にはその全能力を僕が模倣できるまで。プリティヴィ・マータっていつか出くわしたあの群れ以外見てないし、アラガミの中では希少度の高い個体だ。

そうなる僕がディーヴアを死なない程度に捕喰し、再生させてまた捕喰してと能力を学習するまで繰り返す必要がある。サリーとは長い時間一緒に過ごしながら何度も互いを口にし合ってたから能力も模倣できていたものの、いざやろうとするとどうしても結構な時間がかかるんだよな。

しかも僕に捕喰される以上はディーヴアの戦闘能力も結合崩壊で幾らか落ちる。そんな状態を神機使いの襲撃がありえる中で長期間

晒すのはリスクが大きい。

……………それに何より、だ。

【……………は？…こいつを食べるの……………??私がいるのに……………??】

【サリー。ステイ。ステイ？落ち着いて??】

サリーが許すわけないんだよな。サリーの中では相手を捕喰するって深めのキスクらいの認識だから。それを毎日毎日自分以外の相手に長い期間するなんて。僕がサリーに大事にされてなかったらさっきのサリエルの二の舞になってるレベルのブチ切れ案件なんだよね。現にかなり鬼気迫る様子で詰め寄られてる。彼女の前で他の女にやらせてって言うてるようなもんだから当たり前か。

でもサリー。あくまで今回は僕がディーヴァを頂くだけで、最後に細胞を移植するとはいえディーヴァが僕のこと食べるわけじゃないから。ほら、愛ってというのは互いに与え合うから成立するのであって一方的に食ったり与えたりするのは違うと思うんだ。ディーヴァも好きでもない相手に自分の身体を食べられるのは嫌だと思っし、僕とディーヴァの間に愛情とかそういうのは無いから。ね??

【心配しなくても僕の身体はサリーだけのものだから。】

【……………私だけのもの。】

【そう。ディーヴァにも僕の身体を与えるつもりは無いから。だから  
———】

そう言いかけた時点で、サリーが何やら恍惚とした笑みを浮かべているのに気付いた。何やら頬に手を当ててブツブツと呟いてるし、可視化できるほどになにか禍々しいハートが出ている。彼女の独占欲を変な風に刺激してしまったらしい。

【私だけ……あなたの身体を好きにできるのは私だけ……ウフフツ……!!】

【えーと……サリー?その、デイーヴァ食べるの許してくれる?】

【なんていい響き……好きにしていいたなんて。なにしよう……どうやって愛でよう……】

そこまで言っていないからね?と言いかけたけど好き勝手されるのは僕も本意だから黙っておくことにした。前はあんな変態っぽくは無かったはずんだけどなあこの子。猛毒の鱗粉出てるよほら引っ込めて。……殺意剥き出しになるよりはマシだし、こんな感じでいてくれるうちにさっさと済ませちゃおうか。

なにか可哀想なものを見るような目でサリーを見つめるデイーヴァの元へと向かい、僕は横になる彼女の脇腹へと寄り掛かる。そしてどこを食べたもんかと考えていると、デイーヴァは僕の前へと尻尾をフリフリと出してくる。

……ここを食べろということなのだろうか。

【……それじゃ。いただきます——】

「ギャンツ!!」

——噛み付いたら初めて聞くような悲鳴と共に僕の頭上にデイーヴァの前脚が振り下ろされた。反射だったんだろうけど僕の顔面は見事地面に叩きつけられることになった。痛かったんだねごめんね。そういやしっぽ弱いもんなこの子。

ちなみに後から分かったんだけど、お互いにお互いを捕喰し合うのはアラガミの中でも別に愛情表現ではなく普通に加害行為らしい。そもそもアラガミが愛情表現するかどうかはさておき、僕とサリーの行為って特殊性癖に入るのだろうか。

## 10. 新生（ウタヒメ）

【それじゃディーヴァ……いくよ？】

「ガオ。」

結局口にして一番痛まない場所として、ディーヴァの頭部の冠のよ  
うな場所が選ばれることとなった。奇しくもそこはサリーも食いつ  
いていた場所で、悲鳴は上げていたもののあれでもあの子なりに痛く  
ない場所を噛んでたんだなって。いや……単なる偶然か。

【よし。いただきます。】

「ヴツツツ!!」

背中に乗せてもらう形で冠状の頭頂部を口にするとディーヴァが  
身体を跳ね上がらせた。痛かったねごめんね。けどなんていうか硬  
いおまけにひんやりしてて……氷みたいな変わった食感だ。味もえ  
らくあつさりしてていくらでも行けそうな感じ。

その後も再生に支障が出ない程度に彼女を頂き、僕の身体の変化を  
見てみる。さすがに一回じゃ彼女の能力を模倣するには至らないよ  
うで、イメージしたところで氷を発生させることは出来なかった。ま  
……この量じゃそうだよ。やっぱ日にちかけて再生を待ちつつ頂  
くしかないか。

「ヴオオ………」

【いいのいいの。そんな慌てちやいないから——】

僕の様子を見て申し訳なさそうにするディーヴァに言いかけた時  
だった。唐突にそれは起きた。

突如として誰かの記憶が頭に流れる。凍てついた街に吹き荒れる吹雪。そしてヴァジュラの群れと向かい合う誰か。

これは……感応現象？僕とサリーが互いを口にした際、相手の思考や過去を垣間見ることができるあの……でも、あれは神機使いを口にしたアラガミにしか起きないものだと思ってた。神機使いや神機使いを素体としたサリーを口にした時しか起きたことが無かったから。

ディーヴァが今までに口にした神機使いの記憶……なのか？あの街はロシアとかそっちの方だろうか。続きの見たさにディーヴァを口にしたかと思っただが、再生するまでちゃんと待とう。残りの食べ足りない分はサリーで補えばいい。さつきからすごい相手して欲しいからこっちは見てるから。

幸いにもディーヴァの再生能力は高かった。やはり口にした部分が良いのだろうか？翌日にはすっかり元通りに頭部を再生させ、僕は再び頭の冠を口にした。

するとまた感応現象にも似た何か起きた。今度の景色は戦いの後といった風景。相変わらず凍てついた街の中ではあるが、辺りには仲間らしい神機使いがバラバラにされて散乱している。

この記憶の持ち主の絶望が伝わるようだった。勝鬨を上げる最後のヴァジュラを前に孤立無援。酷い傷を負っているのかやたらと視界が揺れる。既に記憶の持ち主は戦える身体ではないらしい。にも関わらず、その神機使いはなお立ち向かう。

全身の傷口から血を撒き、獣のように狂乱したまま咆哮を上げ、片手で鉄の塊のような大剣を振り回す。視界が真っ赤になるほど怒り狂い、我を忘れたようにヴァジュラに襲いかかる。その様は喪失感を

かき消そうとしているようにも、仲間を守れなかった自責の念に駆られて突き動かされているようにも見えた。

「刺し違えても殺す。」そんな怨嗟に塗れた言葉を撒き散らしながら。

残念ながら記憶はそこで終わった。あの神機使いの捨て身の特攻の結末がどうなったかは明日の楽しみとして、僕は仲間を……大切な誰かを失ったら、あんな風に壊れてしまうのかな。一度失いかけた事があるから考えたくないけど……でも気持ちは分かる気がする。あの時サリーが助からないってなったら、多分僕も同じことをした。

そのせいかな。この記憶の持ち主だった神機使いがとても哀れだと思っただのは。神機使いならどう死のうが知ったこっちゃないのに。それとも既に死んでるから同情できるのか。

……考えるだけ無駄だな。意外と僕もセンチメンタルな部分があったんだって事にしよう。偶に忘れそうにもなるが、僕もかつては人間だったんだ。こういうくだららない部分は僕の中に僅かに残った人間らしさってやつなんだろう。

「……………人間？誰が？」

「あれ。サリー知らなかったっけ。僕が元人間のアラガミだって。」  
「えっ。」

サリーがびっくりしたように僕を見つめてきた。僕のこととは何度も口にしては感応現象で思考とか読んてるからてつきり知ってるかと……でもそうか。僕らのこの感応現象って過去までは見れないのか。それとも僕がもう人間だった頃の事を殆ど忘れてしまっているせいかな。

とにかくサリーにとっては初耳だったみたいで、珍しくサリーが浮いたまま硬直していた。その後すぐに僕のことを抱きしめてきたけど。ただその目は不安そうで、僕のことを離すまいと抱きしめる腕に

力が入る。

【じゃあ……もしかして、人間の暮らしに戻りたいって思ってる……??】

【んーん。別に。】

【ほんと……?どこにも行かない……??】

確かに僕はもう何人か人間を口にしてその性質を完全に模倣すれば姿形に至るまで人間のそれになれる。でも、このアラガミの身体になつて最初に優しくしてくれたのはサリーだから。

そのサリーを放つて人間として生きる気はないし、サリーを害する以上は人類には絶滅危惧種になつてもらうつもりだよ。言うなればこの神機使いとの戦いも全てはサリーのためのものなんだから。サリーを置いて人間側に付くなんてのは死んでもない。

【だからずっと一緒だよサリー。僕はどこにも行かないから大丈夫――】

【~~~~~ツツツ♡♡♡】

【ちよ、サリー? 苦しいよ?? あの………】

思いつきりがばーつて押し倒される形でサリーは僕の身体に覆いかぶさり、ずつしりと体重をかけて顔を近づけてくる。僕の言葉はまるで聞こえてないようで……こうなっちゃうと手が付けられないから、されるがままに貪り合うしかない。

そのせいでその日のデューヴァの捕喰は終わりを告げた。冠の欠けたデューヴァが何やらすぐく不満げに僕のことを見つめていた気がしたが多分気のせいじゃないだろう。ごめんね? 目の前でほんとごめんね???

代わりつちやなんだけど昨日さんざん僕のことを頂いたせいとか、次



の日はサリーの機嫌がめちやくちや良かった。何やら嬉しそうにニコニコしながら僕がディーヴァを捕喰するところを見てるし。

幸い今日の捕喰でディーヴァの能力は学習できると思うし、そうなれば僕の細胞を移植するための条件も整う。これでディーヴァも僕やサリーと同じ存在に変化できるわけだけど……

【ディーヴァ。行くよ？同じ場所ばつかごめんね。】  
「オ”ッ。」

すっかり定位置と化した冠を捕喰し、咀嚼する。そうすると同時、再び僕の頭の中に存在しない記憶が流れる。

写った景色は神機が突き刺さって息絶えたヴァジュラと、捨て身で勝利を収めたその神機使いの姿。しかし勝利こそ収めたもののその姿はあまりに痛ましく、同時に既に手遅れであることを記憶の持ち主自身が悟っていた。

何故なら神機使いが押さえる右腕は手首から先がなかった。神機使いを人たらしめる赤い腕輪が何処ぞかへと失われていた。

腕輪を失った神機使いの末路なんて決まっている。直に彼女の身体は外傷とは異なる激痛に苛まれ、同時に肉体の変質が始まる。

「ふうう……っ、ふう………!!ぐあ”あ………!!!」

その叫びはきつと痛みでなく絶望の叫びだった。ここで死んでいればどれだけ楽だったのか。ただただ死を渴望するその祈りは天に届くことも無く、寄りにもよってその姿は最悪のものへと変わり果てていく。自らとその部隊を壊滅させた最後の怨敵である、あのヴァジュラに似通ったそれへと。

真冬の街の中で生まれた氷の女神。化け物としてこの世に遺され

た悲哀の獣。その身体に明確な意識と理性が残ったのはもはや呪い  
としか言いようがないだろう。

僕もよく知るそのアラガミは寒空を仰ぎ、凍てつく街の中で咆哮を  
上げた。無機質な顔で鉛色の空に泣き叫んでいた。誰にも届かない  
獣の声で「たすけて」って。

……薄々分かってはいた。分かってはいたけど記憶が流れ終  
わった後に僕は彼女のことをそっと抱きしめたよ。

【ディーヴァ……これは君の記憶だったんだね。】

「グウルル……」

ディーヴァが僕に顔を擦り寄せて来る。元神機使いにして最初の  
プリティヴィ・マータ。彼女が僕の元へとやってきたのは一体何の因  
果か。僕と彼女は同じだったわけだ。

けど感応現象で記憶が流れてきたってことは、この子はまだ自分が  
人間だった頃のことを覚えているのか。……もしかしてこの子が僕  
やサリーみたいな存在になるのを望んだのって、元に戻りたがってい  
たのかな。ふとそんな考えが頭を過るが、当のディーヴァは不思議そ  
うに首を傾げている。

だってディーヴァは僕と違ってこの世界でも人との繋がりとかがあ  
るし、元は神機使いなんだから。他の神機使いの仲間とかもいるだろ  
う。ていうか今思い返すとよく僕と一緒に神機使いと戦ってくれた  
ね??下手すると知ってる人とかいたかもしれないのに。

【……それでなんだ。こいつが人間を殺せない役立たずなの。】

【うん。……神機使いとか食べないもんね。この子。】

デューヴァはまだ人だった頃の記憶に囚われて人の暮らしに憧れている。無理もない。僕だってそういう時期はあったし、サリーが居なかったら未だに人間と共存するための方法を探していたかもしれないんだから。

うーん……困ったね。今まで普通にデューヴァを戦力として数えていたけど、よく考えたら最初からこの子には人類滅亡に加担する理由がないんだよな。僕がサリーの事があるから滅ぼしたいだけで、むしろデューヴァは人間との暮らしに混ざりたい。ていうか僕の血で言葉を得たら人間側に付くかもしれない。困ったことになった。

【デューヴァ……君はどうしたい？】

「ガオ？」

【僕は君の意思を尊重するけど……人間に、戻りたかったりする？】

デューヴァにそう尋ねてみる。……もしそうだとしたら一緒に戦ってなんて無理強いは出来ない。仮にそれで敵対する事になったとしても、僕だってそう願った事はあるんだから。

訳も分からずアラガミにされて、荒野に解き放たれて、サリーに会うまで人間に戻りたいってずっと思ってた。そして今はデューヴァの願いを叶えてあげられる。叶えられる願いを止める権利は僕にはない。

現に、デューヴァは僕の問いに対して無言で頷いた。それが彼女の本音だった。

【……分かった。じゃあ約束通り、僕の血をあげる。】

「クウン……」

【いいんだよ。君は君の生きたいように生きて。……君がそうしてくれたように、今度は僕が君を助けてあげるから。】

僕が右腕を変質させて蝕刃を形成すると、ディーヴァは不思議そうに首を傾げる。そんなディーヴァの額に僕は真つ直ぐ蝕刃を突き立てた。同時、その鋒から僕の血を流出させてディーヴァの体内へと細胞を与える。

「グウ……ッ、ヴウウ………!!!」

「ディーヴァ……今までずっと一緒にいてくれてありがとう。」

蝕刃をディーヴァの頭から引き抜くと同時、ディーヴァの身体が変質を始める。全身から漏れる冷気は僕の血の力によって赤く濁り、黒い体毛は色素を失ったかのように純白のそれへと変わる。反して身体の内側にある甲殻やマント状の器官は大型化して黒い鎧のようなものに変形。欠けた冠も元通りに修復されると、その表面に黒い模様のようなものが浮かび上がる。

そんな彼女を僕は抱きしめ、無事に変異を終えられるようにと祈っていた。苦しそうな声をあげている辺り、細胞が身体を侵蝕する際に苦痛が伴うのだろう。そこら辺までちゃんと検証できなくてごめんね。

「フヴウ……!!グウルルル………!!!」

「ディーヴァ?大丈夫?痛い?」

「グウヴウウ!!!」

苦しそうな声を上げるディーヴァに呼びかけ、少しでも痛みが紛れるようにって頭を撫でてやる。けどそうしていると、ディーヴァは不意に僕に額を押し付けてきた。

同時、僕の頭の中に再び彼女の記憶が溢れ返る。

それはアラガミとなった彼女の記憶。かつての神機使いの仲間と出会った際のものだ。その出会いは当然感動の対面とは行かなかつた。かつての仲間はディーヴァに無数の銃弾を浴びせ、幾度も刃を振

り下ろして彼女に立ち向かった。未確認のアラガミに出会えば当然の対応だ。

それでもディーヴァはどこかで信じていたのだろう。かつての仲間ならもしかしたら自分だと分かってくれるんじゃないかって。そうじゃなくても自分は危険なアラガミじゃないって。戦う意思はないと知らせたかった。

だからディーヴァは、そのかつての仲間達に一切の反撃をしなかった。いくらその身が刃に裂かれ銃弾に撃ち抜かれても。雪が自分の血で赤く染まっても、ディーヴァは一切抵抗をしなかった。

結果として神機使いの攻撃が止むことはなかった。どころか彼女が自分達の攻撃に怯んでると勘違いし、より一層攻撃は激しくなった。さすがのディーヴァもこれには命からがら逃げ出し、同時にその時ようやく理解した。もう自分の居場所はどこにもないのだと。

そうして流れ出たディーヴァの血——オラクル細胞は、やがて大気中のオラクル細胞にプリティヴィ・マータという個体を記憶させた。それ以来ロシアでは野生のプリティヴィ・マータが発生するようになったものの、肝心のディーヴァはもうその地に戻ることはなかった。

自分のよく知る相手に酷く痛めつけられ、ディーヴァはこの時に人間との共存を諦めた。諦めてなお神機使いや人間を見つけるとその身を隠して争うことを避けたのは、僕みたいに人間に敵意を抱けなかったから。分かっているだけこの子は心根が優しくすぎるんだ。

——しかしそれも僕と会った今は違う。

リンドウさん達に挑んで返り討ちにあった僕が助けを求めた時、この子は群れの中で真っ先に駆けつけてくれた。そして僕を見るなり

一目で理解したらしい。僕が自分と同じ『成れ果て』であることを。

だから僕のことをあの場から救い出し、サリーと再開するまで面倒を見た。力の使い方も覚束無い僕を死なせないようにずっと守ってくれていた。彼女には僕が非力な子どもみたいに写っていたようで、かつての仲間を喪った経験が余計にそう駆り立てていた。

それから今に至るまでは知つての通り。デューヴァは僕とサリーのことを引き続き守り、必要であれば時には神機使いとの戦いにも手を貸してくれた。本当は嫌だったろうに、それ以上に自分と同じ境遇の僕が大事だったから。僕が大事にしてるサリーのこともそれは一緒に、邪険にされながらも面倒を見てくれたのはそういう事らしい。

そして、それはこれからも一緒だと。そう感応現象で告げた時点で『それは起こつた。』

「オ”オオオオオ!!」

僕が抱きしめるデューヴァが空に向けて咆哮を上げた。直後、彼女の足元から無数の赤い結晶が発生する。それは紛れもなく新生したデューヴァの生み出したものであったが、どうにも様子がおかしい。冷気を帯びたその結晶はデューヴァの身体に纏わりつくようにして巨大化している。これ、もしかして……

「——適合失敗みたいね。残念……」

「そんな……デューヴァ!!しっかりして!!?」

「とにかく離れて。あなたも巻き込まれる。」

サリーにデューヴァから引き剥がされ、ほぼ同じタイミングでデューヴァの全身が包まれて巨大な赤い結晶の塊と化した。

そんな……僕の検証が間違っていたとでも言うのか……？だって、  
デューヴァは途中までちゃんと適合してて……姿だつてちゃんと変  
異し終えた。なのにこんな姿になって……失敗？この姿が??

……いや。サリーの言葉で焦ったが多分違う。むしろこの巨大な  
結晶の塊は繭か卵のように見える。現に中央では何かの影が蠢き、結  
晶の塊がパキパキと音を立てている。

大丈夫……失敗じゃない。サリーが気のせいかな残念そうな顔して  
るけど適合には成功している。デューヴァはきつと、あの中で別の形  
に自分の姿を作り替えているんだ。サリーや僕がそうしたように。  
さっきの感応現象といい、早速能力を使いこなしてるんだ。

そうして彼女が結晶に身を包んでしばらくした後。唐突に結晶の  
塊が弾けるようにして砕け散る。結晶の内側に内包されていた冷気  
が吹き荒れ、ようやく変化したその姿が露となる。が……

「……………デューヴァ……なの??」

その姿を目にしてサリーがしばらく言葉を失った。僕も半信半疑  
でそう呼んだら、「はい。」と返事が返ってきた。

それはアラガミって呼ぶにはあまりに異質だった。腰まである銀  
色のふわふわした髪に雪のように白い肌。そして金色の瞳。右腕は  
手首から先が欠けているものの、一糸まとわぬその姿は『人間』の女  
性を限りなく完璧に模倣していた。

「ごめんなさい。獣の姿だどう足掻いても言葉を口にできなくて。  
でも……ようやくよくご主人様達とお話できますね。」

そう言って照れ臭そうに笑いながらデューヴァは右腕を結晶で包  
み、義手のようなものに変質させる。その姿の変化にぼくの頭までも  
が軽くフリーズする。

でも僕が固まってる、デューヴァはこちらに真っ直ぐと歩いてくる。彼女が歩く度に踏んだ場所が凍てつくようにして赤い結晶に覆われ、彼女の素足を傷つけないよう赤い氷の華みたいに固まる。そして僕の元まで来ると、デューヴァは結晶で出来た右手で僕の頬を撫でてきた。

「心配しなくてもずっと一緒ですよご主人様。ご主人様やあの子だけじゃ戦力が心許ないでしょう?」

「デューヴァ……でも——」

デューヴァが僕の言葉を遮るように右手の人差し指を口に当てる。今まで想像もしてなかった彼女本来の振る舞いに思わず黙ってしまった。

「……フレイ・アイアンハート。私の本当の名前です。」

妙に耳に残る声で彼女はそう笑う。……やっぱり。彼女の今のこの姿……これは神機使いだった頃の姿なんだ。心底嬉しそうな笑顔にやはり胸が痛む。多分ずっと、こうなりたがってたんだって。これが本当の彼女なんだって。

「あ。でもご主人様がくれた歌姫デューヴァって名前も好きです。呼びやすい方で呼んでください。」

「……ねえデューヴァ。本当にいいの?その姿なら元の生活に戻れると思うよ?せめて僕が人間を滅ぼすまで……」

「いいんですよ。私、ロシア支部では評判よくありませんでしたし。気にしないでください。」

気遣いなどの感情は一切なさげにデューヴァはそう返す。この姿に戻れるようになって一緒に歩いてきてくれるって。でもこうして人類滅亡の手法が整った今、これからは本格的に神機使いとの戦い



が始まる。そうなればディーヴァの大切だった人とかも滅ぼす事になる。それをディーヴァは間近で見るとてことなんだよ？

「大丈夫ですって。そういう人は大体私の分身みたいなののご飯になつてますから。」

【えっ……】

さらつととんでもなくエグいこと言ったなこの子……そうか。じゃあもう人間の元に戻ったり、人間を守る理由はないって事でいいのかな？こんな完璧な人間の姿になれたから戻りたいんじゃないかって思ってたけど……

「もう一度この姿に戻れた。それだけで私は十分すぎるほど幸せなんですよ。」

【そ……そう？なら……】

「私は今日、あなたにこうして救われたんです。ちゃんと恩返しさせてください。」

ディーヴァが僕の背に腕を回してそう笑う。……分かった。じゃあ一緒に戦おうね。僕とサリーと君で。元神機使いが一緒についてきてくれるならそれはとても心強い。お言葉に甘えてこれまで通りにいっぱい頼りにさせてもらおうよ。

ね？サリー。

【……………】

【サリー？……ねえ、なんか額光ってない？】

【ディーヴァ……？ちよつとベタベタし過ぎ……!!】

そんなかなりドスの効いた声と共に、よりにもよってあのウロヴァオロスにそれに匹敵する極太レーザーが額から放たれた。……いや



「グアアルルルルツツ!!!」

.....仲良くて嬉しい口くる?!

## 11. 狼煙（サイン）

あまりにこれまでと異なるディーヴァの変異。その結果を見届けて今回は幾つかの発見があった。

まず何より大きいのが、人間の性質を完全に模倣すれば限りなく人類のそれに近い姿を模倣できると証明されたこと。今まではその存在自体が推測でしか無かったものの、こうして実例を確認できた以上は「人間に擬態するアラガミ」を戦力として一考できる。これは思いっくだけでもかなりの悪さができる。

そしてこれらの「人間に擬態するアラガミ」は人間だった頃の記憶すがたを明確に保持し、理性が残っていれば人間を口にしていなくても変異可能ということ。これが一番想定外の収穫だった。まさか適合して即座に人型になるとは思ってたなかったから。

「そういう意味ではサリーも人型になれたりするんじゃない？ 身体に素体にんげんの記憶って残ってるんだよね?？」

「なれるけど……何もかも劣る人間の姿になる利点がない。胸も今の姿の方が大きい。」

「サリーの素体にした人間は貧相な身体でしたからね。ご主人様って巨乳派みたいですよし。」

素体にした神機使いの死体蹴りやめてあげて。なんで今の話から乳の話に行くんだ。ディーヴァも自分のおっぱいを手で持ち上げてドヤ顔してるし。……うん、改めて見ると人間だった頃のディーヴァも大概すごい身体してるな。

おっぱいや太ももでかいのもそうなんだけど、アラガミの姿の僕とそんなに身長変わらないのを見ると多分二メートル近く身長あるんだよね。しかも身体付きこそ女性的なもの、身長と相まって並の成人男性よりがっしりしてて強靱な体格してるから。

一見するとむっちりした身体つきだが、お腹周りの筋肉を見るに全身が凶器みたいなモンスターボディなのだろう。……アラガミ化してプリティヴィ・マータになったのが納得できるようだ。マジで肉食獣みたいな身体してる……バスター片手で振り回すだけあるわ。

「もうご主人様……じっくり見過ぎですよ。セクハラですか?」

【全裸で歩き回ってるデューヴァも悪いと思うんだけど。服とかは着れなかったのか……】

「さすがに現物見るか口にしないですね。……人面虎いっもの姿になりましようか?」

あー……そっちのいいかな。目のやり場に困るのもそうだけど、不意に神機使いとエンカウントしても困るから。というのも出来ればだけど、フェンリル側にはデューヴァの擬態能力は知られたくないんだよね。人の姿で色々してもらう場合、事前情報ない方が対策されにくいからさ。アラガミが人間に擬態するって分かったらあっちも警戒するだろうし。

「それは同感ですね。出来れば私とサリーの言語能力も隠したいくらいですけど……」

【それならひとついい手段がある。……サリー、ちよつといい?】  
【??】

僕にデューヴァを近づけまいと抱きしめるサリーに意識を向け、目を閉じる。そして頭の中でサリーの名を呼ぶと、サリーはびっくりしたように身体を跳ね上がらせた。……うん。いけるね。

「えっ?どうしたんですか??」

『感応現象の応用だよ。互いに思考や記憶を伝達できる。やり方も今教えるからね。』

「うわっ……なんかすごい変な感じ。」

元神機使いのディーヴァを口にした際に手に入った能力なんだけどね。互いの身体の一部を持つもの同士。つまり血肉を分け合った者の間でなら、いつでも遠隔で感応現象を引き起こせる。僕の固有能力だから能力会得後に血を与えたディーヴァはまだしもサリーは出来ないから。無言でサリーの唇を奪い、口の中に僕の血と共に能力を分け与えた。

『身体分け与える度にイチヤつきやがって。バカツプルめ。』

【あ。そうそうそんな感じ。……中々に気持ち悪いなこれ。頭に声が響く。】

『すごい……これで離れてもお話できるね……♡♡♡』

そういうこと。サリーやディーヴァが既に言葉を話せるって他に、互いに離れた状態でも意思疎通や情報の伝達ができるから。人間の通信技術に近しい能力とも言えるわけだね。これで万が一神機使いとの戦いで分断される事になっても、互いに状況報告が可能となる。あとディーヴァは獣の姿でも僕らと明確な意思疎通ができる。

『……あ。本当ですね。え、なにこれすごい便利。』

【獣が喋る必要は無い……】

『喧嘩ですか？ねえ喧嘩売ってますよねご主人様?!』

いつの間にか普段の姿になったディーヴァが僕へと感応現象を引き起こしてくるが、サリーは聞こえてないらしい。……そういえばサリーはまだディーヴァに自分の身体の一部を与えてないから通信できないのか。あとで血でいいから与えておいてね。こら嫌そうな顔しない。血に毒とか混ぜるのもダメだからね??

……とにかく。この能力なら今後僕が口にし血を分けたアラガミにも指示を与えて使役できるはず。ディーヴァを見るにアラガミが言語を口にするにはある程度人に近い形が必要みたいだけど、これで

獣型のアラガミともある程度は意思疎通が取れる。この感応現象がどの程度離れていても伝達できるのかはまだ知らないけど、理論上アラガミを組織的に運用できるようにもなったというわけだ。

こうなれば神機使いとの戦いの準備は殆ど万端と言える。いつでも僕らの戦争は始められる。

【戦争……遂に始めるんだ。】

【本格的な開戦とはまだ行かないけどね。サリー、もしかして緊張してる？】

【……ちよつと怖い。私は戦争つてものが分からないから……どうすれば終わるの？】

サリーが心配そうに尋ねてくる。勝利条件は至って単純で、世界各地に存在するフェンリル支部とフェンリル本部をひとつ残らず制圧すること。人類全てを殲滅しなくてもフェンリルが無くなれば人類は僕らアラガミに対抗する手段を失う。こうなれば人類が絶滅種となるのは時間の問題だ。

ただ問題はフェンリル支部の攻略難易度だ。戦力の程までは把握してないものの、各支部の周辺は共通してアラガミ防壁とかいう障壁に囲まれている上には尋常ではない数の神機使いが巡回している。おまけに各支部は連絡を取り合っているから一箇所を攻めれば全支部が臨戦態勢に入る。

そうなれば支部に攻め込む度にあちらには僕らとの交戦データが揃い、後の支部になればなるほど向こうの対処方が確立されて攻略は困難となる。そう考えると攻め落とす順番は大事だと思うんだ。具体的には厄介な支部から優先的に落とすべきなんじゃないかって。

……つまり最初の攻撃目標とするべき場所。それは言うまでもなく極東支部だ。現状でもあそこの神機使いは頭一つ抜けて厄介だ

し、その上に経験を重ねればさらに複数化け物じみた使い手が生まれるおまけ付き。これ以上手がつけられなくなる前に潰しておきたい。僕はそう思うんだけど……………

【ディーヴア。元神機使いとしてはどう思う?】

『んー…………確かに極東の連中は頭おかしいですけど、最初に落とす必要はないんじゃないですか?』

【ほう。】

他にもヤバい支部があると。フェンリルの仔細については僕より元神機使いのディーヴアの方が詳しいだろうから意見は尊重するが、極東よりヤバい場所とかあまり考えたくないな。どこだその極東よりヤバい支部って。

『ロシア支部ですよ。前にあそこにいた時小耳に挟んだんですが、あそこでは剣と銃を切り替えられる新しい神機が開発されてるらしいです。』

【!!……………そうか。新型神機使い……………】

『私がいたのも結構前だから今ではもう完成してるはずですよ。実戦配備にまで至ってるかはさておき、世界各地の支部にこの新型神機が配備されたらそれこそ最悪ですよ。』

そうだね。完全に失念してたけど、今ってまだ新型神機使いがいないんだよね。多分だけどソーマの年齢を見るにアリサも新型神機使いになってないし、世界中で見ても今はまだ新型神機を扱える人材は存在しないはず。

その使い手になりうるアリサと新型神機の研究を一任するロシア支部をまとめて葬れば、新型神機使いが実戦投入されるのを大幅に遅らせることが出来る。確かに最初にやる価値は十分にある。

『それにロシア支部ってフェンリルの支部の配置を考えるとちやうど



真ん中に当たるんですよ。ここを押さえれば支部間での補給路をある程度潰せます。』

【なるほど……立地的にも好都合と。ついでにここを拠点に戦力を展開すれば世界各地の支部に最短で攻撃もできるわけか。】

『そういうことです。そうすれば順番に攻略なんて言わずに全支部への一斉攻撃も可能ですよ。』

全支部とまでは行かないにしても、同時攻撃が選択肢に入るのは大きいな。なんせ隣接した支部の間で派遣されるであろう援軍を事前に阻止できる。あちらからすれば僕がどこの支部を狙うかの攪乱にもなるし、各支部に対応せざるを得ない程度の攻撃をかけ続ければ支部間での連携にも支障が出る。

こう見ると落とした際の損害も旨みも大きい。そのくせして神機使いの質は極東に劣ると来た。戦争の勝手が分からない僕らにとっても初陣の相手としてはこの上なく最適と言える。

『あ。でもロシアは神機使いの数は極東よりずっと多いですからね？支部を直に叩くつてなると何部隊も同時に相手することになるはずなのでそこだけは留意してください。』

【さすが畑から兵士が取れる国だね。……分かった。色々教えてくれてありがとうね。】

『んふふ。もつと褒めてください！』

顔を擦り寄せてくるディーヴアの頭を撫で、望み通りに抱きしめてわしわししてやる。……ディーヴアに言葉を与えたのは正解だったな。この戦いにおいて元神機使いの意見は非常に頼りになる。多分だけど戦術や戦略に関して彼女の方がずっと詳しいし。

神機使いの人数が多いのはあそこが重要な拠点だと向こうも認知してるのか、それとも広大な土地由来の性質か……実際に防衛戦とも

なれば必要なのは個々の質より兵士の量だ。「戦いは数だよ兄貴」と偉い人も言つてた通り、ロシアは一見攻略は困難にも見えるかもしれない。

しかし僕にとって質の低い神機使いが大量に存在するというのはこれまた好都合。なんせ極東の連中よりも簡単かつ大量に人間を口にできるんだ。そうすれば僕の身体にも十分なほどの人間の情報が累積する。

そうなれば初回で勝てなくてもなんら問題はない。人の姿を模倣し内部に侵入さえ出来るようになれば次からは『破壊工作』って選択肢が出てくる。襲撃に際して人間に擬態し、一般の避難民に混ざってフェンリル支部内に侵入できればその時点でこちらの勝ちだ。数がいくら多かろうが関係ない。

『あ。それはいい考えかもしれませんがね。普通に戦うより安全だと思いますし、中に入れば私が案内できます。』

【……そっか。君はロシア支部出身だっけ。】

『はい。正直ロシアの攻撃を進言したのはそれもありますよ？ご主人様ほかのフェンリル支部の場所分らないでしょう？』

……言われてみればそうですね。すっかり失念してたけどフェンリル支部ってどこにあるか知らなかったね。攻撃目標の場所も知らないのによく戦争がどうこう言ってたなオイ。最初から攻撃先に選択肢なんてなかったんだ。デーヴァが居なかったら普通に詰んでたな……

『本当ですよ。この分だと道案内から侵入ルートまで私が計画した方が良さそうですね？』

【あー………お願いしていい？】

『しようがないご主人様ですね。サリーも今回は私の言うこと聞いてもらいますよ。さつきから全然話理解できてないでしょう？』

ちらりと見るとサリーが無言でとても不服そうに頷いた。暗にバカと罵られてるのにこの反応な辺り本当に分かってないらしい。

まあそもそも本来アラガミは知性すら持たないんだし、本能と能力に任せた戦闘は行っても組織を組んでの行動や計画的な攻撃なんかはしない生き物だから。それが普通の反応なんだよ。元人間の僕らが異常なだけで。

「…………戦争って難しい。難しいこと考えるの苦手かも…………」

「いいのいいの。本当なら戦争なんて知らない方がいいんだから。」

「ごめんなさい…………あんまり役に立てなくて……………」

そんな事ないよ。そもそも本当ならサリーやディーヴァを巻き込む気はなかったんだ。前みたいにサリーを失うのが嫌で人類殲滅を決意したんだから、二人には安全なところで人間が滅びるところを見ていて欲しかったのに…………人手があまりに足りないのと僕が不甲斐ないせいで二人を戦いに巻き込んでしまうんだから。その点だけは本当に悪いと思ってる。

「…………そんな事ない。私もあなたに牙を剥く人間は許せないのは同じ。人間と戦うのは嫌じゃない。」

「そっか。ありがとうね…………やっぱサリーは居てくれるだけで十分だよ。」

「そ…………そう? そう言ってくれと嬉しいけど…………やっぱちよつともどかしい。なにか私に出来ることない…………?？」

サリーは地面を何やらガリガリやつてるディーヴァに目をやり、僕にそう尋ねてくる。別に無理になにか役に立ってくれる必要なんて全然ないのに…………多分ディーヴァに対抗意識を持っているんだろう。ぶつちやけこうやって抱きしめてるだけで幸せになれるんだから本当にそれで十分なんだけど…………そう言っても納得しないよな。

【あ。……じゃあサリー。ひとつお仕事頼まれてくれるかな？ちよつと大変な仕事なんだけど……】

【なに？なんでもする。支部とかいうやつの一つや二つくらい倒してくる。】

【んーん。ちよつと口開いて。】

そう言つて口付けを交わすと共に再び僕の細胞を与え、サリーの中に能力を渡す。僕がディーヴァや他の実験体アラガミにやつた、『既存のアラガミを僕と同じ存在知性持ちに変える』能力だ。

この能力を用いて、サリーには他のアラガミを僕の細胞で汚染してきて欲しい。サリーなら飛べるから機動力もあるし、毒の鱗粉の代わりにこの赤いオラクル細胞を散布すればそれだけで吸引したアラガミを変質させられるはずだから。ロシア攻略の目処が立つまでの間にサリーには『頭数』を用意してもらおう。

【……分かった。それならできる。】

【もし神機使用とか見かけたらすぐ教えて。他にも危ないって思ったらすぐ逃げてくるように。】

【うん。……ディーヴァ、私がない間はその子をよろしく。手を出したら後で殺す。】

腰の翅を拵げ、赤黒く汚染された細胞を撒きながらサリーが飛び立つ。これで兵力の面は解決できるはず。本当なら支部に向かう途中で目に入ったアラガミを片っ端から従えるつもりだったけど、こっちのが効率的に頭数を揃えられる。

あとはある程度白いアラガミが出来上がったら僕の感応現象で意思疎通ができるか試してみるとして……それで問題が無ければひとまず戦略と戦力の面の準備は整う。

そしたらあと必要なのは僕自身の戦闘能力か……サリーが生み出した白いアラガミが従わずに敵対した場合、それらを纏めて処刑するだけの力は準備しておいた方がいい。そうでなくともこれから戦争が始まる以上、戦闘能力はいくらあっても困らない。

幸いにもデীবアの実験過程で僕は墮天種を除く大半のアラガミは口にした。それらの能力を統合した上で全身に反映し、現在の姿に上乘せする形で身体を再構築する。

後頭部にブリティヴィ・マータデীবアのマントを思わせる器官を髪のように生やし、両肩にはウロヴオロスの触手とボルグ・カムランの尾先の鎌を合わせたものを六つ形成。マントのように並べて展開する。

右腕の蝕刃は最近口にしたバスターやチャージスピア的能力を使用可能にするだけだからそう変化はないが、左腕の手の甲の邪眼はサリー同様にウロヴオロスのそれを参考にして変質。掌の口の中には可変機構としてクアドリガとグボロの性質を併合した砲門を増設する。

そして腰周りに存在する蝶の翅を模した器官はその表面を軽くも頑強なシユウの装甲で覆い、コンゴウの風力を推進力として噴出する噴出口を設けることで可動式のスラストに変える。これで単純な機動力の強化だけでなく、今まで比較的脆弱だった腰周りの強度を補強できた。

しかし……左手の甲の邪眼で構築の終わった自分の身体を見るが、流石にキモいな。色調こそ黒と白で統一されているもののその姿はあらゆるアラガミの身体的特徴を継ぎ接ぎのように継ぎ足したもので、ヴイナスも裸足で逃げ出すレベルのキメラっぷりだ。

この上からシユウやボルグ・カムラン辺りの鎧で全身を覆えば少しは見た目もマシンになるだろうが、せっかく上げた機動性を重量で殺しては元も子もない。硬さよりは機動性を取りたいしこれで行こう。

『うわ。ぐ主人様またキモくなりましたね。イメチェンですか？』

【急に喧嘩売ってくるじゃんディーヴァ。攻撃の算段は立った?】  
『大体はですけどね。あとはサリーが連れてくる戦力次第……あ”っ  
!?! チクチクしないでツツツ』

肩から生えた槍付きの触手でディーヴァをつつき回すとディー  
ヴァが前脚で頭を抑えて蹲る。そうだね。サリーから通信があるま  
ではこのまま待機だ。サリーが僕のこの姿を見たらなんて言うかな。  
あの子は人間の感性とか分からないから何も言わなそうだけど  
……………

【……………ていうかずっと気になってんだけどさ。サリーって僕のどこ  
が好きなんだろうね?】

『ねえこいつ一人でも惚気け始めましたよ。なんですか? 独身に対す  
る嫌がらせですか?? 訴えますよ??』

【どこにだよ。ごめんって。】

グルルルルってあからさまに不機嫌そうにディーヴァが唸り声を  
あげる。だって不思議じゃない? 僕って容姿もグロいし性格もそん  
な良くないし、はつきり言って好きになる要素なくない?

サリーの愛情を疑うわけじゃないんだけどさ……馴れ初めだって  
僕が飢え死にしそうになってた時に彼女を食料にしようとしたのが  
始まりだし。こう文章にすると本当に意味わからないね? なんでこ  
れで僕のこと好きになったんだろうね。

『そんなの知りませんよ。でも注いだ愛情に応えてくれる異性は実際  
愛しく感じるものですよ。ご主人様とか正にそれですから……正直  
あの子が羨ましいです。』

【……………ディーヴァ。人間だった頃になんかあった? 大丈夫??】

『自分のために人類滅ぼすとか言われたらそりゃ好きにもなります  
よ。私なんて何回彼氏に逃げられたかも分からないのに……』

待って冷氣。冷氣漏れてるから。ごめんね扱らなくていい傷扱ったみたいだね??ダメだこの子思ったより闇深いかもしれない。迂闊に触れるとこっちに飛び火するね。今まではサリーに比べれば無害な部類と思ってたけど、多分この子もやべーやつだ。

『ダメだなんか思い出したら腹立ってきました。さっさとロシア支部潰しに行きましょう。』

自分の支部に対してこれだもんな。絶対私怨混じってるって。そうじゃなきゃ自分の故郷を真っ先に優先攻撃対象になってしないもん。売国奴でももうちょい躊躇するわ。前回のちよつとしんみりした雰囲気返せよなほんと。何があつたんだよ怖いんだけど??

なんにしろ侵攻を始めるのはサリーが戻ってからだ。それまでは現状を維持しつつ待機。増員した戦力を連れて帰ってくるのを待とう。あつちは上手くやれてるかな。前は僕のせいとはいえ一人にしたせいで死にかけてたし、どうしても一人にすると心配になる。どうせここに居ても暇なんだ。一回様子を見に――

『ごめんなさい。大変なことになった……』

【サリー!?!】『……どうした?!大丈夫!?!』

『私は大丈夫だけど……いや大丈夫じゃないかも。とにかくすぐそっち戻る。』

そう唐突にサリーからの感応現象が発生し、言いたいことだけを言い終えるとこれまた一方的に感応現象が切れた。……言ってるそばから非常事態みたいだ。

【ディーヴァ。出撃するよ。】

『あの子なんかやらかしたんですか。』

【僕にもよく分からなかった。】

新たに形成した装甲に覆われた腰の翼を広げ、コンゴウの風力をジェット噴射のように放出することで宙に舞い上がる。更に身体が空中に浮き上がると四枚の翼の噴出口を全て背部に向け、推力を一点方向に集中。サリーが向かった方向に一気に身体を加速させる。

『あつー！こらご主人様!?一人で突出しないで下さい!!』

『サリー連れ戻したらすぐ戻るから。』

空中で弾丸のように身体が射出されると同時、一方向に向けていた翼を改めて全方位に展開。グライダーのように航空形態を取り、姿勢制御を行いつつ右手に蝕刃を形成する。そして左手の無数の邪眼で地上を見渡し探索を行うと、無事にこちらへと飛翔するサリーが目に入る。しかし同時、サリーの後方にある存在が居るのが目に入った。

(……………神機使い??しかもあの赤い神機は……………)

【仲間になりそうなアラガミを探してたら見つかって……………来てくれてありがとう……………その身体は??!】

【イメチエン。ディーヴァいるところまで下がるよ。】

サリーの真横に急降下する形で舞い降り、その手を引いて後退する。なんでこんな場所に神機使い……………しかも極東の第一部隊がいるんだ?ここってディーヴァの話じゃロシア支部の領内なのに。

とにかく一人で戦おうとしなかったのは偉かったねサリー。即座に撤退を選択したのは賢明な判断だ。

【黒い剣を持ったやつがすごい勘が良くて……………すぐ逃げたのに追いかけてくるの。】

【ソーマか……………さすがに前とは編成変えてきたか。】

『ちよつとそこのバカカップル!?大丈夫ですか!?!』



足元を凍てつかせる形で滑走し、すぐさまディーヴァが僕らの元へと追いついてくる。僕らは無事だけど……厄介だな。僕らが侵攻の計画を練ってるところにやって来るとは。これからロシア支部攻撃しようって時にタイミングが悪すぎる。

それにあの赤い神機……リンドウさんがいるって事はほぼ確定でツバキさんも来てるだろう。それに加えてソーマもいるとなると相手は四人編成か。参ったな。前はあの姉弟だけで手に余ったのに。あと一人は誰だ？サクヤさんあたりか？

なんにせよ現状僕らに対する最大の脅威が首を揃えてここに来ている。本来なら撤退を選びたいところではあるけど、今後の攻撃作戦時に横槍入れられて妨害されるのは避けたい。

それにこっちは既に変異を終え進化したサリーとディーヴァがいる。僕もさつき肉体を新調した今、比較的経験の浅いソーマとサクヤさんのどっちか位は殺せると思う。

『それに……主人様。あの連中を撤退に追い込めば恐らくはロシア支部の場所を突き止められます。この辺りで活動してる以上、今はあそこを畴（ねぐら）にしてるはずですから。』

「つまり追いかけてそのまま侵攻作戦を執行すると？戦力はまだ整ってないんだけど。」

『私が追跡しつつご主人様に感応現象で伝達するので、道中のアラガミを引き入れられるようでしたらお願いします。無理なら私も大人しく撤退しますのです。』

ふむ……でも確かに撤退せざるを得ないほどの負傷状態に陥れば、ロシア支部に攻撃を仕掛けた際にもそう直ぐ防衛には参加できないか。ほんとなんであの部隊がロシアにいるんだらうね??ロシア支部の全戦力と極東の最高戦力を同時相手とか無謀もいいところだ。

それに今日にした様子だと、サリーをソーマが追跡してその後ろを

リンドウさんが追いかけていた。ツバキさんとサクヤさんに至っては居場所すら分からないが、それは逆に第一部隊が分断できているというわけで。直ぐに合流してくるとは思うが一時的でも二対三に持ち込めればこちらの勝率は大きく上がる。

このチャンスを逃す手はないか。攻め込むかどうかはさておきここで第一部隊が消えてくれれば今後の戦いが一気に楽になる。いい加減あの姉弟の顔も見飽きた。彼らの死を以て人類廃滅の戦の狼煙としてくれる。

「サリー。デীবア。行くよ……まず狙うのはあの黒剣の神機使いだ。」

「……………了解。」

『新人潰しですね。』

ヴォウツとデীবアが獣声を上げ、サリーが腰の翅を広げる。思えばこちら側から攻撃を仕掛けるのはこれが初めてだったか。しかも初めての三人での同時戦闘。神機にんげん使用のみの特権であった『作戦れんけい』を僕らアラガミが行う。その脅威と有用性を双方が思い知るのはいく後の話。

ただ忘れるわけもない。今日この日、この土地で人類にとって最後の戦争が始まった。後に『神災ラグナロク』と呼ばれる人と神との全面戦争。別名を『第三次世界大戦』。その凄絶を極めた戦災は、人類史の終末は今日この大地から始まったのだと。

## 12. 乱戦（ランブル）

【ディーヴァは頭上から。サリーは後方支援をお願いね。】

【了解。】

【あとここからの会話は感応現象くわうしんげんでね。……じゃ、行くよ。】

大まかに役割を決めた後。僕は腰部の翼を背面に向けて推力を一点集中。ジェット噴射の要領で身体を加速させ、ソーマに向けて蝕刃で斬りかかる。

……が、その一撃は巨大な壁に阻まれる形で防がれた。なるほどタワーシールドを用いたパリングか……反射神経がいいのか勘が鋭いのか。両方かな。僕を遠方に目視してから反応したみたいだ。

大したものだよ。まるで獣だ。

「てめえ……あの時の!!」

【いい反応速度だ。奇襲をかけたつもりだったんだが。】

「舐めるなよ化け物!!ラーナさんの仇が!!!」

睨みつけるようなソーマの眼差しに口元を歪ませ、反撃とばかりに巨大な黒刃を振るってくる。が、僕はこれを後方に飛ぶことで回避。その隙に頭の中でサリーに合図を送る。同時に僕が横に避けると、その場所を撃ち抜くようにして赤いレーザーが放たれた。

「なっ——!!」

「ソーマ!!!」

死角から放たれた砲撃。にも関わらずソーマを庇う形で現れたりンドウさんはシールドを咄嗟に展開するとサリーの砲撃を防ぎ、そのまま僕へと斬りかかろうとする。

が——

『今だよデイーヴァ。叩いて潰して。』

殆ど同じタイミングで、頭上からデイーヴァがリンドウさん目掛けて襲いかかる。前足の叩きつけこそ辛うじて躲したものの、続けざまに放たれる右フックにリンドウさんの身体は大きく吹き飛ばされた。

「ぐうっ……!?この……!!!」

「おい隊長!!」

「大丈夫だソーマ……まさか仲間連れとはな。しかも揃って新種かよ。」

なんで一撃入ったのに無事なんだよ。と思っただが、展開したシールドを叩きつけられる壁面に向けて緩衝材にしたらしい。

それでも衣類の腹部が爪痕をつけられる形で引き裂かれているが、同時に後ろにでも飛んだのだろうか。致命的な負傷にまでは至っていない。

しかもそうして吹き飛ばしたにも関わらず、リンドウさんはステツプひとつで僕に距離を詰めると手にした神機を横薙ぎに振るってくる。幸い距離があつたおかげで余裕を持って反応できたけど。

僕は上に飛んでそれを躲すと、反撃とばかりに急降下しつつ蝕刃を真っ直ぐ振り下ろした。ついでに今度は蝕刃が地面に接触すると同時に刀身を展開し、起爆型のインパルスエッジで追撃。その爆発の衝撃で僕は後ろに飛び退き、同時にデイーヴァに指示を与えてリンドウさんを襲わせる。

「させるか化け猫が!!」

『生憎バスターの扱いは覚えてるんですよ。その対処法諸々含めて。』

「——は!?!」

そうすればそれを妨害するようにソーマがチャージクラッシュを放つ。が、デイーヴァは軽く左前脚を振るうと一瞬で赤い結晶の壁を

形成。ソーマの渾身の一撃を軽々受け止め、リンドウさんへの攻撃を続けて放った。

右前足の叩きつけと共に赤い結晶が剣山のように地面から拡がり、直線上に突き上げるようにしてリンドウさんに襲いかかる。恐らく初見の攻撃にも関わらずリンドウさんはこれを横ステツプで躲したが、どうしてもその動きの後には硬直から隙が出来る。

『サリー。同時攻撃を仕掛けるよ。』

『!!……うん。わかった……!!』

そこで左手の甲の邪眼を向け、感応現象を用いてサリーと共に巨大なレーザーの砲撃を放つ。さすがに回避が間に合わないと思ったのかリンドウさんはシールドを展開するが、タワーでもないあのシールドでは完全には防ぎきれない。僕とサリーの砲撃にリンドウさんの身体は大きく吹き飛び、地面に転がる形で倒れた。

「ぐあっ……!!?」

「リンドウさん!!この……てめえどきやがれ!!顔キモいんだよ化け猫が!!」

『誰の顔面が何だって??ぶち殺しますよ??』

静かにぶちギレながらディーヴァは既に前足で猫パンチの要領でソーマを叩き潰そうとしていた。さすがディーヴァ。ぶつ殺すって思った時は既に行動は終わってるんだね。身を捻って直撃は避けたけど鋭い爪が肩から腹にかけてソーマの身体を思いつき引き裂いた。傷口からだけでなく口からも血を吐いたあたり結構深かったねあれは。

よし。ならソーマはあのままディーヴァに任せて僕はリンドウさんを。サリーはディーヴァを援護しつつ、僕が要請したらこっちにも後方支援をお願い。それまではソーマを殺すのに集中してもらう。

「…………ツ!!ソーマ!!」

「人の心配をしている場合か?このままだと二人まとめて死ぬことになるぞ。」

「悪いが誰一人死なす気はねえよ!!」

推力を背部に向けて加速しつつ空中から斬りかかり、リンドウさんと斬り結ぶ。さらにそのまま肩のボルグ・カムランの尾先を持つ六つの触手を展開し、全方位から貫きにかかる。

しかしリンドウさんは切り結んだ僕の蝕刃を弾くと、その場で身体を捻るようにして全ての触手を回転斬りで斬り落としてみせた。そのせいで早くも僕の肩の触手は結合崩壊を起こした。

とはいえ負傷は軽いものだから、僕はリンドウさん目掛けて結合崩壊も意に介さず蝕刃を横に振り払う。ついでにコンゴウの能力を発動したそれは剣戟と共に赤い真空の刃を放ち、着弾と同時にリンドウさんを大きく吹き飛ばした。

そうして無理やり距離を取って仕切り直すが、距離を置いたリンドウさんは片手に何かを握っていた。恐らく閃光弾だ。スタングレネード

確かに僕にそれは効くが、来ると分かっていたらばなんて事はない。本来の目を閉じつつ手の甲の邪眼を開き、代わりの視覚として用いる。そして閃光弾で手の甲の邪眼がダメになったら目を開けばいい。それだけで――

「ソーマ!!一度下がれ!!」

『ギャンツ!!?!』

【なに!?!】

――そうなじ対策法が確立されてたせいで、僕の対処が遅れた。なんとリンドウさんはスタングレネードのピンを抜くと同時にそれを神機の刀身の腹でバッテリーングの要領で飛ばし、ディーヴァの顔面に直撃させる形で炸裂させた。

唐突なデッドボールと炸裂した閃光。加えて聴覚の機能を奪うほどの爆音によつてディーヴァは崩れるようにして怯んでしまい、みすみすソーマに後退する隙を与えてしまう。

しかもソーマもソーマでその隙を見逃さない。ソーマはなんと咄嗟に神機を捕食形態プレデターフォームに変形させると、ディーヴァの冠を捕喰した上で後ろに下がった。するとどういうわけか、人間のくせにバーストを引き金として腹の傷がひとりでに塞がり始める。

あの人間離れした再生力……『マーナガラム計画』の産物か。忌々しいね。

『なんで……なんでどいつもこいつも頭ばつか食べるんですか!!』

『泣かないのディーヴァ。サリー、ディーヴァのフォローをお願い。』

『正直死んでくれた方がいいけど……まかせて。』

再生を始めたソーマに向け、サリーは額の邪眼……ではなく両掌を前へと向ける。するとその掌にぎよんつと新たな邪眼が開き、瞬きと共に光弾状の赤黒いオラクル弾を放つ。

追尾能力を投げ捨てて弾速に全振りしたそれは見事にソーマの腹と右肩を撃ち抜くが、それでもソーマは負傷を歯牙にもかけない。……不死身か？あいつ。

『大丈夫。威力は弱いけどその分猛毒を込めた。直に——』

『効いてないっばいよあいつ。』

『……ならやり方を変える。』

ムツとした様子でサリーは腰の翅を広げ、毒性の鱗粉を噴き出す。しかしその噴き出す鱗粉はしばらくすると性質を変え、やがて淡く輝く温かなものへと変質する。……待って？これまさか……

『その役立たず……いつまでも倒れてないで戦って。』

『誰が役立たずですか!!……っ!?!』

そんな言葉と共にサリーは、倒れたデューヴァに向けて掌の邪眼からレーザーを放つ。その一撃は見事にデューヴァへと直撃するが、デューヴァにダメージは無い。どころか、結合崩壊した頭部が即座に再生した。

人間視点だとあまりに絶望的なその光景に、当のデューヴァすら思わず困惑して動きが止まる。いやいやそんなのアリか。そんな事できるのか。

『人間が持ってた便利なものを真似した……これで戦える。』

「あのサリエル擬き……他のアラガミを回復できるのか!?!」

心做しかサリーがドヤっているが、もつと誇っている。まさか回復弾を放てるとは。いつそんなものを口にしたのか。そう思ったが、恐らく神機使いの携行する回復錠を神機使いを口にした際に共に捕食。その性質を模倣し、神機使いの記憶を頼りに再現したのだろう。

全くよくここまで成長したねサリー……回復能力そのものもだけど、さつきの掌の邪眼も恐らく僕のものを見よう見まねで再現したものだ。つまりサリーは口にしたものの情報だけでなく、見たものや知ったものを模倣し再現するだけの知能を得たということだ。

……とはいえ回復役<sup>ヒーラー</sup>が存在するとなれば、恐らく相手はサリーを真っ先に狙うはず。結合崩壊すら治療できるとなれば尚更だ。現にリンドウさんは斬り合っていた僕や頭を抑えていたデューヴァを差し置いて、真っ直ぐにサリーの方へと走った。

が、僕が伝えるより前にその行方を赤い結晶の壁が塞ぐ。そうして最低限援護を行うと同時、デューヴァは再びソーマの方へと向き直った。君もナイスアシストだよ。足を止めたその隙について僕は背後



から斬り掛かるが、これも辛うじてリンドウさんはシールドで防がれた。反射神経お化けが。

【本当に……人間の身でよくやる。が、淑女から狙うとは紳士じゃないな。】

「淑女と呼ぶにはちよいと厄介すぎるんでな。」

【よく言う。それはそっちも大概だろうに。】

リンドウさんに腰部の翼を向けて後ろにバックするように飛翔すると同時。さっきまで僕のいた箇所を一瞬遅れて線上の軌跡が残るほどの高速弾が掠めた。しかもその直後、連続した銃声と共に僕の移動先を塞ぐかのように弾丸が放たれる。こちらは蝕刃の刀身を盾に防いだが……思ったより合流が早かったな。

「!!……今のを避けるの……!!?」

「狼狽えるなサクヤ。言っただけだ……奴は普通のアラガミとは違う。お前は支援に徹しろ。」

「了解です……ツバキ隊長。」

狙撃型スナイパーのステルスフィールドか……引き金を引く瞬間まで気付けなかったわけだ。しかもどうやらツバキさんも密接する形で内側にいたようで、防ぎはしたものの完全に不意を付かれた。

で、奇襲って形で女性組が合流して来たわけだけど。これで三対四……数的にはこちらが不利。ソーマが一応負傷しているとはいえ、即座にサクヤさんが回復弾を撃ち込んで応急処置を施した。デイーヴアに斬り掛かれる程度に回復した今、見たままの戦力差って認識でいいだろう。

『さて……どうしたものか。』

『今退いてもきつと追いかけてきますよ。彼らご主人様狙いみたいで

すし。』

『だね。僕も人気者になったものだ。』

なんで極東の精鋭がわざわざロシアまで僕を追いかけてきたのか……正直疑問は多い。僕が単純に特異個体だからって切って捨てるのは簡単だが、あそここの支部長がそんな理由で貴重な戦力を派遣。滞在させるとは思えない。

僕を殺すとなにかいい事があるのか……それとも生きてられると不都合なのか。その理由は知っておきたいところだが、今は目の前の戦いに集中だ。この部隊には生きていられるだけ不都合しかない。

切り落とされた六つの触手の断面に蕾状の器官を形成し、開花させることで内側に小ぶりな邪眼を生み出す。先端に邪眼のついた触手はかなりS A N値を削られそうな見た目だが、これは言うなれば可動式の視覚だ。それぞれ神機使い四人に味方二人、一つずつ向けることで全ての戦況を同時に把握できる。

そうだな……この配置なら、ディーヴァにソーマとサクヤさんの二人を任せるべきか。比較的手負いと回復役ならディーヴァ一人でも対処できるだろうし、恐らくあの姉弟はまた連携してくる。

さっきの立ち回りを見るに僕一人であの二人を相手取るのはキツイ。それに僕一人でリンドウさんを相手して、フリーにしたツバキさんをサリーにサッ対一シでぶつけるのも避けたい。

ちよつと過保護な気もするが、リンドウさんの上達ぶりを見るにツバキさんも大概ヤバくなつてそうだからね。ここは……

『サリー。僕らは二人であの姉弟をやるよ。』

『!!……うん。一緒に戦う。あなたは私が守るから……』

『ディーヴァはあつちの二人をお願い。殺せなくていい、こつちへの介入を防いでくれるだけでいいから。くれぐれも無理はしないよう

に。』

配置を手短に感応現象で伝えると同時に。僕はサリーの隣へと舞い降り、雨宮姉弟へと向き直る。あつちはあつちで僕が向かわせたデイーヴァにサクヤさんとソーマが向かい合う形になり、互いに睨み合う形での膠着状態が続いている。……ソーマも動き回れる程度には回復したか。もしかしたらデイーヴァ一人に任すのは荷が重かったかもな。早く終わらせてあつち行こう。

「さあ……任務再開だ。行くぞリンドウ。」

「了解だ姉上。」

膠着状態を破って最初に突撃をかけたのはツバキさんだった。こちらに直進しながら放ってくる弾丸を蝕刃の刀身で防ぎ、その背後からサリーが掌の邪眼を用いて弾速優先の光弾を放つ。当然その程度の攻撃に当たる人じゃないが、サリーは光弾を連射しつつも額の邪眼を開くと、一瞬で膨大なオラクル細胞を収束させる。

『逃がさない……』

そうして額から広範囲に拡散するレーザーを放つと同時に。放たれた数多の光は不規則な軌道でツバキさんを追尾し、地面に着弾すると爆発と共に猛毒の霧を巻き上げる。

拡散レーザーに見せかけた多数のホーミングレーザーによる爆撃……まるでミサイルだな。ウロヴオロスと同規模の砲撃も大概だけど、撃たれる方はかなり厄介だろうね。現にツバキさんも回避に精一杯で、反撃の余裕なんてなさそうなもの。

「ちっ……本当におっかない女神様だな!!」

【つと。】

当然厄介極まりない後方支援に、リンドウさんが突っ込む形でサリーに刃を振るおうとする。そこに割り込んで蝕刃で止めると同時、サリーは掌をリンドウさんの方に向けて邪眼を展開。虚空を手で薙ぎ払うような動作と共に、横一列に無数の光球を並べる。

『私の大事な人に……近付かないで……!!』  
「!!」

そのさまを見てすぐ退くのは流石というか。なんせリンドウさんが後ろに退いた直後、空中に並べた光球が展開順にレーザーとなって降り注いだ。

扇状に乱射されるそれをリンドウさんはレーザーの間に身を運んで辛うじて躲すが、どうしてもステップ後は一瞬動きが硬直する。そこを目掛けて僕は蝕刃を振るい、同時にコンゴウの能力を刀身に発動。三日月状の真空の刃を飛ばすことでリンドウさんを追撃する。

「ぐっ……!!」

【ほう……凌ぐか。だが——】

「姉上!!悪いがフォロー頼む!!」

そんな声と同時。僕の方へと銃撃が放たれるが、来ると分かっていたらばそう怖いものでもない。最低限身体を揺らすように浮遊して回避すると、左手の甲の邪眼からツバキさん目掛けて三発の誘導レーザーを発射。牽制しつつシールドを展開したリンドウさんに刃を振り下ろす。

敢えて分かりやすい縦振り。故に体勢を崩したリンドウさんは狙い通り、シールドで受け止める形で剣戟を防いだ。しかしこの瞬間。僕は蝕刃の刀身を展開し、高濃度のオラクル細胞を刀身の付け根へと収束させる。そのさまを見てリンドウさんが目を見開いたがもう遅い。

僕はシールドに止められたままの蝕刃を両手で握り直し、強引に振り抜きつつインパルスエッジを発動。剣戟と共に大爆発による追撃を行うことで、振り抜くようにシールドごとリンドウさんを大きく吹き飛ばした。

そして縦に展開した刀身を閉じると同時、腰の翼に備えたジェット噴射の機能を地面に向けて吹き掛ける。そうして爆風で巻き起こした土煙を払うと、そこには膝をつくりンドウさんの姿があった。別にどこかを負傷した、といった様子では無いが……

「!!……リンドウ?!おい大丈夫か!!くそっ……!!」

「俺は大丈夫だ!!……が、ちよつと不味いかもな。シールドがイカれちゃまった。」

「なにつ?!ちっ……なら下がってろ!!あいつは私がやる!!」

さつきから何やつても避けるなり防ぐなりして捌いているからね。まずはシールドを潰させてもらった。これでサリーの範囲攻撃も僕の蝕刃も避けるしか対処方法が無くなったわけだけど……それが分かっているからか、ツバキさんはリンドウさんを下がらせる形で前へと出てきた。アサルトなのに勇ましいことだね。

『サリー。君はあの壊れた神機使いをお願い。この女は僕がやる。』

『分かった。』

『ごつちに近付けなければそれでいい。……くれぐれも深追いして怪我しないようにね。』

射撃で近付けないよう立ち回れば任せられると判断し、サリーをリンドウさんに向かわせつつ真っ直ぐにツバキさんへと身体を加速させる。銃撃の対処方法としてはこれがベスト。多少被弾したところで近接型ほど致命傷にならないし、いくら取り回しのいいアサルトでも距離を詰められると相当やりにくいはずだから。

とはいえツバキさんは距離を詰めようとする僕に慌てる様子もな

く、寄りにもよって顔面目掛けて正確に銃を連射してくる。流石に僕も怯んでしまったが、やはりそう簡単に寄り付かせてはくれないか。まずは回避に専念させるなどして隙を作るべきだね。ちようどそれ用にいい能力もあるし。

まずは肩の触手に意識を集中させ、伸ばす形でツバキさんへと向かわせる。さっきこの器官は敵と味方の位置を把握するためのものとして作ったけど、その邪眼はサリエル神属のものをベースにしている。つまり、手の甲のものと同じく射撃能力を有しているわけだ。

それに伸縮自在の触手が組み合わさった結果、自由な角度から射撃をこなせるある種のオールレンジ攻撃として機能する。触手の操作と射撃つてなると流石に扱うのも大変だが、射撃型は近接戦と同じくらい対多数戦も苦手だ。全方位から襲いかかるこの攻撃にはそう簡単に対処出来ないはず。

「ぐっ………!!鬱陶しい!!」

僕本体とは別に自在に蠢きレーザーを放つ触手にツバキさんは案の定苦戦を強いられている。それでも足を止めないように立ち回り、触手の邪眼を撃ち抜いて潰しているのは流石という他ないが……潰れた邪眼は花卉状の装甲で覆い、即座に蕾に似た鏃へと変形。こちらは刺突という形で攻撃を仕掛ける。

しかし操作が複雑だからどうしても足が止まるな……便利なのは間違いないがもう少し改良できないものか。いや、単純に扱いに慣れてないだけか？よく考えたら思いつきでつけた機能をいきなり実戦で使ってるんだもんな。実際有効だからいいものの傍から見たら舐めプもいいところだぞ。

とはいえいい塩梅にツバキさんの意識も攻撃端末である触手に向けられた。その隙を突いて僕自身も身体を加速。同時に触手を用いた攻撃は止むものの、完全に意識の外からの攻撃にツバキさんの動き

は完全に硬直する。

これは貰った――

「――とでも思ったのだろうか？素人め。」

そんな言葉と共に、僕の振るった蝕刃が何かに弾かれる。しかもそうして捌いた直後、ツバキさんは振り向きざまに銃口を僕の身体に押し付け、至近距離で引き金を引いた。

その銃弾が僕の身体を撃ち抜いて身体の後ろへと貫通したのが傷の感触で分かった。突っ込むよう誘われたと気付いたのは、続けざまにもう一度。頭部を破壊しようとした銃撃を、僕がギリギリ頭を傾け回避してからだった。

ねえ……今この人、銃身で僕の剣戟を捌いた??そういう武器じゃないからなそれ??しかもそうして僕が身体をよろめかせると同時、ツバキさんは退くどころか更に前へと距離を詰め、片手で保持した神機を再度僕の身体に押し付ける形で引き金を引く。

いやいや。確かに至近距離から撃たれたら避けられないけどさ!!こんな近接型の使い手すらドン引きするレベルの荒々しい戦いをする!!しかも何が酷いって、実際めちやくちや有効打になってるのが本当に酷い。いくら威力の弱いアサルトと言っても、ゼロ距離で食らえばそれなりどころじゃない負傷になるってのに。

不味いな……リンドウさんの方が厄介と勝手に思ってたけど、ツバキさんはツバキさんと相当手強いぞ。すぐさま距離を空けつつ肩の触手を再び伸ばそうとするが、予備動作でバレたのだろう。今度は先端の邪眼を順番で撃ち落とす形で触手を無効化された。

【……ッ、中々やる……!!】

『あの女……!!よくも……よくも私の大事な人を――』

『つとサリー。僕は大丈夫だから。』

僕の負傷にサリーが激昂してリンドウさんから気がそれかけるが、宥めつつも逆に飛びかかるようにしてツバキさんに蝕刃を振り下ろす。しかし振り下ろした刃をツバキさんは足で踏みつけて地面にめり込ませると、僕の顔面に銃口を向けて至近距離から銃弾を見舞う。その一撃で顔面の半分が吹き飛んだ辺り、流石の僕も身の危険を覚える。

「どうした化け物!!動きが鈍っているぞ!!」

【ちっ……どつちが化け物だか。】

ひとまず地面にめり込んだ蝕刃を一回消すことで身体を自由にし、フリーになった右手にボルグ・カムランの能力を発動。腕を装甲で覆い、即席のクローとして振り下ろすことで無理やりツバキさんを下げさせる。

さらに追撃としてヴァジュラの電流を金属質の装甲に覆われた右手を通して地面に放電する。が、それでもツバキさんが退いたのは最低限の距離。すぐさま銃撃で反撃してくるから、僕は両肩の六本の触手を交差させて至近距離からの銃撃を凌ぐ盾とした。

ついでに体勢そのままに銃撃で傷んだ肩の触手を付け根からパージ。空洞となった付け根の中にクアドリガの能力を発動する。

そうすると装甲のように巨大な突起が生えるが、当然これらはただの装飾ではない。突起物は一つ一つが外側へと向けて射出されると、一定時間後に空中で方向転換。ツバキさんを捉えると一斉に根元から火を噴いて空中で加速する。

クアドリガが胴から単発で放つ大型ミサイル。それを同時に六つ。誘導性能はそこまでだが、爆発範囲と威力は折り紙つきだ。地面に撃ち込むだけで大爆発を引き起こすのは自明だが、この距離で放てば当然僕も巻き込まれることとなる。

苦し紛れもいい所とはいえ所詮は諸刃の剣だ。僕自身も具体的な



防御手段は用意してない。

「ミサイル……!? あいつ自爆する気か!! くそっ——」

ツバキさんが降り注ぐ複数の大型ミサイルから逃れようとするがもう遅い。この自滅覚悟の絨毯爆撃はステップ数回で逃げられるような攻撃範囲じゃないし、それこそ近接型でシールドでも使えないと逃れる術はない。

現にツバキさんの声は着弾したミサイルの爆音にかき消され、通常の人間なら死に至るほどの熱風が瓦礫を巻き上げ何ヶ所からも同時に吹き荒れる。僕は自分で巻き起こした爆風に身体を任せることで後退しつつも被害を最低限に抑えるが、それでも身体の何ヶ所かが碎け散るようにして結合崩壊を起こす。

【ぐうっ………!!】

そうして吹き飛ばされた後に左手と両足を地面につき、どうにか勢いを殺す。僕が巻き起こした爆発で巻き上げられた砂塵によって視覚は覆われているが、アラガミの僕ですらこれほどのダメージを負ったんだ。いくら神機使いとはいえ全身やけど程度の重傷は免れられないだろう。

とはいえこの位であの人の息の根を止められるとは思っていない。砂塵に覆われたあの向こう側。コンゴウの聴力を用いて探ったところ、未だ土を踏みしめる音がする。やはりまだ生きている。

ならば確実に殺す。熱でボルグ・カムランの装甲が剥がれた右手に再び蝕刃を形成し、半壊した腰の翼を広げて風力を圧縮する。蝕刃は鋒を向けるように構え、刀身を縦に展開。中央部分にオラクル細胞を漲らせ、開いた刀身の間に赤い稲妻として走らせる。

チャンスは一度。爆風で視界が覆われている今、奇襲の形で最速かつ必殺の一撃を叩き込む。そのために僕が選択した能力。それは寄

りにもよって神機使いの能力だった。

羽ばたきとともに翼の内側から風力を解放し、身体を弾丸のように加速させる。鋒を向けた蝕刃を構えたまま赤い雷光を奔らせ、爆風の中を突つ切る形で突進の速度を乗せた刺突を放つ。

その速度はこちらを警戒していたツバキさんの反応すら凌駕し、無慈悲に蝕刃が彼女の腹部を貫いた。僕の通った後に吹き荒れる雷光混じりの暴風が砂塵を吹き飛ばし、やがて口から血の塊を吐き出すツバキさんの姿が全員の視界に顕になる。

「が……………つ……………!!!」

【終わりだ……神機使い。】

「姉上!!!」

チャージグライド。神機チャージスピアの固有能力だ。構える際の隙は大きいものの、アラガミの能力をフル活用して再現したこいつは僕の起こした爆風を吹き飛ばすほどの爆発的な加速を生み出す。そして単純な速度を乗せた刺突は、例え相手がタワーシールドであっても貫くほどの貫通能力を生み出す。

そう。ツバキさんを貫いたのはそんな必殺の一撃なんだよ。身体の一部を変質させた蝕刃だから分かる。内臓を幾つも貫いて破壊する感触があつた。腹から流れる血の量は夥しく、僕が刃を持ち上げて投げ捨てるように振るうとツバキさんは地面に無抵抗に叩きつけられる。

その様にサリーと戦ってたリンドウさんが血相を変えて駆けつけ、サクヤさんとソーマも手が止まる。

「姉上!!!姉上!!!しっかりしてくれ!!!」

「……………嘘、でしょ…………？」

「あのゲテモノ野郎……………また殺しやがったのか……………!? ラーナさんに続き、ツバキさんまでも……………!!」

瞬く間に絶望に染まる第一部隊。ここが戦場ということも忘れて茫然自失となる面々に、倒れたツバキさんは何の言葉も発さない。普段だった檄の一つでも飛ばして我に返すものなのに。代わりとばかりに血の混じった咳を吐くその様は、最早生存は絶望的だと第一部隊の面々に現実を叩き付けるだろう。

とはいえ、こんな戦場のど真ん中で隙を晒した連中を僕らが逃がすわけもなく。僕は再び身体を浮かせると、真っ直ぐに隙だらけのリンドウさんへと蝕刃を後ろから振り下ろす。リンドウさんも咄嗟に殺気に反応して振り向いたが、間に合うわけが無い。

その一撃で僕はリンドウさんも続けて亡き者にする。そのはずだった。

しかしその一撃が届くことは無かった。なぜならそうする前に僕の身体が地面に崩れ落ちた。

力が抜けるようにして地面に倒れ、蝕刃を地面に突き立てて立ち上がろうとするも叶わない。そのさまを見て第一部隊に攻撃を仕掛けようとしていたサリーとディーヴァも、ツバキさんに群がる神機使い同様に僕の元に慌てて駆けつける。

『どうしたの!? 大丈夫!!?』

『ご主人様!?! なんか身体が霧散しかけてますよ!?!』

……………分かってはいた。ツバキさんを殺そうとしたあの一瞬。チャージグライドによる刺突のあの瞬間、ツバキさんは僕に引き金を引いていた。しかもその弾丸が捉えたのはよりにもよって胴体。僕のコアの存在する箇所だ。

直撃してコアが破壊された訳ではない。が、掠める形で欠損したのだろう。身体に力が入らない。おまけに今倒れて分かったが、僕自身も相当消耗していたらしい。当たり前だ。あんなに負傷して、おまけに多数の能力を連続で使用したんだ。戦闘中に肉体の進化も強引に行ったし、自爆同然の荒業まで使った。否、使わされた。そこに倒れているツバキさんに。

……ほんと、リンドウさんの姉だけあるな。死んでもタダでは死なないうつてか。第一部隊を潰す絶好の機会なのに……

「……ソーマ。サクヤ。撤退するぞ。」

【ほう……退くか。その女はもう死んでいるというのに。】  
「つつつ、てめえ………!!!」

僕の発する言葉にソーマが神機を握りしめる。が、リンドウさんはそれを手で制するとツバキさんの亡骸を抱きかかえて立ち上がった。……僕を殺したくて仕方ないだろうに、ここで撤退を選択できるのは流石っていうか。本当に厄介だね。今にも仇が目の前で死にかけているのに。……あまりに挑発が見え透いてたか？

「ソーマ……命令だ。」

「でも!!あいつも弱ってる!!今なら仇を討てるチャンスなんだぞ!?!」  
「分かってる。けど、頼む……」

しかしリンドウさんはソーマの言葉を制し、あくまで撤退を選ぶ。ほんと惜しいよ……もし感情に任せて僕を殺しに来ればサリーとデーヴァが残ったメンバーを壊滅させたのに。さすがは未来の隊長。戦闘技術だけでなく判断力も大したものだ。

最も。そっちが撤退を選んだからって僕らが攻撃の手を緩める理由にはならないんだけどね。僕は地面に膝をつくも、感応現象を用いてサリーとデーヴァに指示を与える。

『サリー……ディーヴァ。僕はいいからあの神機使い達を——』  
『何言ってるんですか!!放っておけるわけないでしょう!!』  
『あんな奴らの命なんかより貴方の方が大事……今治してあげるから……!!』

けど、彼女らは僕の言うことを聞かなかった。それどころか撤退中とはいえ敵のいる目の前で僕の傍に駆け寄り、僕を介抱しようとするのを寄せる。うん……まあ、なんとなくそんな気はしていたけどね。

分かつてはいたけども、僕が人間の存在しない世界を欲しがらる理由。それはあくまで彼女らに脅威の存在しない世界を与えたいだけで、その世界に僕が生きて立っている必要は無いんだよ。僕の命なんかより、この先においても最大の脅威となるあの部隊の殲滅。その絶好の機会を優先してほしいってのが僕の本音なんだけど……

……そんな事言ったら怒られちゃうなって思ったからそつと介抱を甘んじて受け入れた。いいさ……今日はまず一人、あの部隊の人間を消せた。そして同時、そう直ぐには復帰できないほどの傷を負わせた。今日のところはそれくらいで十分としようじゃないか。

それにこれはあくまで前哨戦。僕らにはまだメインの侵攻イベントが残っている。こんな所で死んでも何にもならないのは、この子達の言う通りだからね。

『まっ……まさかこのままやるんですか!!ロシア支部侵攻作戦……ご主人様、そんなボロボロで死にそうなの!!』

『今が絶好の機会なのは君も分かるでしょ。……ディーヴァは先にあの部隊を尾けて支部の場所を割り出して。僕はサリーに治して貰ったら後で追いかけるから。』

『わ……わかりました。サリー?ご主人様のことは頼みましたよ。完全に治すまで、こつち来させちゃダメですからね!!』

デーヴァの言葉にサリーが強く首を縦に振り、回復成分を持つ鱗粉を散布しつつ両掌の邪眼を僕の身体の負傷箇所へと向ける。……この調子で僕の身体が再生出来たら、僕とサリーは道中のアラガミを汚染し統制しつつデーヴァの元へ向かう。ロシアに駐留する極東第一部隊が半壊している今、襲撃は早ければ早いほどいい。上手く行けば支部もろとも取り逃した第一部隊を殲滅できる。

作戦は既に練られ、戦争の火蓋は既に切って落とされた。故に僕らの人類への攻撃は続く。その中既に遠くなったりリンドウさんの背中を見ながら、僕はツバキさんが最後に胴体に残した弾痕を右手で押さえた。

【……………痛いなあ。】

【もうあんな無茶はしちやだめ……………すごく心配した。】

【ごめんね。次はもっと上手くやるから。】

そうしている僕をサリーが後ろから抱きしめ、痛ましそうに傷ついた箇所を指先で撫でてくれる。

それでも傷つけられた箇所がコアだったからか。それとも文字通りに命を懸けた一撃だからか。サリーの回復能力でも僕自身の再生力でも、その傷跡だけはどうしても癒すことが出来なかった。

### 13. 侵攻（ゲヘナ）

第一部隊の交戦で傷ついた身体を癒やす中。しばらくしてディーヴァから感応現象によってフェンリルのロシア支部の位置とここからの移動ルート、そして現在の支部の状況が送られてきた。

半壊した第一部隊が帰投した以外は特にこれといった警戒態勢には移行してはいないらしく、ディーヴァが遠巻きに偵察してるのもあってロシア支部はまだ僕らの接近に気付いていない。

そのためディーヴァには引き続き偵察を続けてもらい、その間に僕とサリーはディーヴァが送ったルートに従ってロシア支部付近へと向かっていった。もう僕という存在はロシア支部内で知れ渡っているだろうが、サリーとディーヴァの存在と僕が二人を従え連携した事はあつちにとつても新しい情報。フェンリルが他支部に情報を共有し、対処法を確立させる前に攻撃を仕掛けたい。

更に生き残った第一部隊の面々や壊れたリンドウさんの神機が修理され、今回の侵攻作戦を邪魔されるのも避けたいから。半ば動ける程度までに回復した僕は、サリーを引き連れて行動を開始した。

その過程で当初の予定通りにサリーが鱗粉を用いて道中出くわしたアラガミを汚染。僕の配下へと変える形で戦力の現地調達を行い、ついでに僕が感応現象で変異したアラガミを統制できるかのテストを行った。

結果は半分成功。というのも意思疎通は出来ても所詮はアラガミ並の知能しかないからさ。元人間のディーヴァや人間を捕喰し性質を模倣したサリーほど頭は良くなく『僕についてこい』とか『僕ら以外を襲え』とか簡単な指示しか理解しなかった。

とはいえ今回はそれで十分。軍勢として用いる分には支障ない程

度には動かせるし、命令に逆らって僕やサリーに牙を剥こうとする様子もない。アラガミは元々が食欲という本能しか持ち合わせない生き物だからね。外部から理解できる命令を与えられた場合それ自体には大した疑問を抱かないのだろう。

むしろ問題となったのは道中出くわしたのが小型のアラガミばかりで戦力になりそうな大型アラガミにそれほど出会わなかったこと。もう少しで僕らもロシア支部につくが、その主戦力はオウガテイルやザイゴート。コクーンメイデンなど神機使いであれば難なく対処できるとはアラガミばかり。

そのためもう少し戦力の調達に時間を割くべきじゃないか。そうデイーヴアに感応現象で尋ねてみたが、彼女曰く『小型でも十分だから質より量を調達して欲しい』とのこと。

曰くロシア支部への侵攻時は支部内の民間居住区↓支部の中央施設という流れで攻め込むことになる。どちらも建造物が多かったり屋内だったりで、小回りの効く小型アラガミは戦力として決して悪くないというのが一つ。

更に神機使いでない民間人には小型アラガミだろうが大型アラガミだろうが脅威度はそう変わらない。なら小回りの利く小型アラガミを多数侵入させ、民間人を危機に晒すことでフェンリル支部内の神機使いの注意をそちらに向けられる。ついでに広域が危険地帯となれば支部内の神機も駆り出さざるを得ず、中も手薄に出来ることだ。

そう考えると必要なのはアラガミの質より数であり、僕らの調達した戦力でもまだ少し足りないらしい。

でもその点に関しては既に解決したも同然と言っておこう。



『やけに自信满满ですね。なにかしたんですか?』

『いや。戦力増強中に面白い性質を見つけてさ。』

『ほう???』

……と言うのもね?さつき言った命令の中に『僕ら以外を襲え』って命令があったと思うんだけど。僕の細胞で変質したアラガミって、例外なく白と黒を基調とした外見に変貌するんだよ。だから知能の低いアラガミでも外見で敵味方を判断できるかなって試しに命令を与えてみたんだけど。

結果は成功だったんだけど、ここで思わぬ副次効果が見つかったね。なんと僕の細胞を持つアラガミがそうじゃないアラガミを襲った瞬間、襲われたアラガミが僕の細胞を取り込んだアラガミ同様の場で変異したんだよね。

ついでで言えば今回の戦力調達はサリーに僕が持つ『既存のアラガミを僕と同じ存在に変える』能力を与えた上で、その細胞を鱗粉として空から散布することで行った。推測でしかないけど、この現象は僕がサリーに与えた能力が変異した個体の中にも同様に残った結果の産物だと思うんだよね。

『えっと……つまり白いアラガミに襲われたアラガミは、同様に白いアラガミに変質する?』

『そういうこと。で、機動力のあるザイゴートに『付近のアラガミを手当り次第襲え』って命令したから。』

『うつつっわ。』

多分だけ僕の知らない場所でねずみ式に白いアラガミは増殖している。向かわせたのが小型アラガミのザイゴートだからあまり強力なアラガミは増えてないと思うけど……って説明したらディーヴァがドン引きしたような声を漏らした。まあつまりそういうこと

だ。

……で、そろそろ戦力も問題無い程度には増えると思うんだけど。デーヴァはどこで偵察と監視を行っているのか。感応現象を用いて尋ねてみると、デーヴァが『この辺です』って座標を送ってきた。案外近いな……一回合流しようか。こっちで調達できた戦力も確認したいし。

『そうですね。なら私がそっち行きます。動かないで待つてください。』

『ほんとう？……悪いねデーヴァ。』

『支部の周りを見たことないアラガミの群れがいたら流石に警戒されますから。それにご主人様、まだ傷が癒えてないのでしょう？』

無理しないでそこで休んでくださいって言葉を最後にデーヴァからの感応現象が切れた。……なんで分かるかな。コアのある胴体の中心……ここだけはどう足掻いても治らないんだよね。活動に支障はないから気にしてないけど、コアが損傷したせいかな。ほんとは厄介な置き土産だよ。さすがリンドウさんのお姉さんだけある。

とにかくデーヴァがこっちに来てくれると言うのならこっちも先に戦力の確認と簡易的な強化を施しておこうか。サリーも鱗粉撒いて飛び回るので疲れたと思うし、しばらくは休んでいいよ。その間に僕は僕の仕事をやる。

感応現象を広域に用いて『ここに集まれ』と命令を飛ばす。そうすると十分かそこで派遣したザイゴートの群れが新たな軍勢を引き連れてこちらに合流した。

その総数はさっきまでサリーが道中従えたのと合わせてザイゴートやオウガテイルが計二百体以上。コクーンメイデン五十匹前後。コンゴウ八匹にシユウ四匹、クアドリガとボルグ・カムラン二匹。そ

してサリエル四匹にヴァジュラ三匹。体色が統一されてるから詳細は分からないが、もしかしたら墮天種も混ざってるのかもしれない。

デイーヴァもこれなら満足すると思うが、大型アラガミはさておきせつかくだ。あつちから見て比較的対処が容易なオウガテイルとザイゴートには簡易的な進化を施しておこう。

僕は頭の中で現在の知能でも理解できる程度の進化の図を思い浮かべ、感応現象を用いることでオウガテイルとザイゴートにその進化形態を伝える。あとそのために必要な大雑把なアラガミの身体情報も。そしてその姿に進化するように感応現象で命じると、みるみるうちにオウガテイルとザイゴートはその姿を変える。

まずオウガテイル。こっちは至って単純でボルグ・カムランの装甲を身に纏うことで防御力と尾の攻撃力を強化。更に背中にクアドリガのミサイルポッドを組み合わせることで遠距離に対する攻撃手段と対建造物に対する攻撃力を獲得。小回りと戦闘能力を両立した歩兵へと仕上げた。

そしてザイゴート。こちらは以前僕の細胞の実験時に生まれた個体のデータを参考に、更に卵殻内にコンゴウの真空器官を増設。邪眼はサリエル神属のものへと変化させ、手始めに推力の増強と超長距離狙撃能力を強引に付与する。

加えてラツパ状の尾を巨大な鳥の脚にも見えるシウウの掌に変質させ、同じく翼もシウウ神属を思わせる大型のものに発達させた。これで先ほど生み出したオウガテイルの変種を保持。空中にて運搬しつつ目的地に投下できる。

そうやって一体ずつ完成形が出来れば他のオウガテイルとザイゴートもその姿を参考に全く同じ姿へと模倣を開始する。そうしてほぼ新種の小型アラガミが二種類。計二百体以上も出来上がる。

『ゾルダート』と『フリーユージェル』。僕の手で作りに出したアラガミ一号

と二号にはそう名付けた。原種個体の生息数が多いために調達も容易で、かつ戦場となるフェンリルの区画内で機動力と制圧力を両立した高性能モデルだ。これからの戦争ではこの二種類が主戦力となるだろう。

いやー……既存のアラガミを姿を留める範疇で進化させるなら情報を与えるだけで行けるな。思いついたことは試してみるもんだね。自身で思考し進化の形を選択するには至らない個体でも、これなら汚染後に即戦力として運用できる。

『なんか楽しそうなことしてますね。』

『あ、デイーヴァ。ちょうどいいところに。』

『随分とアラガミを集めてくれましたね？しかも……ほう、二種類の新種ですか。大したものですね。』

新種のアラガミは小型であつても対処法が確立されておらず、群れともなれば既存の大型アラガミ以上の脅威となるほです。それにピルグリム二組にコクーンメイデンの対空砲火の雨。こちらも多くの神機使いにとつての鬼門。一部隊で相手取るのが困難な大型も添えてバランスもいい。

それにしてもこれだけの戦力を現地で調達してしまうとは驚異的な能力と言うほかない。本当になんなんですか貴方は。』

『サリーが頑張ってくれたんだよ。戦力はこれだけいけば足りるよね？』

『足りるところかオーバーキルもいいところですよ。草木も残さないつもりですか。』

元から草木残っていないだろロシアなんだから。それにこの戦争は人間がする戦争と違って敵国を支配したり資源を略奪するのが目的じゃない。そこに住む人間と国家の完全絶滅が目当てなんだ。井戸にガンガン毒を投げ込むタイプの戦争では戦力なんていくら居ても困ることはないはずだよ？

『むう……じゃあもう正面突破で殲滅する形にしますか？』

「いや。当初の君の予定通りに行くよ。こつちも無駄な被害は被りたくないから。」

『そうですか？これだけいたら正面突破のが早い気もしますが……』

ディーヴァはそう言うが、いくら新種と言っても小型アラガミだしね。対処法が確立されたら瞬く間に制圧されるし、大型アラガミの数は少し心もとないから。

それに例の極東の第一部隊が無理して出てくる可能性もある。脳筋戦術も悪くはないけど、僕らが絶対的な数で劣る以上はこちらの被害は最小限に、且つなるべく迅速に終わらせたい。

そして何より。さっき皆殺し目当ての戦争って言ったばかりだけど、フェンリル支部本体は残したいんだよね。あそこは僕らが持たない神機使いの情報の宝庫だから。

あの極東の最高戦力がなぜこんなロシアまで僕を追いかけたのかとか、フェンリル側での僕の認識がどうなっているとかさ。これから戦いを続ける上であちらの内情を知っておいて損は無いと思うんだ。

『それはそうですね？だからご主人様がそういうのもまとめて地ならしするのかなんて心配で——』

【僕そこまで脳筋じゃないよ。】

『ならいいんです。ご主人様は賢い子ですね。』

正直ここまで戦力が確保されるのは僕も想定してなかったから。心配しなくても僕は当初の予定通りに侵攻するつもりだよ。ディーヴァが顔ペろペろしてくるけどやめようね。侵攻前に死体がひとつ増えそうだからね。落ち着いてサリー。

……そう。当初の予定通り、一次侵攻でこれらの戦力をまずアラガミ防壁内の居住区へ放出。神機使いをその対処のために引きずり出し、その間に僕は民間人でも神機使いでもいいから捕喰して人間の性質を完全に取得。完了した時点で一時撤退する。

続く二次侵攻で一次侵攻同様にアラガミを投下。その襲撃の混乱に紛れて人間に擬態した僕がディーヴァの案内で支部内に潜入。中のフェンリル関係者や待機中の神機使いを皆殺しにし、ロシア支部を内側から制圧する。

中でも新型神機使用に関する研究施設。ここだけは何としても制圧・あるいは殲滅し、未来の新型神機の適合候補者は探し出して排除しなくてはならない。そのために最初の侵攻対象にロシア支部を選んだんだから。中に入ったらくとん無慈悲にやるよ。

『了解です。中の案内は任せてください。』

【頼むよ現地ガイドのディーヴァさん。絶滅ツアーの順番とかは一任するからね。】

あとはこのアラガミの群れが支部に接近した時点で、恐らくあつちは警戒態勢へと移行する。作戦開始後は全体的に迅速な行動が求められる訳なんだけど……なにか質問はありますか。特にサリー。さつきから頭の上には？マーク浮きまくってるけど。話が難しかったね??

【えっと……私は何をしたらいいの?】

【サリーは空から無差別に地上を攻撃して。レーザーよりも毒の鱗粉を撒いてくれた方がいいかな。】

【……………貴方について行きたいんだけど。ダメ……………??】

そうだね……確かに僕もすぐ一緒にいきたいけど。連れていきたいけど!!でも捕喰活動は僕一人のがしやすすいし、二次侵攻もサリーは人間に擬態したことないからさ。元人間の僕とディーヴァは人のフリも上手くできるけど、サリーはそういうの難しいだろうから。

それに外で戦う神機使いも、民間人の防衛と新種や大型への対応つ

て切迫した状況に上空からの空襲が増えればより混乱状態へと陥るはず。貴重な飛行能力持ちのサリーには新型ザイゴートリユージェルと共にそっちに注力してくれた方が助かるんだよね。

別にサリーが嫌いと一緒に連れて行かないって訳じゃないから。だからそんなに心配しなくても——

【そうじゃない……貴方、まだ怪我してる。】

【あー……うん。それはまあ、そうだけど……】

【また貴方が怪我したら嫌なの……だから、もし貴方が危ない目に遭ったら治してあげたい。そのために貴方と一緒に……】

そこまで言いかけたところで僕はサリーにギュッと抱きついた。本当に……本当、サリーは優しい子だよ。その優しさが僕にしか向かないところも含めて、僕はサリーのそういうところが大好きだよ。

……大丈夫、なんて無責任なことは言えないよね。今からやるのは戦争だ。死と暴力を最大効率で与え合う人が生み出した最悪の文化だ。いかに今回の作戦が安全策とはいえ僕も例外なく手傷は負うだろうし、もし状況が変われば死んでもおかしくない。

だからこそ。回復能力を持つサリーをそんな場所のど真ん中に連れて行き、喪失するわけには行かないんだよ。僕らがこれから戦い続けるためにもサリーの生存は絶対だから。不向きなことをさせて死なせる訳には行かないし、悪いけど今回のサリーの申し出は受け入れられない。気持ちはすごい嬉しいけどね。

『ご主人様に賛成ですね。第一サリーは私と違って人間に擬態したことすら一度もないでしょう。』

【それは……そうだけど……】

『サリー。貴方が外で頑張ってくれれば、それだけご主人様がお仕事

しやすくなるんです。これは重要な任務なんですよ。』

デীবアに言いくるめられる形でサリーは黙ってしまいが、実際サリーの仕事が大事なものは本当。なんせ今回の侵攻作戦。僕とデীবアが二次侵攻でフェンリル支部内に潜入する以上、外に残される知能を持つアラガミはサリーだけになる。

つまり二次侵攻時、外のアラガミの指揮はサリーに全部任せることになるんだ。まあ指揮といっても今のアラガミはそう難しい命令は聞かないと思うからさ。空から見て、戦火に晒されていない場所にアラガミを向かわせるだけでいい。

とにかく外のアラガミの監督役が一人は必要だから。こればかりは本当にサリーにしか頼めない仕事なんだよ。

【……………私にしか、出来ない仕事……………】

『ご主人様つてき。サリーの扱い慣れてますよね。』

【人を悪い男みたいに言うんじゃないやありません。】

それに他人事みたいに言ってるけど、一次侵攻時にデীবアには地上戦力の指揮権を渡すつもりだからね？その際にサリーには空中戦力を預けるから配下のアラガミの扱い云々を教えてあげてね。自分も戦いながらで余裕ないと思うけど、長期的に見たらサリーにも戦力の指揮と運用をこなせるようになって欲しいのは本当だから。

『あー……………ご主人様は人間ムシヤムシヤしなきゃいけませんからね。そっか……………私がサリーの面倒見るんですか……………』

【そういうこと。くれぐれも仲良くね。】

『はいはい。』

アラガミの運用に関しちやそんなところか。……………他になんか質問は？無かったらもう作戦を始めようと思うんだけど。



『はいはいご主人様。一つ質問いいですか。』

『「ディーヴァ軍曹どうぞ。」』

『侵攻時にアラガミ防壁ってどうするんですか。あれ破壊しない限り侵入も何も無理なんですけど。』

あー……確かにそうだね。フェンリル支部ってどこもアラガミ防壁に囲われる形で守られてるからね。あれがどんなものなのかはまだピンと来てないんだけど、正直言うとゾルダートとフリーユゲルを生み出したのはその辺の対策のためなんだよね。

と言うのもフリーユゲルは尾に当たる部分に持つ腕でゾルダートを保持して侵入できるから。爆弾を投下する容量で壁を越えて、内側に小型アラガミを投下できるんだよ。

とはいえ確かにアラガミ防壁に穴を開けないと大型アラガミや僕らが侵入できないか。ふむ……参ったな。そこについては全然考えてなかった。

現物見なきや何とも言えないが、壁をぶち抜けるような能力はあったかな。幾つかのアラガミの能力を併用すればいけるか？或いはサリーのウロヴオロスレベルの砲撃とか……

『……………やっぱり何も考えてなかったですね。全く……………』

『「ごめんごめん。そうだね……………どうしようか。」』

『「ご心配なく。そんな事だろうと思って壁を破壊する手段は私が考えておきました。』

……マジで？さすがディーヴァ。できる女は違うね。心做しかドヤ顔してるけど、本当に胸張っていいよ。今回の戦争に関しては何から何まで頼りっぱなしだね。ほんとこの子には言語能力を与えてよかったって何回思ったやら。

元神機使いだけあってフェンリルの設備とか詳しいし、その対処法もちゃんと考えて用意してくれるとか。ディーヴァいなかったら

色々詰んでるレベルで僕の作戦ってザルだからね……割と本気で助かる。今回の作戦終わったらなんかお礼してあげるからね。

『ただですね。ご主人様？この能力、発動に時間がかかる上に使ったあとめっちゃ消耗するんですよ。だからご主人様もなんか他の方法あったらーって思ってたんですけど。』

【悪いけどそんなもんじゃないよ。……消耗するってどのくらい？】

『しばらくまともに戦えなくなりますね。私は戦力として使い物にならないくなります。』

そのくらいなら問題ない。元々ディーヴァには地上戦力の指揮を任せるつもりだったし。そういうことなら僕もさっさと要件を済ませ、早めに撤退すればいいだけだから。

一個人の戦力に戦況を委ねるのが愚策だなんてことは僕にだって分かってる。ディーヴァ一人欠けたくらいで破綻するような作戦を実行する気はないし、壁だけ壊したらゆっくり後方で指揮に集中してくればいいよ。その分今回は僕が前線で頑張るから。

『今回も、でしょうか？本当このご主人様は……』

【なんか不満げじゃん。どうしたの。】

『当たり前じゃないですか。サリーじゃないですけど前回みたいな無茶したら本気で怒りますからね??』

ガオツてディーヴァが牙を剥き出しにして詰め寄ってくる。サリーも無言で頷いてるし、あのツバキさんを殺した戦いでは本気で心配させちゃったからね……うん。気をつけるよ。サリーも近くにいない事だしね。

大丈夫。ディーヴァの言葉を信じるなら今回の神機使いはあの第一部隊ほど手練じゃない。数が圧倒的に勝る以上物量による暴力がどう働くかは僕にも分からないけど……総合的な危険度でいえば前回の比じゃないと思うから。ちゃんと無事に帰ってくるって約束す

る。

『ならいいんですけど。』

【……じゃあそろそろ行こっか。ロシア支部を潰しにね。】

【うん……頑張る。】

手筈も戦力も整った今、遂に実行の時だ。まずは指揮権をサリーとデイーヴァにそれぞれ与え、感応現象で『二人の指示に従え』とこちらの戦力のアラガミへと伝える。作戦予定地に着くまでに感応現象でアラガミを操るのに慣れておくといい。

そしてその上でロシア支部を覆う外周防壁の周囲まで足を進め、デイーヴァの先導の元に侵攻予定地点に移動。そのくらいでロシア支部も外壁の周りにアラガミが集まる異常事態に気付いたのか、壁の中から緊急事態を知らせるようなサイレンが鳴り響いた。

なんか探知されるまでが思ったよりずっと早いが……レーダーみたいなものでもあるのかな。何にせよここまで来たらもう後戻りはできない。

『ご主人様。間もなく神機使いが壁の外に出てきます。』

【ならその前に中を荒らしてやる。サリー、フリーユゲルの進軍とゾルダートの投下をお願い。】

【う……うん。えっと、壁の中に飛んで行って……!!】

そうサリーが指さすと、その単眼の怪鳥らは装甲に覆われた歩兵を足で持ち上げて飛び立つ。僕が生み出したフリーユゲルは仮にもアラガミ一匹を保持しているにも関わらず外周防壁などものともせず、に高高度から侵入し、瞬く間に空を覆い尽くした。

後で知ったんだけど、この当時は防壁を飛び越えて襲ってくるアラガミは存在しなかったんだって。だからこの時代の人間は空から脅威が降り注ぐなんて考えたことも無く、故に初めて行われたこの『空

襲』は見事に成功した。

サイレンが鳴り響いてから三分以内。フリーユージェルが保持したゾルダートが壁の内側へと投下され、ここにまで聞こえるような悲鳴が中から響き渡る。

当然空から降り注いだこれらの新型アラガミにロシア支部の神機使いは壁外の僕らの迎撃どころでは無くなり、脅威に晒された外部居住区の防衛へと駆り出される事となる。

これで壁の外の僕らは完全にフリーになったわけだが……デIVERア。あとはお願いしていいかな？

『任せてください。予定通り壁を破壊します。』

そう言つてデIVERアは歌姫のような甲高い咆哮を響かせ、天を仰ぐようにその力を解放する。すると赤いオラクル細胞が巻き上げられ、空中に無数の結晶の槍が生み出される。

しかもそれらは時間をかけて巨大化し、やがて一つ一つがデIVERアの全長を上回るほどの質量兵器へと変貌。おおよそ一個体のアラガミが用いるとは思えないほどの大規模攻撃として外周防壁へと放たれる。

その威力は想像を絶するもので、放たれた槍の一つ一つが容易に外周防壁を粉碎。砂の城でも崩すかのようにフェンリルの守りを破壊し尽くした。その破壊痕は大型アラガミの群れでも難なく侵入できるほどで、壁の内側のゾルダートに民間人が食い散らかされる光景がここからでも確認できるくらいだ。

なるほどね……こんな撃てば消耗するわけだ。

『ゼエ……ゼエ……そういうことです。あとはお願いしますね……ご』

主人様…………ぐふっ。』

【はいはいご苦労さま。慌てないでいいからゆつくり休んでからおいで。…………じゃ、先に行こうかサリー。】

ごろんと横になって荒い息をするディーヴアの頭を撫で、僕はサリーへと声をかける。でもサリーはサリーで、なにやら呆然とした様子で壁の中を見つめていた。

あー…………そうか。もしかしたらサリーが見るのは初めてか。よく考えたら、僕らつて神機使いじゃない人間って見たことなかったもんね。

【え…………あれが…………人間…………??】

為す術なく小型アラガミのゾルダートに食われる民間人を見て、サリーはそう漏らす。破壊された外壁から外へと逃れようとした人間が後ろから襲われ、中へ引きずられていく様や小さな小屋を焼かれ逃げ惑う子ども。

それらの光景は、どれもがサリーにとって初めて見るものばかりだった。今まで神機使いしか…………自分達に危害を加える天敵しか見てこなかったサリーにとつてそれは、到底信じられない光景だったのだろう。

だからこそ僕はサリーに教えてあげた。

【そうだよ。あれが人間だよ。】

【うそ…………だつて、だつてあんな…………】

【うん。人間はね？本来僕らよりずっと弱くて脆い生き物なんだよ。】

神機以外に僕らに抵抗する手段を持たず、傷つけば再生できないし一般的な人類は身体能力も圧倒的に劣っている。アラガミより高いものと言えば知能だけだったが、今やその知能すら追いつくのは時間

の問題つてところまで来ている。

そう……あれが本来の人間の力なんだよ。人間なんて本来あの程度のもなんだよ。小型のアラガミに遭遇しただけで為す術なく死んでいく。僕らに対抗しうる神機使いが例外なだけで、本当ならとつくにこの世界から絶滅しててもおかしくない生き物なんだ。

【なら……なんであんな弱い生き物を滅ぼすの？あんなの、放っておいたつて——】

【あの弱い生き物の中から神機使い僕らの天敵が生まれるからだよ。】

だからこうして滅ぼさなきゃならない。サリーやデーヴァを脅かす神機使いがもう生まれてこないように。この戦争はそのために始めたものなんだ。そのために滅びるべきは神機使いだけじゃない。人間という種族そのものなんだよ。

とはいえこれは……もう戦争つていうよりは虐殺だよ。サリーの気持ちも分かる気がするよ。あんま見てて気分のいい光景ではないよね。視覚的にも聴覚的にも。もし見てて辛いようならサリーもデーヴァと一緒にここで待つてもいいけど。

【……ううん。あなたが行くなら私も一緒に行く。】

【ありがとう。なら予定通り、サリーは上空からフリーユージェルを引き連れて神機使いの相手をしてあげて。】

【分かった。……あなたも気をつけて。大丈夫だと思うけど……】

僕を心配するように頭を一度撫でたあと、サリーはゆっくりと腰の翅を広げて空へと舞い上がる。が、その途中で何度も心配そうに僕の方をチラチラと見ていた。

……分かってるよ。ゾルダートが人間を平らげて支部内を破壊し尽くす前にさっさと片付けてしまおう。こうやって滅ぼす以上、なるべく楽に死なせてやるのがせめてもの情けだと思うしね。

【では大型軍団。進軍開始。】

蝕刃をデイーヴアが作り出した破壊痕に向けて命令し、神機使いを滅ぼすべく大型のアラガミの群れを向かわせる。その数は計二十三匹。果たしてこの状況に立ち向かう神機使いにとって、今から向かう増援がどれほどの絶望かは分からない。

しかし、僕が異形の戦列を連れて進軍する際。横になつたデイーヴアがボソツと呟いた言葉を確かに聞いた。

『私が現役神機使の時にご主人様がいなくて本当に良かった』と。

……まあつまり、そういうことなんだろう。

後で聞いた話なんだが、こっちの神機使いはオウガテイルを単独でやれて一人前。ヴァジュラ一匹で支部が軽くザワつくレベルなんだった。それを考えると本当に気の毒なことをしたよね。デイーヴアが僕を脳筋と誤解した理由が分かった気がした。

## 14. 蹂躪（パレード）

「た……助けてくれツツツ」

「アラガミだ……!!空からアラガミが!!」

僕が防壁の内側へと侵入した際には、既に地獄が出来上がっていた。空を覆うフリーユージェルが民間人を攫っては空中で食い散らかし、地上はゾルダートが抵抗もろくに出来ない人々を追い回してはその牙と尾で屠殺していく。

並ぶ家屋はゾルダートの放つミサイルに薙ぎ倒されるように粉碎され、恵みの雨のように血と臓物が降り注ぐ。乾いていた地面は既にあちこちに血の水たまりが出来ており、バラバラに喰い散らかされた腕や骨が中に浮いていた。

そんなベル●ルクとそう遜色ないこの光景の中、必死に戦う神機使いの姿も既に散見していた。展開が迅速なのは防衛班だからか。意外とこういつたケースはあるのか、妙に慣れた様子でアラガミと交戦しつつも無事な民間人を避難誘導している。まだまだ無事な人間がいるようで安心した。全部喰い尽くされてたらどうしようって少し心配してたんだよ。

【さて……どいつから頂くべきか。】

「!?こいつ……まさか極東の連中が言ってた新型か!?なんでこんな場所!!」

死体でもいいから口にしようと思いを見渡していたら、ふとそんな声が響いた。見ればロングブレードを構えた神機使いがこちらを見上げて臨戦態勢に入っていた。なるほど……既に情報は共有済みと。まあそりやそうか。他支部に僕らの情報が共有される前にここを落としたかったんだが、この分だと無理そうだね。

「隊長！隊長!!こちらE区画防壁!!例の新型が現れました!!至急集合



を――」

【敵前で連絡とは随分余裕じゃないか。】

何にしろ隙を晒したから、手始めにと蝕刃を振り下ろして頭から真つ二つに引き裂いた。そして切り口から蝕刃を通して捕喰。そうやって傷口から脳と臓物を撒き散らした死体に何度も蝕刃を振り下ろし、遺体を跡形なく平らげる。

そうして喰い尽くすと同時。僕の脳内にこの男の記憶と容姿。身体能力に関する情報が溢れ帰り、肉体に染み渡るようにして刻まれる。これをあと何十人こなせば僕は人間に擬態できるやら……記憶を身体に刻むこの行為は戦争という殲滅行為抜きに楽しいが、今は急いでいるからな。

ひとまず最低限今口にした男の記憶を漁り、向こうの状況と神機使いの配置を把握する。なにになに……さつき口にしたのは防衛班のメンバーで、巡回中に空からアラガミの群れが到来。地上に新種のオウガテイルを投下して……つてさつきまでの光景に関する記憶だな。もう少し前か後に何かないかな。

……この緊急事態に際して、全住民を中央施設に一時収容。神機使いの応援を要請。待機中の神機使いは直ぐに出撃したものの出撃中の神機使いは帰投に一時間ほどかかる……か。

つまり今こうして出動中の神機使いに加えて更に一時間後。外に出ている神機使いが応援としてやってくるわけだ。いや、実際にはもう少し早いと見ていいはず。なら……

『ディーヴァ。防壁侵入口周辺のゾルダートを自衛用に戻して。一時間くらい後に外から増援が来るって。』

『げっ。了解しました。……けどいいんですか？ご主人様の負担増えませんか？』

『大丈夫。こっちはサリーが上手くやってくれる。』

デーヴァにそう感応現象を繋ぐと同時、付近を蹂躪していたゾルダートが一斉に防壁の破壊痕から外へと撤退していく。このままだと壁の内側の神機使いと外から帰投した神機使いに挟まれる形になるからね。消耗しきったデーヴァがエンカウントするのも避けたいし、事前もって手を打たせてもらおう。

そして壁内から消えたゾルダートと引き換える形で、僕が引き連れてきた大型アラガミを戦線に投入。こちらには『武器持ちを攻撃しろ』と感応現象で命令を与える。

ただしヴァジュラ三匹にはゾルダート同様にデーヴァの元に撤退だ。必要ないとは思うがあつちに戻る戦力数が不確定な以上、防衛は過剰なくらいがいい。二人のどちらかでも死んだらその時点で僕は負けなんだ。

「ヴォウツ!!」

【さて……こつちもやることやらなきやな。】

ちようどタイミングよく中央施設の方向からこちらに向かってくる神機使い達が目に入る。その殆どは僕らの迎撃というよりは襲撃に晒されている民間人の救助に来たらしいが、何部隊かは進軍する大型アラガミの群れへと向かってくる。

「いたぞ新型だ!!あいつを潰せ!!」

「あいつがアラガミを指揮してるぞ!!」

【わざわざ死にに来たか。やれ。】

さつき殺した神機使いの報告を受けてか、避難誘導以外の神機使いは真つ直ぐに僕を潰しにかかってくる。報連相が早くて優秀な事だが、おかげでこつちからすれば入れ食い状態。やや後方に展開した遠距離型神機使いにはクアドリガとクーンメイデンを向かわせ、距離を詰めようとする部隊にはシユウ四匹とボルグ・カムランを当てる。

ピルグリム二組には救助部隊をやってもらうとして……サリエル

四匹はどうするか。空から戦域に毒でも撒いてもらうかな。

それにしてもロシアの連中は面白い編成をするね。多部隊での連携を前提としているのか、近接部隊と遠距離部隊で完全に役割が分けられている。あとはスナイパー型から編成された斥候部隊とね。

「なっ……………!!」

【気付いてないとも思ったか?】

真上から不意に放たれた銃撃を身体を逸らして躲し、その仕返しとばかりにコンゴウの能力を用いた蝕刃を外周防壁の上部へと振るう。飛ぶ斬撃で防壁もろとも粉碎しにかかるが手応えはない。上手いと逃れたか。

斥候部隊かとも思ったが、どうやら単騎だったみたいだね。ステルスフィールドで隠れていたから引き金を引かれるまで気付けなかったな。このまま死角からちよっかいをかけられると面倒だ。サリエル四匹には外周防壁上の掃除を頼もうかね。

「あの極東の狙撃手……………避けられてんじゃねーか!!」

「構わん!!元々俺達だけでどうにかするつもりだったんだ!!囲んで叩け!!」

【っと。】

そう保有戦力それぞれに攻撃目標を伝えていたところ、前後左右から一斉に近接型神機を手にした神機使いが襲撃してきた。まあ来るって分かってたから上に跳んで避けたけど。

しかもそのまま蝕刃を地面へと向け、今度はダイーヴアの能力を刀身に発動。落下の速度そのままに地面を蝕刃で貫き、地面から全方位に結晶の刃を形成して突き上げるようにして串刺しにする。

「ぐはっ……………!!」

【……………やはりあの部隊ほどの脅威ではないな。】

そして身体を捻って蝕刃による回転斬りを発動。串刺しになった

神機使い四人を切断と同時に一気に捕喰し、その記憶と生体データを取り込む。それと神機のデータもね。こっちはもう一つずつ頂いて暇もないから拾い上げたそばから自分の身体に突き刺し、傷口から取り込む形でまとめて捕喰する。

すると人間の情報より先に神機の情報が身体に蓄積されたらしい。僕の身体は更に新たな能力を会得した。

「くそっ!!この化け物!!」

声のした方を見ると倒壊してない家屋を足場に、ショートブレードを持った女が僕の首に向けて刃を振るってきた。咄嗟の事で僕は反応が遅れるも、不思議と危機感は無かった。

それもそのはず。既に十分な数の神機を捕喰した僕の身体は、性質を神機に寄せれば対応した神機による攻撃を遮断できるのだから。現に僕の首に振るわれた刃は皮膚の表面に食い込む程度で止まり、その光景に持ち主の女も目を見開く。

「……………は!?!」

『装甲化』とでも名付けようかね。果たしてどの程度の攻撃を遮断できるかは分からないが、この様子を見るにほぼ九割以上無効化できていると言っつていいだろう。

さらに左腕に新たな能力を発動し、腕全体を神機の捕喰形態のような黒い繊維で覆う。そしてその状態で女神機使いを手刀によって薙ぎ払うと、接触した箇所がごっそり抉れるように捕喰された。胴体を根こそぎ捕喰されたせいで神機使いはバラバラになって空中に散乱するが、この能力の本命は殺傷能力ではない。

蝕腕による『捕喰攻撃』。この一撃をトリガーに僕の脈動が一気に強くなる。全身のオラクル細胞が活性化し、様々な生物を歪に縫い合わせたかのような身体の隙間が赤いエネルギーを放って薄らと発光する。蝕刃もひとりでに縦に展開すると、中央の隙間から余剰出力となったオラクル細胞が放出。巨大な光の刃が形成された。

【なるほど……これが『バースト』か。】

力が漲るといふのはこういう事を言うんだらう。素晴らしい力を手にしてしまった。このままちまちま喰い尽くしてもいいが、新しい力を手に入れたら試したいのが男の子というものだ。この力……手始めにこの場の神機使いに試させてもらおう。

まずは腰の翼からエネルギーを噴出させ、一瞬で後方の遠距離型の部隊の元へと飛ぶ。咄嗟の事に神機使いの動きが硬直するから、まずは右手の蝕刃を真っ直ぐ振り下ろした。光刃によりリーチと破壊力が格段に増したそれは一瞬で女性神機使いの身体を縦に裂き、さらに続けざまに横薙ぎに一閃。回転斬りの容量で斬り抜けることで一瞬で一部隊を壊滅させる。

そして斬り抜け後に再び左腕に捕喰能力を発動し、辛うじて息のある死体の山に向けて振るう。そうすることで死体を纏めて捕喰し尽くし、記憶と肉体の情報を全身に記録。さらに残った神機も左腕で持ち上げるとコアの部分を握り潰すようにして捕喰し、身体に順番に取り込む。

何気に遠距離型の神機を捕喰するのはこれが初めてだが、一部隊分の神機を捕喰したおかげですぐさま機構と能力は学習ラーニングできた。いい加減能力を追加する箇所が無くなってきた僕の身体だが、この能力は蝕刃の拡張能力として追加。光刃の展開部に銃口としての機能を搭載することで習得する。

とはいえ遠距離に対する攻撃手段は既に幾つも持っている。専らその用途は近接戦闘における追撃と、全身に反映しきれてないアラガミの能力を銃撃として使う場合くらいか。

……なんて考えていた時だった。ふと殺気を感じて背後に左手の甲の邪眼を向けると、見慣れた相手が僕に突進しつつ神機を振り上げていた。振り向くことなく背部に蝕刃を構えて受け止めたが、装甲化を用いた今の僕なら防ぐ必要もなかったか。

「てめえ……なんでここにいる!!」

【君こそよく出てきたな。わざわざ死にに來たか。】

「この襲撃はてめえの差し金か!!何が目的だゲテモノ野郎!!」

振り向きざまに蝕刃を横薙ぎに振るい、シールドに防がせることで吹き飛ばす。ついでだから早速遠距離神機の能力を発動し、追撃として数発のオラクル弾を放った。けどその様子を見ると相手は建造物の裏へと身を隠し、建物の中を通って僕の死角から飛び出す。

そうして放たれた刺突を僕は結晶の壁を展開することで受け止め、同時に衝撃波を伴う振り上げを放つことでカウンターを決める。

(……今のはパリング!?こいつ、俺ひとの技を——)

【何にしろこの状況で単独行動とは感心しないな。ソーマ。】

そんなに僕が恋しかった?それともツバキさんに会いたくなくなったか……第一部隊の面々に死んでもらいたいのは変わりないから歓迎はするけど。この分だとさつき狙撃してきたのはやっぱりサクヤさかな。リンドウさんは……いるわけないか。神機壊したしねあの人。

そうなると隊長不在での臨時出撃。サクヤさんは衛生兵かつ狙撃手だから単独行動も視野に入るが、ソーマに至っては完全に私怨だろうね。僕のところに行ってきたのも含めて。ツバキさんの件と違いその前と言いつつこの部隊の人間殺してるしね。恨まれるのも当然っちゃ当然か。そんな『死神』の面目躍如とあっちゃ……ねえ?

「てめえだけは……生かしちゃおけねんだよ!!この連中にやらせるわけにも!!」

【一人でどうにかなると?……随分侮られたものだな。】

不意をついてソーマが神機を僕に真つ直ぐ投擲し、同時に弾丸のよ  
うな速度で僕に距離を詰める。しかしその投擲された神機を蝕刃で  
難なく弾き、左腕に捕喰能力を発現させる。

そして真つ直ぐ向かってくるソーマに向けて左腕を振り下ろすが、  
その一撃をソーマは跳躍することで回避。さらに先ほど僕が弾いた  
神機を空中で手にすると、真つ直ぐに落下の勢いを乗せて振り下ろし  
てきた。

うん……やはり戦闘センスはリンドウさんと比べても遜色ないレ  
ベルに高いか。二人の違いを上げるなら経験値の差、かね。

「ツツツ!!」

「ふむ……バスターすら通さないか。これならあの赤神機ブラッドサージも敵では  
ないやもな。」

さつき手にした『装甲化』の能力。全身に発動したままの僕は左腕  
で受け止める形でソーマの神機を止め、同時に捕喰能力を発動したま  
ま左腕で薙ぎ払う。

そうすればソーマの神機の刀身は粉々に粉碎され、その身体は地面  
へと思い切り叩きつけられた。あまりの勢いに一回バウンドした後  
ソーマは地面に転がるが、自分の神機を見てその顔は瞬く間に絶望に  
染まる。

ほんと……隙を見せると気持ちいいほど思い通りに動いてくれる  
な。リンドウさんなら動きを誘導されたって気付くだろうに。

僕はさつき口にした神機使い達の記憶……つまり戦闘経験をも自  
分の記憶として取り込んでいるんだ。神機の振り方、身体運び方、  
戦術に戦略……人間の全てを僕の能力として取り込み進行形で成長  
してるんだよ。ブラフの一つ二つ張るさ。

それに加えてこの『捕喰攻撃』と『装甲化』。もはや僕は一神機使い  
如きにどうこう出来る存在じゃないんだよ。

とはいえいくら神機を破壊したとてこいつはマーナガルド計画の産物。オリジナルとでも呼ぶべきゴッドイーターだ。生命力は並しびとの人間を遥かに凌駕する……故に、無力化した今でも確実に殺す。

まず蝕刃の中央からエネルギーを放出し、巨大なオラクル刃を刀身に纏わせる形で展開。振りかぶった後にソーマめがけて直線上に振り下ろす。その攻撃はきつとソーマにとっても見慣れたものだろう。

神機使いが『チャージクラッシュ』と呼ぶ能力だ。現にソーマは、倒れていたにも関わらず僕の予備動作を見ただけで横に転がって回避した。

……が、当然僕が神機使いの能力をそのまま使うわけがない。この一撃にも大幅に手を加えてある。

「ぐうっ……!!?」

赤黒いオラクル刃が地を裂くと同時。前方五方向に向かって地を這う巨大な斬撃が走り、無慈悲にソーマの身体を引き裂いた。それでもソーマは立ち上がって僕から逃げようとするが、これで終わりではない。

次に放つ一撃。それはチャージクラッシュを発動したままの蝕刃による横への薙ぎ払い。踏み込みつつ放つそれをソーマは流石に予想してなかったのか、半ば祈るように壊れた神機のタワーシールドを展開した。

しかし薙ぎ払いでもチャージクラッシュに変わりはない。ましてやアラガミ仕様だ。辛うじて防ぎはしたものの、もろに受け止めたタワーシールドは刀身同様に粉々に粉碎。ソーマも壁に叩きつけられるほどの勢いで吹き飛ばされた。

「——ッ!!?」

【まだまだ行くぞ。】



刀身にチャージクラッシュを発動したままの連続攻撃。バースト状態という余剰出力がなきゃまず扱えない大技だ。しかしその攻撃の数々は確実にソーマを追い詰め、彼の身体と神機を破壊していく。外周防壁に叩きつけられたソーマに向けてX字に蝕刃を振り上げ、今度は巨大な黒い斬撃を二連続で飛ばす。その破壊力はなんと外周防壁を粉碎するほどで、あまりの威力に外周防壁を壊してくれたデーヴァに申し訳なくなった。

そんな破壊力を持つ連続攻撃だ。ソーマを見れば既に全身血だらけで、いくら再生力を持つと言っても虫の息なのは明らかだった。これでトドメだ。これで二人目。最後の一撃でこのまま抹殺してくれる。

一際絶大なエネルギーを蝕刃に収束させ、オラクル刃を巨大化。あの種の巨大な砲撃レザとも呼べるほどの光の刃を形成する。これを振り下ろせば、ここら一带はオラクルの奔流に焼き払われる形で消失するだろう。

【さうばだ……神機使い。よく逃げたがここまでだ。】

ようやく光の刃ライソーを形成し終え、虫の息のソーマに向けて解放する。全てを破壊し尽くすバースト状態時の渾身の一撃。

その一撃で、この勝負は決着するはずだった。

しかし次の瞬間。吹き飛んでいたのは僕の右腕の方だった。肘から先にかけてが宙を舞い、少し離れた家屋の屋根へと突き刺さる。あまりに突然のことに僕も思考が固まるが、すぐさま何が起きたかを理解した。

腕の破壊痕……これは銃創だ。しかも一撃。狙撃型スナイパーだろうね。銃声がいなかったのはそれだけ離れた位置から撃ち抜かれたのか。

こんな芸当できる神機使いはそういない。恐らくサクヤさんだろうが……まさか差し向けたサリエル四匹を始末したのか？あの女ゴルゴめ。腐っても極東の神機使いか。

いや、重要なのはそつちじゃないよな。なんで『装甲化』を発動しているのに僕の身体に神機の攻撃が通ったんだ？しかもたった一撃で、僕の最も硬度に優れる蝕刃と同硬度の右手首が吹き飛ばされた。普段は銃弾を防げるような硬度なのに……どう考えても普段じゃありえないダメージの通り方だ。これはもしや――

「……………っ、ようやく隙を見せたな……………!!化け物!!!」

「!!……………まだ立ち上がるか。」

僕の思考を遮断するように、ソーマが壊れた神機を片手にこちらへと走ってくる。こいつもこいつだ……最初は無茶な私怨による独断専行と思い、殺すのに絶好のチャンスと思って戦いを仕掛けた。

が、さっきの狙撃で確信した。最初からこいつは罠だったんだと。神機を破壊されたのは流石に想定外だろうが、現に僕はこいつを追う形でまんまと射線の元へと誘導された。嵌められていたのは僕の方だったようだ。

……………バースト能力にイキって暴れてたらこのザマだ。わからせまでが早すぎるんだよ。情けないっいたらありやしない。

だとしても普通、こんなボロボロになってまで……自らの命を投げ捨ててまで罠をするか？こんな年端もいかない子どもが？いくら再生力が高いとはいえないけれど、もしか思えないな。そんなに僕を殺したかったか。自分の命を投げ捨ててまで……だとしたら大した覚悟だ。素直に尊敬するよ。

「しかし無駄な足掻きだ。そんな壊れた神機で何ができる。」

「ここで殺すんだよ……………!!てめえはここで!!!」

右手首の断面にディーヴアの能力を用いて結晶を生成し、巨大化させることで瞬時に結晶の義手を生成。応急処置を施し、僕に立ち向かうソーマを迎撃しにかかる。

一方で遠目に放たれた緑色の銃弾がソーマを撃ち抜くと、全身の流血が瞬時に止まった。回復弾か。あの安全地帯からよくやる。

だが今さら多少回復したところで問題ない……『装甲化』はソーマの神機は遮断できる。それはさつき実証した。それにそもそも神機はもう破壊したんだ。このまま距離を詰めてきたところをディーヴアの能力で――

「喰い尽くせ!!イーブルワン!!!」  
!?!

突如。砕けた刀身の付け根から黒い繊維が溢れるように展開し、巨大な獣の顎(あぎと)のような器官が形成される。それは壊れた神機の唯一の攻撃手段にして、最大の武器。謎の悪寒を感じた僕は慌てて左腕に捕喰能力を発動して振るったが、それより先にソーマの神機が僕の左腕を捕喰した。

しかもそれだけじゃない。ソーマは僕の左腕を神機で啜えると、そのまま力任せに振り上げることで僕の左腕を強引に引きちぎった。アラガミの僕でも激痛を感じるほどの負傷に僕は思わず後退するも、捕喰によりソーマはバースト状態へと移行。なんと捕喰形態を維持したまま手にした神機を僕に振るってくる。はやくも捕喰攻撃は僕に有効と見たらしい。

おまけに振るわれるそれに目をやると、何やら妙な変化を起こしていた。展開された繊維状の捕喰器官が黒から白へと変質を始めているんだ。それだけならまだしも、色調の変化は付け根だけ残った刀身やシールドにまでも起きています。僕を捕喰した辺りから変化が起きたみたいだが……なんだあれ。どうなってるんだ？

……興味深い話ではあるが、ここは退き時だな。このまま無理して消耗すると後の作戦に響く。僕の失態による悪手だが、幸いにも悪いことばかりではない。おかげで今回得た『装甲化』の能力の性質を見極めることが出来た。

それに『捕喰攻撃』によるバースト能力……この二つはサリーやデーヴァを始めとしたアラガミにさらなる力をもたらすだろう。

「ふざけんな!!ここまでやって逃がすかてめえ!!」

「なに……お互い生きていればまた会うさ。決着はその時につけよう。」

結晶で出来た右腕を地面へと叩きつけ、デーヴァの能力を発動。残る余力で巨大な結晶の壁を作り出し、ソーマを強引に分断すると翼を広げて上空へと撤退する。その隙を逃すまいと遠目にスコープに光が反射したが、狙っている箇所が傷の残るコアであることは予想できた。

だから硬質の結晶で出来た右腕で胴体を庇うことで狙撃を無効化し、同時に右腕の掌に結晶の槍を生成。勢いよく投擲して光った場所に撃ち出す事で、着弾地点を無数の結晶の棘で覆い尽くす。

……が、恐らく命中してはいないだろう。今度戦う時まで狙撃用の能力も考えておくかな。今回はこの隙に身体を加速させ、さっさと戦域を離脱させてもらう。なんせ僕にとっての本命はこれからだ。

空中を駆け抜ける形で僕は壁外へと脱出を果たし、感応現象でサリーにも撤退を命じる。一方で投下した戦力には引き続きロシア支部内を侵攻。あちこち荒らしてもらって神機使いを疲弊させてもらう。

そうしてしばらく待つとロシア支部の壁を超える形でサリーがこちらへと飛んでくる。えらく疲弊しているのかふらふらとこちらに降りてくるから、僕は両腕……はないから義手の右腕だけ広げる形でサリーを受け止めようとする。

けど僕を上回る体格を持つサリーにはちよつと無謀だったみたい

だ。ふわりと着地するサリーに巻き込まれる形で勢いよく地面に押し倒されてしまった。

【サリー……………苦労さま。怪我とかしなかった？】

【私は大丈夫……………ってどうしたの!?そのケガ!!まさか今ので——  
——】

【ちよつとヤンチャしただけだよ。平気平気。】

前のツバキさんの時と違って治療すれば治る怪我だからね。しばらく放置しておけば勝手に治る。……………なんて言ってもサリーは納得しないよね。既に僕がどこにも行かないようになってのしかかったまま体重をかけてくるし、ドレス状の翅からは回復効果を持つ鱗粉を。両掌の邪眼からは部位再生の擬似回復弾を放射状に散布しながら僕の傷ついた箇所を撫でている。ちよつとくすぐりたい……………

【誰にやられたの……………?もしかして……………】

【例の部隊だよ。彼らもこの戦線に参加してた。】

【やっぱり……………あいつら嫌い……………】

分かるよ。本当に厄介だよ。その他の神機使いも相手取ってきたから分かったけど、やっぱあの部隊はイレギュラー過ぎる。あそこがって言うよりは極東自体がイレギュラーなのかもだけど。

そのうち極東支部を落とすに行く際はどれだけ苦戦を強いられるやら……………リンドウさんいなくてこれだったもんな。今回は僕の失態が大きかったとはいえ先が思いやられる。

……………というか、考えるまでもなくあの連中を片付けるチャンスだったろうに。わざわざ神機使いの能力で相対せず、アラガミの能力をフルに活用すればソーマー一人を縊くびる方法なんていくらでもあったはず。

それを僕はなんで……………今こうして選択肢が頭にあるのに、あの場であんな愚行を犯したのか。またとない機会だったはずなのに。神機

の能力に浮かれていたとはいえ、あそこまで過信するなんて。そう自分の行動に理解不能な疑問……もはや『違和感』とも呼べるそれを抱いていると、サリーは僕の顔を心配そうに覗いてきた。

【……大丈夫？やられた傷が痛むの……??】

【いや……問題ない。ただ我ながら馬鹿な真似をしたなって。】

「本当ですよ全く。無事に帰ってくるとか息巻いておきながら。」

突然人間の女の声がしたから、僕とサリーはびっくりして同じ方向へと振り向く。するとそこにはフェンリルの制服を身にまとった大柄な女性が仁王立ちしていた。サイズが合わなかったのか胸元は大きく開いており、上着は肩にかけるように羽織ることでマントみたい  
に風に揺れている。

何より。その結晶で出来た義手状の右腕が、この女性が誰かを証明していた。

【やあディーヴァ。もう動いて大丈夫なのかい。】

「それどころか外から来た連中に鉢合わせたから身ぐるみ剥いできましたよ。中を全裸で練り歩くわけにも行きませんからね。」

【鉢合わせてたんだ……しかも剥ぎ取ったって……】

ディーヴァに出くわした神機使いは気の毒だ。その言葉に僕もサリーもそんな感情を抱いていた。合うサイズがなかったのかよく見たら着てるのも男物だし。似合うな……なんて思ってしまったのは身長が高いのがつしりした身体付きをしてるせいだろうか。

……で、なんか怒ってるっぽいけど……僕なんかやっちゃった？なんてシラを切ろうとしたら寄りにもよって結晶の方の右腕で顔面に手刀を入れられた。いてえ。

「全く。無茶しないって言ったのに本来の作戦と関係ない相手に喧嘩売って、その挙句に重傷とか……自殺願望でもあるんですか。」

「ごめんなさい。その件は本当にごめんなさい。」

「……一応聞きますけど、ちゃんと人間に擬態できるだけの情報は溜めて来たんですよね？首を横に振ったらグーで殴りますよ?？」

……無言でディーヴァから目を逸らしたら右ストレートが飛んできた。しかも顔面ど真ん中に。ヤバイソーマに出くわしてからあいつ殺すのに夢中で忘れてた。なんで忘れた??え、こんなことある??いくらなんでもバカ過ぎない??もう二、三発殴っていいよディーヴァ。失態に失態か?死ぬ気か??

どうしよう。二次侵攻どころどころの話じゃなくなっただけど。なに?じゃあ今からもう一回ロシア支部内に突撃して人間を捕食してこいと?こんなバリバリ警戒体勢の戦闘区域で?消耗しきった身体で??無理に決まってるだろそんなの。

「ほんつとこのご主人様は……保険用意しといてよかったですよ。」

「え。保険ってなに。」

「さつき私が身ぐるみを剥いだ連中、再起不能にただけでまだ生きてますから。ついてきてください。」

そう言つてディーヴァは壁沿いに最初の破壊痕の方向へと向かって歩き出す。すると程なくして身ぐるみを剥がれて横たわる神機使いが複数人僕の視界へと飛び込んできた。幸いどいつもこいつもまだ息がある。これはありがたい。

不幸中の幸い、僕はあと少しつてところまでは人間を捕喰できていく。恐らくこここの人間の半分も捕喰すれば僅かに足りなかった人間の情報を蓄積できるはず。

本当に助かった……これはもうディーヴァに足向けて寝れないね。めっちゃドヤ顔してデカイ胸を張ってるけど本当誇っていいよ。二階級特進でいいよ。

「二階級特進って死んでるんですが?？」

「とにかくありがたいがどうねデューヴァ。この埋め合わせは今度必ずするから。」

両腕が欠損したままだから蹲る形で、僕はデューヴァが身ぐるみを剥いだ神機使いを捕喰する。逃げられたり騒がれるのも困るから首の辺りを顔本来の口で喰いちぎり、絶命する前に頭から下にかけて順番に捕喰。非常にゆっくりとしたペースではあるが平らげ、その記憶という名の情報を身体に刻んでいく。

一人、また一人。そうして捕喰していくうちに被食者の記憶が自分のもものとして累積していく。家族、仲間、恋人……そうした割と無価値な情報と任務や神機使いとしての技術などの有用な情報は取捨選択できない。全てが僕の一部として書き加えられていく。

そうやって僕は目の前の最後の人間に口を付けた時。どくんという音と共に僕の身体が脈打ち、全身の細胞が人間という生物の細胞を完全に学習する。

人間は体細胞の作りが全身がオラクル細胞で出来たアラガミとは異なる。今まで口にしたアラガミの性質の模倣は、言わばオラクル細胞の並べ方を変える程度のものであった。しかし人間の場合は細胞の形そのものから変えなくてはならない。だからこんなに学習までに時間がかかってしまった。

しかしそれももう終わりだ。僕は体内で早速自身の細胞そのものを変質させ、アラガミの身体の背中を引き裂くようにして内側から開いた。

あまりに歪で醜悪なそれは傍から見れば悪質な着ぐるみのようにも蛹のようにも見えるだろう。しかし僕が中から新たに生成した肉体を起こすと、アラガミとしての身体は徐々に霧散を始める。

やがてアラガミの身体はボロボロと崩れ落ち、人の形質を模倣した僕は元の身体を脱ぎ捨てる形で静かに地面へと着地した。継ぎ接ぎだらけの身体を捨てた肉体は信じられないほどに軽やかで、頭の中は



何とも晴れやかな気分だった。

……しかし容姿や外見については特に考えず変異したが、今までこんなやつ食べたことあったっけ。そう考えずに居られないような容姿の人間へと僕は変わり果てていた。

なんせ肩にかかるふんわりした髪の毛は月光みたいな白銀色で、瞳はこれまた朝焼けみたいな赤にも紫にも見える不思議な光を宿す。

太陽に翳すように広げた左手のひらに邪眼を開いて自分の顔を凝視するも、その顔付きは少年とも少女ともつかない幼げなもので長いまつ毛や肌に至るまでもが雪みたいに白い。

衣服は肉体の構築と共に散々口にした神機使いの記憶を頼りに、肉体の表面に繊維の性質を模倣しつつ変質させることで黒いボロボロの外套を生み出す。こんなみすぼらしい格好したのが助けてって逃げ込んできたらきつと招き入れてくれるだろう。けど念の為潜入時に軽く土埃は被っておこうか。

仮にそのくらい汚れたとしても、僕は本来の姿とはあまりに対称的な姿になった。あっちが生命の理を土足で踏み躪る程に歪で醜悪なのに対し、こっちの姿は軽く引くぐらいに端正で美人だよ。身長は男性として見たら相当に小柄な部類だけど、今回はそれすら幸いと作用した。

おまけに身体付きは全体的に細くも柔らかめで、変異しておいて性別が自分でも分からない始末。……こんな不思議なやつ口にしたら覚えてると思うんだけどな。サリーとディーヴァはこの姿を見たことある？僕が今まで口にした人間に関しちや僕より二人のが詳しいでしょ。

「ううん……全然ない。」

「ご主人様……いつの間にそんなかわいい子を手にかけたんですか。いい趣味してますね。」

「うっせ。僕も口にした覚えがないんだよ。」

となると、だ。僕がサリーやディーヴァに会う前に口にした人間……なんていないんだよな。僕が人間を口にしたのはサリーとディーヴァに会ってからだから。

そう考えたら可能性として上がるのはひとつ。僕がアラガミになる前の人間の姿がこれだったか。そもそも覚えてないからなあ人間時代。こんな超美形だったら普通に暮らしてたらさぞ人生楽しかったろうに。

人の美醜とか分からないサリーはえらく小柄になってしまった僕を困ったように抱きしめようとはしているが、元人間のディーヴァは僕の顔からつま先を眺めて何やらうんうんと頷いている。こうなるまでに随分と手間をかけさせちゃったけど、満足してくれたみたいでよかったよ。気に入ってくれた？

「ええ。身なりから容姿に至るまで潜入には理想的な姿だと思いますよ。まず間違いない動くまではバレないでしょう。」

「そういう君はデカいしくつそ目立つけど大丈夫？ 結晶の右手とかどうにか出来ないのかい。」

「いえ。この手でしか私はアラガミの能力を使えないので。上着で隠せば大丈夫ですよ。」

そういうものかね。けど言われてみればディーヴァってアラガミの形態になる時もあの腕を叩きつけて変身してたっけ。ならしようがないかな。ぶつちやけ腕がどうこう以前にディーヴァは身長でかくて目立つし。中が襲撃に晒されて大騒ぎになってれば、多少の違和感目は目をつぶって通してくれるだろう。まず向こうはアラガミが人に擬態するって発想すらないんだから。

しっかし……全身を伸び伸びと動かしてはみるが、身体能力はさすがに落ちるな。一応蝕刃は右手から形成できるとはいえ、能力の大半も使用が不可能となっている。神機使いとの戦闘は極力避けるべきか。あくまで目的は新型神機使いの候補者や関連施設の破壊と、フェ

ンリルの重要設備の殲滅。支部を機能不全に陥れるための破壊工作だ。

それとあと中の避難民の大量殺戮ね。こっちは壊すだけ壊したら最後に仕上げとしてやる感じかな。いやあ心が痛むね。どう皆殺しにしてやろうか。毒ガス訓練でも開始するか？そのくらいならこの身体でも行けるはず。

「うっわ……絶対心痛んでませんよこの人。すんげえ楽しそう……」

【楽しむのはいいけど気をつけてね……？もう怪我しちやいやだよ……??】

「大丈夫大丈夫。今回はお目付け役ディーヴァもいるからさ。ちゃんと守つてもらうよ。ね?。」

そう言つてディーヴァの方を振り向いたら「え?」って唾然としてた。なに不思議そうにしてんだ当たり前だろ。人間に擬態した僕はめちやくちや脆弱なんだから。

それともあれか?メイ●リクス大佐みたいな体格に身体を再構築するか??今まで口にした人間の容姿を参照したら多分調整できさぞ。そうしたら僕もディーヴァみたいな筋肉モリモリマツチョマンの変態に――

「わーストップストップストップ!!それはダメですご主人様!!」

「なんでだよ。」

「華奢で儂い美少年にそれはあまりに勿体ないです!!ていうかその顔でゴリラは色々と事故ですよ!?!ご主人様はちゃんと私を守りますから!!ね!?!」

頼もしくて大変よろしい。ま……そもそも守るも何もこそこそと相手が僕らに対抗出来る手段を潰して回った後に皆殺しにするって作戦なんだから。変なドジ踏まなきや至つて安全なんだよ。お互いにしくじらないよう行きたいものだね。ディーヴァはまだしも僕が

何かやらかささないようにサリーには祈っててもらおう。外に破壊と混乱を撒き散らしながらね。

【うん。外は任せて……アラガミの使い方は分かった。】

「よしよし。偉いねサリー。……んじや、そんなサリーのためにさらなる戦力を与えてあげよう。」

【えっ。】

僕がパンツと手を叩くと同時。地面からボコオ!!と音を立てて無数の変異したコクーンメイデンが生えてくる。そして僕が目を感じて感応現象を発動すると同時。五十近くのコクーンメイデンは一斉にブルブルと震え出し、その身にとある変異を引き起こした。

こいつの改造案には少し悩んでただけだね? 今回の戦いのおかげでいい運用方法を思いついたんだよ。その使い方はサリーに感応現象で伝えるけど……その全てをサリーに伝えると、サリーは少々難しそうな顔をしていた。扱い自体は簡単でしょ?

【簡単だけど……いいの? これ……】

「いいよいいよ。倫理的には超アウトだけどね。ゾルダートとフリーユージェル動かす前にこいつら使うだけでいいから。」

「えっ……ご主人様? 何作つたんですか?? 外見はそんなに変わってませんけど……あと沢山いるとキモいですねコクーンメイデン。」

ディーヴァがフルフルと震えるコクーンメイデンの群れを見つめてげんなりしつつも僕に尋ねてくる。んー……教えてあげない。だってディーヴァ知ったら絶対反対するもん。その威力はきつと僕らが潜入した際に目の当たりにすることになるから。楽しみにしててよ。

さてと。第二次侵攻の準備はこんなところで十分かな? あとはそうだね……今回の作戦で手に入った『装甲化』と『捕喰攻撃』の能力をサリーとディーヴァに感応現象で共有して、と。だいたい強力な能力

だけど弱点も多いから、くれぐれも使い所は慎重に選んでね。そもそも使う機会あるかはさておきね。

「うん……あなたも気をつけて。能力ありがとう……」

「平気だと思うけど無理はダメだからね。外は任せたよ。」

「あなたがそれ言いますか。……サリーはなんか困ったことあったら感応現象で呼んでくださいね。余裕あったら出ますから。」

そう言つて僕とディーヴァはサリーと別れ、再び戦乱の渦中へと身を投じた。防壁の破壊痕に向けて足を進め、人の目を盗んで壁の中へと侵入。ディーヴァに手を引かれる形でフェンリル中央施設に向けて歩き出す。

こうしてロシアの砦に引導を渡すための最後の作戦が幕を開けた。不思議と気分が高揚したのはこれで人類の破滅が始まる。そんな確信と共に、ようやく僕が心の中で抱いた宿願を叶えられた喜びが今になつてやつてきたせいでもあつた。

ついでにその様子はディーヴァにも筒抜けだったらしい。僕の手を引くディーヴァはそれは微笑ましそうに僕を見つめていた。

「……………ご主人様。人間に戻なれて良かったですね。」

「本当にね。やっぱこの身体が一番落ち着くよ。」

「あの時の質問を返すようですが、人間の暮らしに戻ることもできるんですよ？ 本当にこのまま作戦を実行していいんですか？」

そんな分かりきつたことを聞くなんて……ディーヴァも意外と意地が悪いね？ 人間の真似事くらなんて人間滅ぼしたあとでもいくらでも出来るんだ。その相手が人間からサリーやディーヴァに変わる。それだけの話だよ。僕が人間性を獲得したからって、それが人類に牙を剥かない理由にはならない。僕らの理想郷のために人類は滅ぼす。それだけは絶対に変わらない。

予定通りだ。予定通りにロシア支部をぶつ潰し、ここを人類絶滅の

ための最初の拠点とする。心配しなくても今度は上手くやるさ。そのため僕は人間になったんだから。

## 15. 悪意（マステマ）

僕とディーヴァが襲撃の動乱に乗じて再び壁内へと侵入してからしばらく。神機使いと僕の支配下にあるアラガミの戦闘は未だに続いていた。段々と対処方法が確立されているのかゾルダートとフリーゲルは難なく処理されるようになり、大型も何体か破られている辺り少しこっちが押されているみたいだ。大型組はまだ既存の个体と能力自体は変化がないとはいえ、存外ロシアの連中も頑張っているらしい。

加えて民間人の避難誘導はあらかじめ片付いたのか、それともすでに死んだか。不思議と神機使い以外に人影らしい人影はなく、もはやこの戦場に安全地帯なんてものは存在しなかった。避難誘導という建前を失った神機使いはアラガミ殲滅のために容赦なく戦火を拡げ、それに応えるかのように空から放たれるサリーの熱線が地上を焼き払い瘴気を巻き上げる。

やっぱり人間は戦うと元気になるなあディーヴァ！死が急速に迫ってくる瞬間が一番生を実感できる!!……ってか？ほんっと人間ってやつは……そんなに戦うのが好きかい。

なら見せてやろうか？もっと面白い絶望もをよ。

「……ッ!?この力は……さっきの!？」

「そうだよ。僕が新たに得た能力だ。」

さつき散々神機使いと一緒に平らげた神機由来の能力。『捕喰攻撃』と『装甲化』の二つを、僕の配下の大型アラガミに感応現象で伝達してやった。

『捕喰攻撃』は言うまでもなく神機の機構をそのままアラガミの身体に転用したもので、生物だろうが装甲だろうが捕喰により破壊。さらに豪華特典として身体に神機使いで言うバーストを引き起こす最強の矛だ。

僕と違って流石にバースト時限定の能力とかはまだ持っていないだろうが、それでも攻撃力と行動速度は跳ね上がる。何より捕喰攻撃自

体がガード不可能の攻撃として機能するだけでも人間には十分に脅威になるだろう。

ただどうにも結合崩壊するとバーストが解除されるみたいだが、逆に言えばそれまでは無制限にバースト状態を維持できるわけだから。こういう戦場なら餌には困らないし、どんどんバーストして行こうね。

加えて『装甲化』。こっちは僕の身体で試しただけだからまだ未知の部分が多いが、要約するとバースト時に特定の神機による攻撃を遮断できる。試した感じ剣戟か銃撃のどちらかを選んで無効化できるが、一方を無効化するともう一方がめちゃくちや通るようになるのが弱点。

ソーマの神機に用いた際にサクヤさんの銃撃で僕の身体の中でも最硬度の右手が破壊されたのは多分そういうことだろう。厄介な欠陥ではあるが、攻撃の半分を無効化できるのは防御能力として見ればあまりに破格。特に今回近接と遠距離でそれぞれ部隊を固めてるロシアにはぶつ刺さる性能をしている。

ただあの感じだと神機の捕喰攻撃も防げなかったし、使い方を間違えると自分の首が絞まるのは本当だからね。まだ状況判断能力に欠ける大型アラガミは、しばらく戦って一番厄介な相手に合わせて発動すればいいんじゃないかな。

……と、未来の灰域種も苦笑いな能力二種類を僕の配下の大型アラガミに共通能力として与えてみたわけけども。そうするとほぼ同時に戦場のあちこちから赤い光の柱が天に昇った。一齐にバーストしたみたいだね。怖い怖い。僕が神機使いだったら泣いちゃうね。現に戦闘音に混じって明らかに神機使いの悲鳴が増えた。ついでにデーヴァがドン引きしたように僕のことを見つめていた。いいでしよこの能力。

「ほんつと……私、初めてアラガミ<sup>脱・神機</sup>化してよかったなって思いましたよ。」



「ね。こいつらけしかけたら第一部隊潰せないかな。」  
「無理じゃないですかね。」

これでも無理かあ。まあ対策練られたらそれまでな付け焼き刃の能力だしね。新型神機使いなんて出たら大して役にも立たないし。近接と遠距離で部隊を分けてるロシアにはぶっ刺さっただけで。けどこれなら僕らが仕事を終えるまでの間にサリーもどうにかできるだろう。あんまりあの子に負担かけるのもかわいそうだからね。

しっかし……民間人が既に全く見当たらないとはいえ、誰も僕らに救いの手を差し伸べてくれないな。美女と美少年がこんな戦場のど真ん中で逃げ遅れて困ってるのに。アラガミがえげつないパワーアップして余裕が無いのは分かるけどさ。ちよつと薄情過ぎるんじゃない?? さっさとあの中央施設に僕らを誘導して欲しいんだけど。もう助けてーって叫んでみるか。

と、僕が口を開きかけた時だった。ディーヴァが何かに気付いたらしい。僕の前でびたりと足を止めた。

「……………ご主人様。気のせいでしょうか。」  
「なにが。」

「なんか……大型アラガミが増えてませんか？一次侵攻で全戦力投下してから補充してませんよね?？」

あ、そうそうそれね。僕も思った。確かに僕は魔改造クローンメイデンしか投下してないし、既存戦力はサリーに預けた分で全部だよ。なのに言われてみれば明らかにコンゴウとかヴァジュラとかあちこちに出現している。特にヴァジュラなんてここに来るまでで十体は確認してるからね。僕三匹しか用意してないのに。

おまけにその個体はいずれも体色が真っ白白々助でちゃんと僕の支配下カラー。仲良くサリーの言うことを聞いて神機使いに牙をむい

てます。なので何も問題ありません。ノープロブレム。気にしたら負けだよ。……なんて言ってディーヴァが納得するわけないか。この子細かいことが気になるよと夜しか寝れないタイプだもんね。

「あれだよディーヴァ。ゾルダートいるじゃん？あいつらが神機使い喰いまくって進化したんだよ。コンゴウとかヴァジユラに。」

「つくならもう少しまともな嘘ついてくださいよ。……その感じだとなにか知ってるんですね？」

「まさか。僕だって正直ビビってるよ。どこから生えたんだろうねあいつら。」

戦力補充の手間が省けたから気にしないようにしてるけどさ。勝手に知らないところで自己増殖するとか怖すぎでしょ。僕の細胞にはさすがにそんな便利機能ないし。もしかしたら僕カラーのアラガミがオラクル細胞に形成モデルとして記憶されて、不幸にもこの戦場のど真ん中に自然発生する形で増えたとか？そのくらいしか考えられないんじゃないかな。

あるいは目を離れた隙にサリーがどっかから補充してきたか。あの子の鱗粉は広域のアラガミを汚染する形で支配下に加えられるからさ。改造クローンメイデンを投下する前に補充してくれたのかもね。だとしたら優秀すぎる。もつと好きになっちゃうよ。僕やディーヴァには出来ない芸当だからね。この作戦が片付いたらぎゅーってしてあげよう。

……なんて。いくつかディーヴァが納得しそうな答えを用意してあげたけど、ディーヴァはまだ怪訝そうに僕のことを見つめている。どっちかは本当なのに。こんなかわいい美少年が本当って言うてるから本当だよ。

「ご主人様？本当のこと言わないとお身体に触りますよ??」

「もう触ってるんだけど？判断が早い。……ん”っ。」

「ぐっへへ……胸のあたりもぶにぶにして柔らかいけどちやんとち●ありますね。男の子……でいいんでしょうか？ご主人様はかわいいですね。」

なんでそこまで確認しといてまだ疑問形なんだよ。股間を鷲掴みにされたせいで変な声出たじゃねーか。さすがディーヴァ。『触る』と心の中で思ったなら！その時ステに行動は終わってるんだね。あとで覚えてろよマジで。仕返しにそのデカ乳鷲掴みにしてやるからな。西瓜みたいなの二個もぶら下げやがって。

「ほう……いい度胸ですね。私に抱かれましたか？」

「ガチの脅迫やめて？その身体でそんな事されたら僕死んじゃうよ。」  
「サリーの目の前でぶち犯されたいみたいです。よく分かりました。」

こいつサリーまで人質に取るか。やめろよサリーにそんな生々しいもの見せるの。あの子知識はあるはずんだけど結構ピュアなんだから。トラウマになったらどうするんだよ。

はー……分かった。休戦だ休戦。ていうかそろそろ中央施設つくじゃん。あそこの入口辺りにいる神機使い、多分だけど門番かなにかだろ。そろそろ怪しまれないように避難民を装わなきゃ。ここからは会話も全部感応現象だね。僕がディーヴァに拾われて一緒に来たって体で行くから。

それにしても全く……ここに来るまで結局誰も僕らを助けてくれなかったな。超激戦中だったから仕方ないとはいえ、案外この連中ってガチで薄情なのかもしれないな。いや、そもそもただでさえ資源が枯渇してるだろうし僕の襲撃を利用して口減らしでも図ったか？ここまで来て門前払いとか嫌だよ？

『大丈夫ですよ。ここは私が上手いことやります。』

『んじゃ任せた。違和感なくやるんだよ。』

『……善処します。』

感応現象でそうやり取りを終え、デューヴァが門番らしい神機使いの方へ僕の手を引いて『いかにも逃げてきました』つてばかりに駆け寄る。幸いさつき戦場のど真ん中を突っ切ってきたせいで僕もデューヴァも巻き上げられた土煙や煤に塗れており、風貌で違和感を感じさせない。いや、デューヴァの場合はお前のようなデカい女がいるかって怪しまれそうだけど。少なくとも僕は大丈夫だろう。

そう思ったから僕はデューヴァが神機使いの元まで辿り着くと、まるで怯えたかのようにデューヴァの腰へと抱きついた。下手に口を開かないよう、外見年齢相応かつ大人しげな性格だと身振り手振りでそう示した。その演技が中々に様になってたのか、門番の神機使いは僕とデューヴァを見つけるとあちら側から走ってきた。

「……生存者がまだいたのか?!よくここまで来たな!!」

「た……助けてください……アラガミに襲われて……」

「はっ……はっ……死ぬかと思った……!!」

……などと被害者ヅラした演技に、その神機使いの男は僕らを一切警戒することなく中央施設の中へと入るように促した。おかげでこの瞬間にロシア支部の壊滅は決定したわけだけど、彼が敵をみすみす通した大間抜けと後世に語り継がれる事はないだろう。何しろこの先の人類に後世なんてものは存在しないのだから。

お勤めご苦労様。なんて内心でほくそ笑みかけていた時だった。

「……………って、フレイ・アイアンハート様?!」

その神機使いはデューヴァを見つめてそんな驚愕の声を上げていた。フレイ・アイアンハート……デューヴァが神機使いだった頃の名前か。何やらその名前を呼んだ神機使い顔は驚愕とともに恐怖と絶望に染まっており、デューヴァはデューヴァで何やら気まずそうに目を逸らしている。

おい待て。めっちゃ顔を覚えられてるのもそうだけど、デューヴァ

？なんでフルネームで様付けで呼ばれてるの??こつちを見る。何やらかした。フェンリル現役時代に何やらかしたんだおい。警戒されてんじゃねーか。

「……久しぶりですねエヴァン。元氣そうで何よりです。」

「えっ……なんでアイアンハート様がここに!?!死んだはずじゃ——」

「残念だったな。トリックだよ。」

仮にも成人男性に体格で圧倒的に勝るディーヴァに詰め寄られ、エヴァンと呼ばれた神機使いがたじろぐ。……そうか。ディーヴァってここでは帰らぬ人となってるわけで、本来死ぬなりアラガミ化してるなりしてる彼女がここにこうして現れた。それだけでロシア側に見れば怪現象になるわけか。そりや亡霊でも見たような顔もするわ。

……いや。それ抜きに恐れられてる気がしないでもないな。本当に何したんだか。これは参ったな。ロシア支部内でもディーヴァが有名人だったなんて。そういうのは先に言っておきなさいよ。多分言いたくない内容だから黙ってたんだらうけど。

どうするんだよ破壊工作。この様子じゃ入ったらクラブのストリップ並にロシア支部の人間の視線を独り占めすることになるし、こそこそバレないようになんて無謀もいいところだよ?。

「それよりエヴァン。地獄から舞い戻ってみればなんですかこの状況は。まるでこちらも地獄じゃないですか。」

「それが……先ほど奇妙なアラガミが徒党を組んで襲来してきたのです。中には極東の連中の報告にあつた新種の姿も……」

「そういう事ならさっさと通してください。いつも通りに私が出て全部ぶっ潰してきます。……私の神機はまだありますよね?。」

そう僕がげんなりとしている傍ら。ディーヴァはそう口にする、

僕にこつちに来るようにと手招きをする。これから中央施設に悪さする僕視点ですら妙に頼もしいディーヴァの姿に、エヴァンは少し考えた後に大人しく扉を開けてくれた。

その顔に少し安堵の色を浮かべているのを見るに、神機使い時代のディーヴァは間違いなく頼りにはなつたのだろう。実際はトドメを刺しに来た側なのに。

しかしなるほどね……ディーヴァ。今の口振りで分かったよ。君は元々、ここに来た時点で神機使いとして出撃する気だつたんだね。自分の顔が知れてるのも織り込んで、その上でディーヴァは既に破壊工作の算段を付けている。

神機使いとして顔が知れてる。本来こそそそするなら不都合ではないが、神機使いって身分なら堂々と侵入できる場所もあるわけだ。例えばそう……『神機保管庫』とかね。僕みたいな民間人が入ったら違和感しかない場所も、神機使いのディーヴァが出撃のために神機を取りに入るなら何の問題もない。

それに神機の整備を行うあそこを真っ先に潰せれば、現在外で僕の配下と交戦してる神機使いへの増援も断てる上に中で待機してる神機使いは全て無力化される。神機使いなんて神機を握らなきゃただの人間なんだから。残りの施設の破壊と人間の虐殺なんかそうして戦力を奪い尽くした後にいくらでも好きにできる。そういう事だね？

『あそこは整備士ばっかで戦える人なんていませんから。入れれば余裕ですよ。』

『冴えてるねディーヴァ。そういう事ならそつちは君に任すとして……僕はどうしようか。』

『ご主人様は電気室をお願いします。あそこは鍵がかかっているだけで見張りもいませんから。』

そりやアラガミが人間に擬態して侵入してくるなんて普通予想つ

かないだろうからね。この時代に人間の不審者なんてそう滅多にいないだろうし。鍵なんて蝕刃を使えば簡単に破壊できるし、侵入自体はそう難しいものでもないはず。

そのくせしてここを落とせば、支部内の照明やコンピューターを始めとした通信施設などの機能の殆どを使用不可能にできる。そうすれば他支部に救援を求めることが出来なくなるだけでなく、同時に今回ロシア支部であった事件の一部始終を他支部に隠蔽できるわけだ。

つまり今回の破壊工作が次の作戦でも使用可能になる。いや……上手く行けばロシア支部が陥落した事そのものを隠蔽することもできるか？アラガミの群れに襲われはしたけど無事に撃退しましたってフェンリルの他支部に伝えれば。そうしたらまた奇襲同然に侵攻を行えるのでは？

……なんて高望みし過ぎるのは良くないね。こういうのはイレギュラーが付き物なんだ。無事に事が運べば万々歳、そうでなくとも今回の戦争が僕らの勝ちで終わればそれで十分。

なんせさつき言った襲撃の隠蔽。その大前提となるのは目撃者の殲滅だ。しかし今回のこの戦場には極東の第一部隊がいた。彼らは僕が軍勢を率いて襲撃したのを知ってるし、襲撃を隠蔽するとすると彼らをか抹殺するのは絶対条件となる。

が、前の戦いで僕はあの部隊に執着したせいで大失態を犯した。同じ過ちを繰り返すのはそれこそバカのことだ。まずはロシア支部の陥落。第一部隊はそのついでで葬り去ることが出来れば上出来くらいに思っておこう。

とはいえ先の出撃でソーマは満身創痍で待機中だろうしリンドウさんも神機が半壊。ツバキさんに至っては死んだ今、残ったサクヤさんが単騎で出撃してるとも思えない。彼らがこの施設のどこで休んでいるかは見つからないが、神機は恐らくこの設備を借りて整備・修理されてるはずだね。

『…………あ。確かに。』

『デューヴァ。もし余裕があつたら彼らの神機だけでも念入りに破壊しておいて。』

『了解です!!』

これは絶好のチャンスだ。もし上手く行けばあの部隊を潰すのは無理でも戦うための力は奪える。恐らく現時点での人類側の最高戦力が邪魔してこなくなればひとまずはあの影を警戒する必要もなくなる。先の出撃が仇になったみたいだな。

そうと決まればさつきと行動を起こそうか。僕は電気室を、デューヴァは神機保管庫を。それぞれの活動を停止させたら感応現象で伝達し、次の目標に移ろう。中に入った後の進行はそんな感じだね。

『あとデューヴァには僕の視覚を共有しておくから。これで僕の道案内をお願いね。』

『うわっ…………えっ、こんな事もできるんですか。』

『感応現象で過去の記憶えいぞうを覗くことも出来るんだ。現在の景色リアタイを共有するくらいいけないさ。』

二つの視界を同時に見るのは少し奇妙みたいで、デューヴァは困惑したように瞬きをしている。多分デューヴァ的には中の構造に詳しくない僕が何してるかが常に気がかりだと思うからさ。こうしておけば互いの状況を常に把握できるし、道案内も「そこを左に」とか言える方がやりやすいかなって。

けどデューヴァは困ったように僕から目を逸らすと、何故か天井を見上げて前へと歩き始める。…………別に心配しなくてもデューヴァの視覚を僕には共有してないよ。さすがにプライバシーもクソもないかなって遠慮した。僕と違ってデューヴァは道案内も必要なければへまする事もないしね。

『ほ…………ほんとですか?よかった…………』

『まあさつきから君が僕のことガン見してるのはバレバレだけどね。』



いいっしょ僕の人間態。』

『!!……はい。すっごい性癖です……正直今までキモいなって思ってたけどめっちゃ抱きたい……』』

誰もそこまで聞いてないけど正直でよろしい。抱かれるの僕の方なのかそうですか。いやまあそうだろうけど。この作戦終わった後にサリーにこの事をチクっ……いや相談してみても、それでディーヴァが生き残ってたら考えてあげるから。だから今は作戦に集中だよ。そんな僕のお身体に触りますよしようとしてもダメだからね。涎拭きなさい。

ほら……エントランス着いたよ。ここからは別行動だ。大体ゲームでよく見るあそこに似てるんだけど、中央にクエストカウンターらしい場所が複数あるしゲートもいくつかあるしで極東のその三倍くらい広いな。おかげで金属の床が剥き出しになった一階には出撃から帰還して待機してる神機使いや逃げてきた民間人が大勢収容され、天井にぶら下がったモニターに映る現在のロシア支部の戦況に祈るように手を握っている。

そして少し階段を昇った場所には壁沿いに無数並んだターミナルと他の階層へと繋がっているはずの複数のエレベーター。そしてその横に非常時用の階段がある。大体ゲームで見たフェンリルのロビーと同じ構造だが、人数が多いロシアなせいかな。全体的に設備の個数が多いし天井も広い。ビルの中みたいだ。

『ではご主人様。私はあそこのカウンターで手続きを済ませた後に神機保管庫の制圧に向かいますので。ご主人様は地下三階の電気室を目指してください。』

『OK。んじゃお互い上手くやろうね。』

「フ……フレイ・アイアンハート様!？」

ディーヴァが一步踏み出しただけで支部内がザワついたから、視線

がディーヴァに集中してる隙に僕は非常階段へと走る。ほんとなにしたらあんなに存在確認されただけでザワつくんだよあの子は。

ていうか超今更なんだけど、ディーヴァってなんで僕に自分の故郷を差し出したんだろうね。戦略的な目的があるのは間違いないだろうけど絶対それだけじゃないよね？わざわざ自分の故郷を滅ぼすように仕向けるなんて、間違いなく何らかの遺恨を抱いての事だよ？そしてそれはきつと僕に自分が有名人だと隠していた事と無関係じゃない。多分僕に知られたくない内容なんだと思う。だから僕も詳しく聞くのはやめておいた。下手なこと聞いてディーヴァの決心が揺らいじやいけないから。

でも……果たしてこれからディーヴァは自分の顔見知りを前にして正常に任務をこなせるのか。ちゃんと自分を知ってて、自分が知ってる相手を皆殺しにできるのか。一応モチベあげるためのご褒美はさつき用意したけど、それでも少し心配にはなるよね。あれをご褒美と呼んでいいのかはさておき。

別に仕事を放棄するなんて思っただけじゃないよ。ただ殺しはせずに無力化しただけ……とかさ。そのくらいの手抜きならするんじゃないかなって。完全に無防備なところに侵入したわけだし、そのくらいの芸当は不可能じゃないはずだから。知った顔を前にしたらその程度の加減はしちゃうんじゃないかなって。僕は思ってるわけですよ。『ご主人様。その扉を開けて前から二番目の左側の扉を奥に。その先を右に行ってください。突き当たりが目的地です。』

『ん。ディーヴァ、そっちの進捗はどう？』  
『今出撃のための登録をジゼルちゃん……あ、オペレーターにやっってもらってます!!これから神機保管庫行きますよ!!』

じゃあそっちの仕事もこれからってことか。ディーヴァの案内通りに僕は足を進めるが、あつちは早速知った顔にエンカウントしたみたいだね。なんだ仲良さそうな子残ってるじゃん。良かったね

デーヴァ。今から死ぬんだし最後に思い出話に花でも咲かせておいたら？

……と、言つてあげたいところだけど僕らの仕事は急ぎだからね。彼らが話していいのは遺言や恨み言だけだよ。後でせいぜい天国に辿りつけるよう祈つてやりな。

ちなみに僕の方は電気室っぽい場所に辿りつきました。めっちゃくちや色んなボタンがある部屋。どこのボタンを押せば施設への電力供給を止められるやら。そう悩んでると再び頭の中に感應現象が発生した。

『まず通信室つて書いてある部屋のボタンを押してください。……そうそう、真ん中辺りにあるその八個のボタン全部です。』

『おけおけ。なるほどブレーカーみたいなものか。他は？』

『あとは管制室と四階、エレベーターですね。残りはそのままにしておいてください。全部消すと異常に気付かれますから。』

そうだね。んじや照明とかはそのまま、つと。言われるままにボタンを押して電力の供給を止めていくが、ここからじゃ本当に機能不全に陥ったかどうかが分からない。どうも破壊工作つていうと核動力炉とかにあれこれ細工して爆散とか派手なイメージがあるけど、現実だとこんなもんか。

しかし管制室とエレベーターは分かるけど四階……なんかあるのかな。そう思ったけどなるほどね？もしここがゲーム中で見た極東支部と同じ構造をしてるなら四階は医療設備や研究室が並ぶラボラトリ。現在負傷中の神機使いはここで治療されてる可能性が高い上、今回の攻撃目標の一つである新型神機の研究施設も恐らくこの階層。次に叩くのはここか。

『はい。ですが新型神機の研究所は私がやりたいので、ご主人様は五階に向かってくれますか？』

『五階？……五階つて支部長室かなにか？』

『そうです。ご主人様はこの支部長を始末してきてください。私はこつちを片付けたら四階に向かいますので――』

そう言いたいことだけ言ってデীবアの感応現象が切れる。向こうも忙しそうだね。言われたまま非常階段を登って五階に登るが、すごく私怨を感じさせる物言いがあったね。まあ僕は優しいし？デীবアの意思を尊重してあげるけどさ。一応今ここ地下だから階段登るのは疲れるね……浮いていいかな。いや、誰かと鉢合わせてもいけないしやめておこう。ついでにエレベーターがちゃんと止まってるのは確認できた。この分だと他の施設も機能停止したみたいだね。よかったよかった。

そう工作の成功を安心していると、再びデীবアから感応現象が発生する。どうやら向こうも終わったみたいだね。大変よろしい――

『ご主人様!! 大変です!!』

『なに?もしかしてしくじった??』

『いえ!! 整備士はみんな寝かせたんですが……神機がないんです!! あの例の部隊の神機が!!』

と書いていたらトラブルらしい。えらく息が上がった声で感応現象が飛んできた。例の部隊……第一部隊のことか?それはちと妙だね。サクヤさんの神機だけじゃなくて、他のメンバーのも無いってこと?あんな壊れた神機で再出撃するとは思えないし、どこか別の場所で修理してるわけでもないんだろう?

かと言ってあの部隊が神機を持って逃げたとも考えにくい。リンドウさんやソーマの性格上今から滅ぶかもしれない支部を捨ておいて逃げ出すとは思えないし、そもそもこのアラガミが蔓延る戦場のど真ん中を壊れた神機なんてお荷物を手にして逃げ切れるとも思えない。そんなもの見つけたらサリーが生かしておかないはずだし。

いや……一応逃走経路自体は考えられるか。あの極東の連中がこのロシアにやってきた交通手段が残ってれば、別に外に出ることなく安全に離脱できてもおかしくはない。

『デイーヴァ。この支部の屋上にヘリポートとかある？』

『ありますよー……って、まさか!!』

『サリー？悪いけど今すぐ真ん中のデカイ建物の屋上を確認して。で、その視覚情報を僕に共有して。』

慌ててサリーに感応現象を用いて屋上を確認させる。突然の感応現象にサリーは困惑してたみたいだけど、直ぐにその景色が僕の脳内へと溢れかえる形で送られてきた。

デイーヴァの言う通りにフェンリルの屋上はヘリポートとなっていたが、奇妙なことにヘリは一台たりとも無かった。……どうやら最悪の予想が的中したようだ。同時、ふと頭の中を過ぎつた予感に従って僕は階段を駆け上がる。

そして五階に到達するや否や、最奥のやや立派な扉を蝕刃で破壊する形で中へ侵入。支部長室の中を見渡してみた。

結果を言えば、支部長らしい人間は既にそこにはいなかった。まさかとは思ったが……時代外れもいいとこな高級な家具の並ぶ室内を搜索する傍ら、再びデイーヴァから感応現象が飛んでくる。

『ご主人様！新型神機の研究施設も既にもぬけの殻です!!あのヤブ医者も適合候補者もどこにもいません!!』

『だろーうね。どうやらしてやられたようだ。』

『……まさかそつちも支部長いないんですか!?あのジジイ……!!』

見切りをつけるのが早いって言うか。判断が早い。思わず笑ってしまうほどに判断が早い。全く本当に、悪い奴っているもんだね。デイーヴァがロシア支部を嫌ってた理由が分かった気がするわ。

「この支部長……ロシア支部とそこに所属する人間を見捨てて逃げたな。しかもただ逃げただけじゃない。極東支部の連中と新型神機に関係した研究内容、そして今回の僕らとの交戦データ及び新型のアラガミの数々に関する情報。それらを保持したまま極東支部に亡命しやがった。」

「いやいや薄情も薄情、さすがに残された人間にも同情するよ。でも最良かつ僕らにとっては最悪な判断だ。おかげで僕らは新型神機の開発を妨害するのに失敗しただけでなく、僕が他のアラガミを統制してフェンリルを襲撃するって情報まで持つて帰られた。今回の目的の半分は阻止されたわけだ。」

「戦いに勝って勝負に負けたというか……いや、薄情で冷酷だけど実に合理的な決断を下せるもんだね。ここの人間全てを生贄に次の戦いに備えてくるなんて。実際選択肢としてはほぼ最善だし大正解なもの。まあ……この判断を下したのがこの支部長かどうかはさておき、ね。」

『……どういうことですか？』

『この指示を出したのがロシア支部の支部長なら、なんで極東の連中も大人しく撤退してる？彼らは民間人を見殺しにできるような性格じゃないのに。』

『いや……ロシアの人間ならどうでも良かったんじゃないですか？』

「それならわざわざお通夜状態なのによその防衛戦に乱入なんてして来ないよ。復讐に燃えるソーマはともかく僕の右手を吹っ飛ばしてくれたサクヤさんまでいたのがいい証拠だ。実に反吐の出る話だけど、彼らは人が危機に晒される状況を見過ごせない。そんなヒーロー気取りのお人好しだからね。」

「そんな第一部隊が見ず知らずのロシア支部の支部長に説得され、はいそうですかと戦闘中に撤退するか？僕なら無理だし、そもそも面倒だから見捨てて自分だけ逃げるね。多分この支部長ってそういう人間なんだろう？」

……ここからはあくまで推測なんだけどさ。多分だけど、このロシア支部には来ていたんだよ。極東の第一部隊と一緒にあそこの支部長が。名前はヨハネス・フォン・シツクザール。あのソーマの父親だ。あいつが第一部隊を諭し、ロシアの遺産を抱えて撤退すること。ここの支部長に提案したのだろう。さすがに自分とこの上司の命令には極東の連中も逆らえず、撤退を受け入れざるを得なかった。

で、自分の命惜しさにロシアの支部長もそれを承諾。ロシア支部を放棄して極東支部へと撤退したわけだ。憶測まみれの推察だが、そう考えると色々と腑に落ちるのも確かなんだよね。

しかし極東の連中……てつきり僕を追ってロシアまで来たものかと思つてたが、まさか支部長自らが僕を追跡していたとはね。何が目的でこんな場所まで追いかけてきたのやら。人気者は辛いね。

何にしろあいつのおかげで僕らは何の成果も得られませんでした!! つてなつたわけだが悪いことばかりじゃない。あいつらが撤退してくれたタイミング的に僕らが人間に擬態できるってことはバレてないし、さつさと引つ込んでくれたおかげでこれから行こう『処刑』を目にすることなく帰つてくれたのは不幸中の幸いだ。それにこうしてフェンリル支部も掌握できたわけだしね。

『ディーヴァ。ひとまずこの事をエントランスで右往左往してる連中に伝えてあげな。『私達は見捨てられました!! もう助かりません!!』 つてね。』

『……………主人様?』

『サリーももう撤退していいよ。ずっと外でありがとうね。もう少しでこつちも終わるから。』

そう二人に感応現象を飛ばし、僕は階段を下ってエントランスの方へと駆け足で向かう。なんせこの連中は見捨てられはしたが、僕ら

にはまだ大事な仕事が残ってるんだ。この人間を皆殺しにするって大事な大事なお仕事がね。破壊工作なんてそれを恙無く進めるための下準備に過ぎない。ここからが一番のお楽しみ時間だ。

そうしてエントランスに辿り着くと、既にディーヴァが今の状況を正直に話したのだろう。誰も彼もが顔色を真っ青にして今にも死にそうな顔をしていた。心中お察しするよ。可哀想にね。そんな彼らにディーヴァは少しやるせなさそうな顔をしていたが、僕がやってくるのを見るとこちらに駆け寄ってきた。

「あつ……ご主人様。」

「やあやあディーヴァ。この人達にはどこまで説明してあげた？」

「え？いや……言われた通り、この襲撃の中で私達は見捨てられたと。そう説明はしましたが……」

元々存在感のあるディーヴァの隣にやってきたことで、必然的に絶望のどん底に叩き落とされたロシア支部民の視線が一斉に僕へと向けられる。何やら楽しげな僕の姿はこのお通夜会場みたいなエントランスにおいても自分でも分かるほどに浮いているが、その様子を何かディーヴァまでもが怪訝そうに見つめている。いや何君まで「何だ何だ？」って顔してんだよ。僕が聞いているのはそこじゃないよ。

「そうじゃなくってさ。僕と君が今回の襲撃の首謀者なのを説明したのかけて。そう聞いているんだよ。」

「「「?!」」」

「ちよゆ!?!……ご主人様!?!」

僕がそう言つてディーヴァの胴体に抱きつくくと、エントランスの間達が一気に愕然とした様子でざわつき始めた。当たり前だよ。だってあのアラガミを襲わせた首謀者ってことは、僕らがアラガミですって告白してるようなもんなんだから。外ヤバいって絶望したらもう中にも入ってたんだから。一番ヤバいアラガミが。



「フレイ・アイアンハート様!?! どういう事ですか!?! やはり、あなたは私達のことを恨んで………!!」

「ち、ちがうの!! 確かに復讐したい人はいたけど、みんなには死んで欲しくなくて……だから犠牲が最小限で済むようにご主人様を——」

「最小限?!? 外を見る!! これのどこが最小限だ半神のイカレ女が!! おいお前ら神機持つてこい!! 戦闘だ!! こいつら殺すぞ!!」

悲鳴と怒号が飛び交う中、待機してた神機使いは神機保管庫のある出撃ゲートへと我先にと走り出して民間人は無謀にもアラガミが蔓延る外へと逃げ出そうと試みる。しかし僕が指を鳴らしてデイーヴアの能力を用いると、その二箇所出口は両方とも結晶の壁で覆われる形で塞がれる。

しかしそうかなるほどね……デイーヴア。君が僕にロシア支部を差し出したのが、まさかロシア支部を無血で手に入れるためだったとはね。確かに最初の方であればあるほど中の攻略は簡単だし、そうすれば神機使いはさておきその他の被害は最小限に支部を制圧できると。後になって対策が練られれば練られるほど皆殺しもやむなしになるから、だからこそ最初に僕にここを襲わせたんだね。

「……ごめんなさい!! 本当にごめんなさいご主人様!!」

「いいよいいよ大丈夫。おかげで実際楽に制圧できたしね。」

「お願いだから殺さないでください!! この人達は無害ですから!! サリーにもご主人様にも危害は加えられませんから!!」

どうか。現に神機保管庫を制圧して入口を塞がなかったら、少なくとも待機組の神機使いは神機を持ってきて僕らに斬りかかっていた。それに君がアラガミだつて分かった今、仮に生き残らせてもこの人達は君を迫害するよ。

そんなこここの人間を守りたいならデイーヴアには僕から離れて敵対するって選択肢もあげたはずだよ? それなのに君はそれを断つ

て僕の側につくことを選んだ。それは他ならぬ君が、人間側に行っても受け入れられないって事を悟ってたからだろう。

それを今になって殺さないでとか……いくら何でも虫が良すぎるんじゃないかな。僕やサリーが散々殺して喰い散らかすのに加担しておきながら、自分は手を汚してないだけで人間側の味方ですとか。きつとこの人達はそうは思ってくれないよ？

「それは……そうですけど……」

「とはいえ君の言う通り、抵抗もできない人間を無意味に殺す必要もないかなって。それは一理あるよね。」

「!!……ほんとですか!?!じゃあ——」

いや殺すけどね。確かに殺す意味はないけど、生かしておく理由もないから。むしろ新たな神機使いになる可能性を鑑みたら皆殺しの一択しかないだろう。誰だってそうする。僕もそうする。

上げて落とすように悪いけどやっぱり死んでもらうよ。そのためのサリエルやザイゴートの毒ガス生成能力だ。こっちはわざわざ室内の人間を手っ取り早く殺す手段まで考えておいたんだから。僕は右掌に口を開き、そこから殺人ガスを室内に充満させる形でパニック状態の人々を絶滅させにかかろうとする。

でもそうすると、デーヴァは僕の右手をぎゅっと握って毒ガスを撒かせるのを止めた。今度はなんすか。

「ご主人様……奴隷として運用するのはいかがですか？」

「急になんてことを言い出すの君は。中世じゃないんだから。」

「この設備……ご主人様も使い方が分からないでしょう？ですが、彼らを生かしておけばその施設は殆どフルに活用できます。ご主人様の役にも立つはず……」

……なるほど。それは……確かにアリだな。こうしてフェンリル支部内は設備含めてほぼ無傷で手に入ったんだし、せっかく無事に

残った設備を使う上で人手はいくらあっても困ることは無い。ちゃんと管理下において使えるって前提であれば、無意味に殺すよりも生かしておく価値は十分にある。

ていうかねディーヴァ。実はと言うと、僕も途中からそう思ってたんだよね。既存の神機使いは殺しておきたいけど、この支部長に見捨てられた人々は味方につけたら上手いこと使えないかなって。本当に皆殺しにするつもりだったらもうとっくにそうしているし。

「えっ……!? 本当ですか……?!」

「君にとつての顔見知りもいるんだろ。なんか途中からこうなるんじゃないかなって思ってたからさ。殺すのは結構前から見送ってたんだよ。」

「……………よかった。じゃあ、殺さないでくれるんですね……?!」

うん。殺すのは見送ってあげる。せつかくディーヴァが頑張って残した命なんだ。有効活用しなきゃ勿体ないだろう。

だから僕はもう一度指を鳴らし、この場にあるアラガミを呼び寄せた。それはここに来る前に生み出してサリーに預けた、僕の手で改造を施されたコクーンメイデンだ。そいつが僕の召喚に合わせて床をぶち抜き、人々のど真ん中からニョキッと生えてくる。

……………ところで突然で申し訳ないんだけどさ。僕の細胞つてさ？僕が姿や能力を模倣できる程度に捕喰した生物に適合し、その姿を僕の配下のアラガミに変える。そんな性質があったよね？

その威力はゾルダートやフリーユージェル、その他の大型アラガミの配下を生み出してる辺りから説明不要だと思うんだけどさ。

ただひとつ言っておきたいのはさ。今回の戦いにおいて、めでたい事に僕はようやく人間の姿を模倣できるようになったんだよ。これは僕が人間を喰いまくって体内に十分な情報を蓄積したからなんだけど……………



長いマントを思わせる器官へと変質し、全身が赤い雷光を纏うと少年だった『それ』は身近な人の形を留めた人間へと襲いかかる。

少年だけじゃない。同様にガスを吸った人間全員が、苦しんだ後に咆哮を上げて目の前で一斉に姿を変えた。その形は実に様々なものの共通して人間離れた化け物のそれで、影響の少ない人間達はその光景に腰を抜かす。ついでで言うとな僕の横でそれを見てたデイーヴアも膝から崩れ落ちた。

「やだ……やめて……みんなやめて……!!」

「なんだよこれ……おい神機はまだか!?早く持ってこい!!」

「保管庫に入れねえんだよ!!誰か助けてくれ!!助け——」

目の前で助けを乞う神機使いが、僕の細胞によってヴァジュラと化した少年に無惨に喰い殺される。うーん……見た感じ神機使いには効きが悪いな?アラガミと人間のハイブリッドみたいな半端な存在だからか。まあ神機保管庫が潰された今、この連中は無抵抗で喰われるしかないんだけどね。

何度も言うようだけど極東の連中がこの性質を知る前に消えてくれて本当によかったよ。今や僕の細胞が伝染するのはアラガミだけではないのだと。例えそれが人間であつても、僕の細胞を取り込んだり僕の配下のアラガミに手傷を負わされれば僕の下僕<sup>アラガミ</sup>へと『転生』する。

これが僕が人の姿と共に得た人類殲滅のための第一にして原初の『厄災』。無尽蔵に汚染と伝播を繰り返し、人々を神機使いの天敵たるアラガミに変える呪いだ。

おかげでこれからは支部への侵攻がだいぶ楽になるよ。居住区にパンドールを放つて自爆させれば民間人がまとめてアラガミ化して牙をむいてくれるんだから。目の前でアラガミ化とかしたら下手すると戦えなくなるんじゃない?人間同士の戦争だったら間違いなく条約で禁止される類の兵器だよな。

「!!……まっつて。まさかここに来る途中に増えてたアラガミって——」  
「おっと。君のような勘のいい女は大好きだよ。その通り。」  
「……………ツ!!なんてことを……………」

泣き崩れるデীবアの傍らで、たった今アラガミに転生した人々に感応現象で『外の神機使いの生き残りを殺せ』と命令を与えて向かわせる。そういえばデীবア言ってたもんね。戦力の補充とかしてないのに僕の配下のアラガミが増えてるって。民間人も全然ないって。いやー……サリーにもパンドールあげたら困ってたもん。これ使っていいの? って。いいんだよ。人間には何しても。死んだ人類だけが善良な人類だってね。聖書かなんかにも書いてあったから。

それにアラガミ化したとはいえ、僕の細胞を持つアラガミになるんだから。頑張つて人間を捕喰すれば人間性は取り戻せるし、そうなれば本当に人間の上位互換みたいな存在になれるよ。そう本能に刻んできたから、多少の知性は残っていても彼らは死に物狂いで人間や神機使いを捕喰しようとするよ。ただのアラガミじゃない。彼らは正しく人類殲滅の尖兵と化したわけだ。

そうして人間を捕喰した時。彼らは僕やデীবアと同じ存在となる。人の姿と知性を保ったアラガミという究極の生物に。

他者を口にするだけでその容姿や記憶という名の技能や才能までも奪い、自分のものとして扱える。おまけに他者感でも言葉を介することなく感応現象で意思疎通を行い、互いの能力を共有し、アラガミという性質上この時代でも食べるものにも困らない。それどころか歳を取ること病にかかるとも無い。

誰しもがなりたいたい自分になれるし、飢えることもないから争う必要も無い。その利便性はデীবアも知つての通りだ。ここの連中はそういう存在に昇華するんだよ。

そうなればいくら元人間とはいえ彼らは僕らの同胞だ。旧き人類を滅ぼしたあとの新たな世界の支配者に仲間入りするんだ。人類を

滅亡させようとしていた僕が随分お優しい事だとは思わないかい？  
天敵である人類を滅ぼすどころか生物として進化させ迎え入れてやるなんて。呪いなんて言ったが、これじゃまるで『祝福』じゃないか。

だからねデীবア。そんなに泣かないで。分かるよ？ここに僕を招いたのはデীবアだし、彼らを生き残らせようとしたのもデীবアだ。そのせいで元人間の彼らは化け物になって人間を食い、更なる上位存在に進化しようとしている。

そしてそう仕向けたのは僕だし、実行したのも僕だから。君が罪悪感を感じる必要は無いし、責任を感じるならそれは全て僕がやったことだから。僕のせいだって押し付けて楽になっていいんだよ。そもそも僕は悪いことしたなんて思っていないし。

「……全部、ご主人様のせい……」  
「そうそう。だから君は悪くない。そんな後悔しなくても大丈夫だからね。」

座り込んでうわ言みたいな返事を返すデীবアを正面から抱きしめ、背中をポンポンと叩いて落ち着かせる。それでも辛かったら僕のことを恨んだり憎んだりしていいし、それで足りなかったら殺してもいいから。それでデীবアの気が楽になるなら。君に辛い思いさせちゃったのだけは本当に悪いと思ってる。

でもそう言い聞かせると、デীবアは泣きながらその大きな身体で僕を抱きしめ返してきた。

「……………なんで、私にはこんな優しいのに……私だって人間なんですよ……………?？」

「元、ね。彼らにもデীবアみたいになれば優しくできるよ。」

「そんなに人間が嫌いですか……?ご主人様だって、元は人間でしように……………」

そうだね。でも僕はデীবアと違って親も友人も恋人も存在しない。……いや、もしかしたらいたのかもしれないけど。もう覚えて

ないから。

覚えてる人間は僕にこんな訳わからん細胞を植え付け化け物に変えた頭のおかしい女と僕らに武器と敵意を向ける神機使い。それだけだ。それだけが僕にとつての人間の全てだ。

人間が嫌いかだつて？ 大っ嫌いに決まってるじゃないか。君やサリーに牙をむく神機使いも、そうなりうる一般人も。もう『本能』と言つていいほどに、潜在的に知覚してしまつてるんだよ。人間は滅ぶべき対象だつて。それは人がアラガミに抱くそれと全く変わらない。

「知つてますよそんな事……でも、ご主人様は前はこんなに惨くはなかつた。」

「……………そうかもね。やつぱ分かる？」

「分かりますよ。どれだけご主人様のこと見てたと思つてるんですか……………」

そう言つてディーヴァが僕の頭を撫でてくるものだから、思わず呆れてため息を吐いてしまった。……………なんで分かるかな。ただ、僕がこゝなつたのも間違いなく僕の自業自得だしディーヴァが気に病む必要は無いよ。もし君が泣いてる原因が僕の変化ならの話だけどね。

さてと。ディーヴァのメンタルケアはまた後でやり直すとして……………サリーからの感応現象だ。僕個人への接続みたいだね。なにになに？

『外の神機使い……………みんな死んだよ。なんか中からたくさんアラガミが出てきたんだけど……………』

『よしよし死んだか。頑張つてくれてありがとうねサリー。その子達は仲間だから手を出しちやダメだよ。』

『……………これで終わり？もう戦わなくていいの？』

そうだよ終わりだよ。これでロシア支部は記念すべき人類の墓標第一号になつたわけだ。初めての戦争は僕らの勝ち。完全勝利つて



わけには行かなかったのが少し心残りではあるものの、人類絶滅には大きく前進した。サリーもディーヴァも本当にありがとうね。

『ううん……あなたもお疲れ様。怪我とかしてない……?!』

『僕はびんぴんしてるよ。ただ後でディーヴァの面倒を見てあげて。ちよつとご傷心だから。』

『えー……………』

感応現象越しでも分かるくらいに超嫌そうな声が返ってきた。まだ溝は深いか。ほんと彼女には悪いことしちゃったからな。僕がディーヴァに嫌われたと知ったらサリーは喜びそうだけでも……

……………それでもひとまずは素直に喜ぶことにした。今日こうして、僕らはフェンリルの支部一つを落とすこと。そして人類を滅ぼす最初の災厄を手にしたことを。

はー……………やっと終わったって考えるとめっちゃくちや疲れたな。長かった……………長い戦いだつたな。いや、僕が疲れたのは絶対別の要因だと思うけども。未だに僕に泣きつくディーヴァを撫でてやりながら、僕はしばらくは休憩しようとして心に決めた。

戦争後の事後処理や、新たな同胞の事もあるしね。

## 16. 忌子（ロスト）

「ひぐつ……!!ぐすつ……!!うう………」

「やあサリー。お疲れ様。いや本当にご苦労さまだったね。」

「!!……おかえりなさい。横のは………なに??」

ロシア支部中央施設の制圧後。僕は未だに泣きじやくるディーヴァの手を引き、中央施設の外へと戻った。それを見るなりサリーが上空から僕の方へと舞い降りてくるのだが、その有様には流石のサリーも困惑していた。仮にも勝ったのにボロ泣きしてるんだから当然だよ。そうじゃなくてもこんなに泣いてるディーヴァとか超珍しいし。

「ご主人様のバカ……嫌い……!!大っ嫌い………!!」

「は???」

「サリー、ステイ。ステイだよ?それ僕も消し飛ぶからね?」

でもディーヴァの言葉を聞くなりサリーは反射的に額の邪眼に手を翳した。ウロヴォロスの能力の破壊光線の予備動作だね。ノーモーションで来なかったのは温情か。ダメだよ。彼女は今回のMVPなんだから。ディーヴァがいなかったらロシア支部は落とせなかったし、そもそも極東支部辺りに無謀な特攻をかけて全滅してたかもしれない。僕が人間性を獲得する事もなかった。だから僕は彼女に感謝してるし、何言われても気にしないよ。それに今回の事に関してはマジで僕が悪いから。

「えっ、ディーヴァ………どうしたの?中で何があつたの?」

「………ご主人様に酷いことされました。あそこの人達はご主人様に何もしてなかったのに………」

「殺すよりはマシかなって。………僕の口から説明するか。」

そうやって僕は隣に今回のもう一体のMVP、地雷型コクーンメイ

デンことパンドールを召喚する。サリーも使役したから分かると思うけどさ。こいつを中央施設の中に呼んで、中にいた人間を全員アラガミに変えたの。そしたらディーヴァがこうなっちゃってさ。全面的に僕が悪いし弁明の余地もないから言い訳は省くけど。この状態からどうにか元気にしてあげられないかなって。

【待って。中の人間って、ディーヴァの知り合いじゃ……】

「あそこの人達……ご主人様の事を心配してたんですよ。こんな大惨事の中よくあんな子が生きてたなって……」

【それを……アラガミに変えたの？じゃあ、今ここにいるアラガミって全員——】

そうだね。人の気配の消えた元居住区を踏み鳴らすアラガミの数々。あれらは恐らくその殆どが僕の細胞で変じた人間だろう。僕が最初に調達して連れてきたのも残ってはいらるだろうが、その殆どは神機使いに討たれたはずだから。

そしてそのアラガミの数を見てディーヴァはさらに激しく泣き叫んだ。その様には流石のサリーも顔を背け、やや物申したげに僕の事を見つめてくる。まるで『ここまでする必要があるのか』って。

【……これは、流石にディーヴァが可哀想……】

「僕もそう思うよ。でもね、仕方なかったんだ。」

「仕方ないってなんですか……!!この人達は、私達に抵抗する力もないんですよ!!それをご主人様は!!!」

だって落ち着いて考えてみてよ。確かにあれは人間が生きてるっただけで許し難いのもあった。けど仮にもしあの連中を残した場合。その上でこの支部を拠点として、彼らを君の望み通りに生かしたでしょう。そうしたら彼らは間違いなく他のフェンリル支部に連絡し、救援を求めるよ。

それで奪還したばかりのロシアに救出目当ての増援が来るのは疲弊しきった僕らにとっても最悪だし、それに加えて【僕の細胞は人間もアラガミに変える】【僕は人間に擬態できる】という僕のトップシークレットまで流されてみなよ。次の侵攻からは破壊工作とパンドー

ルという二つの切り札に対処され、他の支部の制圧は困難を極める事になる。数で劣る僕らがフェンリルと戦う上で、彼らにとって未知の能力というのはそれだけで決め手となるのだから。

デーヴァは僕が個人的な感情で彼らにあんな蛮行を行ったのだと思っただけで、僕からすれば民間人でも人間が生き残っているのは危険だったんだ。彼らは戦えなくともあの地獄を体験している。そういう体験談はフェンリルにとっての貴重な情報源になる。

情報は力なんだよ。だから僕らもフェンリル支部を落とすし、フェンリルの情報を集めようってなったのが今回の侵攻計画の始まりだ。それはデーヴァも分かっているはずだよ。

「……………ッ!!それは……………確かにそうですけど……………!!」

「それともあんな姿で生かすくらいなら殺した方がよかった?……………なら今すぐ処分してあげるけど。」

「!!……………やだ!!ご主人様やめて!!お願い!!」

僕がそう言っ手を手を振り上げると、そんな聞いた事もないような悲鳴と共にデーヴァが僕の手を握ってくる。……………そうだよ。彼らはまだ生きてるんだから。それも変じたと言っても、僕らと同じ身体になっただけ。サリーやデーヴァがその身体で生きることが呪わないうよう、あの姿で生きることが不幸と決めつけるのは良くないよ。

……………まあ、正直僕は彼らのことをさっさと殺してしまいたいんだけどね。

「ご主人様やだ!!なんでそんなにあの人達のこと殺したいんですか!?!」

「……………さっつきからうるさいんだよ。」

「えっ……………」

……………頭の中に響くんだよ。感応現象で『許さない』『殺してやる』って怨嗟の洪水みたいな思考が。『痛い痛い』『憎い憎い』って僕

が喰い殺す瞬間の人間みたいな感情も渦巻き、吐き気を覚えるほどの人の負の感情が配下のアラガミ達から発されている。さつきからずっと。中央施設を出て僕が外に出た時からだ。

「な……なんの事ですか？私には何も聞こえませんが……」

【私も聞こえない……大丈夫？顔色悪いけど……】

「……聞こえるのは僕だけか。良かった。君達は聞いちやダメだよ。僕に感応現象を使うのも禁止。いいね？」

僕は人を口にする際に毎回聞いてるから平気だけど、ただでさえ感応現象は相手の感情を自分のものと錯覚しがちなんだ。こんな呪詛じみた憎悪を受け取ったら気が狂い正気を失いかねない。僕ですら少し気持ち悪いもの。

でもそうか。これは……あのアラガミ達は思考を感応現象で垂れ流しているわけじゃない。これは彼らの思考。口にした者の今際の思念を自分の感情のように錯覚し、同時にこんな事をさせた僕を憎んでいるんだ。

そしてそれがどういうわけか、感応現象を使われてる訳でもないのに僕は理解してしまっている。まるで彼らの心が読めるかのように。どうにも神機使いを口にしまくったせいで、僕の持つ感応現象の能力がさらに進化したらしい。おかげで発してもいない頭の中の思考まで把握できてしまう。サリーやディーヴァの思考は分からない辺り、対象は僕が人間性を完全に獲得してから生み出したアラガミ。つまりこの支部の人間が変じた奴だけと見た。

……いや、そんな事は今はどうでもいい。それよりどういうことだ？なんで……あのアラガミ達から声がする？なんでアラガミが思考してるんだ？僕の細胞でアラガミ化すると共に、彼らからは人間性と共に理性や思考は剥がれ落ちたはずなのに。現に彼らはさつきまで僕の指示に従って人間を虐殺して喰い尽くしていた。それは間違いない。

——人間を、喰い尽くした？

「まさか……………」

【大丈夫？…………ツ、何が起きてるの!?!】

「そうか。…………いや、これは誤算だったな。」

僕がそう呟くと同時。目の前の異色のヴァジュラの背中が苦しみだし、それに呼応するかのように殆どのアラガミが咆哮を上げた。

そして耳を塞ぎたくなるほどの数多の絶叫はやがて獣の声から人の声へ。慟哭みたいに響くそれを皮切りに、さらに変化は続く。

まず目の前でヴァジュラの背が縦に裂けた。その様子に警戒したサリーが臨戦態勢に入ったものの、僕は左手でこれを制する。何しろあの現象には僕にも身に覚えがある。

だとしても……………いくら何でも早すぎるだろ。僕がそうなるのにどれだけ苦労したと思ってるんだ。

「…………ツ、ア……………あ” あっ!?!」

「サリー、落ち着いて。大丈夫。」

やがて裂けたヴァジュラの背から獣声混じりの声が出て、中からガバツと顔を上げる形で『人間』が現れた。その様にサリーが更に警戒心を強める。無理もない。それほどまでにヴァジュラの背から現れた青年は人間と遜色ない姿をしており、記憶がそうさせたのか衣服に至るまでもが再現されていた。

そして見渡して気付く。先程声を上げたアラガミの全てが、今のヴァジュラと全く同じ変体を遂げていたと。強いて言えば異なるのは中から出てきた人の姿。それだけは容姿から服装。性別に至るまで千差万別で、いずれもがアラガミの身体から自身の身を引き剥がす

と信じられないものでも見るかのように自分の手や身体を確認している。

……誰が予想できるかこんなの。アラガミ化してまだ一時間と経ってないんだぞ？僕が一体何年かけて……どれだけ人間を口にして人間性を取り戻したと思ってるんだ。彼らが喰ったのなんてせいぜい数人だろうに。

「ど……どうなってるんだ？俺達……」

「あの赤い霧で化け物にされたのに……それで、人を喰って……ッ！！」

「なんで……なんで戻ったの!?!それになに……なんか痛くて苦しい……私、こんな思いしてないのに……!!」

当人達にとってもそれは現実離れた体験だったのだろう。明らかに困惑するもの、人を喰い殺した記憶と感触に絶望するもの。そして自身の中にある捕食対象の残留思念に苦しむもの。その反応は三者三様で、しかし誰一人として人間の姿に戻れた事を喜ぶ者はいなかった。

……一応彼らがこうも早く戻った理由自体は考えられる。僕が彼らを汚染した際、既に僕の細胞には人間に関する情報が刻まれていた。そのせいでアラガミ化した時点でも体内に一定量の人間の情報が残ってて、僅かな人間を捕食するだけで人間を模倣するに足る情報量を彼らが満たしたか。

或いは単純にアラガミ化してすぐに人間を口にしたから元に戻れたか。どうもアラガミ化しても意識が残ってた辺り、人間性が剥がれ落ちるのにはそれなりの時間がかかるらしい。人間の細胞とオラクル細胞じや構造から異なるし、完全に変質させるのには要する時間が多かったのか。どのみち確証はないからそこら辺は今後どこかで検証してみないと分からないだけだよ。

それにそもそも進化なんて後から生まれるものの方が優れて出来

上がるんだ。こうも簡単に元に戻れるのはずるいとも思うが、この場ではぐつと飲み込む事にするよ。

【ど……どうするの？これ、殺した方がいいの??】

「まさか。彼らはもう僕らの同胞だよ。殺すなんてとんでもない。」

【でも……あの人達があなたの事を恨んでたって。そんなの生かしておいて大丈夫なの……?】

そりや大丈夫じゃないだろう。彼らは人の姿を取り戻した。しかしそれはつまり、少人数とはいえ誰かを喰い殺したって事なんだ。アラガミになって長い僕ならまだしも、アラガミとなって直ぐ。意識が残っているにも関わらず僕の命令に突き動かされ、望みもしない食人を強制された。そして口にしたって証拠なんだよ。あの人間の姿つてのは。

今の僕は感応現象で常に彼らの意識を把握できるから分かる。誰一人として人間の姿に戻ったことを喜んではいけないよ。ある人は口の中に残った人間の食感に嘔吐し、ある人は妻子を口にした罪悪感から自殺に使えそうな道具を辺りを見渡し探している。中にはもう全てを忘れたいと。せつかく得た人間性を捨てたいと獣の姿に戻ることを望む者すらいる始末。

そうでなくとも辺りを見渡してみろ。その土は赤く変じ、アラガミが踏み鳴らした無数の足跡には血の水溜まりが出来ている。崩れた家屋の数々には火が上がって黒煙を上げており、そうした残骸や血溜まりの中には食べ残しと思われる人の部位が散乱している。崩れた壁の内側には既に守るべき街は存在せず、今や彼らの住処は硝煙と血の異臭だけが漂う地獄と化した。

家族も、友人も、故郷も。そして尊厳すら彼らは奪われた。僕というアラガミによって。そんな中実行犯の僕の姿なんて確認してみろ。どうなるかなんて幼子でも分かる。



「!!……………おい!!みんな!!あいつ!!」

ある青年が指を差すと同時。彼らの視線は一斉に僕の方へと向く。その様に僕は小さく笑みを浮かべて手をひらひらと振るが、そうして友好的に振舞ってるにも関わらず返ってきたのは地鳴りみたいな怒声。そして殺意という名の熱狂。血で湿った土を踏みしめながら彼らは僕という元凶を捉えると、各々に言葉にならない叫びと共に拳を振り上げる。

その怒り狂う人の波という光景にサリーは怯え、さつきから茫然自失としてたディーヴァでさえ継るように僕を見つめてくる。……大丈夫だよ。いくらアラガミ化したとはいえ、元はただの民間人なんだ。理性と人の姿を取り戻した今、いくら身体能力が上がったところで神機使いみたいに僕らの脅威にはならない。ましてや数多の戦場を潜り抜け、戦闘経験と能力を蓄積した僕には届かない。

「このクソガキイ!!ぶつ殺してやるああ!!」

「よオクも私達の家族をオオオ!!」

『はいはい。言いたい事は分かるけどちよつと落ち着こうね。』

そう言つて僕は左手を人の波に向けて振り上げ、同時にディーヴァの持つ能力を発動。地面から無数の結晶の槍を生やし、居住区の残骸ごと巻き込む形で彼らを串刺しにして突き上げる。その規模は赤い針の山とも言えるほどで、無数の結晶の刃に巻き込まれる形で千切れた彼らの手足が流血と共に雨みたいに降り注ぐ。

同時に貫かれた人々は実感する。手足が千切れてるのに痛みが殆どない事。そして腹部を貫かれてるにも関わらず生きていること。既に自分の身体が人間ではないと悟り、同時に僕という存在が有する力も身をもって思い知る。賢明な者はこの時点で理解していた。『あの人の形をした化け物に歯向かうのは無謀』なのだ。

「ご主人様ツ!!」

「つと。大丈夫だよデイーヴァ。コアは外してある。」  
「……………嘘でしょう!?皆殺しの間違いですよね!?!」

ほんとほんと。相手の数が多いから大規模攻撃みたいになつてるが、実際は相手の足元から結晶の槍を生み出す能力だから。直進する無数の個人に狙いを定めて形成した結果こんな剣山みたいになつただけで、無力化を前提にした技だから大丈夫だよ。そうじゃなきゃ彼らはとつくに霧散してる。

だからそんな思いつきり胸ぐら掴まなくても平気だよ。今回の一件で僕への信用が地に落ちたのは分かるけどさ。僕だって好き好んで君の嫌がることをするような外道じゃないよ。君の事はそれなり以上に大事に思ってるからね。

「……………ツ、ならいいんです。ごめんなさい……………痛いこととして……………」  
「いいよ。君は彼らのこと大事だもんね。守りたかつたんだものね。」  
「はい。……………過程がどうであれ、人の姿に戻れたのも良かったなって思ってます。ご主人様は嫌かもしれませんが、どうか……………」

分かつてるよ。僕からしても人間性を完全にものにしたアラガミつてのは有用だ。多少厄介だからって殺すような性急な真似はしないよ。彼らは僕の同胞として招き入れるし、その力は残存人類の滅亡のために振るってもらおう。

ただ一先ずはそうだね……………人間性を取り戻したついでだ。彼らには制圧したロシア支部の施設を動かす労働力にでもなってもらおうとするか。

「ふざけた事ぬかしてんじゃねえ!!アタシ達がお前に従うと思つてんのか!!」

「ぶつ殺してやるからとつと降ろしやがれこの化け物が!!」

『まあ話は最後まで聞いてよ。何もパシろうって訳じゃない。』

僕はね。君達のような新たな同胞に、僕が手にしたこのロシア支

部。その中の中央施設に住んでみてはどうだって提案しているんだ。神機使いとフェンリルの関係者だけが住めるあそこは設備は整っているし、ターミナルやテレビ等の娯楽もある。それはあの中に避難してた君達もよく知ってるね。

こんなボロボロで汚い、雨風も緑に浸げないような小屋でアラガミの影に怯えて生きてた君達だ。憧れた事くらいはあるはずだよ。あの建物の中で生きたいと。安全な暮らしがしたいと。まあ君達に至っては最早アラガミの影に怯える必要すらないわけだけどさ。それでも寝心地のいい布団はそれなりに魅力的なはずだよ。現に僕がこうして感応現象で伝えてやると少しだけ静かになったもの。

『ただそのためにはあそこの設備を運用する誰かが必要だ。それをみんなの中で決めて、暮らしてみてもどうかって。僕はただそう提案してるんだ。』

「…………お前バカか？そのための技術を持つ連中もお前が絶滅させたんだろうが。」

『その点に関してはご心配なく。従業員を口にした子の中にはその記憶と技術が残ってるから。…………何なら共有してあげるよ。』

そう感応現象で伝えて僕は結晶に縫い止めた人々に接続し、個々の記憶を同時に把握。中から過去にあの中央施設で働いてた人物の記憶を発見し、それを感応現象を通して全員に共有する。こうしてやれば全員があ施設の器具の全てを動かせるし、後は分担でもシフトでも決めて運用していけば問題は無いはず。

僕はサリーといいディーヴァといい同胞には優しいからね。君達にもその身体に慣れ、その能力で何が出来ることが分かるまではいい場所に住んで欲しいと思ってるんだ。幸い中の神機使いや関係者は全員死ぬかこの誰かになったから部屋は有り余ってる。死に急ぐのもいいけど少しは贅沢な暮らしをしてもいいんじゃないかな。

「ツ…………なんだ今の。頭に直接…………誰かの記憶か？これは……………」

「どうなってるのよこの身体は…………それに、今さらだけどなんで腹ぶち抜かれて死んでないのよ。」

「それに千切れた手足も治って……なんなんですか？ 私達、人間に戻れたんじゃない……」

まさか。君達は君達が化け物と呼ぶ存在に成り果て、その上で人間の真似事ができるようになっただけ。だから歳を取ったり病に苦しむ事もないし、コアを破壊・抽出されない限りは死ぬこともない。あの種の不老不死に近い性質を有するわけだ。

おまけにアラガミが有する数多の能力すら人の姿のまま振るえ、本来この時代なら悩みの種となる食事だって文字通りに何でも口でできる。生贄こそ伴うもの人間一人喰い殺すだけでなれると考えれば、その身体は余りに破格の力を持つんだよ。それこそ普通の人間が虫けらみたいに見えるほどに。

君達は確かに誰かを喰い殺したが、そうして手に入れた身体は決して捨てたものではない。そして同質の肉体を持つ僕もまた、討ち滅ぼすのは容易な事じゃない。それは今こうして串刺しにされてなお生きてる彼らの方が分かっているはず。

だからまずは今の自分の身体について正しく知ることを僕はお勧めするよ。僕を殺すにしろ自害するにしろ、無知なままではその土俵にすら立てない。幸い慌てなくても君達には幾らでも時間がある。そして快適な住処もだ。しばらくはゆっくり過ごし、新しい身体を満喫した方がどちらにしろいい結果が得られるはずだから。

そしてアラガミとなった自分の身体を正しく理解した時。果たして彼らはまだ僕を呪うのか、それとも僕の祝福を受け入れ人を滅ぼすのか。その結果はこう言っただけだがもう見えている。だからこそ僕は彼らの自由を尊重し、大切にすることをしたんだ。

……それに、そっちの方がディーヴァも喜びそうだしね。

「ご主人様……それは……」

『さて。このように僕は同胞たる君達に相応の生活は望んでいる訳だけど。君達はどうしたいのかな。』

「ひとまずこれ解きやがれ化け物!!話はそれからだ!!」

んー……まあ確かに言いたい事は言ったし。それに彼らの考えてる事はいちいち口に出してもらわなくても分かる。となれば話を聞いてもらった今、彼らをここに繋ぎ止めとく理由はない。それにいつまでも串刺しにしたままでは『もう敵意はない』って言っても説得力ないしね。

けどその前に一つ。僕から彼らに一つ贈り物を授ける事にした。それは現在僕が有するアラガミの身体情報。つまり墮天種を除いたこの時代のアラガミ全種的能力だ。それを寄りにもよって僕に殺意を抱く彼ら全員に、感応現象を用いる形で情報ちからを与える。

「えっ……なにこれ!?これ……あの化け物達の——」

『君達への誕生日プレゼントだよ。つまらない物で悪いけどね。』

「さっきから何なのよこの頭を侵す感覚……気持ち悪くなってきたわ——ツ!?!」

その上で僕は手を鳴らして発動していた結晶能力を解除。自由の身として解放する。彼らは咄嗟に体勢を取る事も出来ずに血で変じた泥へと無様に叩きつけられるが、それ以上に突如として脳裏に溢れかえる情報の洪水に彼らは困惑していた。

当然と言えば当然か。情報をこうして与えられるというのも驚くだろうが、それ以上に自分を殺そうとする相手に武器を渡すなんて正気の沙汰ではない。現に特に僕に強い憎しみを抱いていた連中は狂気じみた笑みを浮かべて早速能力を試しているし。荒んだ心に武器は危険って本当だね。

「ハハッ……マジかよ。この能力、全部俺達が使えるのか……?これなら……これなら……!!」

『これなら僕を殺せる』……まあそう考えるよね。」

「これならてめえをぶっ殺せるぜ!!死ね化け物共が!!!」

そう叫び、殊更僕に強い憎しみを抱く青年は早くも腕に能力を発動。その形状を巨大な有機的な砲身へと作り替えると、僕らに向けて

巨大な水弾を放ってきた。

……グボロの能力とはまたシブい能力を選んだね。しかも初めての変異なのに随分と再現度が高い。将来有望なようで何よりだよ。

けど当然、そんなただのアラガミの能力では僕を殺すには程遠い。僕は右手に形成した蝕刃にコンゴウとプリティヴィ・マータの能力を同時に発動。そのまま振り抜く事で放たれた水弾を凍てつかせ、ほぼ同時に衝撃を伴う暴風で粉碎する形で無効化する。

「はっ………!?!」

「驚いた……知識を与えたばかりだと言うのに、もうアラガミの能力を使えるんだね。」

「待て待てなんだ今の……!!何をしやがった!?!」

さらに僕は薄っぺらい賞賛と共に右手の蝕刃を瞬時に消してオウガテイルとザイゴート、コクーンメイデンの能力を並行して発動する。そうして背中に天使のような翼を形成すると、羽ばたきと共に複数の羽根……に見せかけた棘を射出してみせる。

そうして放たれた無数の棘は僕に歯向かおうと息巻いてた過激派の人々の全身を無情に穿ち、着弾と同時に炸裂。全方位に爆ぜるようにして針が伸び、身体を内側からバラバラに吹き飛ばす形で無力化する。

その凄惨極まりない肅清方法に隣のデイーヴァからヒュツという呼吸音が聞こえたが、これだけの事をしてコアが無事なら死ぬことはない。それに見た目ほど痛みもないはず。アラガミの痛覚つてのは人のそれよりずっと鈍いんだから。心配しなくても大丈夫だよ。

「いや……あんな身体をバラバラにしたらコアも壊れてると思う。やっぱりこいつら殺した方がいいよね……分かる。」

「サリー、気持ちは分かるけど物騒な事を言わないの。姿形こそ違えど彼らは君達と同じなんだから。」

「あなたを傷つけようとする奴は許せない……幾ら弱くても生きていい理由にはならない。こんな奴らと私を一緒にしないで。」

サリーはそう身体が霧散し生首だけになった人々を見下ろして口元を歪めるが、残念な事に彼らが死ぬことは無い。首だけになってなお僕のことを忌々しげに見つめ、いつまでも祿に聞き取れないような騒音同然の罵詈雑言を僕へと投げつけてくる。

だから僕は一番近くに転がってる、さつきから最も血の気の多い子の首を髪を掴む形で持ち上げる。そうするとやつと彼が僕に何を言っているのかを聞き取れた。

「ふざけんなよお前!!なんだその能力は!?俺達はそんな能力渡されてねえぞ!!」

「そんな事ないよ。君達も今の能力は持っている。使い方を思い付かないだけでね。」

「ああ!？」

なんせさつき僕が使ったのは小型アラガミの能力だ。オウガティルの棘の内側にコクーンメイデンの腹部……あの針の密集した器官だね。あれを縮小した状態で内蔵させ、仕上げてザイゴートの毒を付与。同じくザイゴートの翼に羽として仕込み、着弾後に棘の内側から全方位に針が飛び出す撒菱状まきびしの弾丸に仕上げただけだ。殺傷力は見えての通りだが消耗は少ないし、だからこそ人の姿でも行使できる。

こんな風に僕らみたいなアラガミは、知性の元に既存の能力を洗練・或いは合成する事で幾らでも攻撃手段を拡張できる。口にしたものを再現するしか能の無かった既存のアラガミとは違ってね。僕らは想像力がそのまま力に変わるんだ。

例としてサリーはレーザーに様々な性質を付与して強烈な弾幕として用いるし、デীবアは水晶の硬度を利用した防御壁や斬撃・質量攻撃を主な武器とする。もし僕を本気で殺したいと願うなら、まずはそのための『武器』を考えるんだ。君達にさつき与えた数々の能力は、云わばそのための『材料』なのだから。

「僕は君達が作る傑作に期待しているよ。……頑張つて僕を殺してみせる事だ。このロシアを僕から取り戻したいのならね。」

「どこまでも舐めた真似しやがって……!!絶対殺してやるから首洗つて待つてろよ……!!」

「首だけでよく言うよ。……もし僕に用がある場合は頭の中で呼んでね。いつでも相手してあげるからさ。」

そう小さく笑みを浮かべ、僕は憎々しげにこちらを睨む生首を他と同じように泥の上へと投げ捨てる。そうして踵を返すと僕は真っ直ぐにロシア支部へと足を進めた。それを見てサリーとディーヴァも慌てて後を追ってくるが、その最中にディーヴァが僕の肩を掴んで引き止めてきた。あんな事になったせいで既に僕への敵愾心とかは消えてるみたいで、それは心配そうに僕のことを見下ろしてくる。

「あの……ご主人様。なんで彼らにあんな事を……」

「ん？あんな事って？」

「あの人達はご主人様の事を憎んでるんですよ？それなのに武器になる能力を与えて、焚き付けるような真似をして……」

そんな事をすれば僕が自分の身を危険に晒す事になるのに。そう言いたいんだろう。現にサリーも物申したげに僕を見つめている。心配してくれるのは嬉しいけど、ああしたのにはちゃんと幾つか理由がある。

彼らは確かに僕を殺そうとし、そのための能力を考え始めるだろう。けどそれで仮に僕を殺せるような能力……或いはアラガミができた場合、それは同時に残存人類に対しても僕以上の脅威となる。人類滅亡を望む僕にとって戦力は幾らあっても足りないし、その新戦力を彼らは自発的に生み出してくれるんだ。それも僕を殺すつて目的があるからそれは精力的にね。

そして同時、あそこの人々は恐らくその大半は元一般人だ。僕への殺意は抱けても戦闘経験に關しては赤子も同然だろう。能力の扱いが覚束無いのもそうだが、経験値の差と言うのは侮れないものでね。



僕がリンドウさんの第一部隊に毎回負けてるのを見れば分かると思うけど、彼らを実戦で運用するに当たってはある程度は戦いに慣れておいてもらう必要がある。それも人の形をしたものとの戦いにね。

彼らにはいずれ人類滅亡のためのこの戦いに参列してもらうんだ。戦士として戦えるようになってもらえないと困るんだよ。そのため僕は彼らの憎しみを煽り、僕を殺すようにと仕向けた。懐柔したり圧政で服従させるのも良かったんだけどね。どの道軋轢は生まれそうだから、それならいつそ軋轢を利用する形で彼らを戦士に育てる事にしたんだよ。それが彼らを焚き付けた理由の一つ。

「そんな……!!じゃあ、あの人達を神機使いにぶつけて殺す気なんですか!?せつかく人の姿に戻れたのに……!!」

「死なせないために鍛えるんだよ。……あの程度じゃこの神機使い相手でも余裕で攻略されるからね。」

「!!……で、でも。第一あの人達がご主人様の言う事を聞くとは思えません。彼らは人間だったんです。他の人間を襲う理由なんて——」

大丈夫だよ。彼らはいずれ自分から人間を滅ぼすようになる。それは僕という存在がいい見本だ。彼らは分かっちゃいないが、神機使いは……フェンリルは彼らという存在を許しはしない。遅かれ早かれその存在が公となれば、彼らは嫌でも神機使いに狩られる身に落ちる。それは間違いない。

それでも僕に従い人を滅ぼすなら神機使いに殺された方がマシって人は少なからずいるだろう。だからもう少し彼らが戦力として使えるようになったら、僕は彼らに戦うための『理由』を与えるつもりだよ。そのためにはまだ少し僕自身の能力を検証する必要があるけど……恐らく問題は無いはずだ。

それに極論してしまうと、別に彼ら自身が戦いに出てくれる必要はあまり無いんだ。現地で戦力を調達する手間が省けると普通のアラガミよりは高度な作戦の実行が出来るってだけで、正直忠実な分今

は野良のアラガミを汚染して使った方が早いまである。だから  
ディーヴァが嫌がるようなら彼らを戦地に送り出すのはやめるよ。  
絶対に彼らの方から行きたがるようになるとは思うけどね。

「あ……ありがとうございます。ご主人様……」

「いいのいいの。君にはこれから辛い思いをたくさんさせてしまうか  
らね。」

「……………えっ……………」

だってそうだろう。彼らを扇動してどうにか僕の方へと憎しみの  
矛先は向けさせたけどさ。そもそもこうなった原因、彼らから見たら  
僕をここに連れてきたディーヴァも同罪なんだから。ディーヴァに  
は絶対に言えないけど『あの女がこいつを連れてきたせいで』って心  
の中で憎んでる人は相当数いたからね。だからまずはどうにか彼ら  
の怒りや憎悪を僕に向けさせディーヴァの事を忘れさせる必要が  
あった。きつとディーヴァは僕と違って責められると罪悪感で抵抗  
できなくなるから。これが僕が彼らを焚き付けた二つ目の理由だ。

現に僕の言ってる言葉の意味を理解し、自分も彼らから恨まれ責め  
られてもおかしくないと気付いた瞬間にディーヴァの顔はみるみる  
と青ざめていく。いや、本当にディーヴァにはなんて謝ったらいいの  
やら。彼らが人間性を取り戻した際の唯一にして最大のデメリット。  
それは君が間違いなく地獄を見る事なんだからね。ディーヴァは  
さつき彼らが人間の姿に戻れて良かったって言ってたけど。

「あっ……………!!あ” あっ……………!!」

「……………大丈夫、君は悪くない。諸悪の根源が僕というのは間違いな  
いからさ。」

「違う……………!!私のせいで……………私のせいであの人達は……………!!」

膝から崩れ落ちたディーヴァはその場で涙を流して苦しみ、縋るよ  
うに僕の身体を抱きしめてくる。……………まだ別に何かされた訳でもな  
いのこれだもんな。さてどう彼女を保護したものか。あの支部の

中で彼らの目につかない場所に匿うか。万一にも彼らの前に差し出すような真似をすれば殺されかねないし、そうでなくても下手に責められれば精神的に追い詰められて自殺とかに踏み切ってもおかしくない。

そうならないようにディーヴァはしばらく僕の傍に置いておくとして……彼らが僕に従属するまでの間はどうか。僕が汚れ役して収まるならそれでいいんだけどね。念のため、彼女の話題が上がった際には『僕に騙されてわざわざ案内してくれたバカな女』と触れて回るか。そう思わせれば当たりは強いだろうけど、少なくとも虐げられる事はなくなるだろうし。

……いや。それは希望的観測が過ぎるか。顔も知らない凶悪犯と顔を知った裏切り者じゃ、どうしても恨みは後者に向きやすい。その上で彼女を彼らにとって味方と刷り込むには、ディーヴァ自身が行動を起こさなくてはいけない。

或いはディーヴァがここの人々の事を忘れ、完全に僕に身を委ねてくれれば支配する側として君臨することも出来るのだが……口にするだけ無理な相談なのは百も承知だね。どのみちディーヴァには、近いうちに残酷な選択を強いることになるだろう。

【ディーヴァ、大丈夫……??】

「ごめんなさい……ごめんなさい……!!私が憎かったのはこの人達じゃなかったのに……!!」

「……一先ず中央施設の中に行こうか。僕らの今後の事はそれから考えよう。」

安心させるようにディーヴァにそう微笑みかけ、どうにか立ち上がらせる。……僕らは確かに勝利し、新たな拠点を得て、これからフェンリルの情報を手に入れる。さらに予期せぬボーナスとして未来の有望な戦力まで手に入ったわけだが……どうしてこうも厄介事と言うのは絶え間なく積もるのか。

人から神に堕ちた人類の贗作。後に僕が『堕し児』と名付ける第二の厄災は、長い長い遺恨と呪いの始まりだった。それは人類にとっても僕らにとっても、そして彼ら自身にとっても。

そうとも知らずに僕はデイーヴァを引き連れ、サリーと共に新たな拠点へと足を進めた。未だに鳴り止まない堕し児達の罵声を背後に、戦争というものの忌々しさを噛み締めながら。……勝っても負けても地獄とはよく言ったものだ。本当に忌々しい。

## 17. 禁書（ラジエル）

旧ロシア支部の支部長室。ロシアという国を人類史から消し去った翌日、僕は良質な椅子に腰掛けたまま頭を抱えていた。

別に何か悩みがあるわけではない。墮し児ってイレギュラーは生まれたものの彼らは相応にこの支部での暮らしを満喫しているし、デーヴァに至っても現状は彼らと接触させることなく匿えている。

強いて言うると墮し児達のせいでは本来僕らがここを落とした目的。即ちフェンリル及び神機使い……人間側の情報を未だに収集できてないのは少々忌々しいけど。

でもまあ彼らについては望まれぬ命とはいえ僕の撒いた種だし、内側に余計な爆弾を抱えたまま事を急いても爆死する未来しか見えなから。それに今や極東の連中が持ち帰った情報なんて氷山の一角に過ぎないんだ。仮にフェンリルが僕らへの対処法を確立して備えたところで、これからの侵攻に生じる障害なんてたかが知れている。

それなら抱えている問題を先に解決しつつ、戦力を整えて侵攻に備えるのが賢いやり方というもの。まずは墮し児達とどうにか手を取り、人間への侵攻に駆り立てる。その上でフェンリル側の情報を収集し、人類殲滅における最適な侵攻方法と侵攻順を確立させる。あとここにわざわざ僕を追いかけてきた極東の行動も調べてね。

これらは頑張れば並行して出来るとして問題はデーヴァだ。あの子もどうにかしないとイケない。今はここ支部長室にて匿ってはいるけど、これから侵攻に於いて墮し児とは共闘するんだから。どうにか折り合いをつけないとイケないし、その上で彼女が精神的に苦しまないよう……同郷の墮し児達に受け入れられるように根回ししなきゃいけない。

加えてデーヴァ自身も今は自分のした事の罪悪感と墮し児達に恨まれてるって恐怖に思い詰めて酷い事になってるから。後であつちのメンタルケアもどうにかしないとイケないね。ようは自分のした事を何とも思わなく出来ればいいんだけど……或いは墮し児達に

恨まれないって根拠を与えてやるか。どちらにしる困難を極めるのはまず間違いないだろう。

……うん。改めて考えるとやる事が多い。仮にも一国を落として凱旋したばつかなのにこの仕事の量だ。頭痛の種はこれじゃないのにまた頭が痛くなってきた。挙句の果てに今はディーヴァが使えないから一人でこの仕事の山をどうにかしなきゃ行けないとか。

全く……戦後処理だけでこれだけ忙しいんだもん。戦争つてのは命だけでなくで時間までも際限なく奪って行くんだね。本っ当に忌々しい。おかげでサリーと仲良く触れ合う時間すらまともに取れないし。そりや頭のひとつも痛くなるわけだ。

……と、現状に対しての恨み言みたいになってしまったけど。話を戻すと、僕の頭痛はこうしたオーバーワークが原因ではない。

事の始まりはあの後僕が旧ロシア支部の中央施設に戻り、この支部長室にディーヴァを匿ってから。その後を生首から再生を終えた墮し児達が中央施設に来てからだ。

正確にはその前……そもそも墮し児達が思考を取り戻した瞬間からなんだけどさ。ほら、僕って今回の戦いで進化して感応現象が更に強化されたよね？そのせいで思考を持つ眷属のアラガミ……このロシア侵攻で生まれた墮し児の思考を把握できるようになったって。

この能力に関しては墮し児はもちろん、まだサリーやディーヴァにも教えてないんだけどさ。一見反乱を目論み続けている墮し児の思考を逐一把握できるこの能力、実はとんでもない弱点が露呈してしまつてね。

……なんとこの感応能力。忌々しいことにオンオフが切り替えられないらしい。おまけに思考を把握できる範囲もこの五階建ての中央施設内全域、どころかその外のロシア支部内全てみたいでさ。下手すると僕の眷属で思考を有しているなら、どこにいても把握できるまで有り得る。

そのせいで僕は今、僕が望む望まないに関わらず彼らの思考をリアルタイムで受信し続けているんだよ。『あの化け物が憎い』『殺したい』『周りの女もろとも死ねばいいのに』『無能の神機使い共が』『よくも私に番を喰わせたな』『寿司食べたい』『あの化け物を殺すための力を』……他 e t c e t c。四六時中、僕が何をしていてもそうやって怨嗟に塗れた思考が流れてくるんだ。

ただでさえ感応現象ってものは他者の感情を自分のものと錯覚しやすい。実際今の墮し児達が僕への殺意に塗れてるのも、口にした相手や神機使いが抱くアラガミへの敵意を自分のものと錯覚したのが一因だろう。

アラガミが憎い。アラガミは殺す。痛い。痛い。苦しい。憎い。憎い。憎い。そうやって口にした神機使いが今際の時に抱いていた感情が感応現象を通して自分の感情になるんだ。自分の味わった責め苦にそうした怨嗟が混ざり合い、僕に対する様々な負の感情が膨れ上がる。そうして出来上がったのが今の墮し児達だ。中央施設の恵まれた生活を与えたとはいえ、その本質はそう簡単には揺らがぬ。

そんな彼らの怨恨と殺意と憎悪で塗り固められた叫びが百十数人分、常に僕の頭の中に鳴り響いて反響してるんだ。感応現象という感覚に慣れた僕でも流石にキツイし、何より膨大な情報量が与えられては更新してを繰り返している。それに僕の頭の容量が耐えられなくなった結果、こうして頭痛として身体に危険信号が出始めたのだと思う。痛みに鈍感なアラガミの身体でこれなんだから実際は僕が思っている以上に不味いことになってるのだろう。

それなのにオラクル細胞はその性質上情報の処理と学習を止めてくれないし、苦痛を伴いながらも与えられた情報をその内容に関係なく脳や身体に烙印のように刻んでいく。見たくもない情報の数々を身体の隅々まで、まるで毒や病のように。細胞の一つ一つが僕の意思に関係なく情報を記憶し、心と身体を腐らせていく。

もはやこの真つ黒な情報の濁流は僕を殺してあまりある凶器に等

しかつた。何しろアラガミは与えられた情報の取捨選択は出来ない。知性を得た墮し児でさえ、与えられた情報の中から選んだものを反映するのが精一杯なんだ。

だからこのままにしておいたら僕は発狂死しかねないし、そうでなくとも精神が別のものに変貌しかねない。行き過ぎた進化が齎す破壊とでも言うべきなのか。進化を意のままに制御できる存在と豪語してたのがこのザマだ。人間性を物にして行き着くところに至った僕は、情報の濁流に飲み込まれる形で溺死しかけていた。

……が、そこはやはり既存のアラガミを超越した存在。僕はこうした問題に対し、ある能力を作り出すことで対応した。

まず感応現象を介した墮し児からの自動での情報収集。これはつまり、累積する情報をいちいち思考を通して確認。閲覧してしまうから精神への負担が甚大になるわけで。極端な話、どこかにそうした情報を書き溜めて後で閲覧できるようにすれば情報の濁流で溺死することはなくなる。

そう思い立った僕は最初に自身の思考と記憶を切り離れた。今まで累積した記憶を全て心のもつともつと深い見えない場所へとしまい、その上で任意に僕が欲する記憶だけを抽出できるように細胞の一部を変質させたのだ。

そしてその上で墮し児から送り込まれる情報の行先を思考ではなく記憶の保管庫へと変更。そうする事で僕は彼らの思考に耳を傾けることなく、その上で彼らから送られる情報を身体に保管することに成功した。

こうして出来上がった記憶の保管庫は、さながらページに制限の無い空白の辞典とでも言うべきものだった。墮し児の思考、記憶、感情が文字としてページを彩り、ページが無くなれば新たにページが足されて書き記されていく。そんな情報の累積が常に行われる記録システム。



こうして生み出した情報の保管庫……生体CPUとでも言うべき能力を、僕は『造書庫<sup>ライブブラ</sup>』と名付けた。実態は一冊の本であるもののページの一つ一つが辞書のそれに匹敵する、そんな決して読み尽くすことの叶わない知識の書。頭痛を治すためと言うだけの理由で、半日を費やしてまで僕はこの能力を生み出した。

おかげで僕の頭の中には久方ぶりにも感じられる静寂が訪れた。同時に僕は堕し児から与えられた情報の海から僕が要する最適な情報を検索し、取り出し、自身に反映する事までもが可能になった。

その対象は彼らの思考や感情、記憶。そしてその身体の構成情報に至るまでの全てだ。造書庫という能力の完成と同時に、最早彼ら堕し児は僕にとつてのイレギュラーでは無くなった。彼らはもう僕にとつての目であり指であり、耳であり、脳であり口でもある。端末という言葉すら生温い、全ての堕し児は僕の身体の一部となったのだ。

おかげで造書庫を手にした今、先ほど愚痴として零した堕し児に関する問題はいつでも容易に解決できる。人間風に言えば相当『非人道的なやり方』ではあるけどね。デイーヴァが知ったら間違いないと曇るし下手すると絶縁されるからやらないけども。

それにターミナルを介した調べ物もだ。なんせ造書庫はこんな使い方だって出来る。

『造書庫<sup>ライブブラ</sup>。堕し児が有する全ターミナルの閲覧記録を僕に開示しろ。………ッ!!』

そう造書庫に接続し、僕は検索をかける形で情報を引き出す。すると頭痛を伴うほどの膨大な情報が僕の頭の中に溢れ返り、目を通すまでもなく僕がかつて見たものとして頭に記憶される。

何しろ堕し児は結果としてロシア支部に住まう全ての人間を喰い尽くし、その全ての記憶を身体に刻んだんだ。つまりこの堕し児達

全員の記憶に干渉できるということは、かつてこのロシアに住んでいた人間全ての記憶を掌握して僕のものに出来るということ。

……流石にもう少し検索を絞るべきだったなどは後悔したけど。おかげで過去にここに住む人々が目にしたターミナルの情報はこうして獲得できた。ついでに側近でのターミナルへの加筆と僕らに關して記した情報なども含め、まともに調べて目を通したら数日はかかる情報がもの一瞬で僕の記憶として保存される。扱いを間違えると身を滅ぼしかねないが、半日を割いた甲斐があった。そう断言できるほどにこの造書庫は高性能であった。

しかもこの能力、本質としては記憶の保存のみに特化した僕の第二人格とでも言うべきものだから。理論上は墮し児は勿論サリーやデイーヴアも感応現象を僕に用いることで造書庫に接続できる。

まあ……見たら嫌でも記憶してしまうって性質上、今は下手に開示するわけには行かないけど。墮し児の怨念とかをサリーやデイーヴアが閲覧したらどんな悪影響を及ぼすかも分からないし、墮し児に至ってはまだ感応現象すら自由に扱えないんだ。この造書庫を僕らの財産として有効活用するのはもう少し先となるだろうから。それまでに僕も造書庫をより効率的に運用できるように手を加えておきましょう。

……で。とりあえず今接続して見たターミナルの情報だけど。ここ最近……僕らがここを襲撃している最中にも、ロシア支部はフェンリル本部に対して僕らの情報を送っていたらしい。ここの支部長が元々この支部を捨てる前提だったから納得行く話ではあるけどさ。

主に記されているのは変質したアラガミを統率する未確認の新種とサリーエルとプリティヴィ・マータをベースに作られた統制能力を持つ新種二匹の目撃情報。そして記録時点でこちらに齎された被害の詳細と僕らが用いた能力。要は全世界に対する警鐘だ。

あの地獄のような乱戦の中でもロシアは随分と僕のことを正確に分析してみたいで、アーカイブに目を通すと僕が他のアラガミに干

渉し、独自に進化を促す能力を持つこと。そして人語を介し、会話を  
行えるほどに高い知能を有することも特徴として記してある。

これだけでも人類視点だと悪夢のような厄災だろう。しかしター  
ミナルの閲覧記録を見るに、やはりフェンリルが僕について把握して  
いるのはアラガミを変質させ軍として率いる能力と人語を解する知  
能を持つということだけ。墮し児の存在と、僕が変質させられるのが  
アラガミだけじゃないという事はまだバレていない。

同時、このロシア支部内から僕の本質を書き足すような真似をした  
墮し児もいないらしい。何しろそんな事をすればロシア支部の健在  
を全フェンリル支部に伝達することになり、救援という名目で神機使  
いって死神を招きかねない。そこはちゃんと理解しているようで安  
心した。そんな真似する子がいたら力尽くでも止めようと思つてた  
からね。

で、他に僕はフェンリル支部の大まかな人員と主な生産施設。そし  
て生産資源の輸送ルートなど、僕が求めていた情報にも目を通してお  
いた。何しろ今後の侵攻作戦とフェンリル支部の襲撃順を吟味する  
上で、こうした情報が必要となるから僕はフェンリル支部を破壊では  
なく制圧したんだ。おかげで情報面に関しては既に十分すぎる成果  
が得られている。

まずフェンリルの各支部は極端な話、他の支部が壊滅したところで  
支部単体でも生存が出来るように地下に多数の工業施設を抱えてい  
る。食料に浄水、発電施設などの生産プラントと……そうしたシステ  
ムはこの旧ロシア支部すら墮し児達が運用する形で稼働している。  
これだけで墮し児達の所謂『人間らしい暮らし』が再現できてる辺り、  
本来なら資源の輸送ルートなんてものは必要ない。

にも関わらずフェンリルの支部間には何かしらの輸送ルートが敷  
かれ、それなり以上の頻度で物資が行き来している。この中身は一体  
何か。

答えは神機の製作に要するパーツ。及びその適合用の偏食因子だ。  
あとは嗜好品とか娯楽品。生活に必要な機能は各支部が最低限賄え

るとはいえ、どうにも神機に関しては大きな支部のプラントで分割して生産し、各支部に輸送後に現地で組み立てられているらしい。偏食因子の調整も然りだ。そういうのはある程度の技術者がいる支部でしか出来ないという事なのだろう。今の人類に神機は下手すると食料以上に必要なものだからね。

で、問題はなんだけど。この輸送ルート。ほぼ必ずといっていいほどここロシア支部を通過するんだよ。神機のパーツとか偏食因子と言った、各支部にとって必須レベルの軍需品が。

どうにもロシア支部は元々、新型神機の研究しかり全フェンリル支部の中でも神機に關した開発を一手に引き受けていたらしい。広大な土地に裏打ちされた大型の支部と多数の人員、そしてそれに反してそこまで強大なアラガミが跳梁跋扈してゐるわけでもない（比較的）平和な環境。ここが神機の製造を一任されたのは当然と言えば当然なのだろう。僕らはそんなこと知らずにここを落としたわけなんだけど。

つまり僕らが落としたロシア支部は世界各地の他支部に向けて必需品である神機を輸出していたわけであつて。そこで僕はふと思つたんだよ。このロシアからの輸送品……正確には輸送車に<sup>地雷型メイデン</sup>パンドールを搭載し、フェンリル支部の内側で起爆してはどうかつて。

そうすれば世界中の各支部で一斉に大勢の墮し児が生まれ、人類に壊滅的な被害が齎される。それこそ僕の本質を暴いて対処するよりも先に支部の内側に大量のアラガミが発生するんだ。極東みたいな戦力過剰な支部はそうは行かなくてもグラスゴー支部みたいな神機使いの少ない弱小支部はこれだけで壊滅するし、大型の支部も甚大な被害を被るだろう。

加えて輸送時にはここを訪れた輸送車の操縦員を墮し児達に喰わせてその容姿を模倣。現地への運搬を行わせる。そうすれば検閲を潜ると同時に現場でパンドールを起爆後、発生した新たな墮し児達との管理と使役を運転手に擬態した面子に任せられる。そうなれば世界中での無差別テロが一変、明確な統制を得た全世界への同時攻撃作戦

に早変わりする。人間のアラガミ化への対抗策を練る間もいまま、  
フェンリル  
人類は壊滅するだろう。

仮に生き残るとしてもそれは大きな支部だけ。もしそうなったら  
今回のロシア襲撃で発生した墮し児達と、この作戦で発生する墮し児  
達を率いて息を着く間も与えず叩き潰せばいい。

とはいえこの作戦、実行に移すには墮し児の協力が不可欠になる。  
むしろ墮し児とパンドールって存在があるから思い付いたわけだけ  
ど、その前提として墮し児を懐柔するだけでなく人類殲滅へと駆り立  
てるのは必須となる。それは彼らを戦わせるための理由を用意する  
必要があるってわけで。

同時にこの作戦はロシア支部が健在時のここを通る輸送ルート  
の使用を前提としている。つまりこれからどうにかしてこのロシア支  
部はまだ健在だという偽の情報をフェンリルに流し、信じさせなくて  
はならない。

けどそれはさつきも言ったようにフェンリルからの救援を招くこ  
ととなる。その際にやってくる神機使いや、フェンリルの人員に僕ら  
が人に擬態したアラガミだとバレなければいいわけだが……そのた  
めの口裏合わせにも、現在の墮し児達の懐柔は必須事項となる。

加えてあの地獄のような戦乱から既に一日。極東とここの支部長  
が離脱した後とはいえ、あまり日数を置いてから生存報告を出しては  
その報告そのものが信憑性を失う。そうすれば『アラガミが人間の真  
似をして偽の報告をして来た』と僕らの進化を無駄に伝達するだけ  
になりかねないし、当然攻撃の計画も破綻する。

以上を踏まえて。この作戦の実行を前提とした場合、僕が現在最も  
優先すべきは墮し児達の懐柔と協力者となる墮し児の徴集。この二  
つをなるべく早急にこなす事だ。本来なら彼らを扇動する事で僕へ  
の憎悪を煽り、殺意を利用する形で実戦形式で戦力として鍛える予定  
だった。しかし状況が変わった。

ロシアの健在を知らせてフェンリルの人間を招くのは、彼らとて死

にたくはないだろうから。招きさえすれば彼らは口裏合わせには協力する。それは造書庫に接続して彼らの自殺願望などを調べたから断言できる。新しい身体や環境に興味津々で、喪失による自暴自棄や自殺願望の死に急ぎ野郎はまだ存在しない。何だかんだ墮し児は中央施設での暮らしそのものは満喫してるらしいし。敵意マシマシの彼らをここに招き入れたのは正解だったわけだ。

が、肝心のフェンリル本部への報告をこなすための人員が僕には必要だ。具体的には外部への連絡手段を有する墮し児。元オペレーターなどの通信技術を持つ墮し児だ。そうした協力者だけは他を差し置いてでも早急に飼い慣らさなければならぬ。彼らが未だに僕の顔を見たら問答無用で殺しにくるのは火を見るより明らかだが、それでもだ。

……そもそもそうした報告をこなせる通信技術持ちが今の墮し児達の中にいるかどうか。オペレーター辺りはそう言った事も出来るだろうが……墮し児になったか喰われたかしてれば記憶は誰かの中にあるはずだけど。口にした他人の記憶を参照して技能だけを引き出すなんて器用な真似が墮し児になりたてはやはやの彼らに出来るかという……ねえ？

最悪オペレーターの記憶と技能を僕に反映してもいいけど、出来ればオペレーター本人が墮し児として現存してくれての方が連絡の文面などをより違和感なく考えられるはず。果たして生きてるかどうか……

『<sup>ライブ</sup>造書庫。この元オペレーターの墮し児、或いはオペレーターの記憶を有する墮し児達を――』

そう造書庫に検索をかけると同時。殆どノータイトムで僕の求める人員がリストアップされる。でかい支部だからかオペレーターも複数人いたらしい。幸いにもそのまま墮し児になったオペレーターは何人が現存してるし、引退組も含めればそこその数がヒットした。ならば……

『……さらに彼女達の現在から墮し児となった当時までの思考、記憶を共有してくれ。……ッ!!』

再度検索をかけ、脳内に新たな情報を獲得する。が、その大半は僕が予想していた通りの怨嗟に塗れた思考の数々。そうしたものが一気に流れてきたせいで僕は吐きそうになるも、口に手を当てて堪える。

……この中で一番現状に対して、僕に対して悪感情の少ない墮し児。それこそが僕が飼い慣らすべき協力者だ。ひとまずロシア支部の無事をフェンリル支部に伝達できればいい。その後の作戦は多少は実行まで猶予が生まれる。

しっかしこの名前……どこかで聞いたことあるような。そう思った僕は僕自身の過去の記憶を造書庫で検索して調べてみるが、なるほど理解した。ディーヴァの生前……というか人間時代の友人か。いや、実際はどういう関係だったかは僕の知るところではないけど。こりやまたディーヴァにとつての爆弾になりそうな相手だな。

一応このオペレーターにコンタクトを取る前にディーヴァ本人に確認を取っておくか。僕が考案した次の攻撃計画然り、このオペレーターのこと然り。今後の大雑把な方針も決まったし、一度腰を据えて彼女と話すべきだろう。彼女のメンタルケアも含めてね。

さて……そうと決まれば彼女を匿ってある部屋に向かうか。幸い造書庫を生み出したことで、反乱分子である墮し児達をどうにか従属させる手筈も整った。彼女にもきつといい報告が出来るはずだ。

## 18. 決別（フレイ）

「ディーヴァ。起きてる？」

支部長室に隣接した扉へと足を進め、軽く扉を叩く。ここはかつての支部長の私室。墮し児達の怨念が渦巻くこの支部で、僕はここをディーヴァに与えることで彼女を墮し児から隠匿した。扉は支部長室の中にしか存在せず、そもそも五階より上に墮し児が訪れる事は無い。故にここは彼女にとって唯一の聖域であり、ディーヴァはこの部屋の中でしか生きれない。それ程までに彼女は心を閉ざし切っていた。

……その顕なのか、僕が扉を叩いたところで返事は無かった。一応コンゴウの聴覚で部屋の中のディーヴァの様子は分かる。彼女は扉を叩く音だけでびくりと身体を跳ね上がらせ、枕か何かで荒ぶる呼吸を必死に押し殺そうとしている。返事が返ってこないのも納得して言うか……ここに来るのは僕だけだって分かっているだろうに。何をそんなに怯えてるのか。造書庫ライブラリの管理下になく彼女の心情は僕には分からない。

しかし僕が彼女に急ぎの用があるのも事実。ディーヴァには悪いが、僕はもう一度扉を叩くと彼女の返事を待つことなく扉を開ける。そして無駄に高級な家具に彩られた私室へと足を踏み入れると、僕はベッドに横たわるディーヴァへと足を進める。

「あつ……!?、主人様……!!」

「悪いけど君に急ぎの用があつてね。……用って言うか質問か。そんな怯えなくても大丈夫だよ。」

「あう……づうっ……!!」

そう諭すように優しく声をかけるも、彼女はそんな声にならない悲鳴と共に首を激しく横に振るだけ。とても話が出来るような状態で



は無かった。……その普段の力強くて聡明な彼女からは想像も出来ないような姿は、恐らく僕が会う以前の彼女本来の姿なのだろう。取り繕う余裕すら無くなった彼女の瞳には今にも零れそうなほどに涙が溜まっており、しかもその視線は真っ直ぐに僕に向けられてる。

……僕の何がそんなに怖いんだか。こんなか細く儂い少年の姿すら恐れるなんて。今回彼女が心に負った傷は僕が思う以上に遥かに深いんだろうね。可哀想に。誰がこんな酷いことしたんだか。とはいえディーヴァが僕を恨む理由はあっても僕を恐れる理由はちよつと心当たりがないんだけど。僕なんかしたっけ？

「ディーヴァ……どうしたの？何がそんなに怖いのか？」

「だって……だって、ご主人様……!!」

「怖がらなくても僕は何もしないよ。……ていうか、そう怖がられると僕も傷つくんだけどな。」

怯えるディーヴァの頭に手を伸ばすと彼女は目をぎゅつと瞑つて頭を手で覆うようにして身をかがめる。……殴られるとも思ったのか。僕がそんな酷いことするわけがないのに。現に僕はディーヴァの頭にそつと手を置き、安心させようと優しく撫でてみせる。それでもディーヴァにとつてはそうされる事がよほど意外だったのか、しばらく撫でてやると漸く恐る恐る顔を上げた。ほんとに何があったんだこの子。

「……………ご主人様……………」

「ほら、大丈夫。僕は君を虐げたりはしないから。ね？どうか落ち着いてて?」

「なんで……………ご主人様、私のこと怒ってないんですか……………」

……………いやいや。なんでそういう考えに至ったんだ？べつに僕は怒ってなんかいないし、むしろディーヴァの事ずっと心配してたんだけど。精神状態ヤバそうだしどうやってケアしようかなって。流石にここまでとは思ってなかったけどさ。でもなんでディーヴァは僕

が怒ってるって思ったんだ。……僕、デイーヴァになんかされたっけ？僕が彼女になんかした覚えしかないんだけど。冗談抜きに。

「だって……私、ご主人様にわがままばっか言ってる……ご主人様のこと困らせてばっかで……今だって……」

「ああ。なんだそんな事か。」

「ご主人様は私の願いを聞き届けて、彼らを墮おとしたのに……殺さないでくれたのに、あんな酷いこと言ってる……」

そこまで言いかけて、デイーヴァの目から大粒の涙がボロボロと零れ始める。驚くほどデイーヴァに言われたことを覚えてない僕は密かに造書庫を起動して過去の僕の記憶を遡るが、確かに『大嫌い』とか言われてたか。別にそんなこと気にしないのに……いや、気にしないのはそれはそれで問題か。わざわざデイーヴァは気に病んでたのにそれではあんまりだね。

……さて。なんて返したものか。こういう時の気の利いた返しは造書庫で調べても何も分からないからな。

とはいえ小賢しいことに、僕にも造書庫で手にした彼女の情報はあつる。彼女の秘密を暴くように下品な気はしたが、造書庫を介してターミナルの情報を得るうちに意図せず知ってしまった。そうなら知ってるのに知らない振りをするほど不誠実な事も無いだろう。

ならばと。僕は彼女に嫌われるのも覚悟の上で、ポツリと漏らした。

「………神兵プロトタイプ。」

「ツツツ!?!ご主人様……どこでそれを——」

「ターミナルに書かれていたよ。……わざわざロシア支部外秘だね。」

フレイ・アイアンハート。身長207cm。享年13歳。彼女は元々フェンリルの管轄下にある孤児院に飼われた一般人……そこら

の人間と何ら変わらない普通の少女であった。身も心も人と同じ、どこにでも居る少女。親をアラガミに殺され天涯孤独となった、この時代なら珍しくも何ともない孤児だった。

強いて上げるなら普通でなかったのは彼女が保護されたその孤児院。もつと言えばこのロシア支部そのものだ。ロシア支部は元々神機の開発に最も注力していた支部の一つであるのは知つての通り、あのペイラー・榊やヨハネス・フォン・シツクザールを有する極東を差し置いて人類全体に影響を与えるほどにフェンリルの神機開発に貢献できた理由。そこにはちゃんと理由がある。

神機つてのは早い話、アラガミを改造した生物兵器だ。触れるだけで捕喰してくる性質から人間が用いるには危険の大きな代物だし、ましてや安定して運用できるものを組み立てるまでには多くの失敗作が生まれる。そしてその失敗作を失敗作と見定めるには、これまた多くの人命が必要となる。

早い話、デイーヴアの所属する孤児院はそうした神機の研究における適合候補者の育成機関……言うなればロシア支部が有する被験者<sup>モルモット</sup>の牧場であった。特に生産体制の整った神機でなく、新たに開発される神機への適合実験のための生贄要員。そう言った表沙汰に募集しにくい人材を供給する、そのために作られた施設だったらしい。

……まあロシア支部は実際にそれで強力で安定した神機を開発し、フェンリルの他支部に配ってたらしい。多少の非人道的実験はフェンリル本部も目を瞑ったのだろう。実際行き場を失った戦災孤児が神機使いになるのはそう珍しいことでもない。その適合率が少々低いだけ。その程度の問題なんだ。ましてや資源が枯渇したこのご時世、働けない子どもなんて生きてるだけで資源を食い潰す害虫に等しいし。死んでた方が都合がいいまであるんだ。口八丁で丸め込み、フェンリルで使い潰されるのは言い方は悪いが比較的賢い運用方法ではあるんだよ。だからこうした行為自体は容易く黙認される。

ただこの時期、既存の神機……後に旧型と呼ばれる神機の性能は突き詰めるところまで突き詰められていた訳だから。ロシアは新たな神機の開発に注力し、専用の開発チームまで設立していた。それが僕にとっては何しろ馴染み深い『新型神機』。近接型と遠距離型の二つの神機の形態を入れ替え、各種の弱点を補うと共に運用の幅を大幅に<sup>ひろ</sup>拡げる人類がアラガミに抗うための新兵器だ。

それでもこの新型神機、性質的には二種類の神機を一人で使えるようにするわけだからね。当時の技術では開発は当然難航した。適合する人間はそもそもそう存在しないし、そのせいで安定性を高めるための技術を確認しようにも適合実験すら行えない。おかげでロシアの連中はそれは様々な方法で新型神機を人間に適合できるもののように、色々な実験を行ったらしい。

そしてその中のひとつに既存の偏食因子と異なる新型神機専用の偏食因子の開発。及び適合を目指す実験の記録がターミナルには残っていた。つまりは新型神機に合わせて人間の方を適合できるように改造する計画。ターミナルに記されていた言葉を借りるなら『神兵計画』。……ディーヴァが参加していた計画だ。

記録によると適合率だけで言えばディーヴァはダントツで高かったらしいが、それでも成功率はせいぜい30%。一般の神機使いであれば絶対に適合試験なんて行われない確率だ。

それでも実行されたのはロシアのこうした神機開発の内情に加え、当時の研究スタッフの中に新型の完成を焦る研究員が強行したとの噂もあったらしいが……何にしる実験は失敗。ディーヴァは新型神機に適合なんて出来るはずもなく、アラガミ化して処分される。

……そのはずだった。

しかしこの実験で失敗した結果。アラガミ化を引き起こしてなお、ディーヴァは人間性を失う事が無かった。

新型専用の偏食因子の影響か、ディーヴァが元々持っていた特異体質か。その最低最悪の奇跡の影響で、彼女は人でも神でもない半端な混種へと変貌した。殺処分するかどうかは意見が分かれたものの、前例のない希少極まりない個体って事もあったからね。人材不足が常の世の中でもあったし、ロシアはアラガミと人間性を両立した彼女を特殊な神機使いとして運用した。

アラガミ化による破格の身体能力に通常の神機使いを大きく上回る再生力。そして既に神機の適合に失敗した上で正気を保っているという性質上、神機から侵蝕こそ受けるものの全ての神機の行使が可能。適合者が存在せずに埃を被っていた神機を自在に運用できる体質と、そうした化け物じみた身体能力からディーヴァは僅か数週間でロシア支部における最高戦力となった。

それでも当時の光景を墮し児の記憶を介して覗いた結果、混ざり物たる彼女の扱いは凄絶なものだった。

何しろ全ての神機を扱えるとはいえ、適合自体が出来るわけではないんだ。侵蝕されるそばから再生するだけで神機の運用には常に苦痛が伴うし、高すぎる戦闘能力を過大評価されて身の丈に合わない任務に駆り出されるのはまだ序の口。その力と特異な身体を他の神機使いは恐れ、陰でその戦果を妬んだ。それも年端も行かない新米の少女がベテランの自分達より戦果を上げている。そうした現実を認めながらも上官は少なからず存在したし、陰湿な嫌がらせも後を絶たなかった。

そんな扱いを受ければやがて心の拠り所を求めるのは必然。幸いディーヴァは器量は良かったから、神機使いの男にはモテた。……とは言ってもまあ、前述する嫉妬とかあるからね？あくまで目当ては身体だけだったろうし、扱いは恋人と言うよりは性欲の捌け口だった訳だけど。十代前半なんて事の善し悪しも分からないから、何されても為されるがままだしそれで喜ばれてしまえば『必要とされたい』ってなっちゃうから。愛されてないって分かっても彼女は男達の間を回されたわけで。

そうやって身も心も疲弊していくうち、歪なその身体は遂に変調を来す。ストレスや強い興奮状態に陥った際、彼女はアラガミ化を再発して暴走する体質と化してしまった。それでもまだ鎮静剤を投与すれば安定する程度には制御は可能であったが、そうした暴走を繰り返す度に彼女の身体は大きく強靱に、年不相応なものへと発達して行つた。暴走の条件も捕喰によるバーストや負傷などと徐々に些細なものになっていき、そうする度にやがて精神にすら異常を抱え始める。

こうなってしまうえば行き着く道などもはや火を見るより明らかだった。というか、適合に失敗して生き残った時点で遅かれ早かれこなる事は分かっていたのだろう。分かっていたからこそ他の神機使いの手に負えない任務を彼女に押し付け、壊れる限界まで色々な意味で使い潰した。こうなってしまうえばデューヴァはロシアにとつて最高戦力以上にいつ暴発するかも分からない生きた爆弾なんだから。さっさと任務の中で事故死してくれば行つた所業も含めて存在ごと隠匿できるし、それで困難な任務を押し付けて達成できればそれでよし。彼女が壊れるまでそれを繰り返すだけ。

そこから先の結末は彼女の感応現象で見た通り。アラガミ化が限界まで進化した彼女は通常任務に偽装された緊急任務に派遣され、そこで任務中の戦死として処分された。そこから回り回って僕の元に彼女はやって来たわけなんだけど……

「要するにさデューヴァ。君が滅ぼしたかったのはそういう連中なんだろう？」

「……………ツ!!!」

「君をそんな化け物に変えた研究者に、使い潰す前提で無茶振りしか寄越さない忌むべき支部長。そして心無い同僚。そいつらに復讐したくて君は僕に君の故郷を売り渡した。……因果応報じゃないか。」

事実を淡々と並べた結果、決らなくていい傷まで抉つたのだろう。

ディーヴァは僕の胸へと顔を押し付けて声を押し殺すように泣き崩れ、身体をへし折りかねないほどに凄まじい力で僕のことを抱きしめてきた。……だから僕も彼女の頭を優しく抱きしめ、ふわふわの髪を撫でて彼女のことを愛でる。……僕にはサリーがいるし良くないことだって分かっているんだけどね。

「大丈夫だよディーヴァ。……君は何も悪くない。」

「ご主人様……ちがう!!私はい——」

「この人間には死ぬに足る理由があった。それだけなんだ。……ありがとうね。君がいなかったらきつと僕は勝てなかった。」

もはやディーヴァに僕に対する警戒心は存在せず、同時に僕の前で今まで取り繕っていた彼女の化けの皮までもが剥がれていく。比較的理性的で聡明だった彼女は既にそこには存在せず、ディーヴァは不意に僕の胸元から顔を上げて身体を起こすとぐいつと僕の身体を抱きしめてくる。

そのせいで僕の身体はディーヴァの大きくて強靱な身体に受け止められるわけなんだけど……そうすると、ディーヴァは彼女の顔と同じかやや大きいくらいの爆乳に僕の頭を押し付けてきた。少しびつくりして僕も顔を上げるものの、ディーヴァは未だにポロポロと涙を零しながら僕の顔をじっと見つめてる。ただ僕の身体に回された手は僕のことを愛しそうに撫でていて……その感触が恥ずかしくて、僕も思わず彼女の胸へと顔を押し付けてしまう。身体は筋肉質で威圧感すごいのにめっちゃ柔らかい……

けどそうしてされるがままに甘えていると、彼女は辛そうに僕の身体を抱きしめ直してくる。僕が彼女に愛情を向けるその仕草が辛くて辛くて仕方ない。もはや感応現象を用いるまでもなく、心を覗く必要もなくそう分かっってしまうほどに。

「……ちがう。ちがうんです、ご主人様。」

「違う?何が違う?……あそこまでされて人間が憎くなかったとでも

？」

「いいえ……いいえ。でも、ご主人様をここに連れてきたのは……私の復讐に利用したかったわけじゃないんです……」

ボロボロに泣き崩れてるのに、ディーヴァは必死に笑顔を作ろうと口角を上げて見上げる僕へと視線を向けてくる。……銀色の髪に琥珀色の瞳。そして白くて柔らかい肌。年不相応に発達したこの身体も、神秘的な美貌も。こうして今まで触れないようにしてたのは、きつと僕も無意識に避けていたのだろう。彼女に本気で迫られたら僕は抗えない。それが頭のどこかで分かっていたから。

「私……ご主人様に喜んで欲しかった。ご主人様に褒めて欲しかったんです。この土地を差し出して、サリーより私の方がご主人様に役に立ってるって……!!そうしたら、私もご主人様に……」

「……ディーヴァはいけない子だね。僕のことを好きなんだ？僕にはサリーがいるって分かってるだろうに。」

「はい……好きです。大好きでした。好きで好きで愛しくて、ご主人様にこうしたくて仕方ありませんでした……!!ご主人様の役に立ちたいって、サリーより愛されたいって……!!」

……僕も分かってはいた。けど、あまりに愛しそうにディーヴァがそう言うものだから。呆れたような笑みと共に意地の悪い言葉を返してしまっただが、そうすると彼女はさらに重たい愛情を僕へと向けてくる。それほどまでに彼女にとって、出会いの形はどうであれ僕と共に過ごした時間は大切なものだったのだろう。僕がどんなに醜くとも、自身の姿がどんなに忌々しい獣であっても。仲間として傍で大切にしてくれる。それだけで僕のことを好きと錯覚してしまうほどに。

なのに僕は彼女に僕も意図しない形で人の姿を与え、彼女の知性と言葉を取り戻した。人の身勝手にアラガミに変えられた彼女がアラガミの僕の手によって人の姿へと戻されたんだ。僕を『ご主人様』な



んで呼ぶ時点で気付いていたよ。君が僕のお願いなら何でも聞いてしまうくらい、自分の全てを捧げてしまうほどに僕が大好きだったこと。サリーがいるからその想いから目を逸らしていただけで。きつと、デীবアも僕が知った上で無視してるのは分かってたはず。その理由も含めてね。

でもその拮抗状態を彼女は今こうして想いを口にすることで破壊した。お陰で僕はもう彼女の想いを知らなかったなんて言い訳は出来ない。そして寄りにもよってこのタイミングで自分の想いを告白してきた理由。それは――

「けど……気付いてしまったんです。このロシア支部を攻めているうちに、ここに住む人達は……少なくとも民間人の皆さんは何も悪くないって。」

「強いて言えば人間として生まれた時点で悪だけだね。……まあ君には何もしてないか。」

「なのに私は、ご主人様に愛されたい一心で……何かされたわけでも無いのに、神機使いじゃない人まで巻き込んだ……!! ここには私に優しくしてくれた人だっていたのに……!!」

声が震え始めると共にデীবアが僕を抱きしめる力が強くなる。……そりや普通、あんな無抵抗で喰い散らかされる一般人を見たらそうなるよね。純粋なアラガミのサリーですら戸惑い躊躇いを覚えるほどだ。元人間の君はさぞ自分のした事を後悔したし、中央施設の中に僕が訪れた時点で一人でも多く生かそうとしただろう。そのおかげで僕は楽にここを制圧できたし、その上で後の不安の材料となる民間人を新戦力となる墮し児へと変えることで摘み取った。

そのせいで逆にデীবアは何も償えなかった。守れなかった。愛しくて愛しくてしょうがない僕が全てを奪って滅ぼし尽くした。後悔から生じた『助けて』って願いすら僕の手によって『墮し児』って呪いに変じた。君はただ僕に愛されたかっただけなのに。僕みたいに人類を滅ぼしたいなんて微塵も思ってたはずなのに。

本気で好きだったからこそ苦しんだし後悔しただろう。デイーヴアが提案なんかしなければ僕はロシア支部を真つ先に潰そうなんて思い付きすらしなかったんだから。そのせいで巻き起こった大惨事も、墮し児に憎まれるこの現状も。齎したのは僕とはいえ、引き金を引いたのは自分なのだと思い知らざるを得ない。全ては僕を好きになった、デイーヴア自身の自業自得なのだ。

「ほんつと……僕のこと好きにならなきゃ、君はこんな思いしないで済んだのにね。」

「……………っ!!ご主人様……………私つ……………!!」

「こんな事になった上で聞くけどさ。……………デイーヴア。デイーヴアはまだ、僕のことが好き?」

なんでこんなにも悪辣な言葉を吐けるのか。こうして密着しているせいで彼女の気持ち分かるせいかな。どんな顔をしてそう尋ねたのが分からない。きつと底意地の悪い笑みに決まっている。そう思ってたのに涙でぐちゃぐちゃになった彼女の瞳に映る僕はそれは優しくもどこか心配そうに、小さく儂く笑っていた。そんな顔でこんな質問を投げかけていたのかと、自分で自分からなくなる。

残酷極まりない僕の問いのせいでデイーヴアはまた泣き崩れ、僕の背に回された腕に入る力が強くなった。自分の泣き顔を隠そうとでもするかのように僕の顔を彼女の胸に押さえつけ、泣き声をどうにか抑えようと頑張っている。それでも嗚咽混じりに言葉を紡ごうとするものだから、僕も彼女の背を慰めるように手で軽く叩いてしまう。

「嫌いに、なれない……………なれないんですよ……………!!ご主人様は、私が思ってたよりずっと酷くて残酷だったのに……………!!」

「……………そっか。」

「なんで嫌になれないんですか……………!!ご主人様のこと好きでいるのが、こんなに苦しくて苦しくて仕方ないのに……………!!」

……きつと僕のことをちゃんと嫌いになれば、デューヴァは彼らと同じ被害者として。僕に嵌められた墮し児の仲間として、僕に牙を剥く事も出来ただろう。そうすれば墮し児に怯えることも無くなるし、僕の始めた人類絶滅のための侵攻から足を洗うことも出来た。正直、そうなってくればいいのにつて思ってた。

ただその願いはどうにも叶わないらしい。啜り泣くデューヴァを無言で抱きしめていると、デューヴァは背中に回していた手を腰の辺りまで下げ、やがて太ももの辺りを撫でるとローブを模した衣類状の器官の内側へと手を滑り込ませてくる。人の姿をそのまま覆うように展開した一枚の衣服の下、人間で言うところの裸体へと。素肌を長い指で撫でられる感覚と共に、自然と僕もデューヴァの胸へとぐいぐいと顔を押し付けてしまう。

「ご主人様……私、ご主人様から離れられません。ご主人様のこと、裏切れそうにありません……」

「うん。……知ってる。」

「だから……せめて、諦めさせてください。ここの墮し児達のことや私の未来のこと、ご主人様以外の全てを……ご主人様の寵愛に比べたら、取るに足らないものだと思わせてください。そうしたら私、きつと大丈夫ですから……」

嘆願するような声と共に腰の辺りを愛撫され、彼女は僕を縋るように求めてやまない。それはきつとどんな道よりも辛い道だし、そこまですた所で僕の気持ち彼女に向くことはない。振り払わなきゃって分かってるのに……僕は情けないやつだね。身体を預けたまま一切の抵抗ができず、彼女が行う全てを無言で肯定してしまっている。……応える気すらないくせに、そうなって欲しいって思ってるんだよ。彼女には僕のためにそばに居て欲しいって。

そのせいで絶対に不幸になるって分かっているのに断れないんだ。

本当に酷い話だよ。ちゃんと止めてあげなきゃいけないのに。それでも僕は、彼女の未来よりも人間の存在しない未来を求めてしまっているんだ。ほんと……こんな僕から逃げられないなんて、まるで呪いじゃないか。あまりに可哀想で、僕はディーヴァの身体をぎゅって抱きしめた。

せめて、少しでもこれで彼女の心が癒えてくれますように。彼女への労いになりますようにと、誰に向けたかも分からない祈りを胸に抱えたまま。僕はディーヴァの胸元から顔を上げ、懇願するような彼女の顔を見つめる。

「……………ディーヴァ。」

「はい……………なんですか。ご主人様……………」

「ありがとうね。……………僕を選んでくれて。」

そう短い言葉で僕は彼女の全てを、彼女がこれからする事の全てを肯定した。なるべく優しく微笑んだつもりだったが、彼女の琥珀色の瞳に映る僕は少しだけ困ったような笑顔をしていた。それが却って彼女の理性と正気を奪ったのか、それともっと別の何かに触発されたのかは分からない。

ただ琥珀色だったディーヴァの瞳は愛情で真っ赤に爛れるかのように変色し、彼女は僕の表皮を変質させただけの黒衣を引き裂き僕の白い柔肌を暴いた。抵抗なんて当然できなかつた。僕のために全てを棄てようという彼女にそんな無礼など出来るものか。

……………例えばそれがサリーへの裏切りになろうとも、僕の細やかな幻想が踏み躪られようとも。こうする事でしかディーヴァは救われず、その救いすら呪いを別の呪いで上書きする程度の気休めなのだから。僕は僕に仕える事を誓い、僕以外を棄てる事を選んだ彼女にこの身を差し出した。

何故なら造書庫という全能に近い全知の力を得てなお、僕には未来

という不確定事象を知る術が無かったから。皺寄せとばかりに彼女に生じる歪みと狂気を僕は知る由も無く、後で思えばここから何かが決定的に狂い始めたのだと思う。

それほどまでにデイーヴアは僕の全身を愛し尽くし、僕の身体が壊れるほどに僕に抱いた重たい感情を吐き出した。当然この夜は僕にとって決して忘れられないものになったし、それは同時に彼女にとっても新たな呪いとして刻まれた。

だからこそ僕は、少し未来の僕は。過去の愚行ぼくに向けてこう告げる。

貴様の行動に責任を取れ、と。

## 19. 呪縛（チャーム）

「……………ご主人様。」（どうしよう。ご主人様絶対怒ってる。絶対嫌われた。幻滅された。）

「なに。」

「ご主人様って……………人間だった頃って、どんな人だったんですか。」（何聞いているの!? そんな事よりご主人様にちゃんと謝らないといけないのに!! ああでもご主人様かわいい。好き。好き。ほんと大好き。これももう天使の接触禁忌種でしょ。）

ここはデューヴァの膝の上。ベッドに腰掛けたデューヴァに向かい合う形で抱かれ、僕は不意にデューヴァにそう質問を投げ付けられた。がっしりしながらも女性らしい身体付きをした彼女に身を預け、僕はデューヴァの顔を見上げる。するとデューヴァは気まずそうに僕から目を逸らした。

「……………さあね。僕は人間だった頃の記憶が殆ど無いから。神機の適合に失敗して処分された位しか覚えてないよ。」

「そつ、そうなんですか。……………私と一緒にですね。」（フェンリルってどこもそんなクソなの？ 滅ぼさなきゃ。）

「正直自分の年齢や容姿すら覚えてないし、その辺覚えてる君とは少し違う気もするけど。……………まあ、ある意味似た者同士とも言えるか。」

目を逸らしつつもチラチラとこちらに目を向けるデューヴァを気にかけないようにしつつ、言葉を返す。別にこういう答えを彼女が求めている訳では無いし、何ならその質問自体も大した意味は無い。それは分かっている。むしろこれは気まずい沈黙の中、彼女がどうか絞り出した会話だ。そのくせ僕はじつとデューヴァの顔を見つめているのに、彼女は一向に目を合わせようとしない。

それが少々ムカついたため、僕は彼女の西瓜みたいにバカでかい胸にぐいっと顔を押し付けた。ついでにガチガチの筋肉に覆われた腹

回りにもぎゅつと腕を回して抱きしめてみせる。するとディーヴァは顔を真っ赤にしつつ、僕の腰に回した腕に力を入れた。まるで自分の身体を僕に押し付けるように。それが反射か彼女の意思かは、本来暴かれるべきではないのだろうか。

「ひゃうっ!?」……ご主人様!?!」(うわっ、すっごい甘えてくれてる。好き好き好き好き。可愛すぎ。)

「なにさつきからシカトこいてんの。……僕の顔好きなんですよ? こっち見なよ。」

「はっ……はい。そりゃ、ご主人様の綺麗なお目目も雪みたいな肌も、ふわふわでいい匂いする髪の毛も大好きです。太ももだつてムチムチしててスベスベですし、女の子みたいなお尊顔とか脳みそ溶かす声とか全部愛しくて愛しくて堪りませんけど——あつ、睫毛なつが……天使みたい……」(こんな美少年犯し倒したとか地獄の最下層に叩き落とされても文句言えないし、童貞奪ったとか神様憤死物だよ。本当にごめんなさい。ご主人様の初々しい反応思ひ出すと、それだけで子宮疼いて理性トびそうになるの。卑しい獣みたいな女でごめんなさい。ご主人様見てこれ以上発情しないよう我慢しなきゃ。我慢我慢我慢。)

誰もそこまで聞いてないんだが。ディーヴァは声に出さなくてもいい事を高速詠唱すると、僕の顔を食い入るように見つめてくる。目が血走っていて少々身の危険を感じるが、しばらくすると首をブンブンと振って我に返った。そのついでとばかりに僕を改めて抱き直すが、再び沈黙してしまう。

……ほんと、何を罪悪感なんて抱いてるんだか。もっと幸せそうにしてくれた方が僕も嬉しいのに。まあ、真面目で背負いがちなこの子の事だからね。仕方ないってのも分かるけど。それでもこれまた難儀な物になってしまったものだ。溜息を吐きたいのを我慢しながら、僕はディーヴァのデカ乳に顎を乗せて彼女の顔をじっと見つめる。

「あの……ご主人様。」（ああもう……ご主人様お顔綺麗。唇柔らかそう。舌入れてキスしたい。）

「なに。言いたいことがあるなら言っていよいよ？別に怒らないから。」  
「私……本当に、ご主人様と寝たんですよ？天使みたいなご主人様の身体を、穢してめちゃくちゃにしたんですよ……?」（夢オチでも全然許せるくらい幸せだったんだけど。むしろ現実だったら明日辺りに私天罰かなにかで死にそう。何なら死んでもいい。私の人生であんな幸せな思いしたの初めて。生まれて初めて生きててよかったって思わせてくれたもの。ご主人様も私とするなんて嫌だったはずなのに。）

当たり前のことを確認するように、或いは噛み締めるように恐る恐るとデイーヴァは尋ねてくる。言い方よ。僕は別にそう大層な物でもないのに。デイーヴァの中での僕はそうではないらしく、確認するデイーヴァの声は酷く震えていた。まるでしてはいけない禁忌を犯したかのように、絶るように僕を抱きしめる力が強くなる。

「うん。それはもう何十回と、僕の腰が壊れて立てなくなるまでブチ犯されたけど。それがどうかした？」

「あああああごめんなさい……本ツツツ当にごめんなさい……!!私つたら、ご主人様になんてことを……!!」（やっぱ怒ってた。当然だ。嫌に決まってる。あんな力尽くで乱暴に、強姦魔みたいに犯して。）  
「気にしなくていいよ。今回は僕に尽くしてくれた君へのご褒美なんだから。噛み締めて堪能してよ。」

特に含みもなくそう答えたが、デイーヴァが琥珀色の瞳に涙を浮かべた。……実際、腰がイカれたせいで僕は今こうしてデイーヴァに抱っこされてるわけなんだけどね。僕に外傷与えたって事実と崇拝に近いレベルの愛情を抱く僕の純潔を穢したという強迫観念から、デイーヴァは僕に対して計り知れない罪悪感を抱いたらしい。墮し児とかこの支部の今後とか、僕以外の余計なこと考えられないようにって身体を差し出した訳だけど。効果は抜群だったようだ。



「ご主人様ほんとごめんなさい……自害するので、どうか私の命で私の罪をお許してください……!!」(ご主人様に嫌われたまま生きるなんて私は辛い。耐えられない。こんな状態で生きるくらいなら死んだ方がマシ。本当にごめんなさいご主人様。)

……それはもう効果抜群すぎて加減しろ莫迦って言いたくなるほどに。せめて死ぬなら極東支部に特攻して殲滅してから死んできて——つて、口に出したらマジで極東にコマンドーして帰ってこなくなるから。僕はディーヴァの腹部に腕を回したまま、宥めるように背中を軽く叩いて落ち着ける。

結果として、見ての通りにディーヴァは僕以外の事を考えなくなつた。というか僕以外の事を考える余裕が無くなつた。良くも悪くも。傷心中とはいえ一晩を共にしただけで女の子はこんなヤバイ事になるのか。なんて考えるのは世の女性方に失礼か。いずれ全員墮し児にするか殺す訳だから礼なんて不要だろうけど。女性だけと言わず人類は一人残らずね。

本当に何がどうしてこうなつたのやら。いや、心当たりしかないけど。これに関しちや本当にディーヴァは悪くないんだよ。思い詰めて一緒に寝る前よりも大変な状態になつているけども。

「だって……ご主人様、純潔だったのでしよう……!?私てつきり、ご主人様はサリーと何度も交尾してるものだ……」(本当は分かつてたのに。ご主人様がそういう事したことないって。)

「交尾って言うなし。……男の童貞なんて女の初夜と違つてそう価値ある物でもないし、別に気にしなくていいよ?」

「ご主人様はもつとご自身の貞操を大切になさつて下さい!!!美少年の初めてなんて人類絶滅させたご褒美クラスの価値があるんですよ!?!」(なのに私はご主人様の何も知らないフリして、ご主人様の言葉に甘えて好き放題にご主人様を犯し尽くした。どうしてもご主人様の初めてが欲しかったから。それなのに自分の身体を無価値みたいにならないで。誰がなんと言おうがご主人様は私には神様みたいなもの)

なの。)

めちやくちや怒るじゃん。この連中を墮し児に変えた時以上にガチギレするからビビって萎縮してしまったが、僕の様子を見るとディーヴァは慌ててぎゅううって僕を抱きしめてくる。……ほんと男の貞操なんてそう価値ある物でもないだろうに。異性の貞操は誰であつても尊く見えるものなのか、ディーヴァは僕を抱きしめたままボロボロと涙を流し続けている。

「それなのに……!!支部の男共に散々回され穢れ切った私で卒業させてしまうなんて、私はなんてことを………どうか許してください。ご主人様のためなら、私は何でもします。何でも役に立ちますから。だからどうか——」(改めて思い返すとほんと最低で死にたくなる。ほんとごめんさい。)

「いや(暫定)中学生で初めて済ますのもだいぶヤバいと思うからほんつと気にしないでいいよ。役には立ってもらおうけどさ。」

「だからどうか、私を見捨てないで下さい……忌み嫌わないで下さい………!!ご主人様が居なくなったら、私………」(私のこと嫌いだつたら八つ裂きにして喰い散らかしてくれてもいいから。だから私のした事を許して。私にご主人様を愛することを許して。ご主人様の与える罰ならどんなものでも私は受け入れるから。)

うーん。人の話聞かない子だこと。先入観………とすべきなのか。ディーヴァの中で僕はどれだけ神聖な存在なのか、僕としてはこの子みたいな綺麗な子と褥(しとね)を共に出来たのは十分な程に光栄なんだけど。ディーヴァ自身も自己肯定感低いのと僕を神格化してるせいで酷い罪悪感を植え付けてしまった結果がこれとは。ほんと難儀っていうか、業の深い子だよな。こんな綺麗な顔しててスタイルもいいのに。

しかもそのくせ精神的にはズブズブに僕に依存してるから。僕に嫌われるのが死にも勝る苦痛になると心の底から本気で考えてるし、嫌われるくらいなら身を捧げて僕の糧になる気満々。色々な意味で愛が重い子だね。愛っていうかこれはもう信仰とか崇拜に近いって言うか………なんか最初期に僕に身を捧げようとしたザイゴート達を

思い出した。あれが引き合いに出される時点で相当だからね？

……まあ幸い従順つて意味では別に困らないし、下手にディーヴァの抱く感情を否定する方が怒りそうだからさ。それに実際ディーヴァに頼みたい仕事は色々あるから。役に立ってけると言うのならそれは遠慮なく頼らせてもらう。僕にこのまま仕えてくれると言うのなら、それこそ僕もディーヴァの面倒を見に来た甲斐があるというものだからね。

むしろ変な罪悪感を抱いている今、慰めるよりは僕に仕えさせた方が気晴らしにもなるか。そう考えた僕はひとつ、ディーヴァに仕事を与えることにした。

「じゃあ……そこまで言うなら、ひとつ君に頼み事をしようかな。」  
「!!……はい!!何でも命じてください!!私に出来ることであれば、何であれ貢献致します!!支部のひとつでも落としてみせます!!」(良かった。まだ挽回させてくれる。極東に特攻でも何でもするから。)  
「そう構えなくても大丈夫だよ。……口で説明すると長くなるから感応現象で送るか。顔近付けて。」

そう呼びかけ、ディーヴァに僕に向けて頭を下げさせる。そして彼女の額に自分の額を重ねると、僕の頭の中の情報を直にディーヴァの脳内へと感応現象で共有する。情報量が多くて頭痛がしたのか、一瞬だけディーヴァは顔を顰めた。が、情報の内容を一瞬で理解するとディーヴァは驚いて目を見開く。

「ご主人様……これは……」(ご主人様におでこ押し付けられた。ご褒美?なんで??)

「今後の人類……いや、フェンリルに対する攻撃の計画だよ。ターミナルの情報と僕の能力を鑑みた上で、僕なりに考えたものなんだけど。」

「これ……ご主人様が考えたんですか?いつの間にかここまで事を――」(ターミナルの使い方も分からないはずなのに頑張つて調べ

たんだ。私が塞ぎ込んで役に立てなかつたばかりにごめんなさい。そんな心配そうにしないで大丈夫。すごい良く考えてる。でもご主人様頭いいのはちよつと嫌。私の存在意義なくなる。ご主人様に私なんて実には必要ないって気付かれる。そういう仕事は全部私にさせて。ご主人様はのんびりしてて。」

そりや君が塞ぎ込んでる間にだよ。大雑把に言うとなロシア支部の襲撃による壊滅を隠蔽し、まずは本支部の健在を偽装。その上でフェンリル間でのここを含めた輸送ルートを復興し、その経路を用いて輸送員に擬態した墮し児を世界各地のフェンリル支部に配備。同時に情報ではない正確な位置を把握した後、パンドールを用いた世界各地への同時攻撃で人類を殲滅するという計画だ。

……とはいえ自分で考案しといて何だけど、計画の穴が多いのも事実。そもそも人間を墮し児に変えられるという人類にとって特大の厄種を、認識され対抗策を確立される前に最大限の被害を齎す方法で叩き付けるための計画だ。そのせいで墮し児を戦闘員としてまともに運用する方法や各フェンリル支部に対する具体的な侵攻方法などまでは考えてない。デューヴァは僕が考えた計画と言うことで、僕の頭を撫でてくれてるけど。そこで優秀なデューヴァの出番というわけだ。

「デューヴァ。君にはこの机上の空論を実行可能な物にまで練り直し、懸念材料などを今一度洗い直して欲しい。」

「そ……そんな事でよろしいのですか？いえ、勿論ご主人様のために全力で取り組ませて頂きますけど——」（私に頼る気満々だった。頼りにされるの嬉しい。ほんと好き。）

「因みに作戦の第一段階偽装する下りは明日。……いや、今日行う。日が明けたら僕は墮し児に協力を取り付けに行くから。その前までによろしくね。」

そう告げたところデューヴァが真顔になった。分かっている。とんでもない無茶振りを投げ付けてる事くらい。けどデューヴァなら同

時に理解したはずだ。この計画、やるなら一刻も早く実行に移さないとヤバいという事に。何しろこの無事を偽装する場合、フェンリルに報告するのは早ければ早いほど疑いが向きにくくなる。むしろ今の時点ですら、既に遅いくらいなんだ。

本当だったらディーヴァの面倒を見たあと、今日の夜にでも墮し児に協力を取り付ける予定だったんだけど。それがこんな日にちを跨ぐ夜中にまで長引いてしまったから。……って、口に出したらディーヴァがまた罪悪感で曇るからね。黙っておくけど。

「でもご主人様。これつまり、この支部の墮し児に協力を取り付ける方法を考えろって事ですよね？」（そもそも話を聞くかどうか。問答無用で殺しに来ない？）

「あとフェンリルへの生存報告の文面とね。こっちは僕が考えるから、君は彼らをこの作戦に協力させるための餌を考えて欲しい。」

「……………餌、ですか。」（ご主人様が私の胸に顔乗せて見上げてる。かわいい。こんな無防備に甘えてくれるなんて、実は私のこと嫌ってなかったりする？そんなわけないか。でも警戒心無すぎすぎて本当に股間に悪い。話の内容がどっか行っただけだ。）

知つての通り、本支部の無事を偽装する場合はフェンリルの関係者。あと神機使いの増援がここに訪れる。そうした連中なんて、人の姿を模倣しているとはいえアラガミの墮し児からすれば死神に等しい存在だ。彼らは僕らに敵意を抱いてはいるが、フェンリル関係者を恐れているという点は同じだ。何しろ自分達の正体がフェンリルに漏れようものなら殲滅されてしまうのだから。僕がわざわざフェンリルの関係者を招き入れようとすれば、当然反対するし協力なんて絶対しない。

だからこそ。ディーヴァにはそんな彼らを言いくるめる言葉を考えて欲しい。言い換えればこの生存を告げ、支部間の輸送ルートが復帰した場合、元人間の墮し児達は何を欲しがるか。僕が輸送ルートを復興させた場合、彼らの生活にどんなメリットがあるか。この世界での人間の営みを僕は知らないから。知る前にこの身体になった

から、彼らの求めるものが分からない。故に人の営みを知るデイーヴアにしか頼めない。

フエンリル本部に向けた生存報告は、この施設の人命の無事と外部居住区を除く施設の無事を伝えればいい。何しろここは神機の研究と開発に於ける重要拠点だ。研究員はさつさと極東に脱出させたようだが、施設の調達ともなれば費用は嵩むし研究のデータやサンプルの持ち出しまでは出来てない。ここが無事と知れば、恐らく救援や復興の援助は惜しまない。この支部の無事自体を怪しんでいなければ、という前提条件は着くが……………

「その……………ご主人様？彼らを扇動する言葉を私が考える、という事でしたが……………その……………」(まだあそこ行くの怖い。ご主人様に嫌われたくないから行くけど。)

「もちろん墮し児の元へは僕が行く。カンペ考えるようなものだと思うってよ。……………協力者の墮し児は何人か支部長室にも招くことになると思うけどさ。君は僕の私室に隠れていていいから。」

「いえ。ご主人様が傍に居てくれるのなら大丈夫ですけど……………お氣遣いありがとうございます。ご主人様って優しいんですね……………」(優しくされるの好き。私のこと氣遣ってくれるの大好き。頭撫で撫でされるのも幸せ。こんなに大事にしてくれるなんて。ご主人様好き。好き。大好き。愛してる。一生ご主人様にこうやって飼われたい。ご主人様に甘えていい子いい子されたい。役に立っていっぱい褒められたい。)

強がってはいたが、僕が表立って動く旨を伝えるとデイーヴアは目に見えた様子で安堵した。頭を撫でてやれば氣持ちよさそうに琥珀色の瞳を細め、僕に感謝するよう優しく抱きしめてくる。僕が傍に居ればというのも本心だろうが、流石にまだ墮し児と顔を合わせるの怖いか。まあ仕方あるまい。僕でさえ墮し児の元に赴くのは少し氣が重いつて言うか、不安が募るのだから。

そもそも僕と会話や交渉の類が成立するかどうか。今回の作戦に於いてはそこからが心配なのだから。本来急ぎでするような事で

はないんだよ。本当なら時間をかけて墮し児をどうにか懐柔して、その上で色々と協力を取り付けるところをさ。亡国の捕虜を翌日に自国の兵士として駆り出すなんて、仮に人類史でも無謀な試みだろうに。僕がやろうとしているのはそれと同じなのだから。しかも陣営に無条件に利益を齎す作戦ならともかく、間違いなく首が絞まる作戦に協力させようって言うんだからね。間違いなくこれでもかとブーイングを叩きつけられる。

とはいえ愚痴つても事態は改善しないし、どうにかするしか無いんだけどさ。それには僕はこの世界の人間の文化……というか文明を知らな過ぎる。それにこれは僕が彼らに敵意や悪意を抱いていないとアピールするいい機会でもあるから。デューヴァの事は頼りにさせてもらおうよ。

……さて。死んでいた腰もそろそろ癒えたようだし、僕は僕のすべきことを成すかな。

「じゃあデューヴァ。他に何か分からないことがあつたら感応現象で僕に聞いてね。僕はきつと四六時中起きているから。」

「えっ……ご主人様、どっか行くんですか？」（ご主人様を抱っこしたままお仕事したかったのに。）

「僕は他にもやらなきやいけない事があるんだよ。日が昇る頃には支部長室に戻る。それまでによろしくね。」

そうとだけ告げ、僕は身に纏った全身を覆うローブにザイゴートの卵殻の性質を付与。海上の浮き袋のように身体を宙に浮かせ、デューヴァの膝の上から離れる。でもそうすると、デューヴァはあからさまに寂しそうな顔……というか泣きそうな顔をした。すっかり子犬みたいになってしまつて。僕のこと飼い主か何かだとも思つてやしないか。割と真面目に。

……仕方ないな。モチベーションは大事だし、こうまで依存させたのは他ならぬ僕の責任だから。僕はデューヴァの頭をぎゅつと抱





「えつと……ご主人様？別に、そこまで身体張らなくても……ご主人様の命令なら、ご褒美とか無くても頑張れますし……」(ご主人様私とするの嫌でしょ？無理しないで。)

「二応ハッキリ言っとくけど、嫌いな相手に身体を差し出すほど僕は阿婆あば擦すれではないよ。……ご褒美いららないならそれもまあいいけど。」

「ごめんなさい嘘です。ご主人様が良いなら凄く抱きたいです。押し倒したいです。気持ち良いつて可愛い声出させたいしご主人様に頭撫でられながらキスしたいとかご主人様の男の子おっぱい吸いながらいい子いい子されて聖母マリアみを感じたいって思っていました。ご主人様を見てこんな卑しい欲を抱いていた私をどうか罰してください。なんかもう全部バレてそうですのでほんと一思いにやってください。」(そんなに私いやらしい目でご主人様のこと見てた？我慢してたのに？だとしたらほんと嫌われそうだし不敬罪で塵にされても文句言えないんだけど。私の考え如きご主人様はお見通しってこと？本当に神様か何かなのでは？そして急にデレたせいで濡れたんだけど。責任取って？)

考えるだけで口に出さなきゃ罪にならないことって結構あると思うんだけど。業の煮凝りみたいな性癖を詠唱するのはやめなさい。文字に起こすと怪文書の類だから。涙目で顔真っ赤にしてるけど、頑張ってくれたらそういう事していいんだよって僕は言ってるんだ。デーヴァは真面目で気負いやすいから。僕に尽くせば尽くした分、褒美として僕を好きに愛でられる。そういう付き合いの方が変な罪悪感抱かなくていいんじゃないかってね。モチベ上げるためのご褒美に罪悪感抱いてたら世話ないもの。

とはいえ一通り自身の拗れ切った願望を吐き出した上で、特に僕が引く様子を見せないと僕が自らの全てを許容するとデーヴァも漸く信用したらしい。別に僕はデーヴァが僕を冒瀆するような真似をしても、咎めもしなければ責めもしないって。最初からそう言ったのに。僕はデーヴァのそういう部分も含めて全部受け止められるんだから。

「いいよ？任せたお仕事ちゃんと片付けたら、好きなだけ甘えさせてあげる。けどこれからは忙しくなるからお互い活動に支障出ない程度にね。」

「ご主人様……私、本当にご主人様のこと崇めそうなんですけど……」(こんだけ寛大だって示したら堕し児の皆さんも問答無用でご主人様崇拜するのでは?)

「普通に好きじゃダメなのかい。……崇めるも祀るも好きにして構わないけどさ。くれぐれも僕を過大評価して計画を組まないでよ？僕そこまで万能じゃないからね?！」

そう釘を刺し、僕はポロポロと涙を流すデューヴァの身体をぎゅつて抱きしめる。……いくら僕を神格化したって僕は全能からは程遠いのが現実だし、造書庫を用いた能力はまだ未知の領分が多い。くれぐれも現実的な計画を考えてくれると有難いんだが……愛情が信仰通り越して狂気の域に踏み込んだか、僕が絡むとIQ下がるな。ちゃんと与えた仕事をこなせるといいんだけど。

……まあいいや。とにかくこれでデューヴァも僕がいなくても仕事はしてくれるし、僕も僕のものすべき仕事に漸く取り掛かれる。作戦考案の進捗は最悪感応現象で確認すればいいしね。そうとなれば、そろそろ僕も行くでしょう。

「じゃあねデューヴァ。結構な無理難題吹っ掛けちゃったけど、明日の朝までによろしくね。」

「はい……上手いこと堕し児の皆さんをご主人様に従属させられるよう、手っ取り早く済む方法を考えておきます。どうか私にお任せ下さい。」(逆らうの何人か見せしめにすれば協力するかな。殆ど元一般人だし。)

「頼りにしているよ。何かあったら僕に感応現象寄越してね。僕きつと起きてると思うから。」

僕の期待に応えようと目を輝かせるディーヴァの頭を最後に撫で、僕はふわりとディーヴァの元から離れる。与えたご褒美が良かったのか、無茶振りと知ってなおディーヴァはやる気に満ち溢れている。僕が傍を離れたところで不安定な状態に陥るような様子も無く、僕も安心して支部長の私室を後にすることが出来た。

……しかしなんて言うか、僕のせいでディーヴァがああなったって考えると色々辛いな。僕に心を開いて手を貸してくれるようにしたかっただけで、あそこまであの子の心を壊したかった訳じゃないのに。あんな愛情がオーバーフローして信仰に変じるほどに慕われるなんて。ディーヴァには本当に、本当に可哀想なことをしてしまった。

だつて僕をどんなに崇め祀つて愛を注いだところで、僕の心が真にあの子に向くことは絶対に無いのだ。それは僕も彼女も分かっていた事なのに。

ディーヴァと別れた後、僕は身体を浮かせたまま屋上のヘリポートに向かった。屋上に吹く夜風は冷たくも心地よく、心做しか身体に蓄積された疲労が癒える気さえする。無機質な鋼鉄の足場は蒼い月明かりに彩られ、空を見上げればそこには満月と夜空に散りばめられた星の海がある。

そうした自然の何の変哲もない景色の方が、今となっては絢爛豪華な屋内より余程心を落ち着かせてくれるのだ。身体や暮らして幾ら人間の真似事をした所で、心だけはアラガミから元に戻る事は無いらしい。それがディーヴァや墮し児達のような、他の元人間のアラガミと僕の決定的な違いだろう。僕だつて元は人間だったはずなのにね。

とはいえ僕がこの屋上に訪れたのは、感傷に耽けるためでも夜風に当たるためでも、ましてや星を見るためでもない。ふわりと僕は爪先でヘリポートに降り立つと、夜の静寂の中で額に手を翳す。そうすることで感応現象を発動すると、頭の中で静かに呼びかけた。

『……………サリー。起きてる？』

直後。ヘリポートの真下から巨大な影が舞い上がり、星の海に浮かべた蒼月を覆った。その額の邪眼は闇の中でも煌々と赤く輝きを帯びており、女神の顔に備えた本来の瞳もそれに合わせてゆっくりと開く。三つの赤い瞳で僕を見据えると、彼女はゆっくりとウロヴオロスに並ぶ巨体をヘリポートに降ろす形で僕に見<sup>まみ</sup>える。

慈愛に満ちた柔らかい笑みを浮かべる彼女は蒼い月明かりと相まっていつにも増して美しく、しかし僕が支部内に居る間は一人で寂しかったのだろう。彼女は両手の長い指で僕を包み込んで持ち上げると、顔を近づけて僕に甘えてきた。

【待ってた。ずっと建物の中から出てこないから、寂しかった……】

「ごめんね。戦後の事後処理って思ったよりする事多くてさ。」

【……でも、会いに来てくれて嬉しい。ずっと会いたかった……】

神々しさすら感じさせる美貌からは想像もつかないたどたどしく幼げな口調と共に、サリーは僕の身体を自分の胸元へと押し付けて抱きしめてくる。僕がこうされるの好きだと知っての事だろうが、ウロヴオロス並の体躯を持つ彼女と人間の中でも小柄な部類の僕との体格差だ。そのふかふかしたおっぱいは僕の全身を包んで余りある程に大きいし、サリーの胸元を覆うのは背中から生えた爪状のウロヴオロスの肉蔓<sup>つる</sup>だけ。それ以外は裸で、原種のサリエルに比べてもひどく扇情的な格好をしているのである。

そんな彼女にこうして全身を胸元に挟まれ、甘やかされてしまえば僕は情けないほどに無抵抗になるわけで。そうやって僕のことを抱きしめると、サリーは長い舌を口元に這わせてきゅううっとお腹を鳴らす。

【好き……大好きっ……!! ずっとこうしたかった……私にこうやって甘えて欲しかった……!!】

「うん。僕もこうしたかった……人の姿のままでごめんね? 思いつき

り抱きしめられなくて歯痒いよね?」

「ううん……平気。平気だけど、あなた見てるとお腹が鳴っちゃって……我慢はできるけど……」

胸元からサリーの顔を見上げると、サリーは三つの瞳を真っ赤に輝かせながら長い舌を伸ばし、胸元にボタボタと強い毒性の涎を垂らしていた。それもそのはず。元が純粋なアラガミの彼女は、その根幹にある食欲という本能に後天的に得た性欲が強く結びついている。つまり発情すれば強い捕喰衝動に身体が支配され、本来の姿の僕は互いに身体を与え合い捕喰させることで愛情表現を行っていた。

それが僕にずっと会えず、寂しい思いをさせたせいでこんな本能が強くなって発情してしまっているんだ。僕に自分の身体の一部を与えて捕喰して欲しいとも思ってるだろうし、僕のことをどう捕喰したものと迷ってもいるだろう。

……でもそんなサリーの様子が、僕には少し意外だった。

「サリー……大丈夫?僕をこうして抱きしめるの嫌じゃない?」

「???……うん。どうしてそんなこと聞くの……?」

「だって、僕きつと臭うでしょ。ディーヴァに抱かれてきたから。」

ポツリとそう漏らすと、僕を抱きしめるサリーが一瞬その身を強ばらせた。僕の言葉に少しでもだけ目を伏せた辺り、サリーはきつと僕を見た瞬間に分かっていたはず。僕が中でディーヴァの相手をして、何回も彼女にこの身を抱かれたことを。だからこそ僕は彼女が怒り狂って僕にその矛先を向けると思っていたし、最悪それで僕がサリーに喰い殺されても仕方ないとまで思っていた。

そう覚悟した上で、僕はサリーにディーヴァと寝たことを謝りに来たのだ。……ディーヴァを僕に協力するよう立ち直らせるためとはいえ、僕はサリーを裏切ったのだから。その上でサリーが満足する形の罰を受けようと、夜中にも関わらずここに来た。

でもサリーは僕を見つめて優しく笑うと、指先で僕の頬をそれは愛

しそうに撫でながら三つの目を細める。

「……大丈夫。怒ってない。私達の愛情表現と人間同士の愛情表現は全然違うから。ディーヴアの事を口にしてたら（あいつに）何してたか分からないけど……」

「ああ……そっか。確かにそうだね。うん……」

【それに……あなたはディーヴアを立ち直らせるためにこんな遅くまで頑張ってた。あいつの相手なんか苦痛でしかないのに我慢して……痛い事とかされなかった？】

まるで『よく頑張った』とでも言わんばかりに、労わるかのようにサリーは僕を慈しむ。どうにもサリーは僕がディーヴアにしたくもないのに強引に犯され、嫌なのに彼女を元氣付けるために甘んじてそれを耐えたのだと。中で僕がしていたことをそう解釈しているらしい。実際は僕に愛してもらう代わりにディーヴアが僕以外の全てを投げ出し、その対価として僕の事を抱いたと言うのに。

あくまでディーヴアに身体を差し出した僕の身を案じ、労わるその言動と行動。それはつまり、僕が自分サリー以外の相手に嘘でも愛情を向けるのは僕にとって耐え難い苦痛なのだ。そう信じて止まない、ある種の狂気に包まれた慈愛であった。『他の女に手を出して許せない』でも『他の女に取られたくない』でもない、『他の女の相手をさせられて可哀想』だなんて。僕がサリーを第一に愛するって信じ切っていないきや出ない発想だもの。実際その通りなんだけども。

【ほら……私にいっぱい甘えて。仕事のこと嫌なこと全部忘れて、ちゃんと休んで。】

「ありがとうサリー。……ほんとごめんね。君がいるのにディーヴアの相手しちやって……」

【うん。……あなたは一人で頑張りが過ぎ。あんな大勢の神機使いと戦って、堕し児なんか生まれてそっちも大変なのに……ちゃんと休んでくれないと、私も心配になる……】

ただあくまで僕の身を案じて心配してるのは本心で、サリーは僕の身体をむちむちした胸元に挟んだまま甘やかしてくる。……その重労働に『ディーヴァの相手』が間違ひなく含まれてるのは実にサリーらしいけど。でも僕は、僕のことを僕以上に心配して過保護なほどの愛情を向けてくれるサリーが大好きだから。これ以上ディーヴァのことを掘り返すような真似はせず、素直に彼女の好意に甘えた。

……思えば、サリーとこうして二人きりになれたのは随分と久しぶりな気がする。こうやって抱っこされて甘やかされて、いい子いい子って頭撫でられて……僕はもう昔に比べたら随分と変わってしまったけど、サリーだけはあの頃のままだ。死にかけたり僕の身体に住み着いたりして、今の姿にまで進化したけど。相も変わらず僕には女神みたいな優しいし、僕に甘えられるのが大好きみたい。

そうしてサリーに身体を預けて、特に何かする訳でもなく何か話す訳でもなく優しい時間がゆっくりと過ぎていく。けどそれは決して嫌な沈黙とかじゃなくて、愛しそうに僕の頭に指を当てたままサリーは笑うんだよ。それはそれは幸せそうに。

この時間がずっと続けばいいのに。思わずそう願ってしまうほどに、それは戦い続きたった僕には幸せ過ぎる時間だった。けど僕がそうやってサリーに甘えていると、ふとサリーが僕を抱きしめる力を緩めた。そして代わりとばかりに僕の足元に両手を払げると、指を伸ばして腰を降ろすようにと促してくる。

「サリー？……どうかした?」

「あなた……あちこち身体を怪我してる。動きがぎこちなかったから……私の能力で治す……」

「ああー……そういうことか。それじゃあお願いしていい?」

そんな抱いていたただけなのに分かるものなのか。サリーは僕の背中が掌に重なるよう手を広げると、指を僕の身体に擽めて掌の邪眼を開く。そしてそこから神機使いの回復弾を模倣した光弾を放つと、そ

れを全身に照射する形で僕の傷を癒した。

それは服で見えないように隠していた、デীবアに付けられた爪痕や噛み跡も完全に癒す。してる時に一回興奮しすぎて大変なことになっちゃったからね。大した傷じゃなかったから腰の方に再生能力回して放置してただけけど……サリーには分かってしまうらしい。ついでにサリーは僕の服の中に指を入れると、身体に傷がまだ無いか触って確かめてくる。……ただ身体を触られているだけなのに、デীবアに愛撫されてた時以上にムズムズする。今までと違って人間を模した身体だからだろうか。サリーも感触が新鮮なのか、僕の身体をずっと指先でさわさわしてる。

「サリー。ありがとうね。おかげで完治したよ。」

「……………。……………。」

「……………あの、サリー？どうかした？」

しかしここで僕はふとサリーの様子がおかしい事に気付く。サリーは何やら僕の身体をふにふにと撫でながら、僕に熱の籠った視線を向けていた。何なら両手で掴んだ僕の身体を自身の口の方へと近づけ、舌なめずりしている。

……………いや。そう言えば、この娘さつき僕のこと見てお腹鳴らしてたっけ。一応サリー自身は我慢できるって言ってたけど……アラガミって基本的に理性より本能の方が強いし、何なら野生のアラガミは本来理性なんてものは持ち合わせていない。僕の細胞によって人間性という理性を後付けしたとはいえ、サリーは元人間の僕やデীবアと異なる生まれつきのアラガミだ。本能に比べて理性の比率は元々低いし、ずっと放置して寂しい思いをさせてしまったんだ。我慢なんか出来るわけない。

つまり。いくらサリー自身は我慢するとは言っていたものの、体格差的に小柄な僕を丸呑みとかするのは全然可能なわけで。正直そうされたい気はするけど。そう思っていたら、サリーが僕の身体に柔らかな唇を押し付けてきた。



「サ……サリー？どうしたの？僕のこと、捕喰したくなっちゃった？」  
「……………ううん。あなたの事は凄く食べたい。けど、ちゃんと我慢する。我慢する……………けど……………」

「別に僕はいいよ？あまり噛み砕かれると再生が大変だから、丸呑みにしてくれると助かるけど——」

などとお願ひした矢先。サリーがにゆるりと暗紫色の舌を僕の身体に這わせてきた。強毒性の唾液を多量に纏ったそれは毒に耐性を持つ僕で無ければグズグズに溶かされてしまうが、粘り気の強いそれは僕にとってローションみたいで。しかもサリーは摘むようにして僕の服を捲ると、服の中にまで長い舌を触手のように這わせてくる。敏感な部分とか舌で撫でられると凄くゾクゾクする……ヤバイ、サリーにこうやって舐められるの好きかもしれない。

でもサリー、なんでこんな僕の身体舐めるんだろう。空腹を紛らすためって言うには全身くまなく念入りに舐めてるし、どうしてもお腹が空いたなら僕に何かしらおねだりしてくるのに。いっぱい舐められるの好きだからいいけどさ。そのせいで全身からものすごくサリーの匂いがする。

……………サリーの、匂い？

「ねえサリー？これ、もしかしなくてもマーキング……………」

「……………。」  
「ごめんね??やっぱディーヴァと寝たの妬いてるよね???」

自分の匂いでディーヴァの匂い上書きしようとしてたり、ディーヴァに付けられた傷をひとつ残さず癒そうとしたり。僕がディーヴァに付けられたものをひとつ残らず消し去り、自分のものだと言わんばかりにマーキングしてるもの。やっぱ僕がディーヴァと寝たのめちやくちや気にしてるよね?!

現にそう尋ねると同時、念入りに僕にマーキングする傍らサリーが三つの瞳に大粒の涙を浮かべた。ごめんね？本当にごめんね??やっぱり傷ついてたんだよね??僕が疲れてそうだからって口にするの我慢してただけで。

サリーは僕の問いに対して何も答えはしなかったものの、代わりとばかりにお腹をきゆううつと鳴らした。それが僕には愛情表現してつめてめっちゃおねだりしてるように見えた。やっぱり寂しい思いしてたんだよ。ほんと可哀想なことしちゃったね???

「サリー。……腕一本くらいなら捕喰していいよ?」

【……………いいの?戦うのに支障出ない…………??】

「平気平気。……これで許してなんて言わないけどさ。僕も君にはこういう事したいと思ってたから。おいで。」

僕はサリーの両掌の上に横たわったまま、サリーに向けて左腕をそつと伸ばす。そうするとサリーは僕にゆつくりとその顔を近付け、やや恐る恐るといった様子で口を開いた。

けれど次の瞬間。ブツリという音と共に僕の左腕の肘から先がサリーに喰い千切られ、血液を模した赤いオラクル細胞が勢いよく噴き出す。流石に欠損が大きいせいか、痛覚が鈍いこの肉体であっても明確に痛みを感じる負傷。加えてデューヴァの一件で再生能力が仕事しないのもあって、流血が止まらない。黒いローブが瞬く間に僕の血で真っ赤に染まり、その様にサリーが慌てて顔を近付ける。

【だ……大丈夫!?!ごめんなさい…………!!私、甘噛み程度で止めるべきだったのに…………!!】

「いいんだよ……ただ、ちよつと傷口を吸ってくれると嬉しいな。流出させちゃうのは勿体無いから。」

【!!……………分かった。吸っていいなら、そうする…………】

だからサリーにお願いして、僕の左腕の断面を口で啜えて貰った。

するとサリーは僕の傷口に舌を這わせ、味わうように流れ出る血を吸い出してくる。どうせ普段ほど仕事しないとはいえ、アラガミの再生能力により傷口はすぐ塞がるんだ。だからそれまでの間だけ。決して長い時間ではないが、これがサリーとの埋め合わせになればいいなって。僕は密着した彼女の頬を右手で撫で、夢中で僕の血を味わう彼女を愛でる。本当……こうするのも随分と久しぶりだ。

欲を言うとも首とかも甘噛みして欲しいけど、人間を模倣した状態の僕がサリーにお願いするとマミるから。僕の傷の断面を舐め、幸せそうに目を細めるサリーを見て満足する。体格差あるとどうしても出来ることが限られてしまうが、今の僕は体力消耗し過ぎて本来の姿に戻れないから。サリーにはもどかしい思いをさせてしまっているが、慎重に慈しむように僕を捕喰してくれるのも中々悪くない。サリーには申し訳ないけど内心そう満喫してた。

そしてしばらくして僕の傷の断面が再生する形で塞がると、サリーはゆっくりと僕の血の混じった唾液を赤く糸引きながら唇を離す。その上で片腕が無くなった僕を見つめると、心配そうに顔を近付けてくる。

「……………大丈夫？その腕、痛くない？」

「全然平気だよ。君こそ大丈夫？多分物足りなかったよね？右腕もいる?！」

「平気。平気だから自分の身体を大事にして……別に、ディーヴァの相手したの怒ってないから……………」

サリーは身体大きいし物足りないだろうと、右手を伸ばしたら珍しくきつぱり断られた。別にディーヴァの相手した贖罪って訳でも無いんだけど、サリーからはそう見えてしまったらしい。本当は僕のことと大事に捕喰するサリーをもつかい見たかっただけなんだけど。サリーがダメって言うなら仕方ないか。

ただ代わりとばかりにサリーは僕の身体を両手で捕まえると、再び僕の身体を胸元に挟む形で甘やかしてくる。なんでこう献身的って

言うか包容力高いのか……このまま甘やかされるとマジでダメになりそうな気がするが、ダメにされたい気もする。ほんと神機使いとの戦いとか無かったらここに住むのにな。柔らかい匂い匂いするしで最高すぎる。……変態ほいから口に出さないけどね？めっちゃふかふかする……

【…………じゃあ、次は私の番。】

「ん？」

【あなたのこと食べさせてもらったから……私の身体も、あなたにあげる。】

などとサリーに甘えていた時であった。サリーは自分の人差し指の第一関節を咥えると、なんとその場で噛み切った。そのせいで傷口からは赤紫色の強毒性の血液が溢れる。きつと僕との体格差を考慮して、僕が食べやすい……というか摂取しやすい血液を選択してくれたのだろう。うん、そこまではいい。

ただサリーはその血が滴る指先を胸元に運ぶと、衣服代わりに乳房の外側に絡むウロヴオロスの肉蔓を胸を寄せるように締め付ける。そしてなんと指から溢れる血を自身の谷間に零すと、胸元に血溜まりを作ってみせた。……待つてねサリー？まさかとは思うけど、そこから舐めてねって事？そこ舐めるとて事は思いつきりサリーのおっぱい舐めることになるんだけど。どこで覚えたこんな事。

いや……確かに人間の姿でサリーの身体を噛み切るのは無理だけどさ。血液だつて身体の一部だし、サリー的にも愛情表現として成立はするだろう。けど今までのサリーだったら傷口舐めてつて僕の前に傷口を晒してきたはずなのに。明確におっぱい舐めてつておねだりしてるこの様子……それに恥ずかしそうに笑みを浮かべている辺り、何となく意味は理解してるはず。これは……

「サリー……色を知る年齢か。」

【あなた胸に甘えるの好きなのに、口にしてもらったこと無かったか

ら……嫌だった？」

「むしろいいの？サリー嫌じゃない？！」

一応尋ねてみると、サリーは恥ずかしそうに俯きながらも小さく頷いた。……これも僕がディーヴァと寝たのを妬いた影響なんだろうか。ディーヴァに対抗するために、恥ずかしいのに背伸びして……そう考えるとほんと愛しくて仕方ないんだけど。まさか人の営みに興味を持って参考にするなんて。明らかにアラガミが行う創意工夫の域を外れた試行錯誤は、それだけ僕に喜んで欲しいという彼女の気持ちの現れだろう。

そういう事なら血が固まってしまいう前に頂こうと、僕はサリーの谷間に顔を押し付けて舌を伸ばした。胸元に溜まった血を舐めようとすれば自然と彼女の乳房にも舌が当たってしまった、その度にサリーはくすぐったいのか身体を小さく震わす。他の生き物が口にすれば長時間の苦痛の後に死に至る彼女の血は蜜のように甘く、自然と僕は続きを求めるように念入りに彼女のおっぱいを舐めてしまう。するとサリーの顔を見ていないにも関わらず、彼女の目線に一層熱が籠もるのが分かった。

【一生懸命ペろペろしてる……かわいい……好き……好き……】

「ヤバいなーこれ……マジでダメになりそう。めっちゃ柔らかい……」

【あなたに舐められると、胸の先っぽうずうずしてくる……もつとっぱい甘えてほしい……】

そして矢継ぎ早に繰り返されるとんでもない爆弾発言。舐めて啜ってたサリーの血で思いつきり噎せてしまった。いや……まさかね。まさかとは思うけど、なんでサリー自分のおっぱい両手で支えているの。しかも服代わりに片方三本ずつおっぱいに絡めてたウロヴォオロスの蔓を背中に引っ込めて……そうする事で、何故かサリーは自身のおっぱいを完全に顕にしよう。

サリエルは元々かなり人型に近いアラガミではあるが、サリーは特に人体の部分はかなり精巧に人間のそれに寄せて作っている。だから衣装を背中に引っ込めればちゃんと言乳首とかある訳なんだけども……おっぱいをモロに露出させると、サリーの額の邪眼が夜の闇の中でライトみたいに赤く輝きを放ち始める。明らかに興奮して活性化してるんだけどサリー、これってまさか——

【お願い……胸の先っぽの方も、舐めて……??】

「ねえサリー意味分かって言ってる??」

【多分舐めてくれたら収まるから……このうずうずするの、鎮めて……】

仮にも原作十五歳以下向け年齢制限：Cのゲームなんだけどこれ?!……いや、もう

ディーヴァの一件あるから今更ではあるけどさ。なんて方向に進化してるんだこの子は。両手でずっしりしたおっぱいをぐいって持ち上げて……どこでそういう事覚えてきたのか。侵攻中に捕喰した人間の中に経産婦でもいたか。流石に僕でも恥ずかしいんだけど……サリーは期待したようにこちらを見つめ、僕が甘えてくるのを待っている。

なんか……人間の記憶を介してサリーがエツチな方向に進化してる気がする。僕だけだろうか。確かに僕らは捕喰した情報を取捨選択して自在な進化を己に齎すことが出来るけど……こういう方向で進化を図るなんて誰が予想できたか。元が人間じゃない分、僕やディーヴァが思い付かないような事を平然とやっつてのけるんだよね。

ていうか、僕のためにわざわざ身体を進化させてくれたって考えるともめちゃくちゃ嬉しい。嬉しいんだけど、そのついでとばかりにサリーが少々拗れた性癖に目覚めかけてる気がするのって考え過ぎかな??いや、元々素質はあったけどさ。このままだと本当にサリーにダメにされそう。そう考えてしまうほど、今のサリーは包容力に溢れていて……

「大丈夫……今は誰もいないから。私とあなた、二人きりだから……」

「……………いい？本当に甘えていい??」

「うん……あなたが甘えてくれると、すごく幸せな気持ちになるの。遠慮しないできて……………」

その挙句にこうぐいぐい積極的に迫られてしまったのは、もう僕に断る選択肢なんて無い訳で。結局僕はサリーに迫られるがまま、明らかに捧げた片腕と不釣り合いな程に彼女からの寵愛をこれでもかと思かす。しかもサリーはこの方法で自身の身体を与える感触を気に入ってしまったようで、僕が遠慮してなおしばらく僕に自身の身体を与えようと迫ってきた。

基本的に人類や人の営みを忌み嫌う傾向のある僕ではあるが、今回ばかりはサリーに人類が与えた悪影響に本気で感謝した。どこまでサリーに知識があるのかは分からないが、そのうち本気で本番してしまう日も近いかもしれない。そう思わずには居られないほどに、サリーは僕を甘やかす愛でる事に特化した進化を遂げていた。こんな性癖ぶち壊す方面で進化するなんて、某博士が知ったら卒倒するのではないだろうか。

## 20. 賢王(???)

それはサリーと互いに捕喰という名の愛情表現を交わした後の事。腰を下ろしたサリーの膝の上に横たわり、僕は今日の昼からの計画について考えていた。少々捕喰させた場所が場所だからぐったりしている僕をサリーは指先で慈しむように撫で、掌の邪眼で僕の姿を見つめてくる。背中から生えた肉蔓に支えられただけの爆乳のせいで、膝の上からサリーの顔は見えない。しかしきつと幸せそうな顔をしているのだろう。膝枕……と言うよりは膝布団とでも言うべき状態だが、めちやくちや太もも柔らかかいし優しく撫でられてるしで幸せ過ぎる。こんな状態で仕事できる幸福よ。

しかし半ば事後に近い状況ということで、特に何か話す訳でもなく静寂が続く。僕が考え事をしているせいで言葉を発さないと言うのもあるが、サリーも僕の姿を見つめて撫でる形で愛でているようだった。それだけなのにこうまで幸せで、戦争のことなんて考えずにずっとこうしていたい。薄らそう思ってしまったほどに、二人きりの時間は心地よい。それはもうこの時間がずっと続けばいいのと思ってしまうほどに。

……分かつているさ。人類に明確な攻撃を仕掛けた今、人類は僕という存在を看過出来ない。僕は人類最後の砦であるフェンリルを壊滅させるだけの能力を持つと、その脅威を世界に知らしめたのだから。そうでなくともサリーやデーヴァを守るためには人類は絶対に絶滅させなくては行けない。そのためにデーヴァを僕に狂うほどに依存させ、その想いに応える事も出来ないのに立ち上がらせたのだ。今さら後戻りなんて出来ないしするつもりも無い。そこだけは間違えない。だから大丈夫。

ただそれでも、こうして何も考える事なく互いを愛し合える時間がどうしようもなく愛しい。けど僕がそう微睡んでいると、僕の意識を現実に引き戻すように僕の頭の中に突然感応現象が接続された。

『ご主人様ご主人様！ちよつといいですか!!』



『ん……デューヴァか。どうかした?』

『ご主人様に言われた通り、墮し児に協力を取り付ける方法を考えましたよ!!』

感応現象越しにも自慢げにデカイ胸を張ってるデューヴァの姿が目には浮かぶ。……随分と仕事が早いな。僕が提示したご褒美が待ち遠しくて仕事をさっさと片付けたって所だろうが……そのせいで雑に仕事を片付けた、なんて事は無いだろうね??? かくいう僕もサリーとイチャついてて仕事さつき始めたばっかだし、仮にそうだとしても咎められる立場では無いけど。

もう直に聞きに行くのも面倒だから、僕はその場で造書庫ライブラを起動してデューヴァの思考を垣間見る。そしてデューヴァが発案した方法を確認すると、続けざまに感応現象を飛ばすデューヴァに応答する。

『ご主人様今どこに居ますか!? 今から今日の計画についてお伝えに伺います!!』

『今屋上のヘリポートに居るけど……デューヴァ。『輸送路が復旧したらこの支部にもレーションのプリンが支給される』とか『バガラリー全話見れる』みたいな子どもしか釣れそうにない誘い文句は却下だからね? 先に断っておくけど。』

『!?!?…その、ですよね。ええ勿論そんな子どもしか釣れない嗜好品を引き合いに出そうなんて、断られて当然ですよね? 分かっていますよ。ええ、そんな珍案よりもっといい作戦考えてました。考えてましたが……その、ちよつと忘れてしまつて……』

あからさまに徐々に頭の中の声がしょんぼりしてしまい、少々可哀想にも感じてしまう。そう言えば身体付きエグ過ぎて忘れてたけど、あの子の精神年齢14歳位なんだっけ。人としての享年そのくらいだったから。逆に言うとうデューヴァくらいの年頃の墮し児はそうした嗜好品で釣れるのだろうか。今後の参考にはするが、何にしるボツとまでは言わずとも代案は必要だ。

『そうか。……忘れてしまったのなら仕方ない。まだ朝まで時間があ

るから、ゆつくりと思いついてね。』

『うづうつ……!!はやくご主人様に会いたかったのに……!!』

『感応現象を接続中だと忘れてやしないかい？本音ダダ漏れてるけど。』

『からか 擲揄うように欲望剥き出しの感応現象を指摘すると、僕の脳内に響く声がブツリと切れる。恥ずかしがらなくてもいいだろうに。』

とはいえ嗜好品で釣る方針は、居住区住みだった墮し児には年齢層を問わずに一定の効果は見込めるか。僕が協力を取り付けたい墮し児は外部への通信技術を持つ人材。つまり元オペレーターとかで支部の中での暮らしに慣れた人員だけど。そういう連中以外には、単純に物で釣るといふ作戦は存外悪くないかもしれない。それで元居住区暮らしの若年層が釣れたら、最悪オペレーターの墮し児の記憶をライブラ造書庫で植え付けて運用してもいいしね。記憶の移植は人格の汚染が酷いからほんと最終手段だけど。

どっちみち、元フェンリルに属していた墮し児達を懐柔する手段も別途用意する必要がある。墮し児達の身を危険に晒してまで、当支部の壊滅を偽装して輸送路を復旧させてまで得られる利点は何か。或いは何を利点と思わせられるか。物欲で釣れない墮し児を動かすにはそこを詰めるのが大事だ。そこに要点を絞って考えてもらった方がいいだろう。

何しろ今回に限らず、長期的に見ればいずれ彼らにはその命を懸けて人類絶滅のために戦ってもらう必要があるのだから。命を懸けるに値する対価を用意し、進んで戦場へ赴くような餌は遅かれ早かれ考えずにはいけない。寧ろそちらを用意できれば、今回の偽装任務も恙無く遂行されるやもしれない。偽装任務単体のメリットより、僕に付き従うメリットを提示すれば今後の作戦に於いても墮し児は管理しやすくなる。が、それはさつきも言った通り僕を殺そうと戦闘技術を磨き終わった後だ。それまでに考えればいい。

むしろ今回に限って言えば、別に僕は墮し児全員に同意を得て協力を要請したい訳では無い。極端な話、元オペレーターの墮し児を一人捕まえて本部にここが無事だと救援要請を飛ばせればそれでいい。

それでいざフェンリルの人間がここに来るとなったら、他の墮し児達は問答無用で状況に対応するしか無くなる。

そしたら間違いなく墮し児の僕への不信心は煽ることになるが、元より僕への信用など元から地の底も同然だ。それに墮し児が僕の命を狙い、その襲撃で僕が戦闘に慣れない彼らに最低限の戦闘技術を叩き込む。こちらも墮し児が僕に尻尾を振る前にこなしておかねばならない事案だから。こう考えると本当にヘイト管理が面倒だし、戦闘を前提としないオペレーターの協力者を一人懐柔出来ればそれでいいな。よし、そうディーヴァに伝えておこう。

『ディーヴァ。一つ言い忘れてたけど、元オペレーターの墮し児を一人この作戦に参加させればそれで事足りるから。その点を踏まえて、今考えていた作戦をもつかい練り直しといて。』

『え？それだったら他の墮し児達の命を人質に適当なオペ子ちゃん脅せば——』

『そういう墮し児の自由を削ぐような方法は最終手段。……陽が昇るまでにはまだ時間あるから。慌てないでよく考えてね。じゃあね。』

そう感応現象を切断すると、僕は改めてサリーの膝の上に倒れるように横になった。下手な圧政で支配して最悪なタイミングで反乱起こされたら堪ったものじゃないから。それこそ戦争中に反乱起きましたとか、身内に優しい僕でも手が滑って粛清しかねない。

それにしてもあれがつい前まで『墮し児に責められるの怖い』って言ってた子の言葉かよ。僕という後ろ盾得て無敵になり過ぎじゃないか？それだけ僕のこと信頼……っていか信仰してるんだろうけど。僕以外がどうでも良くなったようでは何より。僕も寝た甲斐があつたというものだ。

にしてもこういう戦闘絡まない作戦立案能力って、もしかしてディーヴァは素でポンコツ説あるか？ディーヴァって元神機使いであつて経営者や政治家ではないから。そういう内政方面での参謀は今後のことを考えると別に必要かもしれない。拠点攻撃への手際と

かは見事だったんだけどな。流石にジャンルが異なると言うか、事務仕事を全部ぶん投げるには荷が重いというか。

幸い外への救援要請の文面とその宛先、捕まえた通信技術持ちの墮し児に送らせる内容の要点についてはもう考え終わった。デューヴァにも一応意見は聞いておくが、こっちが片付いた以上はデューヴァに任せた元オペレーターの墮し児に協力を取り付ける方法も僕が考えておくか。

要はここにフェンリルの人間が来て、墮し児がアラガミとバレルる危険性を可能な限り排除すればいい訳だからな。というか姿形に關しちや人間そのままだし、元からそんなものあつて無いようなものだからな。流石にフェンリルの連中の前でアラガミの能力とか使ったら二度見されるだろうけど。それさえ控えれば危険はほぼ無いと説得した上で、他支部から得られる支援の中から墮し児が必要とするものは何か。欲しいものは何か。その辺りをターミナルに目を通し、説得の材料とするのが現実的か。

或いは僕の目的を全て正直に語ってしまうとかね。墮し児を人類の上位種として祀り上げて、全人類に革新を促すのが僕の目標。そのための足掛かりとしてこの無事を偽装したいってね。自分達は墮ちたのに呑気に無事こいてる人類が妬ましいって墮し児もいるかもだし、案外選択肢にも……ならないかなあ。墮し児はまず僕のこと殺したいだろうし。

なんて悩んでサリーの膝の上で項垂れていると、サリーが掌の邪眼を向けて僕を見つめてくる。唸っていた僕が心配になつたらしい。大丈夫だよ。もしかしたらデューヴァがなんかいい案を思いついてくれるかもしれないからね。

【さっきの感応現象……デューヴァから？】

「そうそう。今日中でやる作戦の中身が決まったーって連絡来たんだけどさ。ダメそうだったからボツ出したの。」

【……………そう。】

なんてさっきの感応現象について尋ねるサリーに正直に答えたところ、何故かサリーがとても寂しそうな声を出した。別にディーヴァと話していたことを妬いた訳ではないらしい。ただ僕に行つて欲しくないのは確かなようで、僕の身体に重ねた手に逃がさないとばかりに力が入る。

身体を起こして柔らかなサリーの腹部に寄りかかり、どこか落ち着かない様子のサリーを見上げる。案の定胸のせいで顔は見えないんだけど。この子は元がアラガミのせいか、造書庫で思考を垣間見ても思考が読めない。……というか、考えて思ったことをそのまま口に出すから改めて読み取るべき情報が無いんだよね。

まあ本来人の心を勝手に暴くなんて蛮行も良いところだし、サリー相手にそういう事しなくて良いつてのは健全で誠実なんだけど。でもなまじ墮し児の思考が読めてしまえばかりに、僕はなんでサリーがしよんぼりしてるのかが分からなかった。そういう時は素直に聞いてみるのがいいか。

「サリー。どうしたの？元気がないみたいだけど。」

「……あなたがあの中に戻ったら、また私は一人ぼっち。私もあなたと一緒にいきたいけど、身体大きいから……」

「ああ……そっか。そうだね。なるほどね?」

尋ねるとサリーはそうぽつりぽつりと漏らし、僕を両手で持ち上げて自身の顔の前へと持つてくる。確かにサリーはアラガミの中でも最大クラスの存在だし、僕を追って中央施設の屋内に侵入するのは不可能だ。しかしかと言って、今後は僕が墮し児や人類との戦争絡みの仕事をする際は中央施設の中に居ることが殆どとなるだろう。

そのせいで外にサリーを一人置き去りにして、寂しい思いをさせてしまうのは確かに忍びない。というか僕もサリーとずっと一緒に居たい。サリーとしても中にディーヴァが居て、自分の見えないところで彼女と二人きりと言うのは嫌だろうしね。何とかしたい。何とかしたいが……

……いや、一応方法はある。あるけどさ。

「サリー。人間の姿か、それに近い姿を模倣出来たら中に入れるけど……」

「……………人間の模倣って、どうやるの？」

「んー……………やり方は教えてあげられるんだけど、君が条件を満たしているかどうか。」

人間性を物にした後の僕の身体は、さっき左腕を与えた事で摂取している。それにロシア支部に侵攻する際や、その前にもサリーは人間の記憶欲しさに結構な数の人間を捕喰している。墮し児同様に人間の姿を模倣するための準備そのものは整っている。そう思いたい。

が、今まで僕やディーヴァ。そして墮し児などは、人の姿を模倣するために必要な分の人間性を取り込んだ場合にその意思に関係なく人間の姿に変じた。つまり意識してその姿を変えた前例がない。ディーヴァを見るに人間性を物にした後に元のアラガミの姿に戻るのには自由らしいが、逆は果たして可能なものか。

それに言語を解する時点でサリーも十分な人間性を保持しているとは思いたい。元がアラガミのサリーは人の姿を模倣する難易度も僕らとは大きく異なる。僕らは文字通り、人間性を獲得したと言うよりは捕喰を繰り返して取り戻したと言った方が正しい。要は元人間が人の姿に戻った状態なわけだから。しかしサリーが人の姿を模倣するということは、違う生き物へ姿を変えることと同義。果たして上手いくものか。

あともう一つ。僕はサリーの今のこの女神としての姿が好きなのであって、無理に僕が忌み嫌う人間の姿に彼女を押し込めたくないというのもある。これに関しては僕の我儘だから仕方ないし口にも出さないけどさ。それでもサリーは人の姿に封じるまでもなく顔綺麗だしスタイルいいし、おっぱいデカいし包容力溢れるしで無理に人の姿に封じる必要を感じられない。いや、そうしないと中入って来れな

いし寂しい思いさせちゃうから必要あるんだけどさ。

けどそうやって僕が悩んでいた時だった。サリーはやや恥ずかしく、僕を見つめたまま呟いた。

「人間の姿……なりたいたい。そしたら、その姿のあなたとお口同士でじゅぷじゅぷ出来る——」

「よし。じゃあ人間の姿を模倣する方法教えるけどさ。口で説明すると長いから感応現象でいいかな？」

「うん……!!」

そうあからさまに嬉しそうに口元を弛めるサリーに、僕は顔を近付けるよう手招きすると眉間に額を押し付ける。あとはそのまま感応現象を用い、僕や他の墮し児が人間の姿を模倣した時の情報をサリーに与えるだけ。それでサリーは僕らがどうやって自身の体を人の身に封じたかを理解する。

まずは本来のアラガミの肉体の内側に、人間の姿形を模倣した肉体を形成するんだよ。そしてその際に容姿や性別を決定。大体の人間は生前のアラガミ化する寸前の姿を模倣するが、元がアラガミのサリーはこの容姿を決めるところから考える必要がある。

とはいえその容姿やスタイルについては、僕やサリーが生前口にした人間の中から部位毎に形が整ったものを継ぎ合わせて整えればいいからさ。その上でサリーの好みの姿とかをイメージすれば、その姿になれると思う。

あとはそのイメージした身体を本来のアラガミの自分の身体の中に生成。残ったアラガミの身体の部分をオラクル細胞として大気に霧散するよう命じれば、生成された人の肉体を残してアラガミの身体は消える。結果として人間を模倣した姿に変身できるというわけだ。

逆に人の姿からアラガミの姿に戻る場合は、大気中のオラクル細胞に命じてアラガミの肉体を人の肉体に纏えばいい。今の僕みたいにあまり体力を消耗していると上手くいかないけど、ディーヴァを見るにこの二つの姿は気軽に切り替えられるらしいから。一度人の姿を

模倣したら二度と元の姿に戻れない、なんて事は無い。

以上の情報をサリーに感応現象で教えたところ、サリーは僕の身体を自身の爆乳に挟んでこちらを見つめてきた。ほんとうこういうこと出来るし人間の姿なんて取る必要ないと言っただけだけれど、確かにサリーとこの姿でキスしてみたいのもまた事実。

それによく考えたんだけどね？もしこの無事が偽装できて、フエンリルの人間をこの支部に招いた場合。僕はサリーをどうにかして神機使いの目の届かない場所に隠さなくては行けない。そのために彼女を人の姿に封じ、支部内に匿うという手は決して悪くない。それこそ僕の部屋にディーヴァと共に隠してしまえばいいのだから。例え人間性が足りない場合、何人か墮し児をサリーに喰わせてでもやってみる価値はあると言える。

「サリー。模倣する人間の姿は決まっている？」

「決まってるけど……けど、あなたの好きな人の姿でいい。一緒に考えて決めた……」

「いいよ。じゃあもう一度感応現象を繋ぐね。」

互いの思考を感応現象で繋ぎ、模倣する人間の姿を考える。……なんとなくゲームのキャラクリみたいだなと思ってしまったのは、サリーが殆ど僕に姿形を任せさせたせいだろう。おかげで人間態のサリーは随分と僕好みの姿にしまった。因みにサリーが譲らなかったのは胸と身長は大きくしたいという二点のみ。曰く僕のことを抱いて甘やかしたいらしい。当然了承した。

そして決まった姿をサリーの頭の中にちゃんと記憶させ、今一度サリーの肉体の中に人間を模倣した肉体を生成してもらおう。その上であとはサリー本来の肉体を霧散させれば、それでサリーは人間の姿を模倣できる。

……そう思っていたのだが、ここで問題が発生した。

「……………これで、身体を霧散させるの……??」



「そうそう。大丈夫？身体震えてるけど。」

「大丈夫……ただ、ちよつと身体を霧散させるのが怖いだけで……」

そう強がつて笑みを浮かべようとするサリーだったが、直ぐに不安そうに視線を落としてしまった。ある意味当然だった。何しろアラガミにとって肉体の霧散とは一般的に命の消失。即ち『死』を意味する。

ましてやサリーは一度、僕が傍に居ない時に命を落としかけてその身体が消滅する一歩手前まで霧散した。その感覚を覚えていたサリーにとって、意図的な肉体の霧散とは自殺に等しい意味を持つ。ましてや身体の殆どを霧散させろなんて。生物的な本能が強いサリーは当然恐怖を覚えるし、僕もサリーが霧散しかけたあの瞬間を見ると人類への殺意と喪失を前にしたトラウマが再燃する。経験したサリー本人は尚のことだ。

「サリー、やっぱやめておこう。」

「えっ……でも……」

「君を人の姿に封じる方法は他のものを考える。だから……そんな怖い思いをしてまで人の真似事なんてしなくても大丈夫。」

何より嫌がるサリーに無理強いなんて僕に出来る訳もなく、あえなくサリーに人間の姿を模倣させる計画は頓挫した。……仕方ない。純正のアラガミを人の姿に閉じ込めるなんて、本来もつと後に現れる特異点に匹敵する事例だもの。ずっと一緒にいる方法や外部のフェンリルの人間からサリーを隠す方法はまた考えればいい。それまでは毎日僕も暇を作つてサリーに会いに来るし、屋上で片付けられる仕事は屋上で片付ける。

……それに前例のない不安定な方法で姿を変えて、万が一サリーの身に何かある方が危険なもの。僕はサリーやディーヴァが人の影に怯えなくていいよう、人類を滅ぼそうとしているのに。そのサリーに何かあつては本末転倒だ。だからそんな悲しそうな顔をしないで

欲しい。ごめんね？中に一緒に行けるって期待させちゃったね。代案は必ず考えるから。だからどうか、もう少しだけ――

「――ご主人様!!大変です!!」(うわサリーもいる。ご主人様に甘えられてるのずるい。)

「騒々しいね。どうかしたディーヴァ………ツ!?!」

「さっきご主人様の私室のターミナルで調べ物してたら、こんな事が記されていて………どうかしましたか？」(私だっご主人様にあんな風に甘えられた事ないのに。やっぱりご主人様はまだサリーが一番大事なんだ。私とあんなに寝たのに。)

唐突に二人の時間が粉碎されたせいで、僕は声のした方向に若干不機嫌な反応を返してしまった。が、声のした方を見たせいで僕は声を失うことになった。原因はディーヴァの服装である。

何故かディーヴァは、その頭に修道女シスターを思わせる黒いフードを被っていた。それだけでも首は傾げるが問題はその胴体。原作女性陣の服装よろしく、身に付けているそれはビキニアーマーに似たそれだった。下半身はスリットの入った黒いロングスカートだが、デカ乳と強靱な腹筋を惜しげも無く晒したその姿からは聖職者と言うよりどちらかと言うと女戦士をイメージしてしまう。本人的には聖職者モチーフの衣装なのだろうけど。

ていうか、何でもかも聖職者モチーフで衣装を作っているのか。確かに僕らは表皮を変質させればどんな衣服でも理論上は再現して身に纏えるけどさ。実際僕の部屋にディーヴァが着れそうな服は無かったし、全裸で外に出歩かれるよりはいい。けどもうちよつとこう………なんて言うか、メタいけど世界観に合った服は無かったのか。いやこの世界の女は痴女多かつたけどさ？そう僕が服装に困惑してるのが視線に現れていたのか、ディーヴァは得意げにそのデカイ胸を張ってみせた。

「いいでしょう私の服装!!私にとってご主人様は神様みたいなものなので!!神に仕える者として相応しい服装をこの身に再現して見せま

した!!」(ご主人様私の身体好きみたいだからだいたいぶアレンジしたけど。もっと見て。)

「はあ……やっぱりそういう理由か。君ってやつは本当にさあ……」

「…………この服装、お嫌いですか?」(ご主人様だつてエロい格好してるのに。裸にローブ一枚とか押し倒したらそのままぶち犯せるからね?下ちゃんと履いてるだけ私の方がマシだと思っただけ。)

好きか嫌いかで言えばめっちゃ好きだが???性職者スタイル。でも僕に愛情由来の信仰抱いたせいでここまでバK……いや、ネジ外れたって考えるとほんと頭痛がしてくるなって。僕のせいで咎められないってところが尚更タチ悪い。

いや、多分これが年相応の本来のディーヴァなんだろうね。僕がなまじ全部理解するから取り繕うっていうか、隠さなくなっただけで。僕の方に自慢げに駆け寄って来たから頭撫で撫でしてあげるけどさ。よく見たらスリットも結構エグくて筋肉でバキバキのぶつとももが見えている。何が僕の服装より健全だ性職者め。水着みたいなもんじゃねーか。

なんて新調した服装を自慢するように僕に尻尾を振るディーヴァだったが、サリーにとつては当然忌々しいことこの上ない。僕を両手で包むように抱く手前、殺意剥き出しで排斥するような真似はしない。けど僕を自身の膝の上へと転がすと、僕の姿をディーヴァから隠すように両手を重ねてきた。

「…………で。この人に何の用?今疲れてるんだから、その格好見せに來ただけならそつとして…………」

「うわっ!?!ご主人様どうしたんですか!?その左腕……誰にやられたんですか!?!」(許さない許さない許さない。絶対殺す。ご主人様傷つけたやつ殺す。)

「僕がサリーにあげたんだよ。休んだら直ぐ再生するから大丈夫。それより僕に何の用?随分慌てていたみたいけど。」

僕の負傷を見て頭に血が上りかけたディーヴァを制し、サリーの手の中から這い出る。朝になつたら支部長室に戻ると言い残してあつたのに、感応現象も使わずわざわざ僕の元に訪れるなんて。慌てようからしていい知らせでは無いようだけど？あと僕のこと捕喰したからってサリーを睨みつけるのはやめてね。僕らの愛情表現がこういうのだってディーヴァも知ってるでしょ。あまり睨み合つてるとサリーがそのうち額の目からメンチビーム撃つから。それも猛毒性のやつ。

「はい。それが……ターミナルで調べ物してたら、誰かがこんな事をアーカイブに追記したみたいで……えつとですね……」（サリーに腕あげたつてことは、ご主人様もエッチな事したの？ご主人様には私がいるのに。）

「要領を得ないね。顔貸して。」

「ひゃうっ?!」（あつつつ無理顔近い好き好き好き好き。ご主人様大好き。顔綺麗で女の子みたいに可愛いのに男の子だつて分からせてくるの本当に好き。）

身体をふわりと浮かせてディーヴァのフードを外し、右手で顔を抱き寄せ額と額を重ねる。そうして感応現象を発動する事で彼女が見聞きした情報を僕に開示させる。すると僕の頭の中にある閲覧記録が流れてきた。

それは今回のロシア支部の侵攻に対しての、フェンリル側の記録だった。しかも記録されたのはかなり直近。恐らく追記を行ったのは、あの戦場から逃げ延びた極東の連中だろうが……なにになに??

「えつとですな……?その、今回の戦いのこと……もうターミナルにバツチリ加筆されちゃつてですな……?それで、ご主人様の名前が……」（ああもう幸せ幸せ。顔綺麗。甘えていい子いい子されたい。）

「はっ……名前?僕に名前なんかないんだけど。」

「フェンリルが勝手に名付けちゃつたんですよ!!……しかも接触禁忌

種って、人類の天敵みたいな肩書きで……」《おでこギユって押し付けてくるの幸せすぎる。でもこれきつと今は私の考えてること見てるから……余計なこと考えないようにしないと。こんな変態っぽいこと考えてるのバレたら嫌われちゃう。平常心平常心。ご主人様が見やすいようターミナル見た時のことを思い出さなきゃ。》

そう続けるディーヴァをよそに造書庫ライブラを用いて彼女の記憶の中で閲覧されたターミナルの記録に目を通す。そこには今回の戦いで死んだ民間人に神機使いの数、行方不明になった神機の数。施設の損壊率など、この戦いに於いて生じた人類側の被害が確認できる範囲で詳細に記録されていた。そしてこれらの被害を齎した新種のアラガミ——【神骸種】と呼ばれる、僕が生み出したアラガミに関する確認できる範囲での情報。そいつらのせいでロシア支部を事実上壊滅させたことまでが全支部向けに記されていた。

何より。そうした【神骸種】を生み出し、明確に人類に敵意を示した知性を持つアラガミ。かの存在を人類史を滅ぼしうる唯一の存在——【第零接触禁忌種】として全フェンリル支部に搜索するよう促す旨が緊急連絡として明記されていた。

それは各支部の支部長はおろか、フェンリルに属する全ての神機使いに対する警鐘だった。遂に人類を滅ぼし、人類になり変わるに足るアラガミが生まれ落ちたと。人類の存亡をかけた、神々ほくらとの戦争を告げる狼煙だった。

明確に人類史に刻まれた滅亡の爪痕に、国に等しい支部の一つを滅ぼしたその力に人類は畏怖を示した。この【第零接触禁忌種】の名が示すのは人類史の終わり、そして僕ら神々の時代を齎すものに与えられる称号。意思なき神々に知恵を与え、戦場に導き、人類を亡き者にせよと望む人ならざる者の王。

それが、僕が初めてこの世界で授かった名前。

「——ソロモン。」

【……………えっ?】

「ソロモン。……僕の名前。そしてこれから人類が最も恐れ、忌み嫌う名前だよ。」

寄りにもよって神機にんげんども使いに名を与えられたのは、神ではなく人間の名が与えられたのは元人間の僕に対する皮肉か当て付けか。全く忌々しい。名無しというのも名も無き聖書の神のようで気に入っていたのに。寄りにもよって人類が僕の名付け親になろうなどと。全くもって、本っ当に忌々しい。

……けど、それでも気に入った。【第零接触禁忌種ソロモン】。魔神の軍勢を率いて人類史を滅ぼす、僕にピッタリの名前じゃないか。

そうさ。僕はこれで人類の敵となった。名実共に、世界の誰もが認める人類の天敵となったのだ。待っていた。ずっと僕は待っていたんだ。人類が僕の憎しみを知る時を、僕の暴威を味わう時を。僕の名前に怯える時を。サリ―を喪いかけたあの時からずっと、僕は待っていたんだ。この手に人類を滅ぼすだけの力を手にするその時を。

……この名はその証明だ。僕が人類を滅ぼしうる存在だと人類が認めた証明だ。喜ばずに居られるものか。この名のもとに、これより人類は絶滅する。僕らが滅ぼす。僕の神骸種と共に……否、墮し児達の手によつて。人類お前たちの歴史は終わりを告げるのだ。

—— 20 · ソロモン 賢王 : END ——

## 21. 伴侶（セフィラ）

【ソロモン……あなたの名前。】

僕の身体に両手の指を絡め、うつ伏せになって顔を近づけるサリーが感慨深そうに呟く。彼女が名を持たない僕をどう呼んだものかと悩んでいたのは知っていた。例えばそれが人間に与えられた名でも、サリーは僕を名前で呼べるのが嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

しかし、得てしてアラガミは本来人間共によって名を授かるものである。そこに一切の例外はなく、それは僕同様にその脅威を知らしめた彼女達も例外ではない。幸せそうに笑うサリーに笑みを返す傍ら、僕は先程ディーヴァから得た情報の続きを改めて造書庫で反芻する。

曰く、僕ことソロモンの細胞によって変じたアラガミ——フェンリルが「神骸種」と呼ぶアラガミは、現状は僕の尖兵程度の認識しかされていない。それでも支部の居住区に大惨事を齎した結果、優れた知能や進化の速度などの性能は交戦する傍から事細かに分析されていた。当然ターミナルにもその情報は錯綜しているものの、戦時中に得たものが遺言の如く殴り書きされている。

その中でも特に警戒されたのが、僕と共に行動した期間の長い彼女達だ。何しろ神骸種は、その体色が変わった事と捕喰能力を起点とする共通の<sup>擬似バーストと装甲化</sup>新能力を得た以外は基本的に既存の種類と変わらない。ゾルダートやフリーユージェルなど、姿形や能力に至るまで一新した神骸種も居るには居る。しかしそうした存在はいずれも小型アラガミだ。大型アラガミには、姿や能力まで既存のものと異なる神骸種は存在しないんだよ。

——サリーと、ディーヴァの二人以外には。

この二人は、過去に数度の極東第一部隊との交戦記録もある。そのいずれもが僕の傍で連携し共闘していたこと。そして既存のアラガミを遥かに上回る新規の能力と絶大な危険度を持つこと、加えてトド

メに今回の戦いだ。ロシア支部侵攻時に神骸種の指揮を行うところを目撃されたらしく、僕に匹敵する脅威としてフェンリルに睨まれたらしい。新種の「神骸種」の中でも、この二人だけは「伴侶」と呼ばれる新たな接触禁忌種に部類されていた。

まず第一接触禁忌種「テイターニア」。通常のサリエル神属以上の美貌を持つこの個体は、額と掌。さらにドレス状の巨大な翼に備えた無数の邪眼とウロヴオロスに匹敵する巨体を有する。にも関わらずロシア支部のアラガミ防壁を乗り越え襲撃するほどの飛行能力と制空能力を持ち、高い機動性と大火力を両立した害悪アラガミ。挙句に他のアラガミを回復する能力まで確認されていて、猛毒の霧を用いた状態異常まで撒き散らす始末。

極めつけは防壁を越えて飛来するなり、飛び回りながら無数の誘導レーザーを居住区に降り注がせる重爆撃機つぶり。着弾と同時に毒ガスを撒くこれは神機使い、民間人を問わずに夥しい数の犠牲者を出したらしい。この空襲を経験したせいで、フリーユゲルの件も合わせてフェンリルはアラガミ防壁に対空防御を視野に入れるよう戦術マニュアルを書き直すようになったのだとか。

次に第一接触禁忌種「ユミル」。こちらは通常のプリティヴィ・マータとは色しか変わらないが、神骸種特有の高度な学習能力。その更に先の、最早『知能』と呼べるまでに発達した思考を認識され警戒されたいらしい。何しろ氷塊や氷晶の冷氣としての性質よりも、硬度を有効に用いた質量攻撃を操るのだから。しかもソーマのチャージクラッシュを氷壁で止めたり、その氷壁で他のアラガミまで守る知能持ち。将来的に神骸種はここまで賢くなるのかと、僕以外でフェンリルを震撼させたのは彼女の情報が大きい。

加えて前回のロシア侵攻時には、開戦と同時に氷塊を空から降り注がせる大規模攻撃を行使。結果としてフェンリルのアラガミ防壁を粉碎し、僕らが侵攻するための道を切り開いた。それでしばらく行動不能になる事まではバレてないようだが、おかげでフェンリルには



『既存のアラガミ防壁を破るほどの攻撃力を持つアラガミ』と認知されてしまった。

……まあ、人類視点だと確かにこの二人が脅威に映るのは分かる。すげーよく分かる。実際指揮官が僕なら二人は戦略兵器みたいなものだしな？優先的に殺そうってなるのはすげーよく分かる。

「だがこの勝手な『改名』はどういうことだア!?誰に断って勝手な名前前で追記してんだよクソがツツツ!!」

「……………っ!?!……………!?!」

「ご主人様!?急にどうなさいましたか!?……………って、さては私達のページを見ましたね!?!」

急にキレた僕をサリーがびっくりして解放してしまったため、慌てて怖がってるサリーの頬を撫でる。ついでにディーヴァにも宥めるように後ろからギュツて抱きしめられる始末だが……いや、流石にキレずには居られないだろうよこれは。二人には既に僕が名前を授けていると言うのに。勝手な名前で登録された以上、これから二人は人類——フェンリルの神機使い共にこの名前で呼ばれる。僕らアラガミの名前とはそういうものだ。

しかもこの名前……サリーが「ティターニア」と名付けられているのは分かる。服とか王冠状の角とかウロヴオロスが元だから植物っぽいし、色合い邪悪でクソでかいけど妖精みたいな見た目してるから。でもディーヴァの【ユミル】……これって確か、霜の巨人の生みの親の名前だよな?北欧神話だったか。霜の巨人……プリティヴィ・マータの生みの親。

知恵を持ち、知恵を与え王として君臨する僕に【ソロモン】の名が与えられたように、アラガミの名はそれ自体が『象徴』としての意味を持つ。容姿や能力、性質などからかつて人が空想した神々、或いは実在した偉人を連想し、警戒を促す目的で与えられるのがアラガミの名前だ。

故にデューヴァにこの名前が与えられたということは、恐らく彼女の素性をフェンリルが理解しての蛮行だと言うことだ。野に捨てられアラガミ化した彼女と個体反応が一致したか、それとも唯の偶然か……格上の脅威として、偶然この名前が与えられただけかもしれない。

しかしもし前者なら、デューヴァは『元神機使いの神骸種』としてフェンリルに警戒された可能性が高い。……いや、正確には元々アラガミ化した神機使いが改めて僕の支配下に入ったのが正解だけ。ずっと前にデューヴァがアラガミ化したのはフェンリルも知ってるはずだから。そこが関連付けられる可能性は低い。

ただそれでも、前述するデューヴァの知性が元人間という出自に由来するものだとフェンリルが勘づいたのなら。それは神骸種が人間時代の記憶や知性を有する証明となってしまう。そうなれば、神機使いも条件を満たせば神骸種——いや、堕し児に変じるとバレルのは時間の問題だ。可能性に気付いて検証すれば、奴らは直ぐに気付くはず。

幸いまだ僕の細胞が人間すら変じさせるといふ情報はターミナルに記されていない。それは現状バレてないって証拠だが……単純に勝手に二人を改名されてムカつくってこと以上に、僕が思っていた以上に事態は不味いかもしれない。僕らが人間すら汚染でき、さらには人間に擬態できるとバレては今後の侵攻作戦が根本から瓦解する。

「デューヴァ……ありがとうね。君が僕に慌ててこの情報を持ってきたのはこのせいかな。」

「?いえ……ご主人様の名前が決まっていたのと、第零接触禁忌種とか指名手配されてたから知らせておこうと……あとあと!!私達、ご主人様の伴侶ですよ伴侶!!やっぱフェンリルから見てもそう見えるんですね!!」(これももうご主人様と結婚してるようなものでは。幸せませ幸せ。フェンリル本当にナイス。)

【伴侶……って、なに?ソロモン怒ってたけど、嫌なものじゃないの……??】

そうデীবアを見下ろし質問するサリーに、デীবアは伴侶の意味を嬉々として説明していた。うん、そこまで深く考えては無かったみたいだね。情報を持ってきてくれたことには感謝してるから、デীবアをぎゅって抱きしめてあげたけど。そしたらデীবアがめちやくちや♡マークを飛ばし、サリーが静かにデীবアにキレた。ごめんって。

でも状況にそう猶予が無いと知れた以上、行動はさつきと起こすに限る。最低でもロシア支部の陥落そのものを隠蔽し、僕の支配を悟らせないようにフェンリルの支配下に戻す所まではやっておきたいから僕はサリーに邪眼から極太レーザーを照射され、それを床から形成した氷壁で防いでいるデীবアの腰を叩いて呼ぶ。二人ともヘリポートで暴れるんじゃないよ。崩壊するでしょ。ヘリポートが。

「デীবア。デীবア、ちよつといい?」

「は……はい!!なんでしよう!!サリー、ちよつと攻撃やめてください!!ご主人様が真面目な話あるって!!」(今の腰トントンってして呼ばれるの超かわいかった!!)

「この情報さ。追記されたのいつ分かる?」

そう尋ねると、デীবアはうーん……と唸り始めた。というのも、今見たロシア支部の壊滅報告や僕らの情報。これらは間違いなくこの連中が逃げ延びた極東支部から追記された情報だ。何しろデীবアの面倒を見に行く前、僕が造書庫を介してターミナルを見た際には記録されてなかった。その時あったのは、せいぜい僕的能力についての報告やロシア支部の被害報告だった。

後者の情報はあくまで戦時中にロシア支部のターミナルから発信されたものだろう。

「えつと……確か、ご主人様が屋上行ったばっかの時は無かったです!!ご主人様にターミナル見ろってさつき言われた時に——」

(ああもう小さい上目遣い可愛い……ベロ入れてキスしたい。)

「んじや真夜中?……極東の方では朝方つてところか。ありがと。」

「もし正確な時間が知りたければターミナルに更新履歴残ってるはずですし、どこの支部から情報が追加されたか確認してきますけど……それがどうかしましたか?」(お腹とかにもお顔ギュツとして欲しい。私のお腹は筋肉すぐくて触って気持ちいいものでもないけど……)

いや。つまり直近に更新されたってわけだね?大いに結構。もう支部長とか技術者とか、要人を避難させてるからか壊滅って判定が着くのが早いね。あの戦いの中ヘリで両支部の支部長を極東に運ぶのに半日として……交戦した第一部隊から得た情報を精査して、推敲した上で追記するまでに凡そ一日。その間こっちに生存者の確認を行うメールは来てなかったし、一支部が壊滅したって緊急連絡が含まれるから急いで更新したのだろうが……

おかげでこっちから連中に通信を繋ぐ大義名分が出来た。ロシア支部の壊滅が公表された以上、『まだ生存者がいる』『勝手に殺すな』『早く助けてくれ』と救援要請を出すべきは今だ。

そして同時。これまたディーヴァのお陰で、僕は下の階に住まう墮し児達を動員する理由も思い付いた。正確にはディーヴァって言うよりサリーとディーヴァに勝手な呼び名を付けた人間共のお陰だけだ。

そこまで準備が整えば善は急げだ。まだ夜明けは迎えていないが、僕は仕事に取り掛かるとしよう。

「あつ……ご主人様!?どこ行くんですか!?!」

「支部内でやらなきゃ行けない仕事が出来た。悪いけどサリー、また夜に会いに来るから。もう少しだけいい子にしててね。」

「……………えっ。また、中行つちやうの……??!」

ただ僕が支部の入口へと足を進めると、サリーは寂しげにそう呟いた。ほんと仕事しにくくなるなこの子は。これから暫く、他支部との外交とか墮し児の管理とかで会えなくなること増えるから慣らした

方がいいのに。あまりにサリーが悲しそうにするから、僕の足取りも自然と重くなる。

とはいえ今回は本当に急ぎの用事だから。僕はサリーを甘やかしたいのを我慢し、サリーではなくディーヴァの方に向き直った。

「ディーヴァ。君は僕が戻るまでの間、サリーをどうにか人の姿に封じる方法を考えといて。さつき与えた仕事はひとま一先ずいいから。」

「なっ……!?」主人様……人の姿に封じるって、サリーをですか!? それまたどうして——」（サリー中に来たらご主人様抱けないから嫌ですが!?)

「この先他支部から人間共が訪れると言うのに、支部の敷地内に堂々とアラガミを放せないだろう? 支部内の一室に匿える大きさなら、その出来は問わないから。」

そう説明するとディーヴァは、苦々しげに表情を歪めた。当然だ。今まではサリーが超大型アラガミなせいで支部の中に入って来れない。そういう前提があるせいで、支部内でディーヴァは僕を独占できていたんだ。

それがサリーまで人間に擬態し、支部内にやって来たらディーヴァの思い描く愛の巢はいとも容易く崩壊する。幾ら人間がいつ訪れてもいようと建前を述べたところで、僕の本音が『サリーに寂しい思いをさせたくない』なんて事はディーヴァも分かりきってる事だから。

しかもその世話をよりにもよってディーヴァにさせようなどと……幾ら僕のこと愛しくて愛しくて仕方ないディーヴァでも、苦言を呈したくもなるというもの。それが僕と寝て、僕に溺れ、僕以外の全てを打ち捨てて身も心も捧げた直後ともなれば尚のことだ。本命の恋敵なんて一番二人きりの支部内に入れたくないだろう。多分今のディーヴァにとって一番やりたくない事だと言っても過言では無い。それこそ僕の頼みでも聞けないほどに。

だからこそ。この僕の我儘にも近い願いを聞いてもらうには、相応

の対価を払うのが礼儀というものだ。僕は踵を返してディーヴァの方に振り返ると、物申したげな彼女の腰に腕を回す。そして強靱な腹筋に覆われたお腹に顔を押し付けると、サリーには聞こえるか否かという声でそつとディーヴァに囁く。

「くくくッ!? あのと……ご主人様!? 急に甘えてどうしちやったんですか!? いや、私は幸せだし寧ろずつとこうしてて欲しいから全然いいんだけど——」(ヤバいやバいやバいや。不意打ちでこれは理性飛ぶ。サリーいるのに。)

「ディーヴァ。……もしサリーを擬態できるようにしてくれたらさ。僕、一つだけ君のお願いをなんでも聞いてあげる。……そう言ったら、サリーの事を頼まれてくれない?」

「!? ……ご主人様、それって……サリーを人の姿にできたら、ご主人様が私のお願いをなんでも聞いてくれるってことですか!?」

ほら食い付いた。尻尾ブンブン振る幻覚が見えるレベルで。大型犬みたいに素直でほんといい子だね。やる気を出させるには十分だとは思ってたけど、ディーヴァは僕の目の前にお座りするとキラキラした目で僕のことを見つめてくる。すつかり飼いやられたディーヴァの様子には流石のサリーもドン引き。僕に『こいつに何したの』とでも言いたげな視線を向けてくる。ナニしたんだよ。本当にごめんね。

「ご主人様、なんでもって事は……その……昨日みたいなこと………」(ご主人様と赤ちゃん出来るまで交尾したい、とか言ったら引かない?)

「もちろん。僕にできる範囲なら何を望もうと構わないよ?」

「本当ですね!? 後でやっぱダメって言ったら泣きますよ!? 本当にお願いを聞くだけ、とかもダメですからね!?」

「そんな生殺しみたいな惨いことしないよ。心配しないで。」

息を荒げて詰め寄ってくるディーヴァを宥める傍ら、サリーにもちよいちよいと手招きをする。するとサリーは僕の傍にふわりと舞

い降り、僕に♡マークを飛ばしまくってるデューヴァを片手で払い除ける。いや払い除けるっていうか平手打ちで壁に叩きつけた。そのまま両手で僕のこと包んでくるので相変わらず独占欲が凄い。「デューヴァと仲良くしてね」って言おうとしただけなのに。

……僕がデューヴァと話してただけでこんな妬くんだからね。貞操の大安売りでデューヴァにサリーを任せたのは失敗だったかもしれない。けど――

「サリー。君の身体のことのはあの子に任せるけど、あまり喧嘩しないようにね。」

「…………嫌。私、ソロモンと一緒にがいい…………」

「僕も中での用事を片付けたら直ぐ戻るから。…………それまでに上手く人の姿に収まっていたら、支部の中に連れてってあげる。」

そうすればデューヴァもいるし二人きりとは行かないが、ずっと一緒に居ることが出来る。そう説得したらサリーは逡巡したもの、僕を逃がすまいと包む両手を離してくれた。それで僕の言う通りにデューヴァの方へと向かってくれたのだが、その直後に赤い氷塊がサリーを撃ち落とした。

氷塊の飛んできた方向を見たらいつの間にかアラガミの姿となったデューヴァの姿があった。頭部とマントが聖女のフードシスターを被ったようなものになって、四肢を覆う装甲が甲冑じみてるなど原種のバルファ・マータの姿から微妙にアップデートされている。人間態の衣装に合わせてデザイン変えたのだろうか。

けど相も変わらず無機質な女神像の眉間には皺が寄っており、それに呼応するかのようにサリーの邪眼にも活性化の光が灯る。さあ戦いの時間だ。ほんっつと仲良くできねえなこの二人は!!!当たり前前なんだけど!!!

「…………じゃあ僕、支部ん中行って墮し児達に言うこと聞かせてくる

から。デューヴァはサリーが嫌がることをしないように、サリーはデューヴァになるべく優しくするように。いいね?」

【はい…………ごめんなさい…………】

「私もご主人様が嫌がることはしませんよ。ちゃんとサリーは可愛く繕っておきますから、楽しみにしておいてください。」(ぜつつつたいにご主人様は私のものにするから。どんなに可愛くてエロい姿になっても、こっちはご主人様からのご褒美がある。目の前でするとこ見せてやるから覚悟しておけよ本当にこの女。)

ただでさえ左手をサリーに捕喰されて弱つてると言うのに、賢王の伴侶特記戦力二体の正妻戦争を仲裁したから既に死にかけてます。これから僕への敵意百パーの墮し児達んとこ行こうつてのに。ロシア支部落としに神機使い共と戦った時より疲れたんだが?その甲斐あつてどうにか二人を表面だけでも和解にまで持っつてはあったが、夜の闇は薄れて既に日が昇りかけている。ちよつと休みたいが僕も急ぎで仕事に取り掛からなければ。

そういう訳だから僕は不安しか残らないものの、サリーとデューヴァを屋上に残してまずは支部長室へと向かった。その上で改めてターミナルを確認するが、未だに当支部への生存確認やそれに類するメールは届いていない。

思えばアラガミが人間に情報戦を仕掛けようなどと、随分と来るところまで進化を遂げたものだ。本編でもその域にまで辿り着いたアラガミは居ないだろうに。ライブラ造書庫を起動してターミナルの使い方を調べ、同時進行でコンソールを片手で叩く。……やはりというか、支部間の連絡なんかは通信室の専用の設備を経由しないとダメらしい。が、それでいい。僕がすべきことはここでも十分こなせる。

幸い造書庫で捕喰済の神機使いの記憶を漁ったところ、ターミナルの操作は恙無く行えた。あとはここからだ。僕は支部長室を出て廊下を歩くと、階層を跨ぐエレベーターの呼び出しスイッチを押す。

神機使いの居住区より上の四階以上への侵入は、ここに招き入れる際に墮し児達に禁じてある。だからこそここにいる間は僕もデューヴァも墮し児の姿を気にする必要はなかった。だがこれより下は、僕



に殺意と憎悪を抱く墮し児達の領域。実質戦場だ。これより僕は、そうした領域に踏み込んで彼らに協力を取り付けなくてはならない。

……正直ディーヴァ程ではないにしろ、気が重い気がしなくも無い。僕によつて友人を、家族を、住む場所を奪われ、その惨禍に晒されるだけでなく否応なく加担させられた者達。親しきものを口にする事で人間性を獲得した神骸種。墮し児つてのはようはそういう存在だ。彼らの憎悪は正当性しか無い必然のものだし、並大抵の神経した子は彼らの前に出ようなんて思わない。自身がその元凶ともなれば尚更ね。

けど僕は幸い面の皮が厚いし、どんな手段を使おうが人類を絶滅させなきゃいけないから。僕を見た墮し児達が何をするかなんて分かりきってるが、堂々とエレベーターの扉を開けた。十中八九ベネツトだろうね。いやあ楽しみだ。

## 2.2. 蝕鎧（シユラウド）

エレベーターの扉が開くと、目の前にはゲームでよく見慣れたものの三倍以上はあろうかと言うロビーが広がっていた。そこでは様々な人々が各々に談笑しており、僕が想像するよりも遥かに日常と呼べる平和な光景が広がっていた。

なんていうか……もつとこう、墮し兎って元人間だしき？人間性を取り戻す過程で絶対食人は避けられないし。感覚も残ってるし、絶対喰い殺した相手への罪悪感で吐いたり自殺しようとして首吊ってるくらいの地獄絵図は覚悟してたんだよね。だから少々肩透かしを喰らった気がしなくもない。いや、大いに結構なことなだけどね？

あれかな。そういう怨嗟や自責の念は昨日のうちに各々断てたのかな。若しくは墮し兎って殆どは元スラム同然の居住区住まいだから？フェンリルの中央施設での暮らしが快適過ぎて、そういう嫌なことは忘れられたとか。今も随所でチラホラ自販機のドリンクに感動してる子とか居るもの。

加えて各々に人間をぶつちぎりで超越した生物の能力を獲得したわけ？この身体で何ができて何ができないかなど、試行錯誤するのが楽しいって連中も結構いる。そうだよ。どう考えても相応以上の代償は払ったけど、前の餓死しないだけで幸福みたいな居住区暮らしから抜け出せたんだ。

僕が招き入れたここではボロ布じゃない綺麗な服を着れて、食べるものにも困らず、個室もあれば寝心地のいいベッドまである。その上娯楽や嗜好品にも当面は困らないと来た。元居住区住まいならまず間違いなく全員が憧れた暮らしだ。それが手に入ったとあれば、怨嗟など差し置いて僕に感謝してくれても不思議では無い。

復讐つてのは基本的に自分の運命に決着をつけるための行為だから。これから先の幸福が約束された今、そうした生活を投げ捨ててまで勤しむ奴はそう居ない。案外この調子なら僕が軽い協力をお願いしても快く引き受けてくれるんじゃないかな。そう思った僕は柔らかな笑顔を浮かべ、墮し兎達へと声をかけた。



う訳では無い。ただ、僕が展開した防壁に突進を叩き込んだ後の次の瞬間。その身体が黒く霧散したと思つたら、元の墮し児の姿に一瞬で戻つたのだ。

蝕鎧しょくがい。日本語に馴染みの無い墮し児達には『シユラウド』と称して与えたこの能力は、神機を模した蝕装と異なり人型の本体をアラガミの肉体で覆うことが出来る。言うなれば完全に制御された、解除自由な全身のアラガミ化だ。

この能力は蝕装と共に墮し児の基本能力として備わっているし、ロシア支部に入れる際には確かに使い方は教えてある。何しろ蝕装と違って神機の振り方とか知らなくていいし、変じた後の身体の扱いに慣れれば元民間人でも戦力になるからね。けど……………

「これは驚いた。もう蝕鎧を実戦で運用できるようになっていたとは。こういう事が出来るのは君だけ？それとも君達全員かな？」

「氷由来の能力ってことは使うべきは炎系のアラガミの能力だ!!……………大型って何がある!?!あいつの防壁を破れそうなやつはなんだ!!」

「クアドリガ辺りなんてどうかな。ほら、あの背中にミサイルポッド付いてるやつ。墮天種や接触禁忌種はまだ情報足りなくて悪いね。現状炎属性の大型アラガミってそいつくらいしか——」

僕がそう提案すると同時、再び目の前の墮し児の全身が黒く渦巻くオラクル細胞に覆われる。そうして身体に纏つたそれが霧散すると、そこには凡そ色合い以外は原種のままのクアドリガが立ち塞がっていた。……………どうやら今まで僕が口にしたアラガミの姿であれば、既に全ての種類に変じられるらしい。全ての墮し児がここまで出来るかどうかは分からないが。

……………いや。造書庫ライブラで確認したけど、程度に差はあれど全員似たようなこと出来るね。つまり今の時点で墮し児達は既存の大型アラガミであれば変身できる上、人間由来の思考と知能の元に従来のアラガミの能力を行使できると。ほんっと進化の縮図を見ているようだ。たった一晩ちよつとでここまで出来るようになるなんて。よつぽど僕のこと殺したくて練習したんだろうね。僕としても喜ばしいよ。

ただ惜しむらくは、いくら能力を使いこなしたところで墮し児は元

一般人が大半。例え仮に元が神機使いであったとしても、知性を持つ相手との戦闘経験は圧倒的に不足している。駄目じゃあないか。敵の提案を真に受けて姿を変えちゃ。

確かにクアドリガのミサイルならディーヴァの能力は氷だし破れるかもしれないが、そもそもここはロビー。いくら極東の三倍以上の広さはあると言っても、天井の高さなんてたかが知れている。クアドリガなんてクソでかいアラガミに変身してしまえば、頭が天井につつかえて動けなくなるだろうに。

「なっ……頭が当たって身動きが取れん!!ハメやがったなあのがキィ!!!」

そうして天井と床に挟まり、居心地悪そうにずりずりしてる傍ら。僕は右手に神機の長剣（ロングブレード）を横した蝕装を展開し、赤晶の防壁の裏から飛び出す。そして跳躍と同時にクアドリガの骸骨頭をすれ違いざまに両断し、先ずは視界を奪った。そうすると胴体の背中に当たる位置が裂け、人の形をした墮し児の素体が上半身を現す。視界が途切れたから外見ようと出てきたんだね。

「……クソッ!?あのガキ何しやがった!!頭を破壊されたのか!」

「そうだよ。あと戦闘中に生身は晒さないようにね。危ないから。」  
「なッ——」

で、出てきたのとはほぼ同時に素体の首を一閃。宙に刎ね飛ばした後、刀身の側面に生首の断面を乗せる形で受け止める。モグラ叩きじみて首を獲とられたのが余程驚いたのか、首を刎ねた墮し児は口をパクパクしてた。……こういう知識で得がたい実戦経験はこれから神機使いと戦っていく上で必須になる。相手の行動の意図や目的、それらを想像した上での先読みや能力の選別。こればかりは戦いを数こなし、身体で覚えなきゃならない。

幸いにも彼らはまだ僕に根深い怨恨を持つてるし、好き好んで僕を殺そうとしてくるけどね。その際に僕は神機に由来する能力のみで応戦し、こうして死なない程度に彼らを痛めつける。それだけで神機使いとの擬似的な実戦経験は積みせられる。

その過程で墮し児達は蝕鎧も能力も僕を屠ろうとより強力なものを考案するだろうし、どんどん強力なアラガミに進化するはず。そうやってくれれば墮し児は対人類用の尖兵としては十分なほどに仕上がる。行く行くは新種の接触禁忌種に匹敵するアラガミがポンポン生まれ、そうした能力が人の知能の元に振るわれるんだ。そうなれば人類は為す術なく絶滅するだろう。それこそパンドールなんざ出る幕もないほどに。

とはいえそうした戦闘訓練を行うのは今日ではない。何しろ今日の僕は彼らに火急の用がある。だから騒然とする墮し児達の前へと舞い降りると、僕は蝕装の刀身に乘せた生首を投げて足元に転がした。当然それだけで墮し児は怖気付いて後退あしすさるが、あんなになっても死なないのが墮し児のいいところだ。半日もすれば元通りの人型に再生するからね。今は急いでるから軽く脅しとくけど。

「さて。次にこうなりたい子は？今日は別に君達を虐げに来たわけでもないし、気が済んだのなら話がしたいんだけど。」

「この澄ましたオスガキが舐めてんじやあないぞッ!! 第零接触禁忌種だか何か知らんが、そんな神機擬きでこの人数の大型アラガミを――」

そう脅迫気味に話し合いを持ちかけてはみたが、当然墮し児達は蝕鎧を纏って応戦しようとする。しかしその姿が大型アラガミに変わることは無かった。その様に墮し児達が互いに顔を見合わせるが、実態は別になんてことは無い。ここは襲撃で入り口が崩壊しているとはいえフェンリル支部の中央施設内。パンドールを中で爆破したとはいえ、屋内に舞ってるオラクル細胞の量なんてたかが知れている。

だから複数人が大型アラガミの蝕鎧なんか纏おうとすれば全員が纏うオラクル細胞の不足で等しく不発に終わるし、そもそも屋外であつても大気中に舞ってるオラクル細胞は無制限じゃない。一箇所箇所の戦闘区域で大型アラガミを模した蝕鎧を纏えるのは、普通のエリアであれば四体が限界だろう。まあ今回僕がロシアを落とした時みたいに、予め別エリアで蝕鎧を纏ってから戦闘区域に行けばその上限も無視できるわけだが。或いは既にいるアラガミを抹殺して大気中の

オラクル細胞を増やすとかね。とにかくその辺の運用とかも、実戦と合わせて覚えなきゃいけないね。

「……………ツ!!なんだ!?なんで化け物に変身できない!?やり方は間違っていないはずなのに!!」

「場所が悪いんだよ場所が。本気で僕を殺りたいなら、こんな狭い場所じゃなくて外出時を狙いなさい。多分これからよく出る事になるから。」

そして彼らが未だにやる気満々つてのもよく分かったから。黙らせるついでに『墮し児はこんな事も出来るんだぞ』と、僕は蝕装の刀身を縦に展開する。そして付け根の銃口代わりの邪眼を墮し児に向けると、銃撃を模した赤黒い光弾を放った。それは黒い弾道を残すほどの速度で墮し児の胸元を貫くと、四肢と首が宙に撒かれるほどの風穴を胴体に生成する。しかもそれは一人ではなく、射線に立つ複数

の墮し児全てに同様の現象が引き起こす。

そしてそこから間を置かずにもう一発。さらにもう一発。威力に見合わない連射速度でガンガン撃ちまくり、射線に立つ墮し児の身体を重機関銃の如くなぎ倒して行く。未だ蝕鎧を纏おうと抵抗する墮し児は為す術なく首を残して霧散し、反撃を試みようとする肉体を变质させればその箇所から撃ち抜かれる。

銃型神機の速射弾アサルトと狙撃弾スナイパーの性質を併せて模倣した重撃弾ガンドレイクだ。燃費は悪いし射程もそう長くは無いが、貫通力と速射性に関しては今見せた通り。こんな感じに今の僕は、神機のほとんどの能力を使用出来る上にそれらの能力を併用して新たな能力として扱える。そういう意味では極東の連中つてイレギュラーを除けば、通常の神機使いより相当強力な神機使いってわけだ。今まで口にした神機使いの戦闘経験もきっちり造書庫ライブラに貯蓄されてるしね。それらに裏打ちされた銃撃の精密さと剣術は言わずもがな、ほぼ全ての神機の種類の動きを模倣できるってわけ。

その上僕が用いる蝕装は刀身の開閉だけで剣形態と銃形態を使い分けられる銃剣型。本来なら近いうちに新型神機つて似たようなものが神機使い達の間で流通するんだけど、この時代から見れば実用化

はまだ先だ。そもそもそんなもんが実戦配備される前に人類は絶滅させるつもりだけだ。

でもそんな時代を先取りした武器で全神機の機能を銃剣問わず併用でき、神機使い数十人分の戦闘経験を記憶として持つんだ。そんな僕に堕し児の一人一人が勝てる……まで行かなくても、ある程度互角に戦えるようになったのなら。それはもう大半の神機使いは敵にすらならないと言っている。理想としては彼ら堕し児にはその位になってもらいたい、ってのが僕の中での彼らの育成目標だ。

けれどそんな僕の理想値に現時点で達している堕し児は流石にまだ存在しない。それは僕の重撃弾による蹂躪を見た結果、堕し児達も痛感したらしい。このまま僕に挑み続けるべきか降伏すべきか、代案を探るようにざわめき出した。おかげでひとまず僕に対する攻撃も止んだよ。だから今のうちに、僕はさっきの続きの言葉を紡ぎ始めた。

「二回降参、って事でいいなら話をするけどね。君達が僕のこと憎いののは知ってるけど、火急の用事なんだ。どうか落ち着いて聞いてくれる？」

そう諭してはみたが、一斉に堕し児達の頭上に「!？」が浮かび上がると口々に騒音じみた罵声の嵐が飛んできた。だからもう一回重撃弾をぶっぱなして黙らせると、咳払いを挟んだ後にまた口を開こうとした。けど僕思ったの。『これももう感応現象で直に頭に情報を叩き込んだ方が早いな』って。演説垂れ流せるほど治安よくないもの。それに感応現象も通信代わりに使えるようになって欲しいし、僕が急いでるってのはマジだから。

何しろ堕し児達に強引に協力を取り付けるためとはいえ、さっき僕は盛大なやらかしをした。それこそ人類を絶滅させるどころか、このロシア支部が堕し児もろとも壊滅するかもしれないほどのやらかしを。だから僕は未だにざわめく堕し児達に感応現象を接続し、脳内に直接言葉を届けた。

『あー……まずはね。昨日の夜くらい、かな？この支部の中でターミナルを使った子がいるみたいでさ。早い話、ここの支部が無事だつて



フエンリルの連中にバレました。大体数時間前の話だったか。』

「はあ!?!?この無事がバレる事の何がマズイんだよ!!そしたらフエンリルの連中が助けに来てくれるじゃねえか!!つかこいつ、脳内に直接!?!?」

『その通り。このままだとフエンリルの連中が近いうちに来る。このアラガミしか存在しないロシア支部に、フエンリルの神機使い共がね。』

僕のやったやらかし。それはさつきここに来る前。サリーの身体をディーヴァに任せ、支部長室に寄った時のことである。僕は支部長室のターミナルから、フエンリルのデータベースにある情報を追記した。

その追記した情報。それはロシア支部にて初めて出現し、侵攻時に民間人相手に猛威を振るった新型の神骸種。小型アラガミをベースにした『新型オウガテイルゾルダート』と『新型サイゴートフリーユージェル』の詳細な性質だ。名称含めてそれらのアラガミの能力を、アラガミの神骸種カテゴリーに追記しておいた。神機使い側からしても神骸種の情報は少しでも欲しいはずだからね。例え敢えて幾つかの情報を抜いて記したところで気づきやしないし、ロシア支部がとくに僕の手に落ちてるなんて発想も消せる。

それでも壊滅寸前だったはずのロシア支部から、どういうわけかデータベースに対して追記があった。それもフエンリル側にとってめめちやくちや有用な情報。傍から見ればそれはロシア支部に人間がまだ生存している決定的な証拠となる。それが確認できた以上、フエンリルはこのロシア支部を放置することは出来ない。何しろここは神骸種との戦闘経験がある唯一の支部なのだから。色々聞いたことは山積みだろう。

まあ実際のところ、生存確認のメールの類が来てなかった辺りはとつくに滅んだものとして放棄されてるかもしれないんだけどね。しかしここロシアは元々神機の研究設備が豊富だし、メールが来てなかったのは僕が情報を追記する前までの話。こうして生存者が確認された以上は形だけでも救援部隊が派遣されるかもしれない。

結局のところ、どっちになるかは僕にも分からないんだ。僕としてはロシア支部の無事を偽装したい以上、後者の方が都合がいいのだが。けど僕が暗に『フェンリルの連中が来そうでヤバイ』と口にするのと、墮し児達は一気に静まり返った。

「……………えっ。待って？それってもし、私達がアラガミになつてるってバレたら——」

『まあ皆殺しだろうね。どこの誰がやらかしたのか知らないが、バガラリーやら何やら夜遅くまで視聴してくれちゃって。生まれて初めての娯楽だし、前もって注意しなかった僕も悪かったけどさ。』

「ギクギクギクウツ!!」

そう小言を交えたところ、青ざめる墮し児達が多数。それもそのはず。僕は造書庫ライブラを交えた感応現象で墮し児達の思考や行動は全て把握してるし、彼らが自室で夜通しターミナルを触っていたのは知ってる。知った上でこんな話をしてるのだ。それが原因でフェンリルの連中が来るかもと通告すれば、心当たりがない墮し児の方が少ないのだ。実際はそんなメディア再生くらいで支部の無事がバレることは無いのだが。

自分達のせいどころが全滅しかけてるとなれば、墮し児達も幾分か協力的になるはず。そう思って僕は支部長室のターミナルからデータバースに接続し、アクセスの履歴を敢えて残した。要は十割僕のマッチポンプである。さすが第零接触禁忌種。やることが汚いね？でも彼らがターミナル触りまくってたのは事実だから。むしろそのやらかしを許容するよう微笑みかけると、何食わぬ顔でようやく本題に入った。

『なに、やってしまった事は仕方ない。犯人探しは別にしないよ。……………けど流石の僕もこのままフェンリルの連中が来ると困るから。君達の中から協力者を募ろうと思つて来たんだよ。』

「どっ……………どうにか出来るのか!?こんな身体になつただけどよ、ここでの暮らしは最高なんだ!!死にたくねえよ!!」

「俺達は何したらいい!?ていうか何できるやつが要るんだ!?何をすればフェンリルの連中を追い払える!?!」

「私は元々こここの清掃員だ!!出来ることがあるってんなら言っとくれ!!」

そう一気に詰め寄ろうとする堕し児達に対し、僕は唇に人差し指を当てることで制する。……嘘も方便とはよく言ったものだ。あの僕への殺意と憎悪に満ちた堕し児が、こうも僕に協力的になるなんて。流石に支部内での快適な暮らしに味を占めさせた以上、死なば諸共の精神で僕を殺したい堕し児は今ここに居ないらしい。せいぜいあとは諸悪の根源たる僕を排除すれば完璧ってくらいで。おかげで下地は整った。これでこの支部の安全が確保されるまでの間、一時的とはいえ堕し児達は僕に従ってくれるだろう。

そして一時的でも協力を取り付けられたのなら十分。デイーヴァと話してる時はどうなる事かと思っただが、案外どうにかなるものだな。これで本格的に僕も行動を起こせる。

「——そうだね。じゃあまず、この中に元オペレーターとか、支部の外に連絡を繋げる子はある?もしいたら手を挙げて欲しいんだけど。」

「いや、私達つい最近までここの外で暮らしてたし……そういうのできる人なんて………ねえ?」

「ん。ここにいるけど。」(チャンス到来だ。こんな早くにあいつに近寄るチャンスが来るなんて。)

そうして僕がまず尋ねた結果。この騒然とした状況に似つかわしくない、何処か気の抜けた女の声がかウンターの方から響いた。その声の方向に僕と堕し児達の視線が一斉に向くが、その声の主たる少女は意に介することもなくカウンターからこちらをじつと見つめていた。どうもさっきの堕し児達と僕のスマブラにも傍観を決め込んでいたらしい。

服装はオフショルタイプのおペレーターらしいそれなのだが、胸元ガン開きだしへそ出しに改造されてるしで露出度高くて派手な感じがする。髪は肩にかかるくらいのアッシュグレーで、耳とかへそには黒いピアスが開いてる。ネイルもバチバチに決めてるし、その風貌は所謂ギャルというやつだ。しかも肌白いしまつ毛長いしでめちやく

ちや顔がいい。

おまけにカウンターテーブルに腰掛けて足を組む彼女は、自己主張するように両手の人差し指で自分の顔を指す。口角釣り上げて緩く笑うその振る舞いは、絶対フェンリルが無事な頃はタツミさんみたいなのを量産してただろう。現にロビーに居た他の堕し児達もその娘が拳手すると歓声を上げた。

「おおっ……ジゼルちゃん!! そうか、ジゼルちゃんは前からフェンリルでオペレーターしてたって言ってたな!!」

「そうなんだ。説明ご苦労さま。」

なんて早速強火のオタクと化してる元民間人の堕し児を流しつつ、僕は彼女の方へと足を進めて向き合う。正直に言ってしまうと、彼女のことは僕も既に知っている。何しろ僕がここに来たのは、堕し児の誰かと言うよりは彼女に協力を結びつけるためなのだから。

彼女の名はジゼル・レイヴラント。元ロシア支部のオペレーターだ。歳は21。……なのだが、十代前半くらいからフェンリルに勤めているソーマみたいなタイプの娘でね。なんとディーヴァがまだ神機使いとしてロシア支部に所属していた頃からオペレーターをしている。当然ディーヴァとは顔見知りだし、当時はディーヴァとも仲が良かったらしい。ここ襲撃した時にもディーヴァがチラツと話とかしていたしね。僕に『絶滅させんの待つて』ってなったのもこの娘が原因みたいだし。

しかも彼女は元神機使いでもあり、昔は旧型のチャージスピア使ってたんだって。引退してからはオペレーターになったけど、そんな訳で現場の戦況なんかにもバリバリ詳しい超優秀オペ娘ちゃんだ。基本的に仕事のモチベが低くて怠け癖があるのが欠点ちゃ欠点だけど。現状の堕し児を見るに、こんな人材が運良く生き残って人間性を獲得したのは僕にとっても超がつく幸運と言える。

……なんでロシア支部に来たばっかの僕が初対面のこの娘のこと詳しいのかって? 造書庫は堕し児の記憶とか思考とか全部細かく記録しているからさ。そしてそれは彼女も例外では無い。その気になれば個人単位でどんな人間だったかは大体把握できるし、何なら経験

人数とか好みのタイプ、何児持ちかまで色々と分かる。よし、闇が深いからこの話はここでやめよう。

とにかくそんな感じの超敏腕オペレーターだから、外部に通信を繋ぐ上では絶対必要だと思ってる。それこそここに来る前、メンタル病んでたディーヴァの相手をする前から。何なら造書庫<sup>ライブラ</sup>を能力として生み出した直後くらいに存在を確認してから狙ってた。そしてこれからフェンリルと本格的に戦争していく上でも、墮し児の中でも特に彼女は必要になる。良い関係を築くのは難しいと思うが、ゆらゆらと赤い腕輪付きの右手を揺らすジゼルの元に僕は歩を進めた。けどそうするとジゼルは何故か、僕の顔をじいつと見つめてきた。

「……………ジゼル、だっけ。僕の顔見てどうかした？」

「んーん。…………いや、キミがああ第零接触禁忌種なのかーって。随分と人間みたいに喋るんだね。元はアラガミなのに。」(こいつがアレイスターやシーグリッドを殺したアラガミか。人の皮を被った化け物め。)

「まあね。それがどうかし——むぐっ。」

そう尋ねかけた途端。ジゼルは僕の身体をぎゅっつと抱き寄せ、僕の頭を自分の胸へと押し付けてきた。マジでなに!? いや、柔らかいしめちやくちやいい匂いするんだけどさ!? ちやんと身だしなみ整えた人間の女の匂いが!! しかもなんか後頭部撫で撫でされてめちやくちや甘やかされてるんだけど!! 腰の辺りに腕回されて、ぎゅーって身体押し付けられながら!!

人によつちやご褒美もご褒美だろうが、初対面でこうもグイグイ来られると流石に僕でもビビるんだわ。一体なに考えてんだと思ってる造書庫で彼女の思考を読んだが、そうすると思惑と行動が一致してなくて余計分からなくなつた。マジでなんなのこの娘???

ただ幸いというかなんというか。ディーヴァに夜通しぶち犯されたり、サリーのおっぱい吸ったりで女の子には耐性できてたから?? 色々やってがつつり色仕掛けされても平静保ってるわけだけど。これ二つが昨晚同時に起こった事案ってのも大概イカれてるが、サリーと

デーヴァには感謝しなくては。でもジゼルは僕の反応が気に入らなかつたのか、僕が上目遣いで見つめると頬を僅かに膨らませた。「反応薄いなあ。超かわいいジゼルちゃんのおっぱいなんだから、もつと照れたり甘えたりしていいんだよ？それとも人間の女の子は守備範囲外?」（ああ憎い。憎い。私の恋人を奪ったことも、私に子どもを奪わせたことも。そしてそれを知るかと愛らしく微笑む姿も。その何もかもが憎くて仕方ない。）

「別にそういう訳でもないけど。ただ初対面でギョツてされたから驚いただけ。……柔らかいし幸せなのはそうだけだよ。」

「ならもつとちゃんと甘えてよ。ジゼルちゃん、ここの王様のキミに媚び売つとききたいだけだから。そんな怖がなくても平気だよ?」（でも今は我慢しないと。今の私じゃこいつには勝てない。私はまだこいつの事を何も知らないし、こいつを殺しうる能力も持ち合わせていない。こうして他の子の殺意を煽るくらいしか、今の私はこいつに抗えない。）

なんてへにやつと人懐っこく笑いながら僕をクエストカウンターに座らせ、僕の右手を握るとジゼルはその整った顔を近付けてくる。それこそこのまま舌入れてキスされちゃうんじゃないかってくらいに。しかもここロビーのカウンターなのに。

めつちや他の堕し児達に見られてるのにグイグイ迫られて、堕し児達の視線が痛いっていうか……特に男性陣が『ブチ殺すぞゴミックソ野郎』って顔に書いてあるんだけど。さつき協力的になりかけた堕し児達に一気に殺意が漲ったな。この娘いるから攻撃飛んでこないだけで、何人か肉體変質させて臨戦態勢入っているもの。

それもそのはず。何しろこの女、それが目当てで僕にハニトラ仕掛けてやがるから。僕に懐柔されかけてた堕し児達を再び殺る気にさせるために、自ら身体を張って焚き付けてるんだよね。ギャル娘ちゃんは大体頭弱いイメージが勝手にあったがとんでもない。ジゼル・レイヴラント。中々どうして面白い娘じゃないか。気に入った。これからの人類との戦争においてその狡猾さはいいい武器になるよ。

おかげで僕の堕し児の懐柔は振り出した。色々な仇つてのと同様

に大人気オペ娘ちゃんに♡？飛ばされてるって罪状まで擦り付けやがって。僕悪くないのに。新手的サークルクラッシュヤーかなにかか??

「で、ソロモン？キミはジゼルちゃんに何をして欲しいの？」（それにこいつが一体なにを考えているのか見極めなくては。データベースに自分の部下の情報を書くなんて。他の支部にここの無事をバラすものだと、何故分りながら書いた？こいつの目的は??）

「とりあえず他支部に連絡繋ぎたいんだけど、君にはその連絡役をお願いしたいなって。それだけで僕には十分媚び売れるから、手を離して貰えると助かるな。」

「はいはい。そんな恥ずかしがなくてもいいのに。」（そしてこいつの目論見を理解できれば、つけ入り殺す隙も伺える。そのためにも私はこのアラガミのことを知らなくてはいけない。知り尽くした上で、万全を期した上で抹殺する。キミの罪過は死ぬことでしか償えないと、その身を以て思い知らせてやる。）

乱暴に振り払っても波風立ちそうだから、僕はやんわりとジゼルに公開羞恥プレイやめてねってお願いした。これ以上墮し児達の憎しみの火に油を注ぎたくないから。けどジゼルはそんな僕の意図を知ってか否か、僕の右手を離してはくれたものの僕の頬に掌を当ててゆっくり撫でてきた。おかげで他の墮し児達が『どうする？処す？処す??』ってざわめき始めた。そういうところだぞ。

「…………でもそうだね。確かにここだとみんな見てるし、二階の通信室行こっか。ジゼルちゃんもキミと二人きりが良いし。」（とはいえこいつに取り入るのはどうしたものか。色仕掛けが効かないとなると、仕事で使えると思わせるしかないか。）

「発言の悪意がすごいなおい。他の支部に無事だから大丈夫って連絡するだけだからな??！」

「じゃあみんな、ジゼルちゃん帰ってくるまでいい子にしててね？ジゼルちゃんこの子と二階行ってくるから。」（幸い墮し児の中で頼れる相手が私しかいない以上、こいつは私を積極的に使おうとするはず。優秀だとアピールするチャンスはいくらでもある。）

その上で核弾頭級の起爆剤を墮し児達に投げつけた後、ジゼルは僕の手を引いてエレベーターへと向かった。ほんつと火種蒔くの手慣れてやがんなこの娘。炎属性のアラガミか何かか？これで僕が他の墮し児達になにか協力を要請したりってことは半ば不可能になったわけなんだけど。二人きりで他の場所に連れてくとかつまりそういうこと認定されるわけだから。おかげで次に墮し児達と顔を合わせれば再び敵だろう。何なら今日以上に殺意込めて襲いかかってくると思う。

……まあ、僕の方もそっちのが都合いいから構わないんだけどさ。実際僕もジゼルに協力を取り付けたかっただけで、現状ほかの墮し児達には用も無いから。むしろ戦闘経験の獲得とより強力な能力を内包した蝕<sup>アラガミ</sup>の考案に注力してもらいたい以上、彼らに『僕の打破』という明確な目標が在るのは決して悪くない。

ただエレベーターの中に入ると同時。墮し児の目がもう無いにも関わらず、ジゼルは僕に後ろから抱きつくくとエレベーターのボタンを押しした。そしてわざとらしく僕の後頭部に柔らかな胸を押し付け、僕に身体を密着させると音量を落として囁く。

「しかしキミは悪い子だよねー。アラガミなのにあんな悪知恵、一体どこで覚えたんだか。」

「悪知恵？僕なんかしたっけ。」

「フェンリルのデータベースへの書き込み。……やったのキミでしょ？キミはあの子達に言うことを聞かせるため、わざとこの支部を危険に晒した。ちがう？」（そもそもどこでターミナルの扱いなんて知ったんだ。腐ってもアラガミのはずなのに。人間の機械をもう理解してるのか？このアラガミは。）

半ば確信を得た口調でジゼルが尋ね、僕を抱きしめる力を強める。別にバレたところで困ることもないから肯定として笑いかけたけど。いや、ほんとギャル娘ちゃんが頭弱いってイメージは払拭しないとね。恐ろしいことにこの子、僕がやらかした事に最初の方から勘づいてたんだよね。逆に言うとその分を分かった上で、僕が墮し児達に協力を求めるのを黙って見てたわけなんだけど。



「いけないんだー。人間の間だとね、そういうの『マッチポンプ』って言うんだよ？バガラリーとか見たせいで支部の無事がバレたとか嘘ついて、ジゼルちゃん以外に神機使いだった子がいたらどうしたのさ。」（それにこいつ、なんで他の子の行動を把握してた？監視カメラ？それとも他に何か私達の行動を把握する能力でも持つてるのか。探りを入れたいけどいきなり聞くのは危険かな。）

「そしたらその時はその時だよ。……わざわざここで僕に尋ねたってことは、君は他の子にこの事を黙っついてくれる。そう考えていいのかな？」

「当たり前じゃん。ジゼルちゃんはキミと仲良くしたいんだから。キミが困るようなことはしないよ。」（いや、やっぱ今はこいつの信用を獲得するのが第一だ。下手なことは聞けないし、真意を悟られてはならない。なるべく友好的に振る舞わないと。それが最終的にこいつの抹殺に繋がる。）

墮し児達の面前で僕とイチヤついておいてよく言う。なんて恩着せがましく笑う彼女に返さなかったのは、彼女の言葉そのものに嘘は無かったからだ。その胸中に抱えた目論見はさておき、ジゼルが僕に味方してくれるのは本当。少なくとも僕が彼女の心を読めると気付かれない限りは、彼女は貴重な墮し児の協力者となってくれる。

そして同時にこの娘は面と向かって敵に回すにはあまりに厄介だから。たった一日と少しで墮し児達にあそこまで慕われた人望も、僕の企みを見抜き悟るその聡さも。僕が造書庫を用いてやっと出来ることを素の能力で出来る彼女は、野放しにすれば僕の人類絶滅計画を破綻させかねない。

何しろこの娘、僕への恨みや憎しみの強さで言えばロビーにいた子達の十倍くらいヤバいからね。正直話しててキツイもん。自分のこと憎くて憎くて仕方なくて、念入りに殺したいがために僕のことを少しでも知りたがってる。それが分かった上で、何も知らないかのように振る舞うのはすごい難しい。

けど僕が思考を読めると知ったら、それで僕の殺害が墮し児には実質不可能とバレたら。それこそジゼルは何をしでかすか分からない。

そうなれば僕がされて困ることは何でもすると思うし、それこそこの暮らしや他の墮し児を犠牲にしてもこの実状をフェンリルに告発しかねない。そういう意味でも彼女は現状、僕が抱える墮し児の中でも一番の爆弾だ。

だからこそ手元に置いて懐柔し、サリーやディーヴアのような本当の仲間に出ればそれが一番楽だ。そうすればジゼルを経由し、必要に応じて墮し児を動かすことも出来るようになる。僕の言葉なら耳にしただけでブチ切れても、ジゼルの言葉なら喜んで従うだろうからね。そういう意味で僕も彼女と仲良くしたいってのは本当だ。

幸いというかなんというか、ジゼルはジゼルで僕に表向きだけでも従順に仕えようと振舞っている。彼女としてはさっさと僕に信頼されたいわけだから。それに便乗するように僕が心を許せば、当面は良好な関係が築けるだろう。この娘に僕を殺す算段が着くまでは、だけど。

「だからソロモンも、ジゼルちゃんのこと信用して欲しいなあ。なにかとジゼルちゃん、キミの役には立てると思うよ?」（弱味握ってるのを黙ってあげたんだ。これで少しは信用してくれるはず。）

「そうか。じゃあお言葉に甘えていい? 正直フェンリルの機械って色々分らないもの多いから、君みたいな娘を頼れるなら助かるんだけど。」

「おっ。なんだなんだ。随分と素直じゃん? もしかしてジゼルちゃん優しいって気付いちやった?? 他の子はみんな怒ってて怖いもんねー。よしよし。ギューってしてあげようね。人間は仲いい子とはこうするんだよー。」（嘘でしょめっちゃ懐いてくれた。え、もしかして色仕掛け効かないってだけでチョロい?? 役に立つって分かったらめっちゃ頼る感じ? なんか上手く行き過ぎてる気もするけど。）

なんて言いながらジゼルは僕の反応に気を良くし、僕の前に回り込むと向かい合う形で抱きしめてくる。まるで胸中に秘めた業火のように燃え盛る憎悪を悟らせまいとするように、ニコニコと人好きする笑みを浮かべながら。柔らかな胸に僕の顔を埋め、ジゼルは僕に嬉しそうに♡? をたくさん飛ばしてくる。ロビーの墮し児達にもこんな

感じで接してたんだろうなって想像がつくようだ。

けどこれでいい。上っ面だけだろうが当面はこれでいい。ジゼルは僕を殺す隙を探りたくて、僕はジゼルの能力を必要としている。ならばジゼルの貢献に応じて僕は彼女に望む情報を与え、その過程で他の堕し児達より数歩分こちらに踏み入らせる。それで心変わりして仲間になればそれでよし、殺意が抜けきらずに僕に牙を剥くならそれもよしだ。僕の手元に置いて行動をコントロールできるなら、堕し児を人類との戦争に投入するまでは良しとする。

幸い堕し児達を人類に差し向ける手筈は整っている。その時が来ればジゼルは、他の子同様にフェンリルに牙を剥かざるを得ない。僕に大切な存在を奪われたという憎悪。その深い愛情に由来する殺意が根底にある限り、それは聡明な君とて例外ではない。その時までせいぜい強かに足掻くといい。

## 23. 偽装（トロイ）

「で、ソロモン。他の支部になんて連絡するの？」

「ここはロシア支部通信室。当初の予定通り、僕はジゼルの手を借りることでフェンリル本部への連絡を繋いでいた。と言つても秘匿回線でのチャットなんだけどね。その機材の操作方法が分からないつてことでジゼルの手を借りただけで、案の定というかジゼルはこうした機器の扱いにも精通してた。」

おかげでこれで、フェンリル支部間で『ロシア支部が第零接触禁忌種ソロモンに落とされた』つて情報は撤回できる。そうすればいよいよ、フェンリル全支部への同時攻撃作戦が現実味を帯びてくる。

「んつとね。ジゼル、今から僕が言う通りに打ち込んで。」

「おけおけ。……よし、どうぞ。」

『「こちらロシア支部。本日第零接触禁忌種ソロモンの撃退に成功。しかし被害甚大。至急救援を求む。」……こう打つて。なるべく切羽詰まった感じで。」

「は?????」（なに考えてんだこいつ。）

そう頼んだところ、ジゼルから取り繕う気ゼロの困惑した返事が返ってきた。初めてこの娘の本音を聞いた気がするよ。けど無理もない。さつきロビーでした話だと、フェンリルの連中が来ないようにするために通信を飛ばすつて話だった。これでは言ってることが真逆だ。この内容ではまず間違いなく、フェンリルからこのロシア支部に人材が派遣されてしまう。その中には当然神機使いも含まれるだろう。

当然僕に取り入ろうと従順に振る舞うジゼルも、僕の言葉には反論を示した。しかし僕がこんなフェンリルの人間を招くような文書を飛ばすことにはちゃんと意味がある。

「いやいや、ソロモン？それだと他の支部から神機使い来ちゃうし……こうもつと、『ソロモン追い払ったからもう大丈夫』みたいな文章の方が良いと思うなー？ジゼルちゃん。」

「こんな丸一日以上も戦時中なのに音信不通だったんだ。『無傷でピ

ンピンしてます大丈夫』って方が違和感あるでしょ。この惨状を見て逃げた連中もいるんだし。」

「あー……それは確かにそうか。え、でも大丈夫？これだとマジで神機使いとか来ちゃうけど??」(待て待て。なんでこいつ、極東の奴らと支部長がここから逃げたのを知っている？あいつらとは顔見知りだったか？有り得るな……)

ロシア支部が焼き払われて壊滅する状況を目の当たりにした極東第一部隊がいる以上、『ここ無事だから来なくていいよ』って言い訳は通用しない。それならいっそ、『頑張つて撃退したけど壊滅しかけてるから助けて』って助けを求めた方がフェンリル側からしても納得できる。さつき撃退したつてことにすれば、返信が遅れた理由にもなるしね。ぶつちやけ僕の目的はこのロシア支部をフェンリル支部の一つとして再興させることで、そのために中にフェンリルの人間が来るのは別に問題ないんだ。

とはいえさつき『神機使いが来たら墮し児は皆殺し』って脅した手前、ジゼルが心配する気持ちもよく分かる。だから僕は心配そうにこちらを見つめるジゼルに対し、態とらしく悪く笑ってみせた。

「……確かに僕はさつき『神機使いが来たら皆殺しになる』って脅した。けどそれは、君達がアラガミだつてバレたら話だ。」

「えっ。……ああなるほどそういうこと。ほんつとキミは悪い子だね??言うこと聞かすために、わざとあの子達を脅したんだ??」(そしてこいつ、ターミナルに書き込んだのも最初からフェンリルの連中を喚ぶためか。ならこいつの真の目的は——)

「そういうこと。」

確かに僕は神機使いが来たら墮し児は皆殺しにされると脅した。しかしそれは、墮し児がアラガミだとバレたら話だ。人間性を獲得して人の姿形を取った墮し児は、普通の人間と見比べても外見上の相違点は一切と違っていいほど存在しない。それこそ『神骸種は人間に擬態できる』つて先入観が無い限り……いや、仮に先入観があったとしても気付けないほどに。

つまりフェンリルの連中がこのロシア支部にやって来たところで、

彼らの目の前で墮し児の能力を用いなければアラガミとバレるような事は無いのだ。他ならぬ数多の人間を喰い散らかしてきた僕だから断言できる。例え純度百パーセントの人間と墮し児を並べたところで、その二者を見分けることは僕でも不可能だ。

それこそ二つを見極める新技術でも無いと、フェンリルの人間は墮し児と人間を見分けられない。そしてそれどころか、フェンリルは墮し児という人間性を獲得したアラガミの存在すら知らないのだ。思いつこう筈すらない。

だからこそ僕は『来なくて大丈夫』という違和感しかない文章ではなく、『壊滅しかけてヤバいから助けて』と救援要請を飛ばさせた。それでフェンリルの人間がやって来たとして何も問題は無いんだ。けどそれは、同時にジゼル達墮し児にとってはある懸念が生まれることにもなる。

それが何かと言うと、フェンリルの人間が入来するせいで墮し児は僕を含めて能力を使えなくなる。それはつまり、実質僕への復讐が不可能になるということだ。何しろ僕と戦う機会が失われると言っているわけだから。支部内で能力使ったらアラガミだってバレるからね。

当然ジゼルはそう提案した僕に対し、頭の中でどう反論したものかと悩んでいる。アラガミだとバレないとはいえ、フェンリルの連中が支部内に来るのが墮し児に不都合なのは変わりないんだ。その一方で、僕の言う通りに救援要請を送る方がフェンリルに受け入れられやすいのも事実。そこはジゼルは頭がいいしちゃんと理解してる。そのせいで僕に反論できないし、友好的に振る舞うと公言した矢先「お前に復讐できねえじゃねえか汚えぞ」と内心を吐露することも出来ない。

にも関わらず苦々しい表情とか一切見せないのはほんと凄いなと思うよ。そんなに僕のこと殺したいか。ただニコニコと笑い、態どらしく「んー」と唸ること僕に内心を悟らせまいとしている。まあ実際は、僕としても墮し児達が僕と戦<sup>戦闘経験積めなく</sup>えなくなるのは困るからね？ ちゃんとその対処法は考えてあるわけなんだけど。

「そうだねえ……そっか。確かにそれなら、素直に助けを求めた方がいいのか。ほんつと……キミは頭が回るね。アラガミのくせに。」（こいつ、最初から私達が逆らえない状況を作ろうとしてたんだ。これで私達はこいつに手を出せない。）

「ただね。こう送る場合、送って直ぐにやる事があるんだよ。」

「えっ。今度はなに。」（侮っていた。こいつの知能は下手をすると人間のそれを上回る。能力だけでなく知能までもが、こいつは人間を超越してる。やっぱ正面きってやり合うのは無謀だ。）

なんてことは無い。今回のロシア侵攻戦、ここに駐留していた極東の第一部隊は戦況を見限って撤退した。この支部長や新型神機の研究データ、その他諸々の最低限の人類の財産だけ持って。そうせざるを得ないほど、フェンリル側からしてこのロシア支部での戦争は人類が劣勢だったんだ。

そんな中。殆どの神機使いが死んで民間人しか残っていないような戦場で、どうやって攻略法も定かでは無い新種のアラガミの群れを撃退したか？さつき救援要請を求める方が違和感ないと言ったばかりだが、そもそも今の状態だとあれから一日以上もロシア支部が生き残っていたって前提自体がおかしいんだよ。

もし外部に『どうにかソロモンを撃退した』と送る場合。そう納得できるだけの状況が必要だ。こんな神機使いほぼゼロで民間人だけ収容した施設が一日も無事だったというのは、どう考えても疑われる。

故に僕が考えた筋書きはこうだ。殆ど民間人しか生き残りのいなかった僕らは、その民間人を片っ端から神機使いに変えてアラガミの群れに突撃させた。そうする事で夥しい死人は出したものの、どうにかソロモンとその軍勢を消耗させて撃退できた、と。

当然この筋書きで行くにはそれなり以上の数の神機使いを用意しなくてはいけない。が、幸いここには既にアラガミ化した人間達が溢れ返っている。言うまでもなく墮し児達だ。ここまで言えばもうジゼルは理解しただろう。僕が言うやるべきこと。それは――

「ジゼル。君には上手いこと墮し児達を言いくるめて、彼らに神機を

握らせてもらいたい。」

「待つて待つて待つて。キミはアラガミだから知らないかもだけど、神機つて適合に失敗するとアラガミ化しちゃうんだよ??そんなのあの子達に無理強いなんて——いけるね??」(こいつ神機使いの作り方も知つてんのか?なんで??けどこれなら、まだ私達にも復讐の機会は残る。むしろ、やりやすくなる。)

「そう。行けるんだよ。」

これには思わずジゼルとハイタッチ。何しろ堕し児は既に頭頂部からつま先に至るまでアラガミだから。神機の施術に関してはノールスクに等しい。もし神機使い用の健康診断バイタルチェックとかされてアラガミ認定されても『なんか適合に失敗したけどアラガミ化したまま人の形を留まられた』つて言えば堕し児の存在自体は秘匿できる。幸いここには神兵計画つていうディーヴァが犠牲になつた前例もあるし。なんか因縁つけて来た時用にその計画書も偽造して、いざとなれば叩きつけてやればいい。

そして神機の施術そのものが堕し児はノールスクで行える以上。民間人を即席の神機使いに変えて特攻させたという筋書きも、信憑性を帯びさせる事ができる。何しろ神機の種類を問わずに施術をノールスクで行えるんだ。そうなれば握らせるものは決まっている。

「その上で、堕し児達に施術するのは唯の神機じゃない——新型神機を握らせる。この僕も含めてだ。」

「本気で言ってる?新型神機なんて、未だに適合した子は一人もいないだよ?確かにキミ達は適合失敗のデメリットは無視できるけど……」(それにこいつ、なんで新型神機の事なんて知ってる?どれだけ神機使いの内情に精通してるんだ。ただのアラガミのはずなのに。人の真似事したアラガミのはずなのに、どうして——)

「だからこそその性能は未知数だし、多少の暴論も押し通せる。数を揃えられれば尚更だ。どうせ神兵計画とかの研究資料は持ち出しても、新型神機まで持ち出す余裕はなかったはずだし。それを堕し児みんかんじんに握らせ、ソロモンにぶつけたら撃退できた。こういう筋書きで行く。いいね??」



ついでになにか疑われた時は墮し児自体を『新型神機に適合失敗するとうなります』ってガセネタ流しちまえ。人の形を留めたままアラガミ化したって前例は神兵デュー一号ヴァがいるし。あつちは最終的に身体が限界を迎えてバルファ・マータになっただけど、墮し児も適合失敗しても直ぐにはアラガミにならないって事にすれば。何かの節に生データを疑われても、それでゴリ押ししてしまえばいい。民間人に適合率皆無の神機を握らせて特攻させたとか倫理観ガン無視もいいところだけだね!!

けどそれやらせたのも元民間人の僕って事にすればいいし、そうしなきゃロシア支部は滅びてたって言えば何も言い返せないだろうから。それで完全にアラガミ化してダメになるまでは戦力として運用できるとなれば、フェンリルのお偉いさんも文句は無いだろう。

そしてこの方法で行くなら、実は墮し児達に関しても重大なメリットがある。それは神機使いという身分になったことで、フェンリルの連中が来た後にもここに正式に住み着くことが出来るのがまず一つ。と言ってもこっちは些細なものだろう。分からないけど。でも復興後にも二度と居住区に戻る必要が無くなるってのは墮し児達にはありがたい話かな?でももう一つの利点に比べりや些細なものだと思う。

何しろもう一つのメリット。それは神機使いである以上、僕も墮し児も否応なく出撃する機会が訪れるということだ。新型神機使いともなれば尚更だ。もしそうなれば、出撃先は異なれど僕と墮し児を一時的にロシア支部の外へと向かわせることが出来る。つまり僕を襲撃して抹殺する大チャンスである。ジゼルが僕のこの暴論に乗ってきたのもそのせいだ。

これでフェンリルの連中が来て、二度と墮し児の力が振るえなくなるといふ前提は覆った。僕はまず間違いなくロシア支部の外へと出撃することにはなるし、タイミングを合わせて墮し児の部隊を出撃させれば襲撃も容易となる。そこらの任務の用意と選別は、オペレーターのジゼルの専門だ。

その上で外に出て殺り合う以上、蝕鎧を纏うためのオラクル細胞も

満ちている。僕も神機使いの真似事をしなければいけな以上、墮し児達にもより本物の神機使いとの実戦に近い戦闘経験を積ませることが出来る。このロシア支部の無事を偽装できる上に、僕にも墮し児にも得しかない完璧な計画というわけだ。

それでももしロシア支部が完全に復興したら、今度は各支部にお礼として新型神機使い（墮し児）を戦力として派遣してやればいい。それで各支部の正確な位置と間取りを把握したら、いよいよ喜悪コクーンメイデンパンドールを用いて全ての支部を同時に地獄に叩き落とす。それで全ての人類の絶滅は完遂するって寸法よ。何ならその頃には墮し児達も百戦錬磨の神機使い殺しに成長してるはずだから。そうなれば僕の勝ちはほぼ約束されている。

「……………という訳でジゼル。さつき僕が言った通りに、救援要請を送って貰っていいかな？」

「もう送っちゃった。…………復興に手を貸せそうな手の空いてる支部を探すから三日後にもつかい連絡よこせて。」（とにかくこれでソロモンへの復讐の機会は確保できた。最も、こいつがその盲点に気づかないとは思えないが…………何を考えている？それにさつきこいつ、神兵計画って言った。）

「よしでかした。三日後…………三日後か。思ったより猶予があるな。」

こんな死にかけの支部からの救援要請だし、もっと早急に救援が来るものだと思っただが。でもよくよく考えれば、まだ襲撃に遭ってる最中なのに救援欲しさに嘘の状況報告をこっちが送る可能性もある。本当に無事にソロモンを撃退したなら三日くらいは生き残るはずってことか。ある種のここの無事の確認って思っただろね。

ここに住まう人間からすれば堪ったものではないが、幸いにも今の僕らにやることは多い。墮し児達に神機の適合試験を受けさせるのはそうとして、サリーを人の姿に封じて支部長室に匿ったり、外に駐留してる人間性未獲得の墮し児と神骸種を居住区から撤退させたり…………あとはなんだ？レーダーか。アラガミの反応を探知するレーダーも、設定を弄って僕らの反応を探知しないようにしなきゃいけない。神機使いとかは映らないんだし、個別に設定できるはずだから。

これもジゼルの手を借りる必要がありそうだな。

そしてその上で、実はこのロシア支部にはまだ人間が存在する。僕がここを襲撃した際にパンドールを爆破したのは一階。そして神機使いの殆どは外で戦闘していたため、その殆どは死んで墮し児の贄になった。けど戦闘で負傷して撤退した負傷兵や、その面倒を見る医療スタッフなんかは四階にいた。何なら今も医務室にいるし、下の騒動にも気付かずに療養してるはずだ。

こいつらは当時の惨状を目の当たりにした生き証人。状況を偽装したい僕にとっては邪魔になる。外の墮し児に人間性を獲得させるための餌にするなり、同じく墮し児に変えて口封じするなりして処理しとかなきゃならない。それも秘密裏に。ジゼルやディーヴァを始めとする墮し児にバレたらまた面倒だから。顔見知りも何人かいるかもしれないしね。特にジゼルは聡いから、悟られないようにしなくては。

.....

「.....やることが多いな。三日か。」

「まあ三日もあればなんとかなるっしょ。他の子を神機使いとして仕上げるのはジゼルちゃんやとくから。」(ダメだ。知りたいことばかりが増えていく。こいつに直に聞かなくては。でもどうやって?)

「手間かけて悪いね。僕が行くとまた乱闘になるから助かるよ。」

僕をぶち殺したいって下心があるとはいえ、本当にジゼルはよく僕に貢献してくれる。特に墮し児にあれこれ頼む仲介役として、今の僕にジゼルの存在は不可欠だ。まあその間に間違いなく墮し児達にも余計なことを吹き込むだろうって、そんな嫌な確信はある訳なんだけど。今の僕にとっては些細な問題だ。

けどジゼル自身、僕が彼女を頼らざるを得ないのは既に理解している。きっとそのせいだろうね。ジゼルはゆつくりと僕に足を進めると、僕の身体に正面から抱きついてきた。墮し児の目がないのにこうスキンシップの距離感が近いのは、半分くらいは彼女の癖みたいなものらしい。ジゼルは誰にでもこんな感じで接するみたいだから。悪

い女だよ。それで男だけじゃなくて女の子の墮し児まで落としてるんだから相当だよ。

実際こうされると頼まれ事とか拒否しにくくなるもの。分かってやってるのか密着すると、ジゼルは緩く笑ってみせた。

「ねえソロモン？代わりつっちゃ何だけどさ。ちよつとだけキミも、ジゼルちゃんに付き合ってくんない？」（一か八かだ。信用はある程度得られた。もしこれで、ソロモンが首を縦に振ってくれれば―――）

「いいよ。君だつてタダ働きは嫌だろうしね。僕にできることなら何なりと。」

「もう、そんな身構えなくても大丈夫だよ。ただちよつと息抜き兼ねてキミとお話したいなつて。なんか飲みながらさ。」（いよつっしやきた!!いきなりチャンス到来!!頑張った甲斐あつたなほんと!!前のクソ支部長よりよっぽど温情だわこのアラガミ!!）

……まあそれなら別に断る理由もない。実のところ僕も、よく働いてくれるジゼルにはここらで報酬を与えておくべきかとは思つていた。何しろ良質な仕事に高いモチベは必須だ。僕に貢献すればするだけ望むものが手に入ると思わせるのは、人間をベースとする以上墮し児には有効な手立てだ。それはジゼルも例外ではない。そしてこれからも彼女の手を借りる以上、そう示しておくのは早いに越したことは無いと。

さつきあは言ったものの、実際ジゼルは僕の弱点や隙を探ろうと機会を伺っている。そんなあからさまな話題には触れないまでも、二人で話す時間は欲しがってるんだ。その中で僕についての情報が得られれば、それがジゼルにとっての報酬になる。それくらいは僕も分かっているから、ジゼルの要求は二つ返事で了承しようとしたんだよ。

——ジゼルのその言葉の続きを聞くまでは。

「つっても下の階は他の子いて乱闘になっちゃうし?ジゼルちゃんの部屋でお話する感じになるだけどさ。」（ついでに後である子達に部屋連れてつたつて言つてやる。神機で滅多刺しにされちまえ。）

「ごめん。やっぱちよつと考えさせて。」

「それ最終的に拒否するやつじゃん。なんかジューズ奢ってあげるから行く？そんな時間に時間取らせないから。確かにジゼルちゃんの部屋ちよつと散らかってるけど。」（おつと、部屋行こつて意味は理解してんだなこのアラガミ。ほんと人間の文化に詳しいこと。）

そういう問題じゃないんだわ。今までも何回も普通に抱きしめられたり頭撫でられたりでヤバいなんては分かってたけどさ。さすがに距離感の詰め方バグり過ぎじゃないか??他の堕し児にもこんな感じなの??……こんな感じだったわ。しかも全員に「みんなには内緒だよ」つて言ってる。くつそタチ悪くて笑う。そりや堕し児達が揃いも揃ってあんな後方彼氏面するわけだ。

……まあいいか。それなら別に。堕し児も部屋に連れ込まれてんなら「あいつジゼルちゃんに部屋に連れ込まれたんだ許せねえ!!」つて暴動にもならな……いや、バレたら地獄になるな。確実に。そして間違いなくジゼル本人も堕し児を焚き付けるネタにする。何なら僕に手を出されたくらいは言うだろ。

そう思っただけど、よくよく考えたら二人きりで二階来た時点で堕し児にはそういう認識されてたわ。ならいいな。既に地獄が確定してるなら。

「………いいよ。今後はやる事多いし、僕も今後のスケジュールとか相談したいからね。」

「えー。ジゼルちゃん、仕事の話とか嫌なんだけどなー。どっちかって言うとキミの話とか聞かせてよ。」（寧ろそのためにあくせく働いたんだよこちとら。）

「僕の話……ね。あんまり面白い事は言えないと思うけど、それでいいかい?」

確認程度に尋ねると、ジゼルは満足気に笑みを浮かべて僕の手を引いた。何ともまあその立ち振る舞い全てが蠱惑的というか、あざとって言うか……性経験皆無のクソザコ童貞だったら数秒で陥落するだろうなって嫌な確信があった。ほんとサリーやディーヴァのおかげで多少は美人に耐性が出来ててよかったと思う。

……ていうか、堕し児の女の子に部屋に連れ込まれたなんて知った

らサリーやデーヴァがなんて言うやら。あつちはあつちでサリーの身体を人の姿に封じるために頑張ってるのに。そう考えるとすごい罪悪感っていうか……別になんかやましい事する訳でもないんだけどさ。どっちかって言うことやること腹の探り合いなんだけど。それでもめちやくちやヤキモチ妬くのが目に見えるようで申し訳なくなる。

「そういうえばソロモンってさ。今日見た時から左手なかったけど、どこやっちゃったの？上の階でなんかあった??」（こいつ腕生えたらさらに戦闘能力上がるんだよな。ほんと面倒臭い。）

「痴情の纏もつれてやつだよ。」

「意味分かって言ってる??」（こいつ女いんの!?アラガミなのに嘘でしょ!?!まさかあの娘じゃないよね??あの娘シヨタコンだっけ??）

ジゼルが信じられないものを見るような目で僕を見つめてくるが、嘘は言っていない。……ほんと。なんで僕の周りに集まる優秀な子は女の子ばかりなのか。なんて、贅沢な悩みだっことは分かっちゃいるんだけどね。

因みにジゼルはそう聞いた上で僕に♡?マークを飛ばすのはやめなかったし、自重するような事も無かった。ほんっと、僕を殺したってだけでよく演やるよ。僕のこと憎くて憎くて仕方ないだろうに。そのうちサリー辺りに消されるんじゃないかなこの娘。

## 24. 変調（ノイズ）

そうして僕は、ジゼルに招かれるがままに彼女の部屋を訪れた。正直な内心を言うならこの時点でヤバいなっては思ってた。なのに強めに拒否ってでも離れなかったのは、ジゼルに体良く報酬——僕と個人的な会話をできる時間を与えられるという、そんな思惑のせいだ。僕に貢献する有用性を思い知らせようとか小賢しいこと考えたのが運の尽きよ。

「どうしたのソロモン。……なんか緊張してる？」

「緊張するなって方が難しくない??……ジゼル、これは何のつもりかな。僕のこと聞きたいって話じゃなかったの。」

「そうだけど?……あつ。もしかしていやらしいこと期待しちゃってる??女の子みたいな顔して、ソロモンもちゃんと男の子なんだねえ。」  
そうニヨニヨと笑ってジゼルが僕の顔を覗き込んでくる。……ベッドに二人並んで座るのは、もうそういう雰囲気にはか思えないんだよ。しかもジゼルは僕の腰に手を回して、ぐいぐいと抱き寄せてくるし。どうしてこうなった??いや、ジゼルの部屋が思った以上にゴミ屋敷で座れる部分がここしか無かったからなんだけどさ。

僕は造書庫を介して墮し児の思考が読める。それはジゼルとて例外では無い。でもだからこそ油断した。というか、造書庫の思わぬ弱点が露呈した。確かに造書庫は墮し児の思考を読めるが、あくまで読めるのは思考と記憶だけ。わざわざ気に留めるまでもない当人にとっての些事は、僕には把握できないんだ。

そして男慣れしたジゼルにとって、男を自分のベッドに座らせる程度はわざわざ頭で考え意図してやるようなことでも無い。だから部屋に入るまで僕はこうなるって分からなかった。分かっていたらさっさと引き返すなり、繕う準備をしていたものを。

「ま。やらしい事したいって言うならジゼルちゃんは全然いいけどね??そっちのが色々聞くより、キミのことも分かると思うし。」

「性交で相手の性格を把握する能力か。大したものだが一応女の子な

んだから、自分の身体は大事にしなさい。」

「わあ紳士。じゃ、優しいキミにはこれをあげようね。」

なんてケラケラと笑いながら、ジゼルは僕になにかを渡してくる。……缶ジュース？ああ、なんか飲みながらって言ってたっけ。でも何気にこの世界に来て、僕が人間の飲食物を口にするのって初めてかもしれない。いや……マグノリア・コンパスにいた時はどうだったかな。もう覚えてないや。

何にしろ毒とかは入って無さそうだし、入ってたとしてもサリーの体質を併せ持つ僕に毒は効かない。ジゼルも僕の反応を見てるし、ありがたく頂こう――

「……っ。」

「お？なにになにどしたの。そんな驚いた顔して。」(えっ、なにその顔。)  
「……………めちやくちや美味しい。なにこれ。」

そう素の反応をしてしまうほどに、缶の中の飲料水は澄んで味わい深かった。分かってる。なんて事ない、自販機で安価で売られてる缶ジュースだ。フェンリルに勤める人間にとっては何でもない、日常的に口にするであろう文明の味。ただ僕にとっては、それがあまりに新鮮だった。

……………いや、新鮮つてのは違うか。僕は忘れていたんだ。長過ぎるアラガミとしての暮らしで、人の暮らしとその快適さを。食生活ひとつ取ってもそうだ。人間の食事がこうも口に合うとは……文明の荒廃と共に、食生活も荒廃したものだと思っていたのだが。このままだとアラガミとかサリーレベルじゃないと食べなくなる。そう確信するレベルで、人間の食事はヤバかった。

「あっはは。そんな美味しかった？……………キミがそんな顔するなんて思わなかったな。目キラツキラじゃん。」(……………そんな美味しかったんだ。かわいい……………ツ!?)

「正直僕も驚いてる。……………こんな美味しいもの飲んだの、きっと初めてだよ。」

「……………そっか。アラガミ  
キミでも味とか分かるんだね。車両とかも食ってるイメージだし、味覚なんてないと思ってたのに。」(ちがう。こいつは



私達の全てを滅茶苦茶にしたアラガミだ。こんな無邪気な顔したつて、それだけは間違いないんだ。騙されるな。」

そしてそんな初めて見るレベルで喜んでるらしい僕に、ジゼルがクスリと笑いながらそう漏らす。……ほんと、胸の内が顔に出ない娘だこと。そもそも嘘という概念を知らないサリーや素直なディーヴァが異例なだけで、普通はこんなもんなのか？いや、復讐誓った相手にここまで平静装えるのは早々居ないよね。ていうか居てたまるか。

つまりそれだけ僕に敵意を悟られまいとするジゼルは、僕が隙を見せるまでは友好的かつ役に立つわけで。僕がほぼ一気に缶の中身を飲み干すと、それを見たジゼルは僕に身体を寄せてきた。

「とはいえ……こんな味の薄いジュース一つでこんな喜ぶなんて。キミは健気なんだね。今度プリンのレーションとかあげよつか。キミ絶対好きそうだから。」(逆に活用するんだ。餌に毒盛るとか、なんか使い道はあるはず。)

「ありがたい話だけど遠慮しとくよ。……これ以上君達の食事に慣れると、前の食生活に戻れなくなりそうなのでね。」

「むしろそうなってくれた方が人類は安泰なんだけどな。……第零接触禁忌種が餌付けで大人しくなってくれるなら、多分フェンリル総出でキミにフルコース積むと思うよ。」(何にせよここまで人間の食事にこいつが反応を示すとは思わなかった。他にもこういう隙見せそうな生態はなにか無い？例えば――)

八岐大蛇ヤマタノオロチ日本神話に出てくる怪物。酒盛られて寝てる間にぶち殺されたジャパニーズ・キングギドラ。こいつをぶち殺したスサノオ共々その名を冠する接触禁忌種が現れることで、この時代に於いても人々(主に神機使い)をザワつかせることになる。の二の舞になる未来しか見えないから丁重にお断りしておくよ。……ていうかマジで、この味に慣れたらアラガミとか人とかまともに口に出来なくなる。ジゼルが思い描く『餌付け作戦』は想像の百倍くらい有効だからやめようね。正直下の墮し児に総出で襲われるより危機感覚えた。実行しようとしたら全力で阻止するからな。

などと、恐ろしいことに僕の弱点が早速一つ露呈した訳だが。まだ

まだジゼルの僕に対する攻撃は始まったばかりだった。と言うのもね？僕がもらったジュースを飲み終えてその缶を床に置いた途端。ジゼルは僕の首の横に掌を当てると、ぐいーっと僕の身体を横に倒してきた。

おかげで僕はジゼルの太ももの上に頭を置くことになるんだけどさ。そうするとジゼルは、僕の髪を長い指でさも愛しそうに……そう錯覚させるような手つきで撫でてきた。要は膝枕されてるってわけ。この娘と出会って一時間経ってないって何回言ったつけ。されるがままされてる僕も僕だけど。スラリとした体型だと思ってたけど、こうやって甘えるとめちやくちや太もも柔らかい……

「……………じゃなくて。ジゼル、これは何のつもり？」

「んーん。いや、実際キミって人間の女の子に興味とかあるのかなーって思ってる。人間の男の子はこうすると喜んでくれるんだけど。……どう？ジゼルちゃんのお膝枕。」（もしこいつが欲情とかしてくれるなら、殺りようは幾らかある。期待薄みたいだけど……………）

「すごい柔らかくて良いけどさ。……仮に僕が人間の女の子に興味ある、って言ったらどうするの。懐柔でもする？」

ライブラ  
造書庫でジゼルの思考は読めるから、随分と切り込んだことを聞いてしまうけども。僕がそう尋ねると、ジゼルは僕の頭を撫でる手を一瞬止めた。

そして僕を真っ赤な瞳で見下ろすと、僕でなくともわざとらしさを感じるほどにジゼルは悪戯っぽく笑う。頭のどこかで「これは男共は落ちるわ」と確信を得るほど、それはもう蠱惑的に。

「そうだなあ。……懐柔っていうか、キミが良いなら仲良くなりたかな。それでキミが嫌じゃないなら、そのうち恋人になったり。」（よしいいぞ思ってたより反応がいい。これなら可愛がった後にぶち殺せる。）

「……………悪趣味だな。僕に取り入ろうとでも？」

「えっへへ……………まあそんなとこ。キミがジゼルちゃんの恋人になったらさ、ジゼルちゃんのお願いも聞いてくれたりするかなーって。……………まあキミみたいな子がタイプってのもあるんだけど。」（あわよ

くばこのまま抱いて、隙を突いて殺してやる。」

などと嘘なのに熱の籠った視線を向け、ジゼルが僕のローブの裾の中に指を這わせる。そして僕の柔らかな太ももの肌を軽く撫で、誘惑するよう目を細める。

……恐ろしい事にね。これ仮に、僕がジゼルの誘惑に乗った場合。間違いなく僕はジゼルに、この場で抱かれることになる。まあその場合これまた間違いなく、してる最中にジゼルに殺されるけどね。

デーヴァに先に●されてて本当に良かった。童貞のままだったら罠と分かりながら死んでた可能性がある。……いや、僕にはサリイがいるしそれは無いか。それは無いにしても、本当に恐ろしい話だよ。

だから僕はジゼルの膝に乗せた頭を持ち上げると、背筋を伸ばしてベッドに座り直した。顔には出さないが、ほんとの誘惑は心臓に悪いからね。膝枕から離れたせいでジゼルは頬を膨らませてるが、やりわりと提案を断っておく。

「僕に大事にされたいなら、キミはこの調子で働いてくれるだけで十分だよ。……君は身体の安売りが少々過ぎるな。」

「女の子に興味ある、って言ったのはキミだろー。いいのかなー？ジゼルちゃんの彼氏になったら、さつきみたいに甘々させてあげるのに。物欲しそうな顔してたの知ってるんだからなー。」（ダメか。分かっちゃいたけどほんつとガード固いな。）

「生憎と恋人は間に合ってるのでね。魅力的な提案だけど、遠慮してくよ。……これでも僕は一途なんだ。」

でもそうして断ってる最中。僕はまたしても知ることになった。造書庫ライブラを運用する上での弱点……とか注意点。確かにこの能力は堕し児の思考と記憶を常に感応現象で記録し続け、スーパーコンピュータのように纏めて僕に全てを伝える。それこそ用いれば相手の心を読む程度は朝飯前で、おかげで今まで僕は堕し児相手に僕なりの最適解を積み重ねて事を意のままに運んできた。

けど――

「ソロモン。……もしかしてその恋人ってさ、フレイのこと？」

——そう、ジゼルが初めて素の反応を僕に返す。僕に身を寄せて尋ねるほどの食い付き様と、突如として出てきたある名前。それらは造書庫でジゼルの思考に先程まで存在せず、たった今の僕の答えで一瞬にして生まれた反応だ。

そして同時。ジゼルの脳内での興味が、一瞬で僕の生態からフレイ・アイアンハート——いや、僕に連なる【伴侶】と呼ばれる接触禁忌種の一角。フェンリルから霜の巨人の名を授かった、デイーヴアへと移る。

造書庫は確かに相手の心を読み、その心象や行動までをも把握できる。しかしそれを加味して僕が行動を起こした場合。それらの行動が相手の心象にどのような影響を与えるかまでは分からない。これが今ジゼルと話していて、思わぬ形で露呈した造書庫のもう一つの弱点。

やってしまったと思った時にはもう遅かった。ニコニコとした作り笑いは何処へやら、僕にデイーヴアの事を尋ねるジゼルは、初めて真剣な面立ちで僕を見つめていた。

「……………フレイ？誰だそれは。」

「身体とおっぱいバカでかくて、綺麗だけど筋肉すごい娘いたでしょ。

……あの子がキミの恋人なの？」

「ああ、デイーヴアの事か。……恋人、では無いかな。彼女は僕のことが好きで好きで仕方ないようだが……それがどうかした？」

別段意に介した様子も見せず、真面目な声色で僕に問い詰めるジセルに軽口で応答する。……が、言葉を吐いて直ぐに余計なことを言ったりとまたしても後悔した。デイーヴアの片想いを知った上でのこの言動。彼女の女心を弄んでいると言外に示せば、ジゼルの殺意を煽る材料になるかと思っただが。どうにもジゼルは違ったらしい。

何しろジゼルは何故デイーヴアがロシアを——仮にも彼女の故郷を滅ぼした相手に恋愛感情を向けるのか。一体僕が何をすれば、あの娘が僕をそんな好きになるのか。そう乙女じみた方向から思考

を働かせ、僕が言ってもいない余計なことを推測で正確に悟ったのだ。

「そっか。……………そうなんだね。あの子はキミが……………」(戻してくれ  
たんだ。あの子は、こいつに救われたんだ。なら……………)

そのせいで、半ば独り言じみた眩きをジゼルが漏らす。そしてそう口にするとはほぼ同時。ジゼルが内心で僕に抱く黒い感情の全てが、大きく揺らいで消えかけるのを僕は理解した。代わりに生まれたものは、僕に対する感謝と疑問。やってしまったと後悔した時には既に手遅れ。ジゼルは不意に僕の身体に寄りかかるよう身を詰めると――

「ソロモン。……………正直に答えて。」(それにさつき、この子は恋人って  
言った。これじゃ、まるで……………)

「ん。……………いいよ。」

「……………どうして、キミはあの子を人の姿に戻してくれたの?」(もし  
かして、この子もフレイと同じで……………境遇が同じだから、同情してく  
れたんじゃない?もしそうなら、この子は……………アラガミなんかじゃな  
くって……………)

——ジゼルは、僕の目を見つめながらそう尋ねた。……………本当に  
失言だった。今は僕をどうにか殺そうとあれこれ足掻いてくれた方  
が都合がいいって言うのに。

とはいえ下手に嘘を吐いても、こうも目を見つめられてはバレるし  
さ。かと言って目を逸らせば、それはそれで隠し事があると自白する  
ようなものだし。事実上、軌道修正は既に不可能となっていた。

……………まあいい。のらりくらりとはぐらかすだけならやりようはあ  
る。それこそ僕は造書庫を用いて心を読めるのだから。ジゼルが期  
待する答えとは裏腹に、僕はジゼルの問いにこう返す。

「なに?……………もしかして戻さない方がよかった?なら望み通り畜生の  
姿に戻してやってもいいけど。」

「なっ……………ちがう!!そうじゃないの!!ただ、私は戻してくれてあり  
がとうって——」(ちがう。ちがう。余計なこと言った。待つて。

お願い。」

「ありがとうって事は無いだろう。……あの娘は僕をここに招き入れた張本人だぞ？僕と並んで、さぞ墮し児みんには憎まれてるだろうに。」

そう、ジゼルの内心を知った上で僕は尋ねる。実際間違っではないない。憎いとまでは言わなくともジゼルはディーヴァに思うところはあるし、下の階の墮し児なんかは僕に並ぶくらいディーヴァの事を憎んでいる。それは事実だ。だからこそ僕はディーヴァを墮し児の面前に晒さないよう支部長室に匿っている。その上で四階より上への立ち入りを墮し児に禁じる事で、僕はディーヴァを墮し児達から隠して守った。

でもそんな事を知らないジゼルは、僕がディーヴァを獣の姿に戻すと提案すると激しく首を振って拒絶した。……ニコニコと笑顔を貼り付けるのが上手だなって思ってたけどさ。こんな顔するんだってくらい、必死に嘆願するように僕の肩を掴んでくるんだもの。ジゼルは自分の事なら随分と耐えられるが、他人が絡むと案外脆いらしいね。

おかげでジゼルの内心で、僕に対する警戒と敵意が再び再燃する。『僕はやろうと思えばディーヴァを始め、墮し児達を再びただの化け物アラガミに戻せる』。そう言外に示したせいだ。ただその上で、ジゼルはディーヴァを元に戻させないようにと必死に言葉を選んで吐き出す。

「私は……下の子達とは違うの。あの子のこと、まだ身体が小さかった頃から知ってるし……妹みたいに思ってるんだよ。あの子がどうかは分からないけど……」（お願い。あの子をまた化け物に戻さないで。やっとな元に戻れたんだから。）

「へえ。……それは今もそう思ってるんだ？」

「うん。……あの娘が人の姿でここに戻ってきた時はすごく嬉しかったし、今でも生きてくれて良かったって思ってる。少なくとも憎いだなんて……私は思えない。だから——」（やっぱりこいつがフレイを元に戻したのは気紛れだ。こいつは化け物で、人の心なんて分かりやしない。情に訴えようとしたのが間違いだった。私のせいで

フレイがまた化け物にされる。それだけはダメだ。またあの子が化け物にされる前に、こいつは殺さなきゃ。」

「——だから、あの娘から二度と人の姿と言葉を奪わないで」と。絶るように嘆願するジゼルの言葉は、嘘偽りない本物のそれだった。造書庫で見たから間違いない。そして必死にデীবアを庇うその様を見て確信したよ。『ああ、彼女はデীবアに会わせて大丈夫だ』って。

ここを地獄に変えた罪悪感を、デীবアは『大好きな僕に愛されるための必要な犠牲』と思いついで自身を守っている。そして『僕に愛されてる』と思いついで、今の彼女は僕の頼みならなんでもやってみよう。……それは今の僕には都合のいい状態だが、この先のことを考えるとあまりに不安定で危うい状態だ。だから僕以外にも、絶る相手が必要だとは思っていた。

そして造書庫で神機使いの時代の記録を辿ったことで、ジゼルには前もって印を付けてたが……僕の見立ては正しかったらしい。あれだけの地獄を齎されてなお、ジゼルの怨嗟は僕にこそ向けどデীবアには向かない。それどころか、他の墮し児が憎悪を向ける中でもデীবアの味方で居てくれる。語った言葉は少ないが、その点に関しては確実に信用出来る。

そういう相手であれば、デীবアの元に連れて行っても大丈夫だろう。寧ろ、今の彼女にとってはきつといい刺激になる。

「ならジゼル。……今度デীবアに今の言葉を聞かせてあげてよ。きつと喜ぶから。」

「……………えっ。」

「あの娘さ。今すっごい精神病んでて不安定なんだよ。自分のせいでロシアが落ちたって。」

だから僕はジゼルにそう持ちかけた。……きつとデীবアはジゼルと会わせるって言うのと拒否するだろうから。期を見てサプライズで招き入れることになるんだけどさ。一人でも墮し児に自分の味が居るって分かれば、あの娘も精神的に少しは余裕が出来るだろう。

ただ僕がそう頼むのは意外だったのか、ジゼルは反射的に身体を強ばらせた。それもそのはずだ。ディーヴァが匿われている支部長室は五階。普通の墮し児は立ち入りを禁止されており、本来許可なく立ち入れれば厳罰を与えると言い含めてある。

つまり。その支部長室に入ることが出来るというのは、僕の懐に入り込むに等しいということなんだ。その上で僕らの目論見や普通の墮し児では手に入らない情報まで手に入る。寧ろ僕の抹殺を目論むジゼルは、こうしたエリアに訪れる事を最初の目標にしていたほどだ。私室なら、僕も隙を晒すと思っっているみたいだからね。

そのために僕に貢献し、僕の信用を得ようとあれこれ小賢しい立ち回りを演じていたのが……思うよね。『流石に順調に行き過ぎて怖い』って。例えそれが、僕の身内のメンタルケアのためだとしても。ディーヴァの知り合いって好材料があるにしても、身構えるのは当然と言える。

「……………いいの？四階より上は、私達は入っちゃダメって言ってたのに。」(……やっぱり、こいつはフレイに情みたいのはあるの?)

「今のディーヴァには僕以外の刺激が必要だからね。……ま、僕に依存しきって素直に言うこと聞いてくれた方が都合はいいんだけど。それも可哀想だからね。君は特例だよ。」

「ふーん……………そっか。」(それとも、私のリアクションを見て誘ってるの？もしそうなら罠の可能性も全然あるけど……ダメだ。こいつの考えが分からない。)

どこか納得が行かない様子だが、それを悟らせないようにジゼルが僕から目を逸らす。……何年ぶりかの妹分に会う緊張が半分、僕の思惑が見えないが故の警戒心が半分。ってところか。僕が無警戒とか、どう考えてもジゼル視点だと罠に見えるものね。

だからさらにもう一つ。僕はジゼルの綺麗な顔にずっと顔を近づけると、人差し指を彼女の口に当てた。それがびっくりしたせいで、ジゼルは軽く身動きじぶしたけどさ。構わず僕は言葉を続ける。僕に散々色仕掛け敷いてたくせに、この程度で狼狽じぶえるんじゃない。



「——但し、だ。君の上階への入場は特例中の特例だ。故に幾つかの制約は設けさせてもらう。」

「!!……………うん、そうだよ。そうに決まってるよね?」

「悪く思わないでくれ。無条件に君を招き入れられるほど、まだ僕は君を信用できていないんだ。意外と臆病だね。」

などと微塵も思ってもないことを口にすれば、ジゼルは安心したように表情を緩めた。分かるよ。納得は全てに於いて優先する。特に僕らみたいな小賢しい人種は殊更ね。相手がこの位の警戒心は見せとかないと安心できないのはよく分かる。

故に僕は、ジゼルを上階に招く際に以下の制約を提示した。

- ・ 上階への入場・及び上階内での行動時は僕の同伴が必須。
- ・ 上階で見聞きした内容と、上階での行動の仔細の口外禁止。これには上階の状況の共有も含まれる。

- ・ 支部長室と支部長の私室、そして屋上ヘリポートでの一切の戦闘行為の禁止。

「……………と、君に課す縛りはこの三つだね。」

「まあなんていうか……………当然の処置だね?というかそれだけでいいの?もつとこう、ガツチガチに拘束した方が——」

「僕が傍にいるってだけで拘束力としては十分だろう。それに代わりと言っては何だけど。僕らの領域に君を招き入れるのは、他支部の間を招く準備を全て終えた後だ。その暇な時間に、君は僕の元に招き入れる。」

そして最後にそう提示してみせれば、ジゼルは吐きかけた言葉をぐっと飲み込んだ。同時に先程まで拍子抜けだと油断していた彼女が、内心で別な意味での警戒心を抱く。当然か。要は『用済みになったら連れて行ってあげる』って言ってるようなものだ。ジゼルも内心『自身の目的が僕にバレたか』ってめっちゃくちや動揺してるし。顔には一切出さない辺り流石だけど。

それでもジゼルは僕の提案を断ることは出来ない。何しろこれから行う仕事の数々は、ロシア支部の復興とその後の墮し児達の生活の

保証——及び、引き続き僕を抹殺する機会を得るために必須な仕事なのだから。それらを全て片付けてから感動の再会をしると言うのは至って真つ当な言葉だ。それを口にするのが、寄りにもよって敵対する支配者だからジゼルは警戒しているだけで。

それに、例え僕の招待が畏だったとしても。ジゼルがディーヴァに会いたいという思いは、紛れもない本物なのだ。彼女はディーヴァがただの少女だった当初から、神兵となって人の枠から外れるその過程。そして人としての声と姿を失う最期まで、オペレーターとしてあの娘を導き続けた。……いや、ジゼルの胸中の言葉を借りるのなら『導く事しか出来なかった』。この世で数少ない、不幸な彼女の味方なのだから。

「……………いいよ。そういう事ならさつきと仕事を済ませよっか。ジゼルちゃんも早くあの子に会いたいし。」

「やる気になってくれたようで何よりだよ。……次は、僕らに埃を被った神機を適合させるんだったか。」

「そうそう。今のままだと民間人だけで第零接触禁忌種を撃退したとか、訳分らない状況になっちゃうからね。」

だから僕の持ちかけたその話を、ジゼルは警戒しながらも二つ返事で了承する。……正直言ってフェンリルに飛ばした救援要請への返答が来るまであと三日、僕らがやるべきことはまだ多い。だがその中で最も優先すべき事。それは『あの劣勢からソロモンの軍勢を撃退した』という、奇跡にも近いご都合主義展開の偽装だ。

そのためには『民間人を神機使いにして特攻させた』という手法シナリオでつちあげ、その証明用に墮し児達を神機使いに変える。さらにフェンリルが開発を推し進めている新型神機を、彼らにどうにか適合させたとなれば……外部の人間は、ロシア支部のこの状況を疑うことは無くなる。

そしてそこまで出来れば、実はもう最低限フェンリルの他支部から人員を迎え入れる準備は完了する。他にも墮し児に神機の使い方を叩き込んだり、神機使いの主要設備の運用方法を教えたりとやる事は多いけど。そっちは最悪、アラガミの能力同様に造書庫で知識を直に

植え付けてやればいいから。

ただ僕の望み通りというか何と云うか、僕と墮し児は顔を合わすとスマブラになるからさ。僕の言うことなんて墮し児はまず聞かないし、あくまで全てはジゼルの提案という体で進める。そうなれば、当然ジゼルに押し付ける仕事の量は常軌を逸したものとなる。墮し児だからいいものの、それこそ普通の人間であれば過労死するほどに。そう既に察しているからか、ジゼルは先ずは僕の周りの仕事を纏めて片付けることにしたらしい。何しろ僕は僕で、本来なら好き好んで墮し児達の前に訪れる理由がない。少なくとも墮し児達はそう思っているから。それに僕がやっておく事は、ジゼルの視点だと神機の適合以外ないからね。

「…………じゃあほら。先ずは先に、言い出しつぺのキミから神機使いになる？ 下の子達には説明したり何だりで時間かかるし、人数も多いから。ほら、早く早く。」(こいつも前の支部長と一緒に人使い荒いな。仕方ないとはいえ。)

「そうだね。…………それにあの腕輪を付ける機械、操作方法は君も分からないだろうし。他の墮し児で事故が起きる前に、僕で試しておいた方が安全か。」

「あつはは。それは確かに。でもきつとどっかに説明書とかあるし、キミをスケープゴートにする必要は…………ん？………………………あれ。」(……………待つて。今こいつ、なんて言った?)

体良く事故死させられるのならそれはそれで。なんて、内心ガチでジゼルは目論んでいた。けど僕が急かすジゼルに応答した瞬間、どういうわけかジゼルは不意に動きを止めた。

…………怪訝に思つて造書庫を用い、それで僕も気付いたよ。あまりに一瞬ではあるが、またしても僕は失言を漏らしたのだと。その証拠にジゼルはピタリと石になったかのように動きを止め、自身の思考と僕の言葉を脳内で何度も反芻している。

やめようね。余計なことに気付くのやめようね。余計なこと考えるのやめようね。君のような勘のいい女は好きだけどさ。マジでそれには気付くなど、思わず感応現象を飛ばしそうになった。

「どうしたジゼル。……何を固まっている？」

「……………んーん。」（なんで、アラガミのこいつが適合試験に使う機械を知っている？あれを知っているのは、神機使いとフェンリルの人間だけのはず。フェンリルの……人間……）

半ば彼女の思考を遮断させるように、彼女の隣を横切つて前に躍り出る。そして手を差し出すと、ジゼルはやや戸惑ったように僕の手を取った。

けど、そうするとジゼルは僕の手を握つて一言。

「……………小さな手。」（……まさか。この小さい男の子の姿が、本当の姿なの？人間の真似事をしたとかじゃなくて、こんな小さい男の子がアラガミになって……それで……）

本人も気付いてか否か、ポツリとそう漏らした。

当然僕は聞かなかつたことにした。……ただでさえ凶らずして、僕はジゼルに示してしまったんだ。『ロシア支部を滅亡させた人類種の天敵』と『人として生きること許されなかつた少女の救世主』。そんなかの第零接触禁忌種が併せ持つ二面性を、ジゼルは既に知つてしまっている。

その上で今、ジゼルの頭に過ぎつたのは……僕自身もとつくに忘れていた僕の本質。ともすれば彼女ら堕し児の中での僕の認識が覆りかねない、そう確信するほどの僕の秘密だ。少なくともそうと知つてしまえば、ジゼルは僕を殺せなくなる。それどころか、僕に本当の慈愛を向けることすら有り得るのだ。

それを迷惑だなんて言うつもりは無い。ただ……今はまだその時期では無いのだ。確かに彼女を筆頭に堕し児達は、いずれ僕のためにとその力の全てを捧げる。だがそれは最低限、彼らが人間態の僕を——  
——神機使いを相手取れる程度の戦闘力を獲得してからでないと  
いけない。

そしてそれまで、僕はあくまで堕し児達にとって『討つべき仇』で無ければならないんだ。他の感情を抱くな、とまでは言わない。けどその根幹が揺らぐ事だけは、絶対に認められない。それを許して堕し

兇が戦力として使えなくなれば、僕の計画は根本から瓦解する。

全く……墮し兇全ての思考も記憶も自在に読めるというのに。心変わりというものだけは、造書庫をどう用いても予測の仕様がなない。その上僕は人の心の機微に疎く、そのせいで何度ミスを犯した事か。とはいえやってしまったものは仕方ない。僕は握ったジゼルの手を引いて、その意識を現実に戻すように呼び掛けた。

「ほら、早く行くぞジゼル。僕はこの支部の構造を知らないんだから。案内してくれ。」

「……………ああ、うん。そっか。そうだよ。ごめんね？ ぼーっとしちゃって。」（いや、そんな訳ない。余計なことは考えるな。この子はアラガミだ。私の仇の化け物だ。）

そうすれば幸いにも、ジゼルは直ぐに自ら思い描いた可能性を頭から消してくれた。……というより、過ぎった『最悪』を考えないように蓋をしてくれた。ただそのせいかな。僕の姿は頑なに視界に入れようとしなかったし、僕にしばらく何かを話しかけたり聞くような事もなかった。

## 25. 原点（ゼロ）

「…………ほらソロモン。着いたよ。」

ジゼルの部屋を出た後、僕は彼女に手を引かれる形で無機質なガラス張りの部屋へと導かれた。その中央には見覚えのある物々しい機械がポツリと置かれており、中には既に巨大な武装が設置されている。

神機技術研究所。広大なロシア支部でそう呼ばれる別棟に、神機の適合試験を行う設備は存在した。この区画には普通の神機使いは最初に神機の適合試験を行う時以外、大半は二度と訪れる事は無いという。

しかし中に並ぶデスク上や引き出しなどは開け放たれ、無造作に散らかっていた。このロシア支部を襲撃した際、こここの技術者達が慌てて資料を持ち出したのだろう。現に残っている資料には、これと言った有意義な情報は残っていなかった。

ただその過程で、僕は中央の神機の適合試験の施術台の操作マニュアルを発見した。幸い機械自体の操作はそう難しいものではなく、神機と対応する腕輪をセットすれば後はボタン一つで施術を行えるらしい。

そして傍にあった案内図を見る限り、肝心の神機と対応した腕輪は……………専用の保管庫にセットで保存されているとの事だ。適合者が見つからない神機は総じてそこで埃を被る事となり、新型神機もそこにあるはずなのだが。

……………どういう訳か、先に保管庫に神機を探しに行ったジゼルが戻ってこない。どうかしたのだろうか。

「……………見に行くか。」

説明書を始めたとした資料や案内図にも目を通し終えた僕は、ゆったりとした足取りで保管庫へと向かいかける。が、その時だった。突如として、ジゼルが血相を変えて僕の方へと走ってきた。

「ジゼル？どうした、そんな慌てて——」

「やっぱいソロモン。ここ、何故か新型神機が置いてなくて……」  
「は。」

思わず素の反応が出てしまう。が、先ほど見つけた説明書をジゼルに渡して入れ替わりで保管庫へ向かえば確かにそこには無数の神機が吊り下げられる形で保管されていた。

それらは柄の部分には対応した腕輪が引つ掛けられており、取り外せば直ぐに適合試験を行えるようになっていた。しかしジゼルの言った通り、そこに新型神機の姿は影も形も無かった。

……いや。全く無い、と言う訳では無いのだけど。見落としのないうちに一つ一つ神機に目を通すも、それらしいシルエットは一つを除いて全く見つからない。

「……ジゼル。念のため確認するが……新型神機の開発と生産は、既に完了してるんだよね？」

「うん。どっちかって言うとうと適合できる人間が見つからないって偏食因子の改良に手こずってて。神機そのものは結構前に出来てたはずなんだけど……おつかしいなー。」

「ふむ……」

遅れて保管庫に戻ってきたジゼルの記憶では、確かに新型の神機はここにあったという。であれば、考えられる可能性は一つだけ。

「……さては、極東への離脱時に持ち出されたか。」

「あつ。」

「もしそうであれば、今頃新型神機は極東支部だろう。適合者の問題であれば、そう直ぐに実戦配備はされないだろうが……」

支部が壊滅するかって瀬戸際だ。有用な遺産は当然持ち出そうとするだろうし、今の人類にとっての最たる財産は神機に連なる「技術」だ。外で無惨に僕の軍勢に喰い散らかされる神機使いや、僕の細胞で変異していく民間人を差し置いても回収する価値は十分にある。と  
いうか、真つ先に回収しなければならぬはず。

少し考えれば分かることなのに失念していたな。新型神機が既に回収されているとは。そりゃ回収するだろうに。彼らがみすみす崩れ行くロシアに置き去りにするなど、何故楽観視出来たのか。

「……………やられたな。これで彼ら堕し児に新型神機を適合させ、ソロモンの侵攻を凌いだという言い訳は出来なくなった訳か。」

「どうしよ……………てかあのクソジジイ共、連絡つかないと思っただらこんなものの回収に奔走してやがったか。すっごい納得しちゃったわ。クソが。」

「旧型の神機使いと新型の神機、何方どちらに将来的な価値が有るかという事だろう。」

捨て石にされた神機使いや置き去りにされた民間人は堪ったものじゃないだろうがね。少なくとも僕の予測が正しければ、この指示を出した人間は後者を取る。より多くの未来のために、少数を犠牲に出来るあの男なら。

……………全く以て、忌々しいことこの上ない。極東の連中は、神機使いから支部長に至るまで尽く僕の目論見を挫くのが上手過ぎる。まるである種の因縁を感じるほどだよ。彼らを滅ぼさないことには、人類の絶滅は儘ならないと……………そんな気さえしてくる。

だがしかし。あの非常時間で時間は無かったようだな。或いは不要と判断したか。不幸中の幸い、さつきも言った通りに保管庫には新型神機が残っていた。たった一振り、ジゼルも知らない形状の神機が。

おかげでまだやりようはある。僕はそう確信し、たった一つの新型神機を手にとった。そして施術台のある下の階に足を進めつつ、ジゼルに今後の予定と指示を飛ばす。

「ジゼル。予定変更だ。堕し児達には後でここから好きな神機を選ばせ、適合試験を執り行ってくれ。」

「……………ソロモンは？まさかそれを適合させる気？」  
「他に方法もあるまい。」

しかし僕の言葉に、ジゼルは言外に難色を示す。それもそのはず。この新型神機——と言うより、この刀身パーツが戦場で振るわれていた所を僕は一度だって見たことは無い。

つまり。こいつは実戦配備前の試作型だ。

折り畳まれた異形の刀身は大きく湾曲しており、柄の長さはハンマーやスピアのそれと同じ。傍から見れば、使い方すら分からない新



型だ。そして使われたことがないということは一——

「ダメだよ。他の神機なら私がい方を教えてあげられるけど、それは私も初めて見たし。性能だって、どの程度使えるか——」

「そう。だからいい。」

「へ？」

僕が手にした神機は、まだ人類の誰もがその使われる所を見たことがない。つまりその性能が知られていない、未知数の存在だ。

故に。アラガミの僕がこの神機で法外な力を振るったところで、そういうものだとその価値を決めることが出来る。新型神機に加え、運用データの無い試作パーツ……これらが生み出す未知の力は、まだフェンリルにすら知見が無い。

そして僕が示した力が絶大であればあるほど。あの人類にとって絶望的な状況を巻き返したという、奇跡にも近い状況の偽装に説得力を与えられる。

……ああ、皆まで言うな。我ながら僕も詭弁だとは思うよ。けど、現状をポジティブに捉えるならこれが一番いい。それだけ『この神機と僕が高性能だった』って事にすればいいんだから。

「えー……ほんとにそれでいいの??使い方も知らなければ、そもそもちゃんと動くかどうかとも分からないのに。」

「そこばかりは賭けだが……もし駄目だったら、その時は他の手を考えればいい。それに使い方は僕が知ってる。問題ない。」

「……………知ってる?なんで??」

なんでだろうね。くつそまた口滑らせた馬鹿野郎め。ジゼルもジゼルで揚げ足取るのが上手いこと。ほんと僕の一言一句に至るまで警戒してんだな。

そのせいで今の戯言をジゼルは戯言で片付ける気は無さそうだから。僕は神機の近くにあつた適当な紙を拾い上げると、それを遠目にジゼルにヒラつかせた。

「何故も何も……マニュアルには既に目を通した故ね。ま、何処までマニュアル通りに動くかは賭けだが……………」

「あつ、ちよつと!?!」(絶対それ神機のマニュアルじゃなくて研究書類

とかだよね???)

「とにかく駄目そうだったら代案はその時考えればいい。ジゼル、始めてくれ。」

何でもない紙切れをジゼルに渡すことなく懐に仕舞い、反論を許すことなく施術台の前へと向かう。言葉を吐く際に目も合わさなかったし、ジゼルには嘘だとバレてるが……僕の有無を言わさない態度に折れたのか。ダメ元で了承はしてくれたようだ。僕が施術台の台座に新型神機を配置し、腕輪を上下に分割して施術台の蓋に嵌めるとスピーカーから彼女の声が流れた。

『じゃあ……キミの言う通りに本当にやっちゃうよ?! いいんだね!』

『ああ。……腕の置き方はこんな風でいいのかな?』

『うわ、頭の中に声があった。……それどうやってるの? すっごいキモいんだけど。あ、腕は多分そんな感じでいいよ。』

ガラス越しだから感応現象で応答すると、ジゼルがマイク越しにそう漏らす。見れば頭を押さえて嫌そうな顔をしていた。最初はみんなこの感応現象を応用したテレパシー嫌がるよね。便利なのに。

とはいえ感応現象越しに僕の姿勢が問題ないことを確認すると、ジゼルはやや大袈裟に右手を振り上げ人差し指を伸ばす。

そして――

『じゃ、もうさっさと始めちゃうけどさ!! ちょっと――いや、だいぶチクツとするから!! 我慢してね!!』

――勢いよく右手を振り下ろすと、施術台のスイッチを押した。

その直後。勢いよく施術台の蓋が閉まると、手首にゴリゴリとドリルのようなものが食い込むエグい音が響く。そして遅れてグチュグチュと。食い込んだドリル状の管から、骨の中に異物が流し込まれる音がする。これが人間であれば、この施術は想像を絶する苦痛となっただろう。

しかし僕はアラガミだ。そうやって二度と外れる事がない腕輪が装着される様も、再生を前提としたオラクル細胞の身体にはささくれ以下の外傷にしかならない。体内に注入される偏食因子もそう。人間なら適合しないとアラガミ化を引き起こす異物も、既に全身がアラガミの僕には何の効果もない。

強いて言うなら。既に僕の全身を形成するオラクル細胞が、今体内に打ち込まれた偏食因子の性質を新たに学習するだけだ。そしてその偏食因子の性質すら、僕は今まで喰らった神機使いから十分なほどに摂取し学習を終えている。

……………少なくとも僕はそう考えていた。

だが。

「……………~~~~~ツ?!?>うっ……………!?!?」

まず最初に、割れるような頭痛が走った。そして次に、周りの音が聞こえなくなるほどの耳鳴りが襲いかかる。思わず左手で頭を押さえようとしたが、サリ〜に与えたせいで左手は依然手首から先が無かった。

いや、そんな事はどうでもいい。なんだこれは。既にアラガミ化を引き起こしたこの身に、一神機の偏食因子が今さら毒になるとも言うのか?……………それとも、新型神機の偏食因子と旧型神機の偏食因子は異なるとも言えるのか。

故に初めて身体に入ったこの異物に……………或いは異なる種類の偏食因子が二つ同居したことで、拒絶反応を引き起こした。……………そう考えるべきか?

……………まさかな。それは無い。何しろ僕は、既に新型神機の偏食因子を体内に宿している。一番最初に僕の身体に投与されたオラクル細胞……………僕の身体を爪先から毛髪の一つに至るまでを穢し、アラガミ化を引き起こした全ての始まり。あの時僕が手にしたのは、確かに新

型神機だったはず。

(……………ああ、そういう事か。)

脳を揺らす頭痛を思考を循環させることで紛らわそうとする内、僕はある可能性に気付く。そして苦痛に耐えようと瞑っていた目を細く開けば……施術台の隙間から、赤黒いオラクル細胞が稲妻のような形状と化して走っていた。

やはりだ。僕はこの閃光を知っている。これは僕の身体に元より存在する偏食因子の力……後の未来で人類に【血の力】と名付けられた、ブラッドのそれだ。この頭痛は、役目を終えて眠りについていた過去の偏食因子が目を覚ましたんだ。

僕を神機使いを通り越してアラガミに変え、僕が自分の神機を持たないが故に眠りについていた。それが新たに新型神機を用いるための偏食因子を打ち込まれ、自らの神機を得たことで目を覚ましたんだ。

ある意味この段階で感応現象を自在に制御していたのが、既にその証拠だったのだろう。何故今の今まで忘れていたのか。僕は確かに神機使いで——本来なら、最初のブラッドとなるはずだった。そして今、僕は人ならざる身でありながらブラッドに……否、アラガミとして名乗るのなら【感応種】文字通り感応現象の応用で偏食場パルスを支配するアラガミ。具体的に言うとなら神機を誤作動させて使用不能にしたり、周囲のアラガミに影響を与えたり出来るやべー奴ら。本来なら出現するのはまだ先の未来のはずだが……?として覚醒しつつある。

そう思わぬ形で、僕は自身に秘められた力を思い出す。しかしそれとほぼ同時。未だ音を捉えられない耳鳴りの中で、僕はある声を聞いた。

『……………と。ーやーと、繋がりました。』

それは僕の中から消えて久しい、最早懐かしくも思える声。僕自身も図らずして得た同居人にして、僕に神機の力を齎した外因。僕の宿敵の得物が、僕の中で自我を開花させた存在だ。

あまりに静かなので存在そのものを忘れかけていたが……ずっと

僕が捕喰を重ねて数多の情報を獲得する中で、それらに埋もれていたらしい。どこか懐かしさと、僅かな怒りを帯びた声でそれは語り掛ける。

『……………久しぶりですね。ずつつつと、貴方に呼び掛けていたんですよ?』

「レンか。……………とつくに消えたかと思ってたが、しぶといな。」

『勝手に消さないでください。全く……………あの怖い彼女さんが体内から居なくなっただけと思いきや、大量に情報を取り込んで僕のこと埋めるんですから。僕が居ないと神機絡みの能力は使えないんですからね?』

どこか膨れたような声でレンがそう呟く。……………が、その言葉に自然と視線が施術台に再び向く。そうすればそこには、既に蓋が空いて手首に装着された赤い腕輪があった。

さらに握りしめた異形の神機は、未だにバチバチと血の力に由来するエネルギーを発している。それを試しに持ち上げてみると、折り畳まれていた刀身がガシャコンと音を立てて展開した。

その形状は大鎌のそれによく似ているが、偏食因子の共鳴の際に僕の細胞が逆流したのだろう。黒と赤の異形の色彩と化した刀身は、通常の神機とは一線を画す禍々しさを放っている。

何なら神機の根元にある本来なら橙色のコアも、真紅に変色して鈍い輝きを称えていた。ていうか、これ……………

『……………ところでソロモン。その神機、見るからにあなたのオラクル細胞で汚染されてますけど。』

「やはりか。妙な話だが、神機の刃の先まで僕の感覚が通ってる。……………まるで身体の一部のような感覚だよ。見たまえ、手元を離れても動かせる。」

『早速やらかしましたね。どう言い訳するつもりですか???こんな神機使い、多分誰も見たことありませんよ。』

そりやお前……………「新型神機使いは適合に失敗するとうなる」とでも言っておけば。或いは「適合には失敗したけど奇跡的に人間の形は留めた。なんか細胞が逆流して神機は汚染されたけど」とか、言いようは幾らかある。

特に後者に関しちやどつかで聞いた話だし。最悪『神兵計画』の書類をゴミ箱から掘り出してゴリ押せば、無理やり黙らせることが出来るだろうよ。

.....。

.....しかしねえ。僕が神機使いか。この僕が.....第零接触禁忌種にまで至った僕が、今さら神機使いとは。

いざなってみると、中々どうして笑える話じゃないか。しかも人類にとつての希望の星、新型神機使いだよ。人類最大の天敵たるこの僕が。

.....。

「.....はあ。」

『どうしたんですか。珍しくため息なんて吐いて。』

「なに。.....我ながら遅かったなって。」

クルリと手の中で大鎌を回し、逆手持ちにして構える。片手でヒュンヒュンと振り回してみれば、それは扱いにくそうな形状に反してよく手に馴染む。

それだけ、僕にとつては神機使いとしての才覚もあつたということだろう。.....そのせいか、余計に手遅れ並みに色々と想像してしまうものだ。今の今になって、やっと神機使いの真似事だなんて。

.....もし僕が普通に神機使いになっていたら、極東の第一部隊の連中と肩を並べて戦ったりとかさ。人類の中でも有数の神機使いになつてチャホヤされたりとか、不味いレーション食つてつまらないアニメ見たりしてさ。

それで人間の女の子と恋仲になつたりとかして、もう幾分か普通に生きていたのかなつて。姿形だけなら紛れもない神機使いになつた今、そんな『もしも』を一瞬だけ考えてしまった。

.....本当だったら、そうやって生きてた筈なんだつて。今となつては何の意味もない可能性を想像してしまった。しかし僕の思考を、

頭の中のレンはやんわりと否定してくる。

『…………別に今からでも遅くないんじゃないですか？これを機に足を洗って神機使いになっても——』

「何を今更。無理に決まってるだろう？そんなもの。」

『無理じゃないですよ。逆にその姿と神機で、何故神機使いが出来ないんですか。』

何故も何も。今から人間の真似事をして英雄ごっこをするには、僕はあまりにアラガミとして幸せになり過ぎた。優しくて献身的な伴侶に、強くて可哀想な僕の崇拜者。彼女達を差し置いて、何故今さら人の真似事が出来るものか。

何しろ僕が長すぎる人ならざる者の生の中で得たものと言えば、あの二人だけだ。だからこそ手放せない。あの二人を捨てることでしか得られない、人としての暮らしなんて絶対に選べないんだよ。仮にその姿がどんなに人のそれになったとしても。

その上、万が一僕が人として生きたいと願った場合。その存在が障害になると知ったら、サリーは躊躇わずに命を捨てる。嫌な確信だけど、あの娘は僕が幸せになるためなら何でもする。ずっと見てきたから分かるんだ。

あの娘達のために残った人類全員皆殺しにしようって決めるくらいなのに、論外も論外だろう。仮にその対価がどんな幸福であれ、彼女達の居ない世界での幸福は既に僕の中で何の意味も成さない。

『……………こう言うのも何ですけど。あなたも結構重いですね。いや……………まあ、無理も無いのかな……………そうですね……………』

だから言ったのだ。遅すぎた、と。せめてサリーに会う前にこうなっていれば、まだ選択肢があったものを。

……………おかげでこの新たに手に入れた血の力も、新型神機に新型パーツも、直に人類を滅ぼすための力として完成する。僕が得る全ては人類絶滅のために。そう在り続けた僕が、今さら神機に適合できたくらいで揺らぐような事は無い。

なのに、人に仇なす以外の選択肢が確かに在るのに選べない自身が

酷く滑稽に思える。ジゼルと触れ合い、少しだけかつての人間の暮らしを思い出し、或いは体験したせいだろう。

或いはたつた今打ち込まれた、この神機使い製造用の偏食因子がそうさせたのか。人間臭い感慨と未練に耽る僕に、頭の中の住人はえらく申し訳なさそうな声を返した。

『……………ごめんなさいソロモン。その、期待させるようなこと言つて。そう、ですよ。あなたが人類の味方なんて……………そんなこと……………』  
「構わんよ。ただ僕にもそういう可能性があつて、その上で僕は選ばなかつた。それだけだ。君にとっては不本意だろうがね。」

何よりそう持ち掛けたレン自身、僕に正しい用途で神機を使って欲しいと願つたのだらう。願うことなら、レン本来の持ち主と僕が戦わずに済むならと。

とはいえ、僕にとつては取るに足らない感慨も、未練たらしい憧憬も。その姿形があまりに幼くては、見るに堪えない程に痛々しいのだらう。

或いは特段僕がそう振る舞つたつもりが無い故に、余計にそう見えただのか。

「ッ!?!」

手の中で半回転。神機の柄をくるりと回し、振り子のように刃を翻す。そうすれば不意に、僕の後ろから息を呑む音がした。

「ジゼル。適合試験の施術、ありがとうね。」

そう、僕の後ろに音もなく立つジゼルに振り向かず、礼を告げる。同時にもう一度神機の柄を逆方向に回せば、彼女の首に当てた刃が何事もなく下がった。

だが。そうしてもしばらく、ジゼルはその場で立ち尽くしていた。我に返ったら直ぐさま後退あとずさしたが、その顔色はあまり優れない。当然か。



「びっ、びつくりした……!!今、キミ私の頭を落とそうとした!?なんで!?!」(なんでバレたの!?!殺気は隠したはずなのに!!)

「なに、新たな玩具ちからを手にしたばかり故ね。今の僕は血に飢えている。」

「だからって人に神機向けちゃダメでしょ!!首斬られるかと思ったんだからね!」(いや、反射?後ろに立たれることを嫌っての事なの?警戒はされてないみたいだけど……)

僕を指さしながらも涙目で吠えるジゼルに、僕も適当な言葉で応対する。本当によく口が回る。わざわざ気配を消して、僕の背後を取ったくせに。

「……:僕の首を落とそうとしたのはそっちだろう?『僕を殺すなら今しかない』と。そう思ったから、ジゼルは今僕の背後を取った。」

無理もない。この機会を逃せば、もう僕を殺すことは出来ないからと。僕を仇として殺し得る最後の機会に、彼女は最初で最後の賭けに出たんだ。

そしてジゼルは失敗した。いとも容易く、呆気なく僕がその殺意を牽制した。……が、殺せなければそれはそれだと思っていたのか。僕が神機を引き摺りながらも振り返ると、ジゼルはいきなり僕を抱きしめてきた。

「でも……:無事に適合できてよかった。大丈夫?どつか痛いところはない??すごく苦しそうだったけど……:」

「問題ない。不適合だったのか、少しビリッとしただけだ。そして神機の方を僕に合わせて適合させた。この分なら他の墮し児も、適合率の心配はしなくていいだろう。」

「そっか。凄いなあキミは。……あんな適合するために技術者共が色々やってた新型神機を、こんな簡単にモノにしちゃうなんて。」

ギョツと自身の胸に僕の顔を押し付け、ジゼルが僕の頭を撫でて褒めてくれる。相変わらず距離感は大グってるが、そこには既に復讐のための下心は無かった。

ただその代わりとばかりに。しばらく僕を抱きしめた後、ジゼルは

躊躇いがちに口を開いた。

「……………あのさ。一つ、聞いてもいいかな？」

「断る。」

「まだ何も言っていないのに!!……………いいじゃん、キミの適合試験手  
伝ってあげたんだから!!そのご褒美に、ね!!」

造書庫で何を聞く気なのかは分かっているから、僕は二つ返事で拒  
否した。が……………そう言われると断りにくい。何しろ僕に尽くすと  
いい事があると、さつき示したばかりだから。ここでそれを覆すの  
は、今後を考えると控えたい。

……………まあいいか。そこまで察してるなら、今更隠す必要も無い  
し。

「いいだろう。ただ答えられるとは限らないよ。」

「ほんと?!いや、そんな大した事じゃないんだけど——」

「勿体ぶらずに早く聞きなさい。この後は墮し児達に神機を適合させ  
なきゃならんのだから。」

そうジゼルを急かすと同時。僕を抱きしめるジゼルの腕に、緊張し  
たように力が入った。

しかも急かしているにも関わらず、ジゼルは何度か深く息を吸って  
吐いてと繰り返し返す。そして急かしこそすれど、僕もそれを大人しく見  
守った。

そうすれば。

「……………キミの。名前……………そろそろ教えて欲しいな、つて。」

ジゼルはそんな、至極妙な質問を僕に投げ掛けた。

だから、僕もその意図を分からないフリをした。

「……………可笑しな事を言う。僕の名は——」

「ソロモンじゃなくて!!……………本当の名前、あるんでしょ!?!……………お願い  
だから、教えて……………!!」

「……………。」

我ながら態わざとらしく思えるほど、大きなため息が漏れる。それは小さく震えるジゼルの背中を叩く自身にか、僕に無用な同情を向けるジゼルにか。

本当に……：自分の事は分からないものだ。他者の事ばかりは、知りたくないことまでも理解できるくせに。

だから下手に繕わず、僕も初めて正直にジゼルに答えた。

「悪いが……それは答えられない。」

「!!……どうして——」

「何分、もう覚えていないんだ。本当の名前も、どう生きてきたかの記憶さえも。」

人類に畏怖の象徴として授けられた、ソロモンではなく祝福として与えられた人間の名前。ジゼルが僕に求めた名前は、何時からか風化して無くなっていた。造書庫で調べて思い出すことが出来るのも、今の僕にはアラガミとなる前の数刻の景色が限界だ。

きつと執着が無かったからだろう。人間だった時の記憶も、その更に昔にあったはずの過去も。その結果がこれなら、何一つとして悲しむ必要は無い。

だと言うのに。

「……………そっか。」

その答えは、僕の予想以上にジゼルの心に深い傷を残した。長い沈黙の後に絞り出した短い言葉は、彼女が今まで並べた言葉のどれよりも僕の耳に残った。

ボロボロと涙を零し、僕を抱きしめる彼女の手が暖かい。こうして抱きしめ返せないのなら、左腕をさっさと調達しておくべきだったと少しだけ後悔した。

「……………なんで、君が泣くんだよ。」

そのせいで、返した言葉は随分と冷たいものになってしまった。繕うように彼女の胸に顔を押し付けたのは、僕も顔を見られたくなかったからだと思う。

何しろこの暖かさは居心地が悪くて仕方がない。未だに僕を一人の人間として扱う、初めて人間として扱われた苦しさがある。こんなにも僕の心を締め付けるなんて。彼女の思考は造書庫で全て知ってたと言うのに。

……僕という存在が真つ当な人間から見れば、如何に哀れで惨めな存在か。僕の生涯の何も知らなくせに、ジゼルはその暖かきで僕に思い知らせる。

「あのね。……私、弟が居たんだ。ちょうどキミくらいか、ちよつと上くらいなの。」

長く間を開けた後に、律儀にジゼルは僕の問いに答えを返した。とはいえ実際は、聞くまでもなく僕は知っている。

アレイスター・レイヴラント。元神機使いで、僕が殺した彼女の一番大切な人の名前だ。このロシア領内で活動してた最中、散発的に襲撃を行ってきた神機使いの一人で、顔も名前も気に掛けずに殺したから覚えてなかった。

とはいえ墮し児同様、造書庫には僕が喰い殺した人間の情報や記憶も残るから。最近ジゼルの事を調べた際に、その顔と名前を知った。殺した時期もサリー（テイターニエ）が今の身体になる以前ってだいぶ昔だった07（ネメシス）。転生の辺り。しね。ディーヴァなんてまだ言葉すら喋れなかった時期だよ。

そんな何ヶ月か前の事だが、愛しくて愛しくて仕方ない弟を僕に殺された怒りは未だジゼルの脳内に鮮明に残ってる。元々僕に抱く憎悪が大きかったのは、それが一因でもあった。

だと言うのに、ジゼルは僕が殺したことを一切口に出さない。自身達神機使いも、僕を殺そうと全力を尽くしたのだからお互い様なのだと。そう割り切り、あくまで僕に重ねた最愛の弟の姿を懐かしむように言葉を続ける。

「それと同じくらい小さな男の子がさ。……………無理やりアラガミにされて、自分のことも思い出せなくなるまで彷徨ってたんだなって……………そう考えたら、この世界が地獄みたいに思えて。」

「……………そうか。」

「誰が一番悪かったんだろうね。…………キミは、望んであんな姿になつた訳じゃないのに。」

『そしてそんな子どもを痛めつけて殺すことでしか、自身の喪失と憎しみを晴らすことは出来ない』と。そう察した時点で、ジゼルは僕への復讐を諦めてしまう。そのくらい、僕にも分かっていった。

彼女は心根が善良過ぎたんだ。それこそ僕が想像していた以上に愛情深くてさ。だからこそ大切な人を全て奪われて、復讐の鬼になりかけていたのに。僕の素性が割れたせいで、全部が台無しになった。既に亡き弟がよほど重なるのか、普段より幾分素直に甘える僕をジゼルは大切そうに撫でている。彼女から全てを奪った仇敵である僕を、ある種の愛しさを感じるほどに。

その上で、ジゼルは僕に言葉の続きを紡ぐ。

「でもさ。…………これでキミは、やっと人間として生きられる。やっと……………普通に生きられるんだよ。」

きっとそれが人間にとっての幸福なのだろう。その言葉は間違いなく、僕に幸せになって欲しいという願いの言葉だった。

けどそれは僕にとっては叶えようのない願いであり、決して至れなくなつた道だ。継る価値すら失った幻想を嬉々として語るジゼルに、僕は思わず言葉を詰まらせる事になる。

「……………ジゼル。それは——」

「分かつてる。……他の皆は、きつとキミの事を許してくれない。今だつてキミの顔を見たら、直ぐに殺そうと思う。でも………」  
僕は善良な人間で、更生出来ると信じたのだろう。あくまでジゼルは僕に寄り添い、僕が人間として幸福になるようにと願ってくれている。

無知とはいえ、小さな子どもを惨たらしく殺そうと考えた罪悪感のせいだろうか。ジゼルだつて、僕の話は憎くて憎くて仕方ないだろうに。

「あの子達も、キミの事をちゃんと話したら分かつてくれると思うから。だから………」

「ジゼル。……君は本当に優しいんだね。」

「そんな事ないよ。……私だつて、根っこは他の子とそんな変わらないと思う。」

その憎悪を押し殺した上での献身の、何と心苦しいことか。応えようも無い善意の押しつけに、僕は随分と続きの言葉を紡ぐのに手こずる事となる。

ジゼル自身は蟠（わだかま）りの全てを吐き出せば、僕と共に人の暮らしを送れると信じていたのだろう。僕も、少なくとも心の底ではそう望んでいると。

けどその実態は違う。望むことすらなくなった僕に、ジゼルの願いは叶えられない。

「……………ありがとうジゼル。そしてごめんね。」

だから彼女の胸に押し付けた顔を、一步後ろに引くことで離す。そうして顔を上げてみれば、ジゼルは呆然とした様子で僕の顔を見つめていた。

人の生を絶対の幸福と考えるジゼルにとって、あまりに僕の言葉は想定外だったのだろう。我に返るとジゼルは、困惑の籠った笑みを僕に向ける。

「えっ……………ごめんねって、何が？」

「出来ないんだ。僕が人の暮らしの真似事なんて。」

「そつ……そんな事ないよ。キミはどこからどう見ても人間の子どもだし。その神機だつてよく似合ってる。誰もキミがかのソロモンだ第零接触禁忌種なんて分らないよ。」

「そう的外れなフォローを、そういう意味ではないと察しつつもジゼルは必死に飛ばす。………本当に、僕が更生できるって信じていたんだね。僕が人間を起源とする以上は、多少は人の価値観が残っているって。」

「何しろつい最近まで人間だった彼女達墮し児は、アラガミとしての暮らしは地獄と同義だと思ってる。というか、実際その認識は間違ってる。」

「だから人の暮らしをなぞる事に執着するし、僕も同じだと思ってるんだろう。………このロシアの惨状だつて、僕が人の姿に還ろうと行つたのだと信じている。」

「けど、僕はその願望にも近い幻想を一言で一蹴する。」

「そもそも前提が違うんだよジゼル。僕はそもそも、人としての暮らしを望んでいない。」

「ハッキリと認識のズレを口にすれば、困つたように笑っていたジゼルの表情が引き攣つた。………いや、可能性として想定くらいはしていたのか。ジゼルが考え得る限りの最悪の可能性ではあるが、僕が苦痛のあまり人間を見限つているとは頭の片隅で考えていたらしい。」

「………それでも、僕の正体を知ったせいで認めたく無かつたんだね。そうだろうとも。何しろ僕が人間嫌いだと確定してしまえば、僕がこのロシア支部を滅ぼした目的から変わってくる。」

「——人の姿を獲得し、人の暮らしを取り戻すために止むなく死体を重ねたのでは無いのなら。僕は何故、ロシア支部を攻め落としたのかと。」

「口に出した言葉以外は何を語った訳でも無いのに、ジゼルの出来の

良い頭は将棋倒しのようにその答えを導き出してしまふ。

何故、僕はロシアの人間を無差別に襲撃したのか。

何故、僕は人の性質を得た後にも虐殺を続けたのか。

何故、僕はこの支部を修繕しフェンリルの一支部として復旧しようとしているのか。

そうやって全てを悟ったジゼルは、一步退いた僕にその指を伸ばし掛けた。けど、それが僕の頬に触れる事は無い。……………僕が人間である自分に触られるのは嫌なのではと、氣遣ってしまつたらしい。

……………ただ代わりに、ジゼルは震える声で尋ねた。

「……………そんなに、人間が憎いの……………??」

明確な意思の元に行われた殲滅に、人類絶滅という大願。僕という存在を正しく理解したジゼルに、僕は沈黙しか返すことが出来ない。

何しろ僕自身も分からない。感慨も無く殺すうちに分からなくなっていた。人間が憎いかどうかなんて。ただ、僕らの害となるから滅ぼさなければならぬと。憎しみに基付く復讐よりは、使命感に近いのだろう。

……………僕は苦痛に耐え兼ねて人類を見限つた訳でも、人類全てを憎むが故に絶滅を掲げた訳では無い。ただ……………そうだな。

「ジゼル。神機使いは憎しみでアラガミを殺すか？」

「……………同じだって言いたいのか？キミが人間を殺すのは、生きるためだって……………必要な事なんだって……………」

「ああそれだ。流石、君は聡いね。」

どう言語化したものかと迷っていた傍ら、僕の代わりにジゼルが答えを言ってくれた。

つまり僕やサリーが生きるためには必要なんだ。人間の、全人類の犠牲が。

そんな身勝手な大量殺戮は、人間を起源とする僕しか思考し得ない。故に僕は、数有るアラガミの中でも第零接触禁忌種へと至つた。



悪い意味での人間らしさだけが、僕の中に残った結果だ。

「そうだ。必要なんだ、全ての人類の犠牲が。僕らの生活を守るために、残存人類は邪魔なんだ。」

「無茶苦茶だよ……!!キミは人としての暮らしを諦めて、地獄みたいなアラガミとしての生活を盤石にするために……何の罪もない人達を、皆殺しにしようって言うの!?!そんな大虐殺なんかより、普通に生きた方が絶対に幸せになれるのに!!!」

「やはり分らんか。……それで良い。」

当然自身を人間だと思い込み、人類の味方と勘違いしてるジゼルは僕の目的と思想を真っ向から否定する。……彼女だつてとつくに、墮し児というアラガミの一種だと言うのに。人間から見れば、僕も彼女も何一つ変わらない敵だというのに。

とはいえ、僕らの存在の是非を議論するのは今では無い。何しろ既存の人類が絶滅すれば、次は僕らが人類の位置に収まるのかもしれないのだからね。

そんな物よりも、今大事なことは唯一つ。

「で、どうする?ジゼル。僕はこの通り、既存人類の抹殺を大願としている訳だが。」

「そんなの……止めるに決まってるでしょ!!二度と私達みたいな思いをする人は出させないし、これ以上キミに人を殺させる気も無い!!キミの願いは叶えちゃいけない!!」

「そうか。じゃ、頑張つて僕を殺さなきゃな?」

人間の価値観に由来する正義感を叫ぶジゼルに、僕は小さな笑みで告げる。……そう、これでジゼルは理解した。僕という存在は墮し児達の復讐の対象であり、同時に人類にとっては絶対に倒さなければいけない敵だと。

そうすれば、『僕が年端もいかなない少年を由来とし、人に仇なす生き方しか出来なかった』という優しい言い訳も意味を成さない。ジゼル

ルは再び、僕を殺す権利を得たわけだ。

けど、僕が淡々とそう告げればジゼルはその顔を絶望に染めた。僕から逃げるように一歩退き、首を激しく横に振った。

「なっ……なんでそうなるの!?! 私は、キミにいい子にしたいだけで……!!」

「何時までも弟の幻影に縋るなよ。ジゼル・レイヴラント。僕を止めたくば、それこそ息の根を止めるくらいしか方法は無いぞ。」

「ほ、他にもキミの願いを挫く方法はあるから!! 例えば……ほら、キミの事を他の支部に伝えたり……って……」

なんて無謀な選択肢をジゼルは口にするが、直ぐに気付いたらしい。そんな真似をすれば僕だけでなく堕し児という存在は公になるし、自分達の身を危険に晒すことになる。

そうでなくとも自分で殺すか他人に殺させるかで、結局僕の野望を止めるには息の根を止めるしか無いのだと。それなら自身の手で殺した方が気が晴れるのではと、直に彼女は気付いてしまう。

実際のところ、僕はジゼルに期待している。高い知性に由来するアラガミの能力の最適化に、計画的な襲撃と諜報能力。そして元神機使い故に、民間人上がりの堕し児には無い基礎戦闘能力まで備えているんだ。鼻肩目抜きに、彼女は堕し児の中でも一番の逸材だ。

だから僕の正体を知り、復讐を諦めた時には正直焦った。戦闘を放棄して僕に寄り添うだなんて、そういう生き方は尖兵たる堕し児達には求めていない。求めるとしたら、それは彼女達が人類を絶滅させるだけの力を得た後だ。

………我ながら惨い仕打ちを行っている自覚はある。しかし、僕はジゼルに復讐を諦めさせない。力に対する渴望を、決して手放させはしない。

が………無理強いたところで、僕の望むようにはならないのは理解している。だから僕は、あくまで大義名分を与えただけだ。事実を

語り、選択肢を与えただけだ。

『僕を殺せば人類を救える』と。そう思い知らせた上で、ジゼルが僕の殺傷を拒絶するならそれも良い。一生僕への憎悪と庇護欲に板挟みになったまま、傍に仕えるのもまた一興だろう。

……………だが。

「……………本当に、殺すしか無いの……………??」

僕は知っている。人という生き物は、大義のためならどんな蛮行でも成し遂げられる生き物なのだ。それは他ならぬ、人を起源とする僕が証明してきた事だ。

ましてやそれが、心の底で望むものなら止めるべくもない。そういう意味ではジゼルを心配する必要なんて無かった訳だ。

「……………随分と嬉しそうだな?ジゼル。」

「……………ツ?!ちがつ……………私……………!!」

「良い良い。君はこれまで通り、僕の傍らで為すべき事を為せば良い。それが回り回って僕の為になる。」

ジゼル自身は気付いて居なかつたらしい。……………僕を殺すしか無いと理解した瞬間、彼女は笑っていた。僕を殺していいのだと、無意識に喜んでいた。

だから僕自身もそれを肯定してあげただけどき。そうしたら、ジゼルはその場に蹲って両手で口を押さえてしまった。

「ちがうの……………私……………キミを殺せるって知って……………喜んだりなんか……………!!そんなつもりじゃ…………………………ぐっ……………!!」

そうすれば直に、自己嫌悪と罪悪感にも似た嫌気がジゼルの口から零れ始める。僕に抱いた願望と、無意識に表面化した本性は未だ彼女には毒となるらしい。

聡い上に愛情深い人間は、こうも生きにくいものなのかと。嗚咽と共に吐瀉を撒くジゼルを、僕は暫く見下ろしていた。

……………ここまでして、未だ彼女がどちらを選択するのか想像がつか

ないとは。全く以て、彼女の人の良さには呆れたものだ。

そして同時に、そんな彼女に惨い仕打ちを重ねられる自分自身にも呆れを覚える。まさか僕がここまで悪辣な性格だったとはな。

サリーと言いディーヴァと言い、愛情を注ぐような触れ合いしかして来なかったせいだろうね。自身の人の悪さを、僕は今に至るまで知らなかった。何しろ大半の人間は触れ合う前に殺してきたから。

その悪辣さを自ら知ることではやはり確信するよ。「ああ、僕はもう人間じゃないんだな」って。身体だけの話では無い、精神構造までもがとつくに人間のそれから乖離してるんだって。分かり切っていた事ではあるけどね。

ま、だからこそ人類の絶滅なんて選択肢を迷いなく選べるんだろうけど。神機を手にした程度じゃ更生出来ないわけだ。

こんな僕の本性を正しく知覚すれば、ジゼルも罪悪感で吐くような事は無くなるだろうにね。

とはいえ僕への認識と対処方法を決めるのは、あくまで他ならぬジゼル自身だ。僕に抱いた憎悪と憐憫、復讐<sup>使命</sup>と慈愛の擦り合わせは彼女自身にしか出来ない。

故にこれ以上、僕からジゼルに掛けるべき言葉は無い。ただ吐くほどに感情に苦しむジゼルを眺める以外、やるべき事も無い。

だから僕は、最後に一言だけ。

「ジゼル。……僕は君がどちらを選んでも、君の選択を尊重するよ。だから恐れず、後悔がない選択を選ぶと良い。」

「……………ッ!!!」

「僕はもう行く。また明日、エントランスに会いに行くから。……今日はあるがとうね。」

緑に返事も出来ない状態の彼女にそう告げると、適合したばかりの新型神機を引き摺ってその場を後にした。その背中を見て、ジゼルが

何かを叫んだような気がしたけど振り向かなかった。

けどそうして神機開発研究所を出るとほぼ同時。突如として、僕の頭の中にある声が響く。

『……………いいんですか。彼女、あのままにして。貴方に何か言ってみたんですけど?』

「いいんだよ。今のジゼルには一人で考える時間が必要だ。」

『よく言いますよ。あんな苦しむ程に悩ませたのは貴方でしょうに。』  
わざわざ苦言を呈しに現れたレンに、僕も苦笑いしか返すことが出来ない。……………言い訳にしか聞こえないだろうが、必要な虐待だったんだよ。

僕もここまで包み隠さず話すつもりは無かったんだが、ほんとあの娘は聡いからさ。ならばせいぜい僕の思惑通りになるよう軌道修正したら、あんな吐くほど苦しんだだけで。なんであんな僕に情を向けるかね。

『……………ソロモンって、本当に人の心分からないんですね。』

「造書庫ライブラで読める筈なんだがねえ。」

『それ、自分の心は読めないでしょう。……………貴方も、しばらく一人で考えた方がいいと思いますよ。貴方は自分で思ってる以上に面倒な性格してるので。』

めっちゃチクチク言葉を吐いてくるなこの神機。僕の更生を測った者同士、思うところでもあったのか。妙に機嫌が悪い気がする。

しかも一方的にそうとだけ吐き捨てると、それを最後にレンの声は僕の脳内から途絶えてしまった。言いたいことだけ言っただけ居なくなりやがって。意識だけで僕の一部判定になってるのか、あいつに造書庫使えないんだよな。

まあいい。これで新型神機は無事僕に適合したし、あと僕がやるべき事と言えばサリーを人の姿に封じる事だけだ。そうすれば概ね、他の支部の人間を招き入れる準備は終わる。

ただあつちは僕が忙しいせいで、ディーヴァに任せてしまってい

た。墮し見相手にやるべき事はやったし、僕もあつちに合流する  
ようか。

……本当に情けない話だけどさ。ジゼルと話してて、思った以上  
に僕も堪えた。今はとりあえず、サリーに癒されたい。

## 26. 愛慾（ロマンス）

それは新型神機の適合を終え、僕が屋上のヘリポートへ向かった時の事である。ふと僕は、逸るあまり新型神機を持ったまま五階まで来てしまった事に気付いた。

流石にこの右手についた腕輪はどうしようも無いが、神機を持って行つてはサリーを怖がらせてしまうかもしれない。そう思い立つた僕は、ヘリポートに行く前に神機を支部長室に置きに行ったんだよ。そしたらさ。

「ブー……どうしようどうしよう……サリーを人の姿に封じるのがあんなに大変だなんて……」

「……ディーヴァ？」

「もしかしてご主人様、どう足掻いても出来ないって分かっているが私にお願いした……？いやいや、ご主人様がそんな意地悪するわけ無いって。とにかくご主人様来る前にどうかしなさいけないのに……」

何があったのやら。そこには小言でブツブツと思考を垂れ流しながら、支部長室を徘徊するディーヴァの姿があった。

余程思考に意識が持っていかれてるのか。僕が入ってきたことには気付いていないし、声を掛けても気付かなかった。

……だからね？

「ディーヴァ……僕が来る前になんだった？」

「ひびうっ!?ご主人様!?!」

「うおっと。」

その重厚な筋肉に覆われた脇腹に腕を回し、真正面から彼女の腹筋に顔を埋めた。そしたらディーヴァは悲鳴じみた鳴き声を上げたが、反して彼女の子宮はドグンッ!!と音を立てて胎動した。刺激し過ぎたか。ごめんって。

それでも僕の顔を見れた嬉しさが勝ったのか。デイーヴアは太い両腕で僕を軽々と抱き上げると、強く抱き締めながら頬擦りしてきた。背骨がへし折れそうだ。

「ご主人様おかえりなさい!!もう下での用事が終わっただんですか!?!」

「優秀な堕し児に協力を結び付けられたお陰でね。」

「は!?!えっ……あの殺意の塊の堕し児を、手懐けた……!?!どうやったんですか!?!それにその右手……その神機……」

聞きたい事は山ほどあるのだろう。忙しなく視線が僕の顔から右腕へ、さらに右手に握った神機へと移り行く。

が、そこらについてはサリーもいる場所で話したいから。僕はデイーヴアの腕からすると脱出すると、神機を室内の壁に立て掛けて支部長室の外へと出ようとする。

でもその時だった。僕が支部長室から出ようとする、後ろからデイーヴアが僕の両肩に手を置いて捕まえてきた。

「ご……ご主人様?どこ行くんですか?」

「サリーんところ。下であった事や、今後の方針については三人で話したいからさ。」

「あー………はは。そう、ですか。そうですね……えへへ………」

なんて何かを誤魔化すような笑みと共に、デイーヴアが僕の肩を掴む手の力を強める。肩が外れそうだが。

口には決して出さないが、どうやらデイーヴアは僕をサリーに会わせたくないらしい。しかもこれはヤキモチ妬いて、つて理由でもないな。寧ろなんか隠し事してる?造書庫起動ライブラしてみるか。

………ああ。そういうこと。

「でもほら、ご主人様?堕し児の相手したならお疲れでしょうし、少し休まれては如何ですか?」(まだサリーの身体出来てないし、屋上行かすのはマズイ!!)

「デイーヴア。どうやらサリーを人の姿に封じるのに難儀しているよ



うだね?」

「ギクギクギクウツ?!?」(なんでバレてるの!!!というかりアクションしちゃった!!!)

僕の任せた仕事がまだ出来てないのが余程マズイと思ってるらしい。僕が尋ねると、ディーヴァの血の気が目に見えて引いた。部屋来た時点で呟いていたでしように。

別に僕の任せ事の全てをこなせ、なんて無茶は言うつもり無いのに。僕の頼んだこと出来ない!!死、なんだろうね。この娘にとって。ほんと、愛情が重たいっていうかなんて言うかさ……僕がこんな風にしたせいなんだけど。

「ごめんなさいご主人様……お仕事できない役立たずでごめんなさい……!!」

「難儀しているだけで進捗が無い訳では無いんだろう?それで十分だよ。残りの調整は僕も同伴するから。よく頑張ったね。」

「ほんと手を煩わせてごめんなさい……!!ご主人様、下でも働き詰めで疲れてるのに……!!」

泣きそうなディーヴァを宥めつつも、当初の予定通りに僕はヘリポートへと向かう。ディーヴァはこんな風に謝ってばかりだが、僕は正直サリーの人間態がまだ完成してなくて良かったと思ってる。

何しろサリーの人間態は、僕にとって一番大切な彼女の形態の一つだから。こう言うっては何だが僕が多忙だからディーヴァに任せていただけで、僕自身サリーの人間態を考案することは心待ちにしてたんだ。

その容姿も衣装のデザインも、サリーと相談しながら試行錯誤して仕立て上げるのは楽しみだったからね。その楽しみをディーヴァは残してくれた。そう考えれば何を咎める必要があるだろうか。

………なんて。

………ヘリポートに上がって、サリーを見るまでは思ってたんだけどね?

「!!…………ソロモン!!ソロモン、おかえりなさい…………!!」

ヘリポートに鎮座する彼女を目の当たりにしたら、そうした思考は全て何処ぞかへと消えた。

何しろ人の器に閉じ込められたサリーの姿は、僕どころか世の男の大半の心を奪うであろうそれだった。

腰掛けているとはいえ、床に着くほどに長い黒髪に白無垢みたいな純白の肌。そして明るい深紅の大きな瞳。額には邪眼の名残なのか、赤い宝石のような装飾が陽光を受けて輝いている。

けど長い睫毛に覆われた二重と言いつ、薄くも柔らかそうな唇と言いつ……その容姿を構成するパーツは一つ一つが芸術品のようで、『人ならざるもの』だと言外に語るような美貌だった。

そんな人外そのものの美しさの少女が、好意と愛情を剥き出しにした笑みを向けてくるんだ。本来の姿も大概蠱惑的だが、人間嫌いの僕も『これはこれで……』と認めざるを得ない。

「……………ディーヴァ。」

「な、なんですか?」

「いい仕事をしたね。ほんとよくやった。よしよしよしよし。」

おかげで気付けば気遣い抜きに、この人の殻を仕立て上げたディーヴァを抱きしめて褒めていた。

この出来栄えでは、もはや僕が手を加える余地など存在しない。これだけ綺麗に仕上がっているのなら、僕が何を調整してもノイズになる。少なくとも容姿は認めざるを得ない、あまりに完璧な仕事ぶりだ。

……完璧な仕事過ぎて、二度とサリーを人間の姿で他の男の前に晒すものかと内心で決意した。というか男限定で人類を滅ぼす理由が一つ増えたレベルだ。

駄目だこんなの。多分だけどこの姿なら、残存人類の男の九割は一目惚れする。作られた容姿とはいえ、こんな綺麗な女の子とか見た事無いもの。

……ほんと綺麗過ぎて、対峙する僕もちよつと緊張してる。人が広義に崇める女神の偶像と言うのはこういうのを言うんだろかね。

でもそうして僕が身を強ばらせているのが不安になったのか。サリーは僕を見つめると、ほんの少し首を傾げた。

「ソロモン？……どうしたの？」

「ごめんね。……ちよつと、見惚れてた。」

「早く来て……ぎゅーってしたい……ソロモン居なくて寂しかった……」

ただ国を傾けて余りある美貌に反して、精神年齢の幼さはそのままだから。直球に甘えて愛情を注ぐことしか知らないサリーは、普段から破壊力がヤバイ。

けどこれは……性癖狂うわ。もうとつくに破壊され尽くしていた自覚はあったが。まだ壊せるとは思わなんだ。

おかげで僕は、サリーに誘われるがままに鎮座したままの彼女へと飛び込んだ。そうすればサリーは軽々と僕の身体を受け止め、全身で包み込むように抱き締めてくれる。

「……ただいまサリー。サリーも頑張ったね。その身体は、君にとっても窮屈だろうに。」

「うん……ソロモン、温かい……不思議……」

「……それが人の身体だよ。アラガミの身体は、体温なんて分からないものね。」

そうサリーにとっては不可思議な感触とも言える『温もり』を確かめるよう、彼女は抱き締めた僕に身体を押し付ける。それには僕もされるがまま、彼女に身体を預けて甘えた。

本来の姿と人の姿のどちらがいいかは甲乙付け難いが、この体温だけは人の姿に軍配が上がる。……あと、凄く変態みたいな事言うよね？今のサリー、めちやくちやいい匂いする。

お陰で僕はサリーの胸元にぎゅって顔を押し付けてしまった。そ

うすればサリーは僕の頭に大きな手を置いて、ゆっくりと長い指で僕の髪を撫でてくれる。

でも、その時だった。

「……………いけませんご主人様!!今のサリーを興奮させては!!」

そんなディーヴアの声が、サリーに甘えて微睡む僕の意識を現実へと引き戻した。

何かかと思いきや、僕の頭を撫でるサリーの指が既に小さく震えていた。それを妙に思っ、僕はサリーの顔を見上げたのだが――

「はー……………??♡はー……………♡?ソロモン……………ソロモンかわいい……………!!」

「え”っ。」

「一生懸命甘えてくれて嬉しい……………!!好き……………大好き……………!!」

彼女の真つ赤な瞳の中に、激情じみた愛情が宿る。そうするとほぼ同時、何かが目を覚ますようにサリーの威圧感が一気に膨れ上がった。

その様には僕でも一瞬身の危険を感じたほどだ。その全容を目の当たりにしていたディーヴアは、多分それ以上だろう。

「胸にぎゅーっして……………かわいいソロモン見てたら、好きなの抑えられなくなっちゃったあ……………!!!」

「ご主人様、急いでサリーから離れてください!!巻き込まれます!!」

「あ……………ツ♡♡♡ソロモン……………!!好き好き好き好き……………!!大好き……………」

――ブチンツ!!と。サリーの頭の中で何かが切れる音が響き、僕を逃がすまいと腰に腕が回される。そしてその精神状態が正気を逸脱したその瞬間。呼応するようにサリーの身体にも異変が起きる。

まず僕が顔を押し付けていたデカ乳が、さらに大きく膨らみ始めた。元々僕の顔を余裕で上回る大きさだったそれは、瞬く間に僕の首を――いや、上半身を包み込めるほどにまで急激に成長を始め

る。

何ならおっぱいだけじゃない。座したままの体勢ではあるが太ももも、腰周りも……髪から爪先に至るまでのその全身が、ミシミシと音を立てて巨大化を始めている。

「は……♡♡あ”あ………ツ♡?♡♡」

そうしてサリーの身体が大きくなるにつれて、発される声にもアラガミ特有のノイズが掛かり始める。

元々僕の倍近かった体躯が、人外の巨体へと戻るのにはそう時間は掛からなかった。興奮で我を忘れたサリーは僕をおっぱいに挟んだまま、両腕で谷間を締め付けて僕を見下ろす。しかし僕を見下ろすその瞳も、既に二つだけでは無い。

【ソロモン……♡♡ソロモン………♡♡♡】

額の宝石のような器官が大型化し、その根元から蔓のような触手が伸びる。そしてそれは瞳孔を開いて変じた邪眼の周りを覆うと、枝を束ねた冠のような角を彼女の額に形成する。

それを皮切りに未だ巨大化を続ける彼女の背中から、柔肌を裂いて六本の蔓に似た触手が伸びる。それは脇の下から彼女の爆乳に纏わり付くと、ずっしりとした乳房を支える衣となる。

そしてそれは胸だけでは無い。肘から生えたものは手首までを覆い隠し、膝裏から生えたそれは爪先を覆うブーツへと。白い肌を包む黒い衣装のように、彼女の全身がウロヴオロスに由来する触手で彩られる。

何より腰から生えた一際大きい蔓の骨格は、枝のように腰周りに伸びるとその先に真っ赤な邪眼を咲かせた。その合間を縫うように蝶の模様の翼膜が広がると、瞬く間にそれは彼女の腰周りを覆うドレスに姿を変える。

こうして興奮で我を忘れたサリーは、易々と本来の姿へと戻ってしまった。ディーヴァが難儀している、と言うのはこの性質なのだろ

う。おまけに人間態で刺激してしまったせいで、一人では鎮められないような興奮の仕方をしてしまったらしい。サリーは額の邪眼を煌々

と輝かせると、衝動に突き動かされるままにぐぱあつと口を開いた。  
「はー……はー……ごめんなさいソロモン……噛まないから……噛まないから、鎮まるまで舐らせて……!!」  
「いいよ。」

荒い息と共に懇願するサリーを、僕は二つ返事で受け入れた。するとサリーは僕を右掌の上に横たわらせ、紫色の触手のように太くて長い舌を伸ばす。

そうして僕の腹部に舌の腹を押し付ければ、滑り気と湿り気を帯びたその先は僕の股間を通り抜ける。そして先端に至ってはローブの内側に入ると、背中から僕の身体に巻きついてきた。

なんか……絶対口に出来ないけど、触手責めされてる気分になるな。舌もサリーの唾液でじっとりしてるし、素肌に舌が擦れる度に凄変な気分になる。デイーヴァも見てるのに。

当然サリー自身にはそんな気など微塵も無い。ただ僕はだいたい直球にエッチな事されてる気がして、サリーの舌に思いつき股間を押し付けちゃった。ローブの下裸で何も履いてないのにね。サリーに変態なことしちゃってる……

「ご主人様!?大丈夫ですか!?サリー、ご主人様下ろしてあげてください!!」

「デイーヴァ……僕は大丈夫だから。だから、あんま見ないでくれると助かる……」

「……なんか、ほんとソロモン可愛くて好き……鎮まるまで愛でたい……好きな我慢したくない……!!」

しかもそうやって僕がサリーに発情していると、サリーは僕の身体に巻き付けた舌を僅かに引いた。そして僕の身体を顔の前へと引き寄せると、なんと腹部に柔らかな唇を押し付けてきた。流石に絵面がヤバい気がするのはいかのせいかな。

「ねえやっぱご主人様フ●ラされてませんか!?私が見ている前で正気ですかこの女!!」

「やっぱそう見えるよね!?されてない!!ギリされてないから!!でもサリー、やっぱ一回止めて!?舌巻き付けて甘えないで!!」

【やだ……………】

結局サリーが満足するまで僕はサリーの舌から解放されることは無く、ディーヴァは目の前で僕が淫行されると錯覚してブチ切れていた。控えめに言っただけで地獄絵図のそれだったが、またされたいと思ってしまうのは我ながら末期だと思う。全身舌でじゅぷじゅぷされるのめっちゃ良かった……

「……………とまあ。さつきみたいになつくと興奮しただけで、今のサリーは元に戻っちゃうんです。チツ!!」

「なるほどね。まあ……………そりゃそうか。」

「ごめんなさい……………甘えるソロモン見てたら、可愛くて我慢できなくなっちゃった……………」

そうした地獄絵図の後。僕は全身をサリーの毒性の唾液で水没させたまま、彼女の人間態が抱える欠陥についてディーヴァから説明を受けていた。ディーヴァはまだ怒ってる……

しかし……………話を聞く感じ欠陥と言うよりは、サリーの人間態の構造を考えれば当然の破綻と言うべきか。

何分僕やディーヴァは、普段はアラガミの体内に人の姿を構築。その後に余分なアラガミの身体を形成するオラクル細胞を大気中に霧散させることで人の姿を取る。

が、純粋なアラガミのサリーはこの身体の霧散が怖いらしくてね。無理もない。身体の霧散って、要はアラガミの死体が消える時のアレそのものだから。一回死に掛けた事のあるサリーが抵抗を示すのは仕方がないんだよ。

そのせいで僕はサリーを人の姿に封じること自体に難儀していたんだけど。ディーヴァはこれを、要はとんでもない力技で解決した訳だ。

つまりディーヴァはサリーの外見を人間のそれに寄せた上で、限りなくその細胞密度を圧縮——要は器を縮めてその中に中身を押し込む形で、彼女を今の人の姿に変えた。

とはいえサリーは元が空飛ぶウロヴオロスとも呼ぶべき巨体だ。

このやり方では体躯の縮小はどう足掻いても半分が限界で、姿を人に寄せてなおその身体は三メートルを超える巨体となってしまう。

その挙句にこの形態のサリーは、力技で強引に小さくなってもらってる状態だから。ちよつと気が緩んだり興奮したりすれば、さつきみたいはその身体は元に戻ろうと巨大化を始めてしまう。

だからデーヴァは、僕より少し進んだところでサリーを人の姿に変えることに行き詰まっていたと。……………正確には人の姿に変えた後に、その状態を維持できない不完全性に。それに加えて人と呼ぶには未だ大き過ぎる体躯と、多くの課題が残ってしまった訳だ。

「……………それでも人の姿に出来ただけで相当に上出来だけだね。」

「!!……………本当ですか!? えへへ……………褒められちゃった……………」

「ああ。僕じゃ思い付かなかった方法だ。」

サリーにダダ甘の僕では、ガワを人に寄せて彼女の身体を強引に縮めるという選択肢は思い付かなかった。そういう意味ではデーヴァに任せたのは正解だったようだ。見た目の完成度も含めて。

……………ただねデーヴァ? 彼女が抱える欠陥については僕もよく理解したけどさ。それより僕は、もう一つだけ気になってる点があるんだ。

「はい!! なんでしよう? 主人様!!」

「……………サリーのこの服装さ。なに?」

そう尋ねると、デーヴァが無言で僕から目を逸らした。こっちを見る。目を逸らすってことは自覚あったんだなこの娘。デーヴァも「なんて格好してやがる」って思ってたんだろ。

何しろ今のサリーの服装。それは隠すべき場所をギリ隠した……………いや下手すると隠しきれてない、そんな極めて際どいものだ。

上は首周りに形成された首輪型の装飾から伸びる黒い布切れ二枚で、それがちょうど乳房の中央を隠すように垂れ下がっている。俗に言う『乳暖簾』というやつだ。

加えて下も、腰周りの蔓状の装飾から伸びる前垂れが前後に一枚ずつ。お陰で股周りは隠せているが、本当にそれだけだ。実質細かい布切れ四枚だけの超軽量装備が今のサリーの服装なんだよ。



因みに大前提として言っておくが、サリーは当然下着なんてものは付けてない。分かるか？実質全裸に乳暖簾と、ノーパンに前垂れオンリー。歩こうものなら揺れるし見えるに決まってる。

思わず僕の胴体を上回る太さの太ももに跨り、「店長やってる〜？」とサリーの乳暖簾を捲ってしまった。ちゃんと下にあつたのはT●Bだったよ。撫でたらビュツてした。

なんだこの痴女。

凄いよな。水着で任務に当たる何処ぞの神機使いもヤバいと思っていた僕がドン引きする格好シスターのフードこそ被っているものの、首から下が黒のマイクロビキニにエグいスリット入ったスカート姿。スカートの下はノーパン疑惑。間違いなく道歩いてたら捕まる。

何だこの性職者（ソロモン談）なのがディーヴァなのに。それ上回ってくるんだもんな。辱めにしても惨たらしいって。

「ちつ……違うんですご主人様!!この服装は、サリーからの要望で私が提案したものでして!!エロい格好させて辱めようとした訳では無いんです!!」

「だからってサリーが無知なのをいい事にやりたい放題が過ぎるだろう。もう少しなんかデザイン無かったのか。」

「サリーが『人間の服の感触は嫌だ』ってごねるんですよ!!けど、●KBやM●K丸出しは不味いでしょう!?!だから——」

.....  
.....あー。

そういうえば、人型アラガミにとって人間の服って感触が不快なんだっけ。そのためにわざわざアラガミ素材で衣服を作る必要があるレベルだった気がする。人間の衣服を表皮で模倣したものも不快なんだ。

そしてディーヴァはそんな専用服の知識は無い以上、最低限の場所

は隠せる上にあまり肌に触れないようにヒラヒラした服にしたと。

その結果が暖簾と前垂れって訳か。エロゲか何かの服装かと困惑したが、そういう意図があったのか。

それによく考えたらだけど、サリーって普段から履いてないし……上に至っては背中 of 触手で覆っただけの手ブラだからね。よくよく考えたら普段から全裸みたいなものなのか。ヴィーナスといいアマテラスといい、アラガミってそんなもんだったわ。

それでも今の服装を見れば、視覚的には幾分かアラガミの姿の時のがマシに見えるけど。下手すると全裸よりエッチが過ぎるって……サリーはそういうの分かんないんだろうな。さつきからずっと首傾げて？浮かべてる。かわいいね。

「因みに一応聞くけど、サリーはその服は嫌じゃない？大丈夫??」

「あまり肌に当たらないし我慢できる……けど、出来るならこれ外したい……」

「これでもまだ不快か。」

尋ねるとサリーは申し訳なさそうに小さく頷いた。……ともなると、やっぱりディーヴァが上手いところに落とし込んでくれたと思うしかないか。

一応弁明しておく、僕もエッチな格好は嫌いでは無いよ？ただ僕の彼女に痴女みたいな格好させて外を歩き回らせたくないだけであって。特にサリーの場合は美少女が過ぎるし、身体付きがどこもデカイしで目に毒過ぎるでしょう。

何なら身長も女の子座りした状態で僕より目線高いからな。身体大きい分、相対的にほんと色々とデカいんだよ。やっぱりこの格好アウトでは???どう思いますかデザイナーのディーヴァさん。

「まあまあ。ご主人様の私室にぶち込んで、人目に晒さなければ問題はありませんか。服の話はこれくらいにしましょう。ね?」

「そうだね。……ってディーヴァ。どうした?」

「ご主人様。……私もサリーと同じ格好したい、って言ったら——」

「却下。」

なにド直球に頭の悪い格好で僕のこと誘惑しようとしてるんだこの肉食獣は。今のディーヴァの格好でも外歩こうとしたら全力で阻止するからな？恥を知れ恥を。

ていうか今の時点でも布四枚と下着聖女ディーヴァに囲まれる僕の身にもなつてくれ。この時点でも変態の烙印は免れられないのに、布四枚×2なんてこの世の終わりみたいな編成を認めてみる。何れいずここを訪れたジゼルに見られたら、何て言われるやら――

『……………因みにソロモン。一応言っておくと、貴方も裸にローブ一枚はだいぶ人のこと言えませんからね???』

正論で殴るのやめて貰えませんかレンさん。僕は外からフェンリルの連中来るようになったら適当に服装考えるから。好きで全裸ローブやってんじやねえんだよこっちは。厚着し過ぎると人間の姿で空飛べなくなるんだよ。

『あ……………』

……………とまあ。服の話はこのくらいとして、サリーの身体について話を戻そう。ここからサリーをどう縮めたものかって話だったな？

現状の人間態サリーの課題は、未だ三メートルを超える体格。そして興奮すると元の姿に巨大化してしまう不安定さ。他にも幾つかあるが、特に大きい問題はこの二点だ。

そもそも身長三メートルはデカすぎて屋内に入れないし、屋内での巨大化をされようものなら部屋が潰れかねない。体躯ウロヴオロスって二階建ての建造物くらいはあるからな。下手するとサリーに至っては浮く分それを上回る。

「そうなんですよ……………さつきみたいにご主人様に発情する度に巨大化されてちゃ、支部長室が保ちませんからね……………」

「あ、それともう一つ。対処が要る問題追加だ。」

「え。」

これは今のサリーの問題……………と言うよりは、人間という形態を取らせることそのものへの問題と言うべきだが。どういう訳か、サリーはさつきからずっと座ったままだ。

何なら僕がヘリポートに来たばかりの時も、サリーは近付きたいな

がらに座ったままずりずりと移動していた。これは恐らく……………

「サリー。……君、その姿じや立てないんじゃない？」

「!! そうなの……………この姿だと、普段みたいに飛べなくて……………」  
「やはりか。」

元々飛行による移動を主体とするサリエル神属は、当然だが足を用いた歩き方を知らない。それを羽根を持たない人の姿に封じた結果、今のサリーは移動が不可能になってしまっているんだ。

そしてサリーが布面積の多い服を不快がって嫌がる以上、僕のロブザイゴートの浮き袋の機構を繊維単位で再現した黒ローブ。繊維内で気流の流動を制御し、人間態でも飛行能力を獲得できる便利な能力。のような外套を与えてやる事も不可能。車椅子も考えたが、嫌な女の姿が脳裏を過ぎったから却下だ。サリーに不自由はさせたくないしね。

ともなると、時間を見て僕が歩き方を教えてあげる他ないわけなんだけど。そうなることまた先程の問題が絡んでくる。

「それに……………なんだか、この姿だと身体が重くて……………凄く窮屈なの……………!!」

「まあ本来の姿を半分は圧縮して縮めてるわけですからね。身体の大きさは半分でも、質量は本来の姿そのままですから。身体も重いでしょう。」

デイーヴアの言う通り。今のサリーは、体躯は半分まで縮めたけど体重はそのままだ。そのせいで多分だけどサリーは立ち上がることは出来ないし、今の座った体勢もキツイと思う。二足歩行なんて夢のまた夢だ。

が、逆に言うとサリーの今の巨体と興奮時の巨大化もこれが原因だろう。

要は身体が無理やりこれ以上縮めないくらいに縮められてるせいで、元に戻ろうとするのが巨大化の原因だ。言うなれば今のサリーの身体に、許容量以上のオラクル細胞が詰め込まれているせいだと言っている。

そしてそこまで分かれば、実は施すべき処置そのものはそう難しい

ものでも無い。

「サリー。……ちよつと失礼していい？」

「ん……………」

女の子座りしたままのサリーの太ももの上に跨り、僕は彼女の二の腕へと両手を当てる。そして彼女の意識に造書庫を用いて接続すると、僕はある変異を彼女に促す。

そうすると突如、サリーの両肘から黒い蔓状の触手が伸びて柔らかそうな二の腕へと巻き付く。そして次は僕の胴体よりも大きな太ももへと。膝裏から形成させた触手を装飾具のように巻き付け、彼女の身体を彩る。

そうして彼女への干渉と変異を終えれば、今度はデューヴァが首を傾げた。

「ご主人様……………それは……………」

「拘束具だよ。サリーの本来の姿と同じ材質の触手だから、そこまで不快感は無いはず。」

「うん……………大丈夫、だけど……………」

サリーも不思議そうに、人間の姿の自身に巻き付く蔓状の装飾具を指で撫でている。

……………そう、さつきも言った通りにこれは拘束具だ。サリーが興奮して巨大化しそうになったら、腕や太ももを締め付けて巨大化を食い止める。そういう目的で僕が生成した封印だ。

分かっている。これだけじゃサリーの巨大化を強引に止めるだけで、彼女の内を満たす膨大なオラクル細胞はどうにもなっていない。

だからあくまでこの封印は、これからサリーに行うある作業の下準備だ。

「ソロモン……………なに、するの……………??」

「君の体内の余剰オラクル細胞を体外に放出させる。その体躯の大きさも、身体の重さもそれで解決する筈だから。」

「……………??」

デューヴァのお陰で人の形という殻は出来ているんだ。なら後は、張り詰めた水風船と同じ。中に詰まった水を抜けば、破裂寸前まで張

り詰めた水風船はその形を縮める。

僕がサリーにこれから行うのはそれと同じだ。自身の身体を散らせることに抵抗があるなら、人の身を形成した後に細胞の放出を行えばいい。

何しろオラクル細胞を放出するだけなら、サリーも普段からやっている。毒霧の放出とかレーザーとか、あれ全部オラクル細胞の放出に指向性与えたものだからね。それと同じ要領で、これからサリーには体内のオラクル細胞を吐き出してもらおう。

「確かにそれは名案ですけど……ご主人様?」

「なにディーヴァ。」

「それと、サリーの身体に拘束具を生成した事に何の関わりが……??」

そう処置を行おうとしている傍ら。ディーヴァが訝しむように僕に尋ねてくる。何ならサリーもディーヴァに同調するようにコココクと頷いてきた。かわいいね。

けど、これはさつきディーヴァが言った事だろうに。今のサリーは興奮させると巨大化するって。それで大きくならないようにするための拘束具だよ。

「……………ツ!!!まさか……………ご主人様!?!」

「ん……………??!どういうこと……………」

「仕方ないだろう。人間の身体じゃ毒霧やレーザーの発射なんて出来ないんだから。」

ディーヴァはこれから僕が何をしようとしているのか察したらしい。瞬く間に顔が真っ赤になり、何か言葉を発しようとして必死に口をパクパクと動かしている。

……………まあつまりそういうことだ。何分人間の身体で体内の細胞を放出する手段というのは限られてる。あくまで仕方なく、仕方なくだから。

「と言うわけでディーヴァ。悪いけどちょっと席を外して貰えるかな。終わったら支部長室まで迎えに行くから。」

「嫌ですご主人様!!!私が見てないところでサリーとエッチなことをする

気でしよう!?!私で童貞捨てたくせに!!!」

「そこまではしないよ。ただ、ちよつと彼女のおっぱい搾るだけだから。そんな怒らないの。」

今にも僕に襲い掛かって来そうな勢いで怒り狂うディーヴァを宥めつつ、ずつしりとしたサリーの乳房を撫でる。そうするとサリーもこれから何をするのか理解したのか、僕に向ける視線に一気に熱が籠った。

「それだったら私見守ってもいいですよねえ!?!いや授乳だけでも許せませんか!!!私の吸ってくださいよ!!!」

「ディーヴァそもそも母乳出ないだろ。馬鹿な事言ってるやないではよ逃げなさい。サリーの体液は猛毒なんだから。気化したの吸ったらディーヴァでも死ぬぞ。」

「この流れで真つ当な理由上げるのズルくありません!?!私のご主人様の中の優先順位ヒエラルキーの話をしてるんですよ!!!」

んなもんサリーが最上位だって前々から言ってるのに。……………なんて今のディーヴァに言ったら火に油注ぐようなものだから言わないけど。どうしたものかな。

……………あ。そうだ。いい事思いついた。

「ねえディーヴァ。僕が下行く前にさ、君に言ったこと覚えてる?」

「!?!……………確か『サリーを擬態できるようにしたら、ご主人様が何でもお願いを聞いてくれる』って言った事ですか?あれは———」

「そうそう。そのお願い、下で考えててよ。僕がサリーの身体を縮めてる間にさ。」

まあ十中八九なんかそういう願いになるのは予想できるが。何なら今僕がそう言った途端、ディーヴァはキュツと下腹部を押さえた。

何しろジゼルに墮し児の事は任せてるし、僕もやるべき事の大体はこれで片付くからね。頑張ってくれた分、ちやんとディーヴァも労つてあげればいい。そうすればディーヴァの怒りも多少は収まるというもの。

とはいえディーヴァにとっては余程僕の提案が意外だったのか。既に色々想像してヤバイスイッチが入ってるが、僕に確認するよう再





法はあれ位しか知らなくて。」

「ううん、ソロモンは悪くない。ソロモンを困らせるあの女が悪い。役に立たなければとつくに殺してる。」

そう恋敵に嫌悪感と殺意を剥き出しにするサリーだが、人の姿を作ったり面倒を見てくれた事に思う所もあるのか。心做しか、その表情は前よりも柔らかかった。嫉妬心以上に、僕が純粹に嫌じゃないか心配だったらしい——

「…………でもソロモン。」

——などと、サリーの優しさにホッコリとしてたのも束の間。不意にサリーは僕の顔にずいっと自身の乳房を押し付けると、局部を隠す暖簾状の衣服を捲り上げた。当然僕の顔は彼女の柔らかな胸に沈む事になるのだが、サリーはそれを見ると愛しげに切れ長な目を細める。

「ソロモン……私、あなたとディーヴァがした事をやってない。それだけが今まで許せなかった……………」

「……………」と、言いますと?」

「人間の愛情表現。」

胸に顔を押し付ける僕をさらに埋めるように、サリーの手が僕の後頭部に押し付けられる。半ば力尽くで自身の身体に僕を甘やかそうとするサリーは、僕に選択肢を与えるつもりは無かった。

人間の愛情表現。それ即ち交尾セックスなり。当然僕も、人間を根源とする以上はサリーとしたいと考えた事はあった。

でも僕の方からそう頼んだ事は無かった。僕がヘタレだからってだけではない、純粹なアラガミのサリーに人の行為を強要するのは何処か引け目を感じていたんだ。サリーは食事として身体を差し出すことはあっても、人の性行為には興味が無いんじゃないかって。

僕らにはアラガミならではの愛情表現の方法があったし、無理に人の真似事をする必要も無いかって。人間を嫌い絶滅対象とするが故に、自分に言い聞かせてただけだ——

「…………ソロモン。ディーヴァのくれたこの身体なら、今なら出来るよね……………?」

「それは多分、普通に出来るけど……………」

「正直私も何が良いのか分からないけど……………してみたいの。あなたと同じ、人の形になった今だから……………」

——そう、最愛の彼女に迫られては断るなんて選択肢は無かった。

さつきといい、今まで擬似的にそういう雰囲気になった事はあったけど……………いよいよそういう目的でする時が来たんだ。じつとりと湿った下腹部を前垂れ越しに撫でるサリーに、僕は腹を決めた。

……………というか、今まで内心で抱いて煮詰めてきた欲望に正直になる時が来たんだ。彼女が僕を求めてくれている以上、断る理由は存在しない。

「サリー……………今の体格差じゃちよつと難しいから、ちゃんと身体を人並みに縮めてからね。」

「!!!」

「正直……………僕も、サリーとはずっとしたかったから……………一緒に、がんばろ……………??」

自分でも頬が火照って、身体が期待してしまっているのが嫌という程分かる。そのせいで彼女の乳の横腹を撫でる手付きも、自然といやらしいものになってしまっている気がする。

けどサリーはそんな僕を、愛しくて仕方ないとばかりに涙の溜まった瞳で見つめてくれる。僕に愛情を向けられることが幸せで仕方ないと、言葉を介さず全身で伝えてくる。

思えば彼女と一線を越えるまで、随分と長かった気がする。だからこそ噛み締めるように、僕はサリーに最後の調整を施し始めた。

そして僕らにとつての、忘れられない夜が始まる。